

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

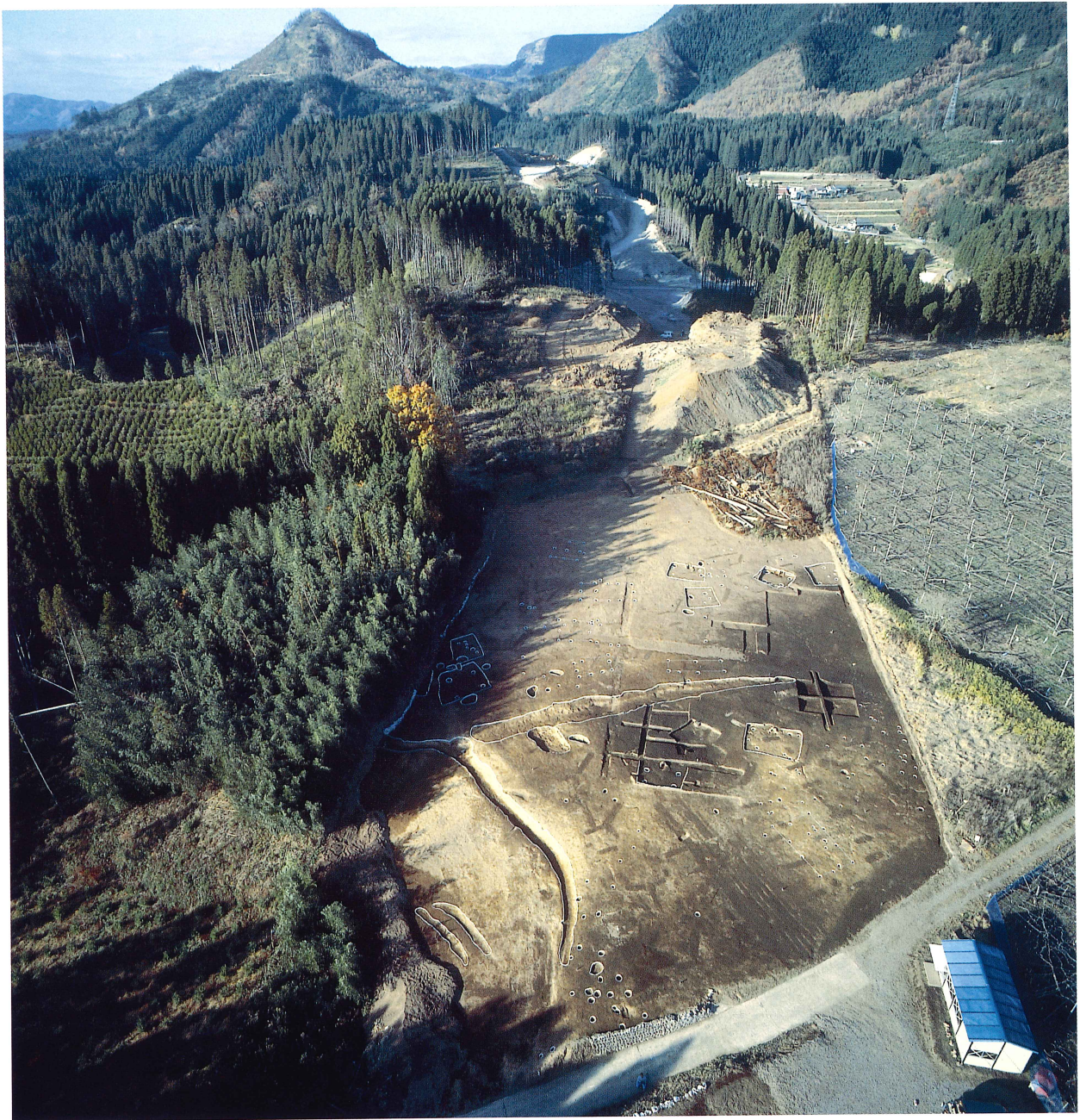
^{まつ}松 ^ぎ木 遺 跡

1997

大分県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

まつ ぎ
松 木 遺 跡



松木遺跡全景（東より）

序

大分県教育委員会は、日本道路公団福岡建設局の委託を受け、九州横断自動車道建設予定地のうち玖珠インターチェンジから湯布院インターチェンジの間に所在する松木遺跡の調査を平成6年度に実施しました。この報告書は、その埋蔵文化財発掘調査の記録です。

松木遺跡は、標高415m前後の舌状丘陵部に所在する遺跡で、古墳時代から奈良時代にかけての住居跡と縄文時代後・晩期の遺物包含層などが検出され、その実態解明について多くの成果を挙げることができました。

調査の起因が道路建設工事という開発行為であり、その結果遺跡の一部が消滅したことは残念であります。本書が、県民の皆様にあらためてこの地域に生きた先人たちの営みを振り返り、将来に守り伝えるべき文化遺産としての埋蔵文化財を御理解いただく契機となれば幸いです。

最後に、この調査について多大な御協力をいただきました関係各位及び地元の方々に対して、深甚なる謝意を表します。

平成9年3月

大分県教育委員会

教育長 田中 恒治

例 言

1. 本書は、九州横断自動車道の玖珠～湯布院間建設工事に伴う埋蔵文化財調査のうち、平成6年度に実施した松木遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団福岡建設局の委託事業として、大分県教育委員会が実施した。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

帯刀 将人 (教育長)

調査委員 賀川 光夫 (別府大学教授・県文化財保護審議会委員)

調査総括 末広 利人 (県教育庁文化課長)

岡 忠夫 (同 課長補佐)

小野 倉吉 (同 課長補佐兼管理係長)

調査主任 渋谷 忠章 (同 主幹兼埋蔵文化財第2係長)

調査員 西 哲弘 (県文化課主査)、佐脇 義敏 (同 主任)、五十川孝正 (同 主任)

江田 豊 (同 主任)、染矢 和徳 (同 主事)

長田 大輔 (同 嘱託)、原田 靖久 (同 嘱託)、稲村 博文 (同 嘱託)

調査補助員 阿南 亨 (別府大学卒業生)

作業員 岩本 貢 高倉 和一 梶原チエコ 江藤シズ子 高倉 由美 合原 正利

滝石 重夫 小川 直美 原 加津子 原 千恵 金田 頼子 有馬 秀子

山中ゆり子 日野 真澄 志津里幸子 後藤 栄子 高倉美保子 佐藤 力

森山 泰民 穴井千代子 和田マサ子 加藤 静子 武石フジエ 秋好マサ子

永野 明 永野ヤヨイ 野中 和子 松木マツエ 松木 弘子 入部 安子

(順不同)

以上の方々には、酷暑・厳冬の中、御協力願った。心より感謝したい。

協力者 玉永 光洋 (県教育庁文化課主査)、小柳 和宏 (同 主任)、竹野孝一郎 (九重町教育委員会)、
佐藤 祐二 (玖珠町教育委員会)、甲斐 素純 (九重町文化財調査員)、内恵克彦 (九重町文化財調査員)
(順不同)

調査期間中、以上の方々には、ご多忙中にもかかわらず視察と助言を得た。感謝の念に絶えない。

4. 発掘調査は、五十川が担当した。
5. 遺構の実測および写真撮影は、主として五十川がおこない、一部、原田・竹野の協力を得た。
6. 遺物の整理作業は、大分県教育庁文化課資料室で実施し、遺物の実測および浄書は主として五十川がおこなった。また、整理作業全般を通して、西村しのぶ・吉良明美・浜田千春・山口美紀 (以上、県文化課) の協力を得た。
7. 遺物の写真撮影は、藤田大祐氏 (フジタフォトサービス) の協力を得た。
8. 本書で使用した航空写真は株式会社スカイサーベイの撮影による。
9. 本書の執筆・編集・構成は五十川がおこなった。
10. 出土遺物・写真・図面などは大分県教育庁文化課資料室で保管・管理している。

凡 例

1. 地形図・遺構実測図等の方位は、磁北を用いた。
2. 土層断面図等の色調は、主観を廃するために、「標準土色帳」を参考にした。
『新版標準土色帳』農林水産省農林水産技術会議事務局監修1991年度版
3. 「カマド」各部位の名称については、「塚堂遺跡」の報告書内で使用されている用語に従った。
『塚堂遺跡Ⅱ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会1984
4. 遺物実測図では、須恵器の断面にはトーンを付け、土師器および土師質土器と区別した。
5. 調査概報の中で、「近世動物墓」として扱った遺構は、本報告書の中では「近世土坑」として土坑に含めて扱っている。
『九州横断自動車道玖珠～湯布院 調査概報第2集』大分県教育委員会1995

本文目次

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の立地と環境	2
(1) 立地と地理的環境	2
(2) 歴史的環境	3
III. 調査の概要	6
(1) 調査区の設定	6
(2) 試掘	6
(3) 基本土層	7
(4) 調査の方針	7
(5) 調査経過	7
IV. 遺構・遺物	10
1. 住居跡	12
2. 掘立柱建物跡	43
3. 土坑	49
4. 溝状遺構	56
5. 集石遺構	59
6. 包含層出土遺物	60
(1) 縄文時代の遺物	60
(2) 弥生時代～古墳時代の遺物	70
(3) 歴史時代の遺物	72
V. まとめ	78
1. 歴史の変遷	78
2. 遺物について（須恵器と土師器）	78
3. 遺構について（住居跡）	80
4. 集落について	81
VI. おわりに	83

表目次

第1表 B・C地区遺構一覧表	10
第2表 掘立柱建物跡計測表No 1	44
第3表 掘立柱建物跡計測表No 2	45
第4表 縄文時代遺物（土器）観察表	74
第5表 縄文時代遺物（石器）観察表	75
第6表 弥生時代～古墳時代遺物（土器）観察表	76
第7表 歴史時代遺物（土器）観察表	77
第8表 松木遺跡変遷年表	78
第9表 須恵器編年一覧表	78
第10表 住居跡一覧表	80

挿図目次

第1図	松木遺跡位置図	1	第38図	8号住居跡出土遺物実測図No 3	38
第2図	松木遺跡周辺地形図	2	第39図	8号住居跡出土遺物位置図	38
第3図	玖珠盆地周辺主要遺跡分布図 (旧石器～縄文時代)	4	第40図	9号住居跡実測図	39
第4図	玖珠盆地周辺主要遺跡分布図 (弥生～古墳時代)	5	第41図	9号住居跡出土遺物実測図	40
第5図	玖珠盆地周辺主要遺跡分布図 (中世～近世)	5	第42図	10号住居跡実測図	40
第6図	調査区およびトレンチ位置図	6	第43図	11号住居跡実測図	41
第7図	調査区基本土層図No 1	8	第44図	11号住居跡出土遺物実測図	42
第8図	調査区基本土層図No 2	9	第45図	堅穴状遺構実測図	42
第9図	松木遺跡遺構配置図	11	第46図	堅穴状遺構出土遺物実測図	42
第10図	1号住居跡実測図	12	第47図	1号掘立柱建物跡実測図	46
第11図	1号住居跡カマド実測図	13	第48図	2号掘立柱建物跡実測図	46
第12図	1号住居跡屋内土坑実測図	14	第49図	3号掘立柱建物跡実測図	47
第13図	1号住居跡出土遺物位置図	15	第50図	4号掘立柱建物跡実測図	47
第14図	1号住居跡出土遺物実測図No 1	16	第51図	5号掘立柱建物跡実測図	48
第15図	1号住居跡出土遺物実測図No 2	16	第52図	6号掘立柱建物跡実測図	48
第16図	2号住居跡出土遺物実測図	17	第53図	土坑内出土遺物実測図	51
第17図	2号住居跡実測図	17	第54図	近世土坑および出土遺物実測図	52
第18図	3号住居跡実測図	18	第55図	土坑実測図No 1	53
第19図	3号住居跡カマド実測図	19	第56図	土坑実測図No 2	54
第20図	3号住居跡出土遺物実測図No 1	20	第57図	土坑実測図No 3	55
第21図	3号住居跡出土遺物実測図No 2	21	第58図	溝状遺構実測図No 1	57
第22図	3号住居跡出土遺物位置図	21	第59図	溝状遺構実測図No 2	58
第23図	4・5号住居跡実測図	22	第60図	集石遺構実測図	59
第24図	5号住居跡カマド実測図	23	第61図	包含層位置図	60
第25図	5号住居跡出土遺物実測図No 1	25	第62図	縄文時代B地区出土遺物位置図	62
第26図	5号住居跡出土遺物実測図No 2	26	第63図	縄文時代遺物実測図土器No 1	63
第27図	5号住居跡出土遺物位置図	27	第64図	縄文時代遺物実測図土器No 2	64
第28図	5号住居跡出土遺物実測図No 3	28	第65図	縄文時代遺物実測図石器No 1	65
第29図	6号住居跡実測図	29	第66図	縄文時代遺物実測図石器No 2	66
第30図	6号住居跡カマド実測図	30	第67図	縄文時代遺物実測図石器No 3	67
第31図	6号住居跡出土遺物実測図	31	第68図	縄文時代遺物実測図石器No 4	68
第32図	6号住居跡出土遺物位置図	32	第69図	縄文時代遺物実測図石器No 5	69
第33図	7号住居跡実測図	33	第70図	弥生～古墳時代遺物実測図No 1	70
第34図	8号住居跡実測図	34	第71図	弥生～古墳時代遺物実測図No 2	71
第35図	8号住居カマド実測図	35	第72図	歴史時代遺物実測図No 1	72
第36図	8号住居跡出土遺物実測図No 1	36	第73図	歴史時代遺物実測図No 2	73
第37図	8号住居跡出土遺物実測図No 2	37	第74図	奈良時代集落構成図	82
			第75図	集落周辺地形図	83

写真目次

巻頭写真

写真-1	松木遺跡遠景	86
写真-2	松木遺跡全景	86
写真-3	1号住居跡完掘	87
写真-4	1号住居跡内土坑遺物出土状態	87
写真-5	1号住居跡カマド	87
写真-6	2号住居跡完掘	88
写真-7	3号住居跡完掘	88
写真-8	3号住居跡遺物出土状態	88
写真-9	3号住居跡カマド	89
写真-10	4・5号住居跡完掘	89
写真-11	5号住居跡遺物出土状態	89
写真-12	5号住居跡カマド	90
写真-13	6号住居跡完掘	90
写真-14	6号住居跡遺物出土状態	91
写真-15	6号住居跡カマド	91
写真-16	7号住居跡完掘	92
写真-17	8号住居跡完掘	92
写真-18	8号住居跡遺物出土状態	92
写真-19	8号住居跡カマド	93
写真-20	9号住居跡完掘	93
写真-21	10号住居跡完掘	94
写真-22	竪穴状遺構完掘	94
写真-23	11号住居跡完掘	94
写真-24	11号住居跡遺物出土状態	94
写真-25	掘立柱建物跡	95
写真-26	土坑	95
写真-27	近世土坑	96
写真-28	溝状遺構	96
写真-29	集石遺構	97
写真-30	縄文時代包含層G-5区	97
写真-31	縄文時代包含層E-6区	97
写真-32	縄文時代包含層遺物出土状態	98
写真-33	作業風景	98
写真-34	1・2・3号住出土土器	99
写真-35	5・6号住出土土器	100
写真-36	8・11号住出土土器/鉄器・石器	101
写真-37	土坑出土土器/包含層出土土器・石器	102

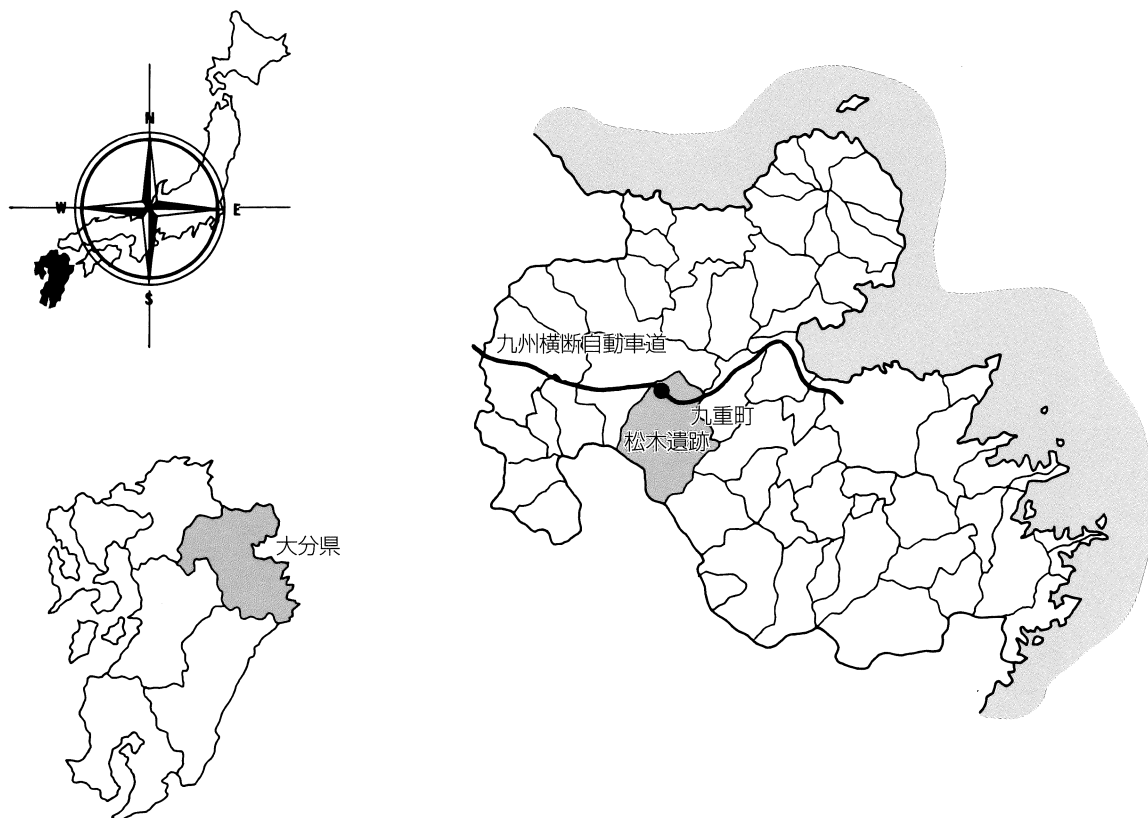
I. 調査に至る経過

九州横断自動車道は長崎市を起点に、すでに供用中の九州縦貫自動車道と鳥栖ジャンクションでクロスし、九州の東西を連結する高速自動車道である。建設予定地の玖珠～湯布院間約22kmにおいては昭和60年2月に工事施工命令があり、大分県教育委員会では工事施工者である日本道路公団福岡建設局と区間内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、昭和61年4月に路線内の分布調査を実施した。その結果、九重町松木地区で3ヵ所、湯布院町川西地区で1ヵ所、合計4ヵ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。その後、日本道路公団福岡建設局は路線内における埋蔵文化財の取り扱いについて文化庁と協議し、その委託を受けて、大分県教育委員会が発掘調査を実施することになった。

九重町松木地区（松木・室園・五分市）では、平成5年9月より室園・五分市遺跡の確認調査をしたが、顕著な遺物・遺構などは確認されなかったため本調査は実施しなかった。松木遺跡は平成6年2～3月にかけて試掘調査をおこなった。調査の結果、標高415m前後の舌状丘陵部上の平坦部より古墳時代から奈良時代にかけての住居跡4基と縄文時代後期～晩期にかけての土器片と扁平打製石斧などが検出された。本年度は調査区全面の表土剥ぎをおこない、本格的な調査を実施することになった。その結果、住居跡11基、竪穴遺構1基、掘立柱建物跡6棟、土坑14基、溝状遺構5条、集石遺構2基、縄文時代後期・晩期の遺物包含層などが検出された。

一方、湯布院町川西地区のかわじ池遺跡では、縄文時代早期から前期にかけての集石遺構と大量の土器片および石器類などが検出された。

以上、松木遺跡からは、丘陵地に立地する奈良時代の集落などの各遺構や遺物の存在が明らかになり、当時の生活の一端を知る手掛りが得られた。また、かわじ池遺跡からは、縄文時代早期から前期にかけての土器の様相と当時の生活や祭祀形態を知る上で大変興味深い資料が得られることになった。



第1図 松木遺跡位置図

II. 遺跡の立地と環境

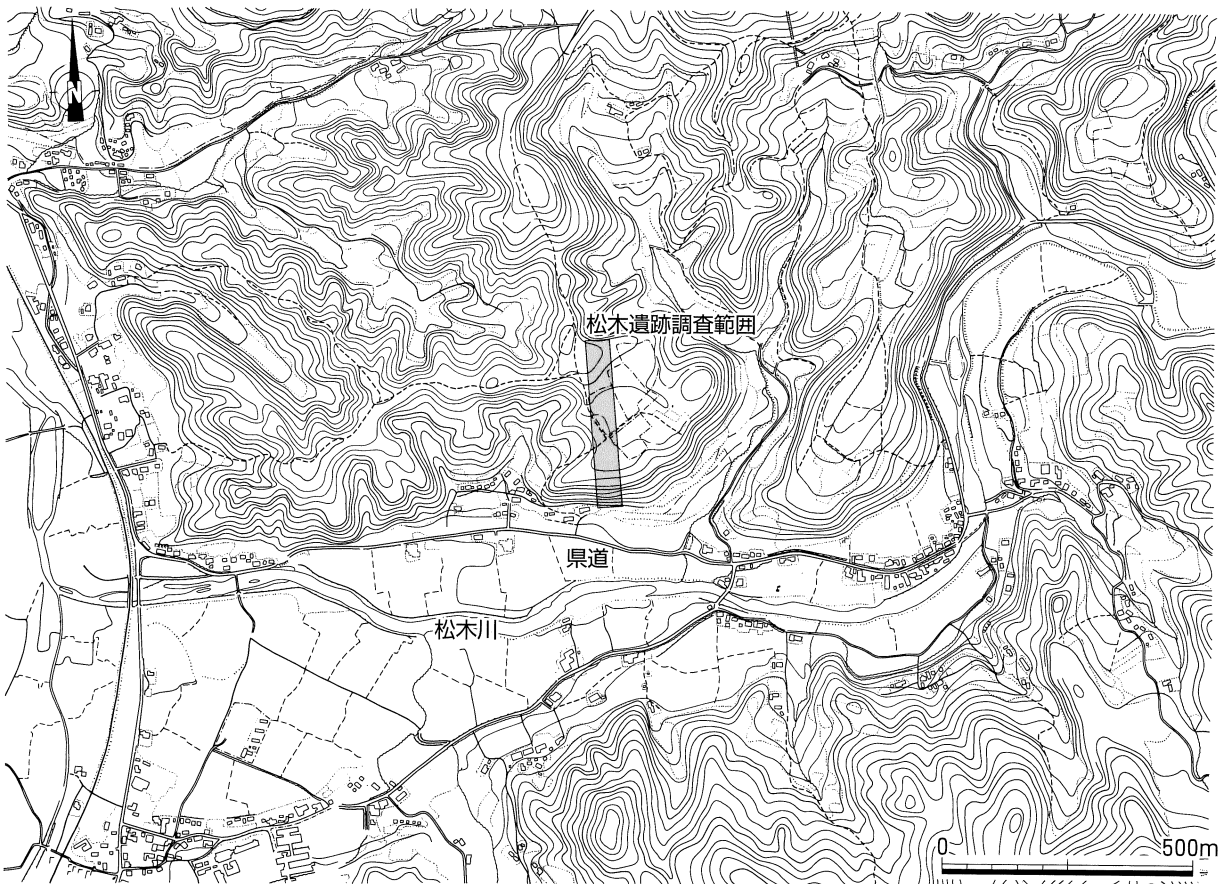
(1) 立地と地理的環境

松木遺跡は玖珠郡九重町大字松木字大明神に所在する。玖珠郡は大分県の西部に位置し、玖珠町と九重町から成る。気候は山地型気候区に属しており、山間部で標高も高いため、九州と言えども気温が低く、雨や雪などが多い。また、玖珠郡地方は九重火山群をはじめとする火山性の山岳に起因する特異な景観を見せている。郡北部には山間盆地である玖珠盆地があり、その周囲は伐株山・万年山・大岩扇山・小岩扇山などのテーブル状を呈する火山性溶岩台地（メサ地形）や扇状地によって取り囲まれている。郡南部には星生山など1700m級の九重連山があるほか、その北側周辺には飯田高原が広がっている。この九重連山に源を発するのが玖珠川である。鳴子川・野上川・町田川・松木川などの大小河川を合わせ九重町を南北に貫流し、さらに玖珠盆地内で森川・太田川などと合流しながら、筑後川の上流域を形成する。また、玖珠川水系の流域には温泉の湧出地が数多く分布しており、源流域の深山渓谷と合わせ、保養地および景勝地として知られている。

玖珠盆地の東端、松木川と玖珠川の合流地点より約1.5kmほど東の松木川右岸の丘陵地に松木遺跡は位置する。この丘陵地は宝八幡宮が鎮座する宝山から南側に派生し、端部は舌状を成している。南北約250m、東西約300mほどの平坦部があり、標高は約415m前後で、県道からの比高差は約50mを測る。平坦部は現在果樹園として梨の栽培がおこなわれている他、一部には杉の植林がなされている。近くには、「滝すべり」で有名な竜門の滝があり、夏には賑わいを見せている。

(2) 歴史的環境

松木遺跡の所在する九重町一帯は10世紀初頭の『和名抄』の中に見える「今巳・小田・永野」三郷のうち、永野郷に含まれる。その後、中世において、玖珠川と松木川および野上川両岸地域は飯田郷と称された。豊後清



第2図 松木遺跡周辺地系図(九重町森林基本図より転載)

原氏の流れをくむ飯田一族の発展のもとに「別名」（開発地）が開かれ、一族庶家はその領主となった。特に、松木氏は松木川中流域を開発し、鎌倉時代を通じて帆足氏と野司狩場（武士の戦闘訓練の場あるいは牧場か）の所有をめぐる争い、戦国時代には玖珠群衆として活躍した。なお、松木氏の本城であった「松木城」が竜門の滝付近の通称「城ノ台」と呼ばれる山の頂きにある。居館は松木本村の通称「ドイ」にあったと思われるが、今は庄屋家であった近世松木氏の墓が残るのみである。

ここでは、主に松木川流域の遺跡に焦点をあて、旧石器時代から古代までの概観を述べるとともに、玖珠盆地を中心にした玖珠・九重町の遺跡にも触れてみることにする。

（旧石器時代～縄文時代）

松木川右岸には下馬原遺跡・樋ノ口遺跡・二日市洞穴がある。下馬原遺跡からは旧石器時代の縦長剥片などが採集されている。樋ノ口遺跡からは安山岩製の扁平打製石斧・横刃形石器や無文土器片などが採集されており縄文時代後期後半から晩期前半の時期が考えられる。いずれも松木遺跡と同様の標高400m前後の丘陵地に位置している。二日市洞穴は耶馬溪溶結凝灰岩が松木川の浸蝕で形成されたもので、内部からは縄文時代早期および前期の集石や埋葬遺構のほか、草創期から後期にかけての各文化層が確認された。

その他、玖珠盆地内では玖珠川流域に十ノ釣遺跡・旦ノ原遺跡・中西遺跡・西田遺跡・板屋A遺跡などが見られる。縄文時代後期～晩期頃の土器類や扁平打製石斧および石鏃の石器類が出土している。また、玖珠川と町田川の合流付近の標高400m前後の丘陵末端部には奥野遺跡・富迫台の原B遺跡・都原遺跡・釘野遺跡などがある。都原遺跡では縄文時代後期中頃の竪穴住居跡をはじめ、西平式土器や扁平打製石斧・石鏃・搔器・滑石製の垂飾品などが出土している。特に、住居跡は円形を呈し、中央部には石組みの炉跡が設けられている。釘野遺跡では後期の住居跡や晩期の遺物が検出されている。なお、高原地帯にも野矢原遺跡をはじめ数カ所で遺跡が確認されており、遺跡の分布は玖珠川およびその支流沿いの丘陵地のみならず高原地帯などの高所にも見ることができる。

（弥生時代）

松木川流域では明確な遺跡は知られていないが、玖珠川と松木川の合流付近の書曲地区で後期の甕の口縁部が採集されており、松木川の河岸段丘上に当時の集落が存在した可能性がある。

九重町内にはその他、玖珠川左岸の丘陵上に粟野遺跡群・富迫遺跡群・横尾遺跡などが、高原地帯ではカマザコ遺跡・立石遺跡が存在するが、本格的な調査はおこなわれていない。

玖珠盆地周辺の台地上には拠点的な集落と思われる名草台遺跡・旦ノ原遺跡・四日市遺跡などがある。特に、名草台遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての集落と墓地の遺跡である。石棺や甕棺が検出されており、後漢時代の獣帯鏡の破片が出土している。また、この近くで、九州横断自動車道建設の際に治別当遺跡・白岩遺跡が発見されている。治別当遺跡では弥生時代終末から古墳時代初め頃の溝や杭列が検出された。白岩遺跡は弥生時代後期の山頂型の高地性集落であり、環濠と情報伝達のための狼煙台の施設が認められた。

（古墳時代）

玖珠川と松木川の合流する書曲付近で弘川古墳・井尻古墳・二日市横穴墓群が見られる。弘川古墳は丘陵上の、井尻古墳は河岸段丘上の円墳であったが、現在は消滅している。二日市横穴墓群は足手荒神社裏側の丘陵斜面にあり6世紀代の横穴墓が合計46基が確認されている。これら以外、九重町では野上地区に横穴墓群が見られる程度で、地形上の制限もあり古墳の数は少ない。

玖珠盆地では多くの古墳が分布する。森川流域の丘陵先端部には4世紀後半から5世紀初頭頃の瀬戸古墳群がある。円墳2基と方墳4基から成り、円墳からは畿内系の竪穴式石室が検出された。玖珠川左岸には5世紀代の方形周溝墓であるおごもり遺跡や玖珠郡内では唯一の前方後円墳である6世紀前半代の亀都起古墳があり、在地首長の出現が窺われる。後期古墳としては玖珠川右岸に位置し、線刻壁画を施した横穴式石室をもつ円墳の鬼ヶ城古墳が有名である。また、森川沿いの丘陵斜面には6～7世紀の鷹巣横穴群や上ノ原横穴群などがある。

稲作が生活基盤であることを考えると、この時期の集落は盆地内の沖積地に展開したであろう。しかし、背後の丘陵地では谷ノ瀬遺跡・下綾垣遺跡・原田遺跡などの集落跡が発見されており、その立地条件は興味深い。ま

た、二日市横穴墓群などの古墳の存在は、松木川流域の沖積地や丘陵地にもこの時期の集落が営まれていたことを物語っている。

太宰府出土「久須評」の木簡や東大寺正倉院文書中の『豊後国正税帳』の記載などにより大宝律令施行前後の玖珠郡の様子を垣間見ることができる。しかし、今のところ松木川流域では今回調査した松木遺跡の他には、この時期の集落遺跡等は発見されていない。だが、前述したように、周辺に存在する古墳などから当時の有力な地域集団の存在を想定することができ、おそらく奈良時代以降も人々の暮らしが営まれたであろう。なお、玖珠川左岸の粟野遺跡では8～9世紀の須恵器が採集されている。

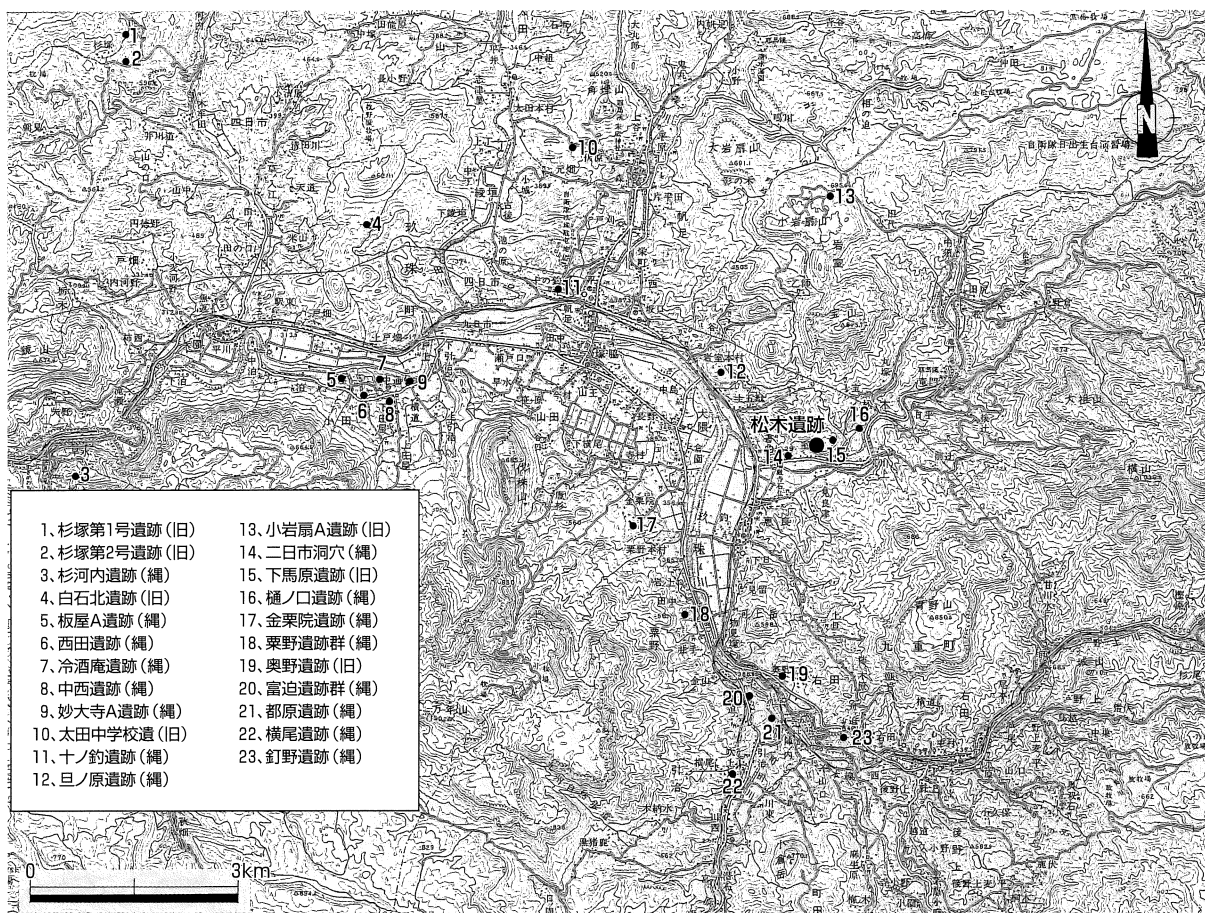
玖珠盆地西端の西田遺跡では7世紀後半から8世紀前半頃の大型土坑から円面硯が出土しており、玖珠郡衙の候補地のひとつになっている。また、古代官道の「荒田」駅の所在地についても明確な位置は判明しておらず、玖珠郡衙同様に諸説がある。

以上、簡単に概説したが、特に、九重町では発掘調査された遺跡が少なく、今後の調査で当地での歴史の間隙が埋められることを期待したい。

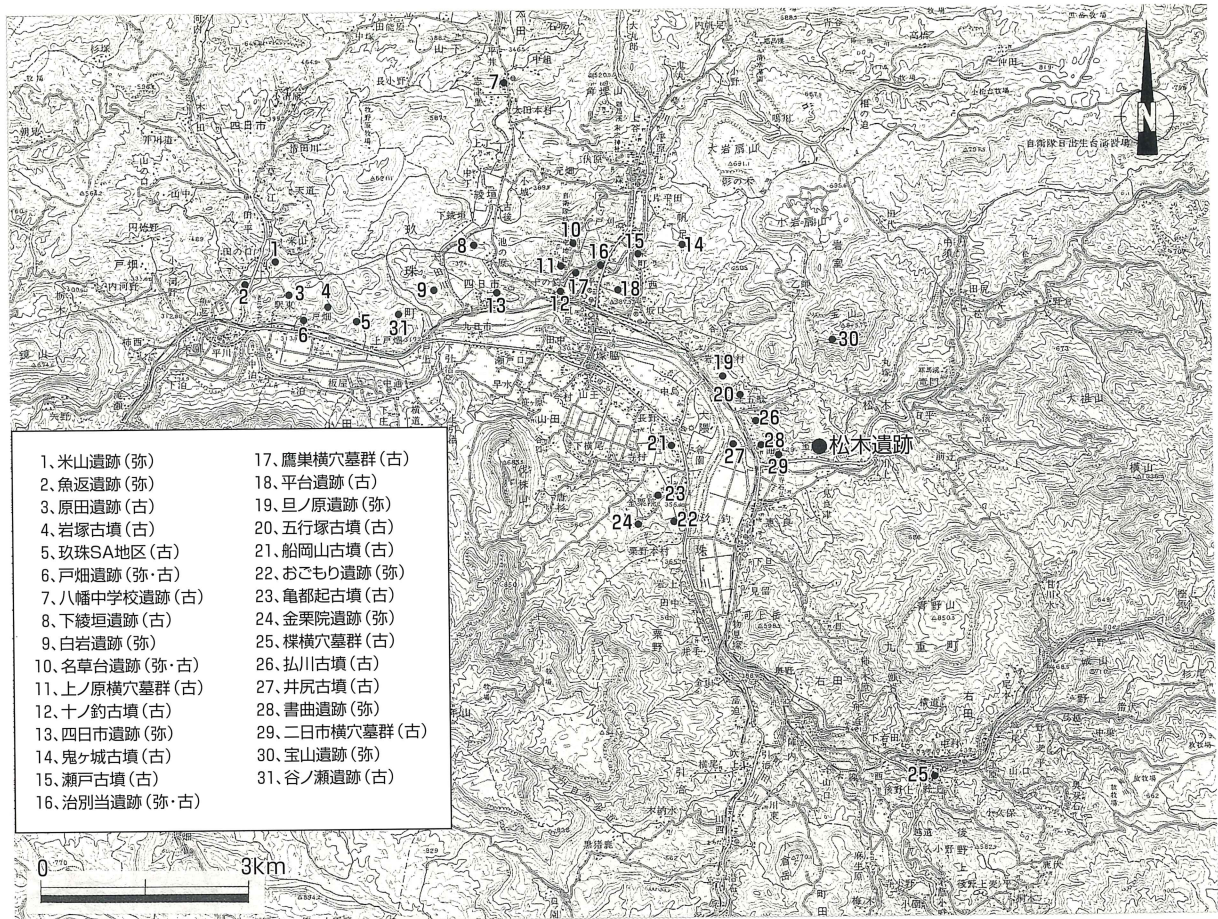
参考・引用文献

『大分県の地名』日本歴史地名大系45 平凡社1995

『九重町誌』町誌編纂委員会1995



第3図 玖珠盆地周辺主要遺跡分布図(旧石器～縄文時代) 1:50000「森」(国土地理院)



第4図 玖珠盆地周辺主要遺跡分布図(弥生～古墳時代) 1:50000「森」(国土地理院)



第5図 玖珠盆地周辺主要遺跡分布図(中世～近世) 1:50000「森」(国土地理院)

Ⅲ．調査の概要

(1) 調査区の設定

調査区を設定するにあたり、地形形状の特徴を考慮し、便宜的に次の4地区に分けることにした。ただし、B・C地区については同様の地形であるが、調査の都合上、里道を境とした。

(A地区)

標高420～430 mにかけて見られる丘陵部分であり、緩やかな斜面になっている。

(B地区)

標高415m前後に広がる平坦部で、里道より北側の部分である。

(C地区)

B地区同様に標高415m前後に広がる平坦部で、里道より南側の部分である

(D地区)

標高380m～410m付近で、平坦部がとぎれ急勾配の下り斜面になっている。

(2) 試掘

遺構の有無と基本土層の確認のために、A～D地区に合計10本のトレンチを設定した。南北方向のものは幅5 m、東西方向のものは幅3 mとした。

(A地区)

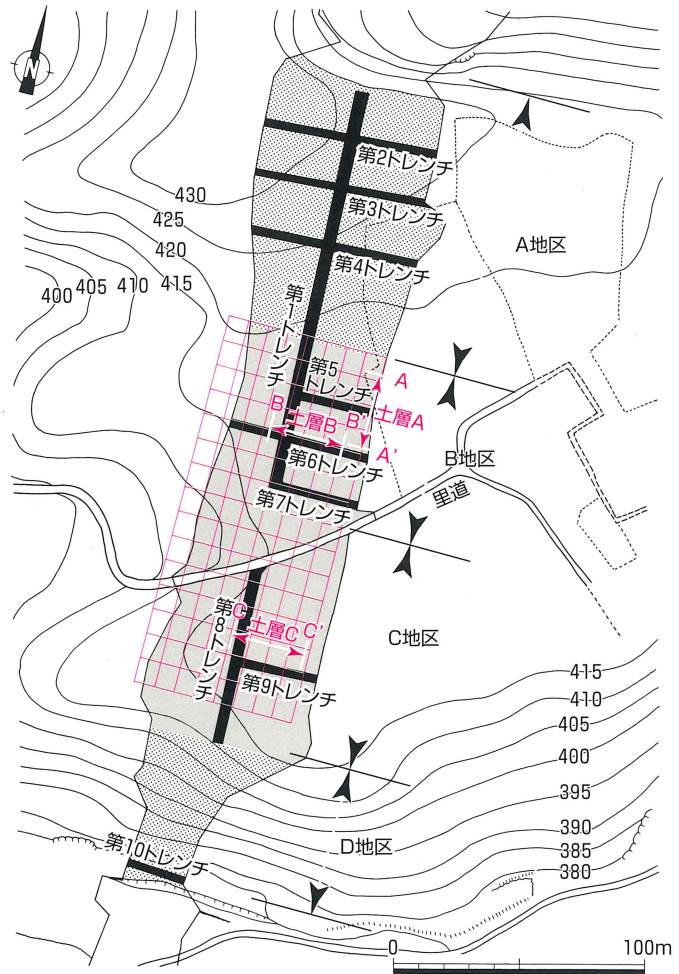
第1トレンチを南北方向に、第2～第4トレンチを東西方向に設定した。表土を取り除くと、黒色土の堆積はほとんど見られず、赤褐色粘質土が厚く堆積していた。その下は黄色土のローム層であった。各層で遺構・遺物は全く検出されなかった。

(B地区)

第1トレンチを南側に延長するとともに、新たに第5～第7トレンチを東西方向に設定して、試掘をおこなった。第5トレンチでは耕作土下の黒色土の中に土師器の破片が散在していた。第6トレンチは基本土層確認のためローム面まで掘り下げることにした。遺物は、上層では土師器・須恵器の細片が、下層の茶褐色土中からは扁平打製石斧が2点と縄文時代後期の特徴を持つ二等辺三角形の石鏃が1点検出された。また、第7トレンチでは黒色土中より粘土質の焼土塊が検出された。観察の結果、住居跡内に付設されたカマド跡であることが判明した。周辺に住居跡の存在が予想されたため、第6トレンチと第7トレンチ間の表土を部分的に削いでみた。比較的浅い地点で焼土塊が検出され、同じくカマド跡であることが分かった。以上のように、B地区の試掘では、少なくとも2基の住居跡と縄文時代後期頃の遺物包含層が存在することが明らかになった。

(C地区)

第1トレンチを更に南側に延長するとともに、第8トレンチを設定した。耕作土中に弥生土器や土師器などの混入が見られた他、北よりの地点からほぼ方形を呈する住居跡のプランが1基検出された。また、表探で縄文土器の破片や石鏃が検出されていたため、C地区の中央部付近に東西方向の第9トレンチを設定し、縄文時代の遺物包含層の有無を確認した。その結果、部分的に遺物包含層があることが判明した。



第6図 調査区およびトレンチ位置図

(D地区)

踏査の結果、急斜面であるがテラス状の部分があることが判明した。横穴墓の可能性が想定されたので第10トレンチを設定した。表土を取り除くと凝灰岩が露出したが、横穴墓の存在を窺わせるような遺構・遺物は全く検出されなかった。

(3) 基本土層

B・C地区を中心に調査区の基本土層の説明をしたい。

第1層(褐色土) 両地区に見られ、耕作土である。

第2層(黒色土) 粘性はあまりなく、粒子のキメが細かい。両地区に見られるが、B地区では北半分に厚く堆積しているが、南半分は比較的浅い。C地区では耕作のためか第1層との混ざりが著しく、純粋な黒色土の堆積は部分的にしかない。この層は奈良時代以降の遺物を含んでいる。

第3層(黒褐色土) 第2層に比べやや明るい色調を呈し、やや粘性がある。両地区に見られる。B地区では中央部東よりの部分に厚目に堆積しているが、C地区では中央部に薄く堆積している程度である。この層は弥生時代～古墳時代までの遺物を含んでいる。

第4層(茶褐色土) 粘性がやや見られる。両地区とも部分的に認められる。この層は縄文時代後期・晩期の遺物を含んでいる。

第5層(黄褐色土) 粘性度が強く、粒子のキメが細かい。遺物は含まない。

第6層(黄色土) ロームで、地山の層である。遺物は含まない。

(4) 調査の方針

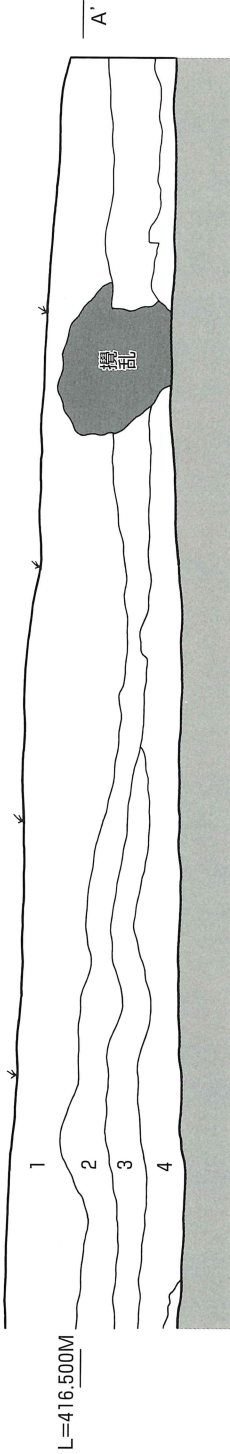
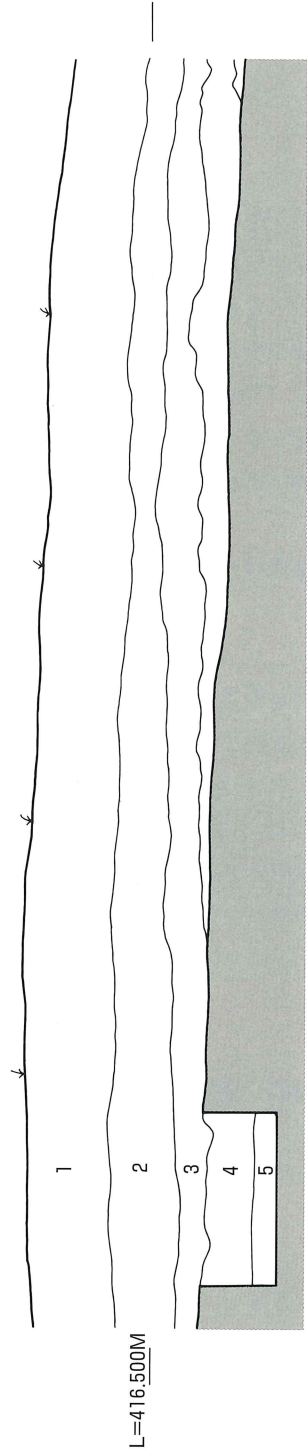
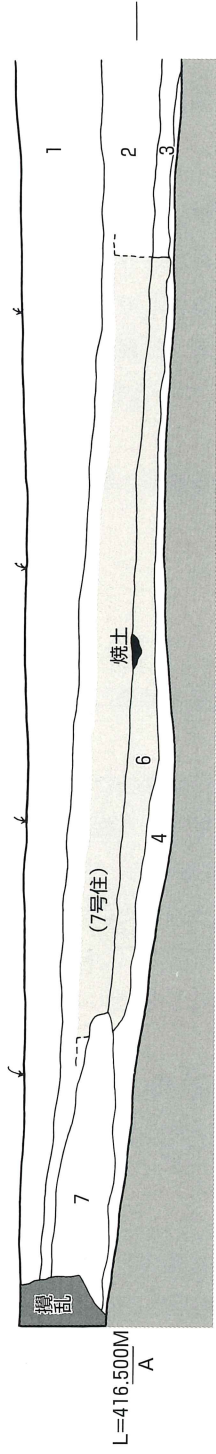
遺構・遺物とも検出されなかったAおよびD地区は調査対象から外し、B・C地区を本調査の対象とした。試掘および土層確認の成果に基づき、以下の方針により調査を実施することにした。

- ①表土剥ぎは、B地区については第1層の耕作土を重機により完全に除去し、第2層からは重機または人力で数cmづつ数回に分けて掘り下げ、その都度遺構検出をおこなうことにした。住居跡が第2層中より掘り込まれているため、この方法が最善と思った。C地区は杉の植林地であったため、木株が一面に存在した。そのため、木株を慎重に除去した後、第1・第2層を重機により取り除いて、遺構検出をおこなうことにした。
- ②B・C地区では実測等の基準とするために、両地区内で、杭打ちをおこなうことにした。東西方向に8m間隔、南北方向に10m間隔で杭を配し、西側からA～Hのアルファベットを、北側から1～15の数字を記して、8m×10mの小調査区(A1区～H15区)を設定した。
- ③縄文時代の包含層の調査は、遺構の調査が全て終了した時点で実施することにした。B地区では、特に遺物が集中している小調査区をピックアップし、掘り下げることにした。C地区は包含層の認められる中央部付近の小調査区を掘り下げ、包含層の範囲の確認と遺物・遺構の検出を実施することにした。

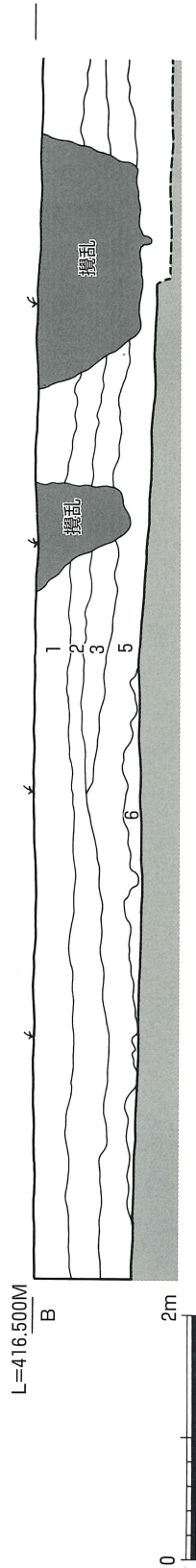
(5) 調査経過

試掘の成果を受けて、本調査は平成6年4月より開始した。調査現場へは急斜面で狭い農作業用の里道を利用するしか方法がなかった。排土置場には調査対象外のA地区をあて、C地区より重機による表土剥ぎを始めたが、梅雨時になっても雨がほとんど降らず土壌の乾燥が著しく、梅雨明けした後は猛暑が毎日のように続いた。このような気象条件のため木株除去・遺構検出などの作業はスローペースにならざるを得なかった。B・C地区の表土剥ぎ・遺構検出およびC地区縄文包含層の調査(C地区では遺構が少なかったため、遺構検出と並行しておこなった)が終了した頃にはすでに8月を迎えていた。思ったより遺構が少なかったこともあり、その後はペースを取り戻し、住居跡・土坑・溝等の遺構の掘り下げ・実測・写真撮影を順調におこなうことができた。11月下旬には一応遺構の実測等を終了した。日程の都合もあり、空撮は12月初めに実施することになった。悪天候と強風という最悪の条件の中ではあったが、何とか無事に終えることができた。その後、B地区の小調査区を掘り下げ、縄文時代包含層の精査をおこなった。12月下旬、雪の舞い始める頃にB・C地区の調査を全て終了し、器材・プレハブ等の撤収を完了した。

土層④
(B地区南北A~A')

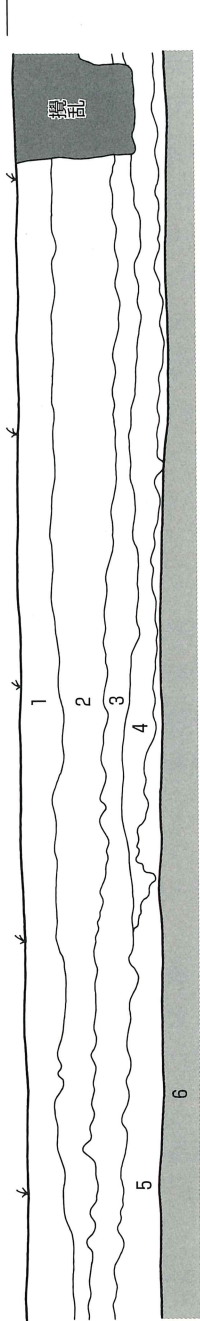


土層⑥
(B地区東西B~B')



第7図 調査区基本土層図No1 (S=1/60)

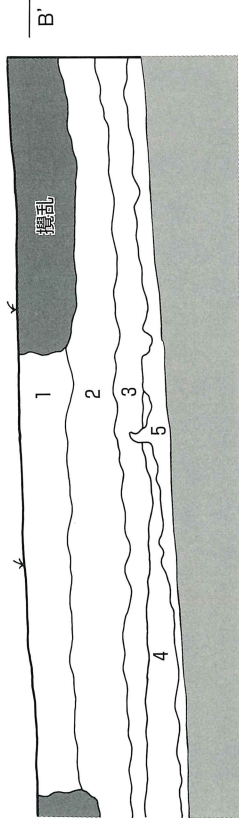
L=416.500M



土層A (B地区南北A~A') 土層説明

番号	特 徴
第1層	褐色土 (耕作)
第2層	黒色土 (植物残骸・根の残骸が細かい、奈良時代以降の遺物を含む)
第3層	黒色土 (礫・土壌がやや細かい、縄文・古墳時代の遺物を含む)
第4層	黄褐色土 (粘性があり、粒子のサイズが細かい)
第5層	黄色土 (ローム)
第6層	明褐色土 (7号住居跡の粘土床土)
第7層	赤褐色土 (粘性に富んでおり、丘陵部からの流り込みか)

L=416.500M

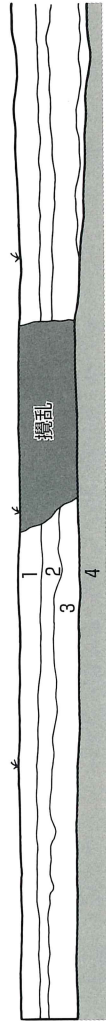


土層B (B地区東西B~B') 土層説明

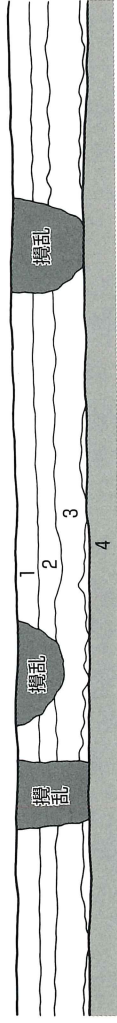
番号	特 徴
第1層	褐色土 (土層Aの第1層に対応)
第2層	黒色土 (土層Aの第2層に対応)
第3層	黒褐色土 (土層Aの第3層に対応)
第4層	茶褐色土 (粘性が弱く、縄文時代以降の遺物を含む)
第5層	黄褐色土 (土層Aの第4層に対応)
第6層	黄色土 (土層Aの第5層に対応)

土層C
(C地区東西C~C')

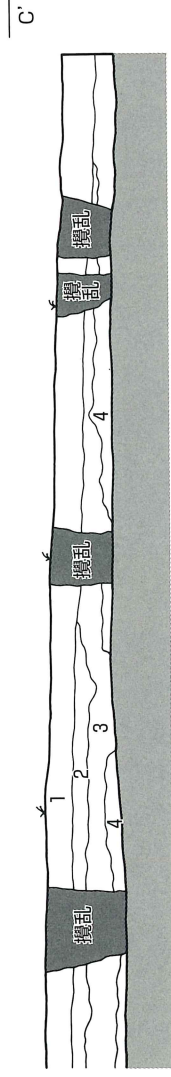
L=416.500M
C



L=416.500M



L=416.500M



土層C (C地区東西C~C') 土層説明

番号	特 徴
第1層	暗褐色土 (土層Aの第1層に対応するが部分的に黒色土が混ざっている)
第2層	黒褐色土 (土層Aの第3層に対応)
第3層	茶褐色土 (粘性が弱く、縄文時代以降の遺物を含む)
第4層	黄色土 (土層Aの第5層に対応)



第8図 調査区基本土層図No2 (S=1/60)

IV. 遺構と遺物

遺構が検出されたのはB・C地区である。いたる所で後世の攪乱を受けていたが、B地区を中心に住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝などが確認された。

B地区では、住居跡10基・掘立柱建物跡6棟・土坑14基（うち近世土坑1基）・溝状遺構4条が検出された。住居跡は本地区の北東および西よりの地点に分布している。規模は一辺が4～5m前後のものが大部分で、形態的には方形と長方形の2種類が見られ、主柱穴はすべて4本である。カマドを付設するものが半数を占め、1号住居跡を除き、すべて北壁中央部に構築している。遺存状態は5号住居跡と8号住居跡を除き、あまり良くない。また、カマド内部あるいは周辺部に甕などの土師器片が集中する傾向にある。須恵器の量は少なく、土師器が主体を占める。後述するが、須恵器や土師器の特徴から判断すると、若干の時期差はあるもののほぼ8世紀前半～中頃（奈良時代）に位置付けられる。掘立柱建物跡は住居跡と重複することなく分布している。1号掘立（2間×2間総柱）・2号掘立（2間×4間）・3号掘立（2間×2間総柱?）・4号掘立（2間×4間）・5号掘立（1間×2間）・6号掘立（2間×4間）の6棟を数えた。柱穴からの出土遺物はない。土坑は本地区の西よりの地点に主として分布している。楕円形および長楕円形のものが主流で、内部からの遺物はほとんどない。溝状遺構のうち1号溝は本地区の平坦部が切れて斜面へ移行する付近で検出された。断面U字状を呈し、全長約35m・幅約2～3m・検出面からの深さ約50cmを測る。近世土坑は本地区の中央部東よりで検出された。径約1mを測り、円形を呈する。子牛の頭骨を中心に一体分が埋葬されていた。また、内部からは18世紀後半代の染付け碗が出土している。

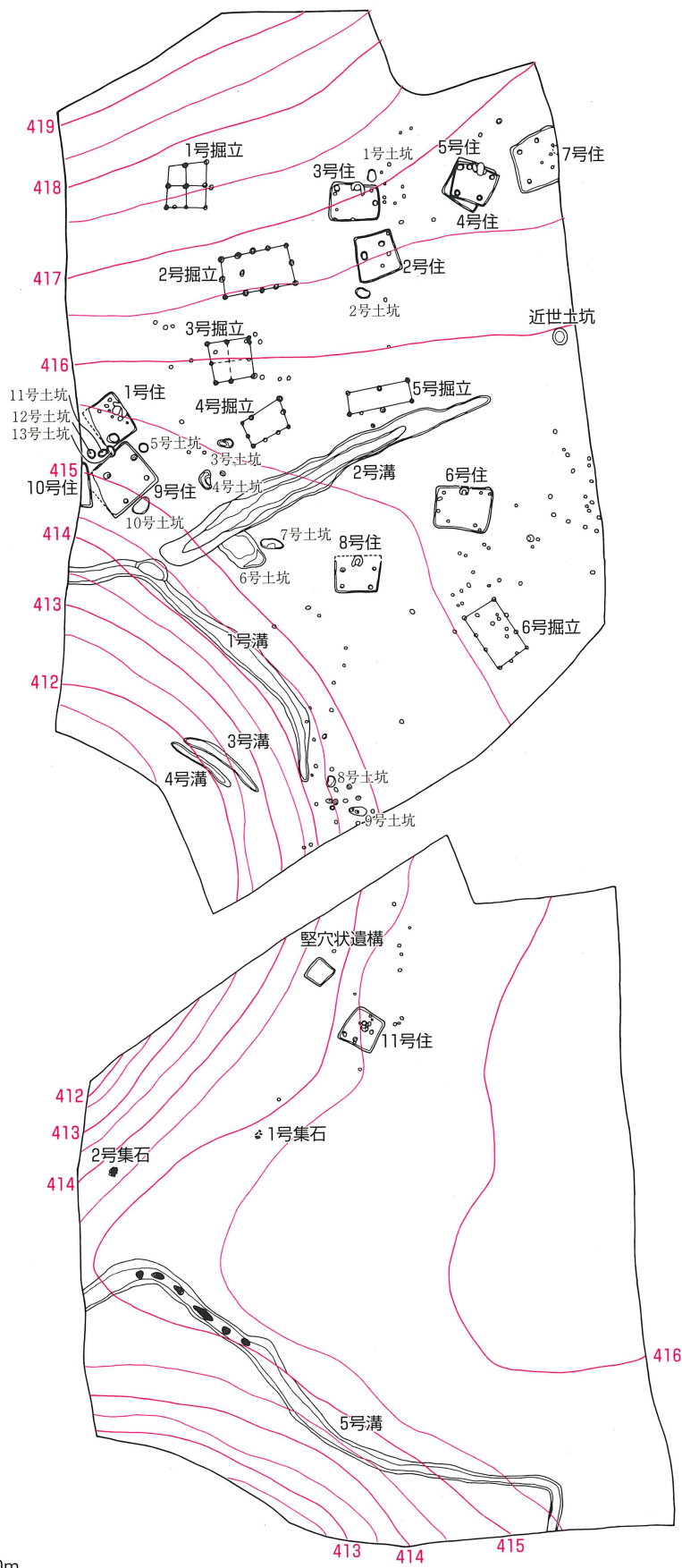
C地区からは、住居跡1基・竪穴状遺構1基・溝状遺構1条・集石遺構2基とB地区に比べ、遺構の分布が希薄である。これは、全面的に杉の植林地であったため攪乱が著しいことに起因することと思われる。住居跡は本地区の北側に位置する。規模は3.6m×3.6mの方形を呈し、床面中央部には炉跡がある。炉跡の周辺部からほぼ完形に近い状態で、古墳時代前期に位置付けられる小型丸底壺と二重口縁状の口縁部をもつ壺が出土した。竪穴状遺構は住居跡の北側に位置する。規模は小さく、2.4m×2.2mの方形を呈し、柱穴などの施設はない。覆土からタタキ目のある土器片が少量出土し、周辺には胴部に刻目突帯文をもつ弥生時代終末頃の土器片が数点散布していた。溝状遺構はB地区の1号溝と同様の地形上で検出された。全長約55m・幅約2m・検出面からの深さ約40cm前後を測り、溝内の西側から小石を塚状に積み上げた箇所が6ヶ所確認された。集石遺構は2基とも西側の地点にあり、自然石や河原石などで構築されていた。遺物は皆無である。

本遺跡の立地する舌状丘陵地に広がる平坦部は、南北約250m、東西約300mほどである。調査区域はその平坦部西側の一部分にすぎない。住居跡などで構成される集落は調査区域の東西両方向（特に、東方向）にも広がるものと思われる。また、遺構の分布が集中するのはB地区であるが、状況からするとC地区にも本来はもっと遺構が存在していたと考えられる。

以下、各遺構および遺物について住居跡（竪穴状遺構を含む）・掘立柱建物跡・土坑（近世土坑を含む）・溝状遺構・集石遺構・包含層出土遺物の順で説明を加える。

第1表 B・C地区遺構一覧表

遺 構	地 区	B 地 区	C 地 区	合 計
住居跡（竪穴状遺構を含む）		10基	2基	12基
掘立柱建物跡		6棟	0棟	6棟
土坑（近世土坑を含む）		14基	0基	14基
溝状遺構		4条	1条	5条
その他		縄文時代包含層	集石遺構2基 縄文時代包含層	2基



第9図 松木遺跡遺構配置図

等高線は遺構検出面のものを記入した。

1. 住居跡

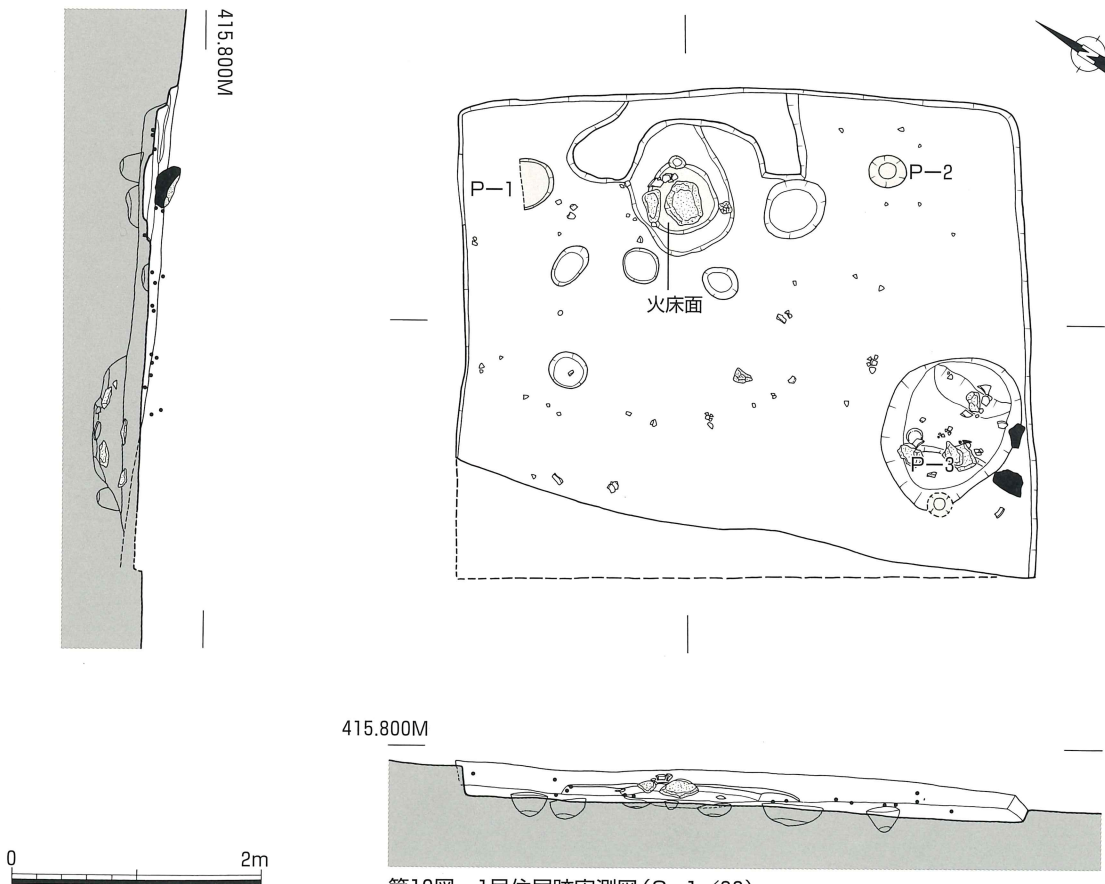
1号住居跡 (第10図)

B地区の中央西寄りに位置する。北東壁にカマドを付設し、南側の床面には楕円形の土坑が掘られている。住居の規模はN-55°-Eに主軸方向をとる南北(長辺)4.5m×東西(短辺)3.9mの長方形を呈し、検出面からの深さは10~20cmを測る。主柱穴は4本と思われるが、北西の壁面付近は一部削平をうけているためP1~P3の3本のみが検出された。直径20~30cm、深さ約20cm、柱穴間約2.8mを測る。床面は北東側から南西側に向かい緩やかな下り勾配になっている。住居跡内にはやや粘性のある明褐色土と粒子の粗い黒色土が順次自然堆積している。

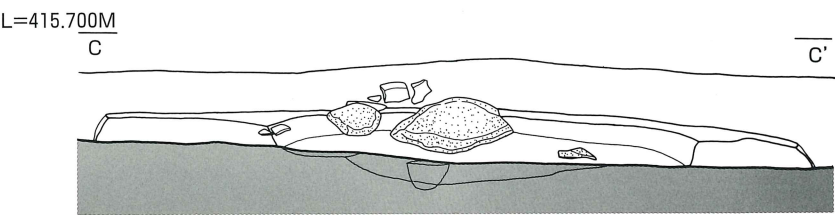
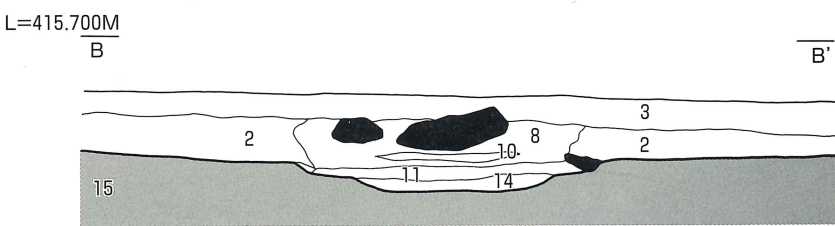
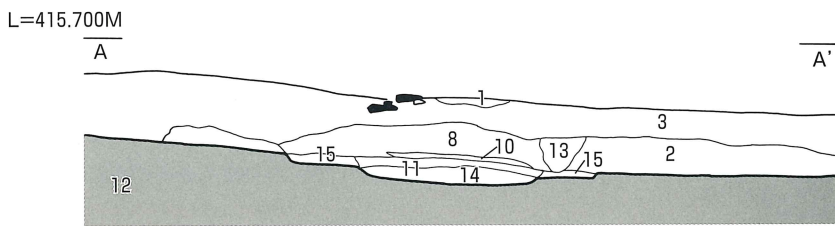
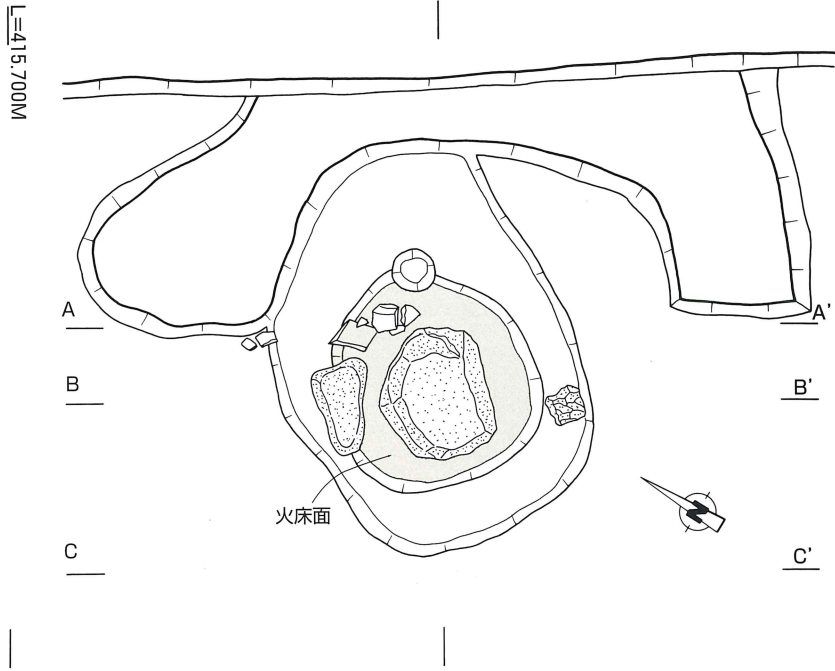
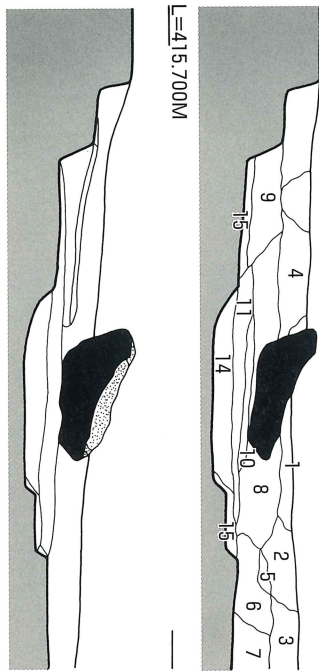
遺物はあまり多くなく、カマド付近を中心に床面から坏蓋・鉢などの須恵器が2点・甕・鉢・皿などの土師器が6点、紡錘車の未成品が1点出土している。また、土坑内からは須恵器の坏身や土師器の鉢・坏身、および鉄製品などが出土している。その他、覆土中からは弥生土器片および黒曜石細片などが数点出土している。

カマド (第11図)

遺存状態は悪く、天井部は崩壊している。35cm×30cmを測る安山岩がやや浮いた状態で検出された。側面の一部と下面が被熱し赤褐色を呈しており天井石と思われる。この安山岩の直上で土師器(甕)の口縁部破片が検出されている。また、付近には内側が被熱した25cm×15cmを測る川原石があり、袖石の一部と思われる。安山岩の下方面には焼土が充填し、側壁が赤褐色に被熱した55cm×55cmの火床面が見られ、燃焼部と思われる。燃焼部の後方には小ピットがあり、支脚痕であろう。炎口部から煙口部にかけては燃焼部より一段高くなっている。左右袖部分の一部と煙道部は、崩落および削平されており、原形をとどめていない。



第10図 1号住居跡実測図(S=1/60)



1号住居跡カマド土層説明図

番号	特徴
第1層	褐灰色土(砂質・攪乱)
第2層	褐色土(住居跡覆土)
第3層	黒褐色土(住居跡覆土)
第4層	暗茶褐色土(粘性がある)
第5層	暗黒褐色土
第6層	暗茶褐色土(焼土粒子を若干含む)
第7層	暗褐色土(やや粘性がある)
第8層	茶褐色土(焼土粒子を含む/天井部崩落土)
第9層	黒褐色土(粘性がある)
第10層	黒褐色土(灰まじり/灰残滓)
第11層	黄褐色土(焼土粒子を多量に含む/灰残滓)
第12層	黄褐色粘質土(袖部を形成する)
第13層	明褐色土
第14層	赤褐色土(焼土/火床面)
第15層	褐色粘質土(カマド基盤床)

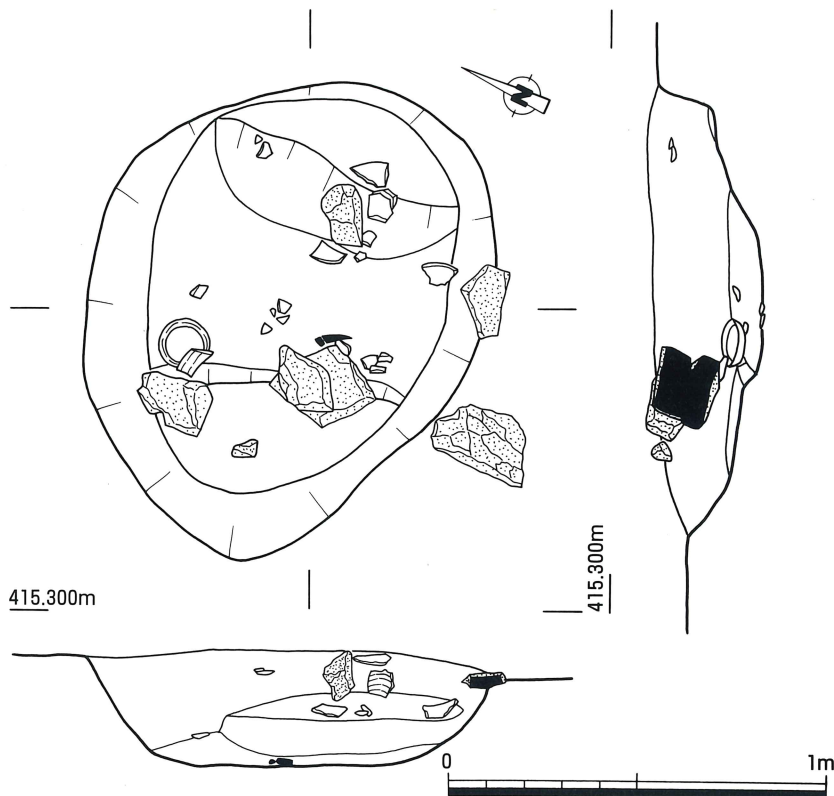


第11図 1号住居跡カマド実測図 (S=1/20)

カマド壁体と袖部分は黄褐色の粘土を住居壁に貼り付けて構築している。また、住居跡の床面を3～4cmほど掘り下げ、そこに粘性のある褐色粘質土を基盤床として貼り、その後、中央部を新たに掘り下げ燃焼部としている。

土坑 (第12図)

住居跡内の南側で、床面精査の際に検出された屋内土坑である。(長軸)1.3m×(短軸)1.0mの楕円形を呈する。東西の側壁にそれぞれテラス状の段があり、中央部は一段低くなっており、深さ30cmを測る。覆土は、上層に住居跡のものに類似する黒色土が堆積している。下層には灰および若干の焼土を含む黒灰色粘質土が見られるが、土坑内側壁には被熱した形跡がない。遺物の他には部分的に表面が被熱し赤褐色を呈する川原石と角礫が数個ほど浮いた状態で検出された。また、土坑の掘り方の一部が住居跡の支柱穴であるP3を切っている。灰・焼土粒子混じりの黒灰色土はカマドの灰残滓であり、被熱した川原石・角礫はカマドの袖石・天井石の一部であると推定される。



第12図 1号住居跡屋内土坑実測図(S=1/20)

以上のことから判断すると、この土坑は、住居跡廃棄に伴って、カマドの機能が停止した段階で、意図的に壊されたカマドの残骸を器類(生活用具として使用していたもの)と共に廃棄する行為のために掘られたと推測できる。この行為はカマド廃棄における祭祀との関連性が指摘できよう。

出土遺物

土器 (第14図)

須恵器坏蓋 (1) 反転復元

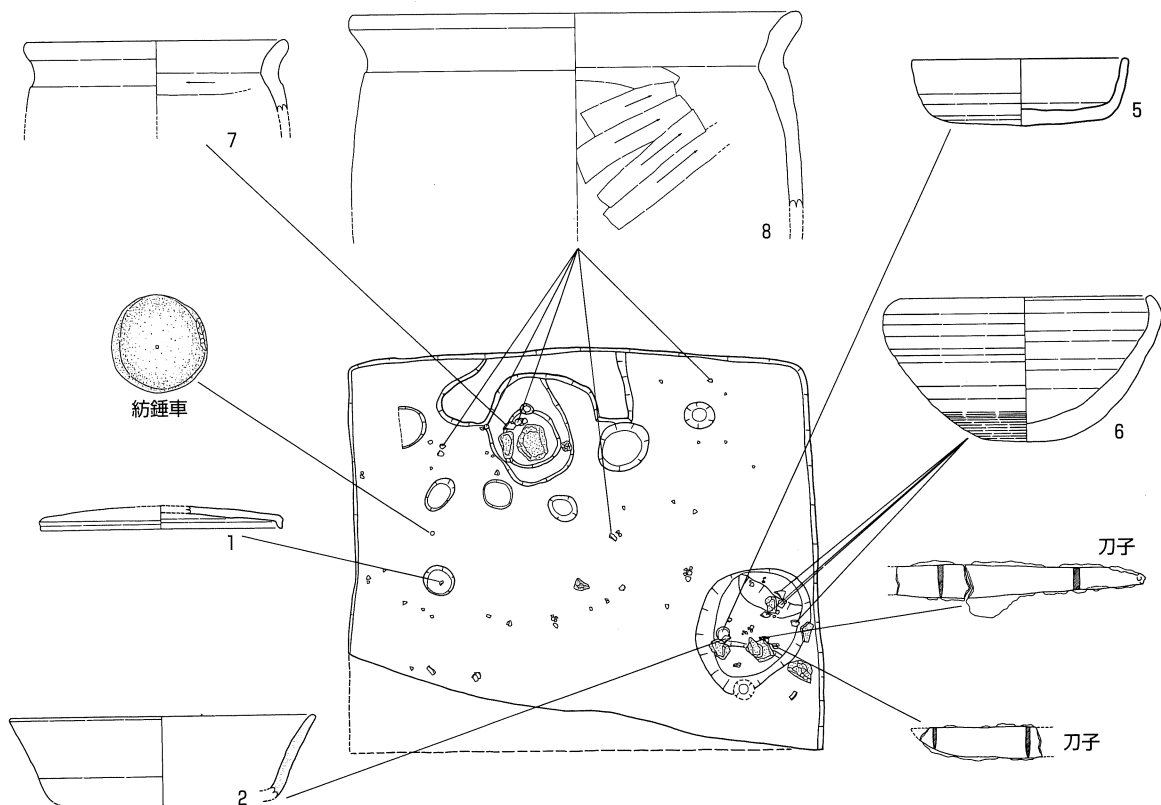
復元口径15.0cmを測る。口縁部には鈍い沈線を巡らし、端部は断面三角形でほぼ垂直に折れる。つまみ部分は破損しているが、恐らく扁平な擬宝珠つまみになると思われる。天井部には回転ヘラケズリを施す。胎土には白色粒子を若干含み、内外面とも暗灰色を呈する。焼成は堅緻である。

須恵器坏身 (2) 反転復元

土坑内より出土する。復元口径19.0cmを測る大型の坏である。破片のため底部の形状は分からないが、底部から体部にかけて膨らみ、やや開きながら直線的に立ち上がる。胎土には砂粒子を若干含み、内面は灰色・外面は暗灰色を呈する。焼成は堅緻である。

須恵器鉢 (3)

小片のため明確ではないが鉢の底部であろう。平坦面をやや持つが、若干尖り気味である。胎土には砂粒子を若干含み、内外面とも灰色を呈する。焼成はあまい。



第13図 1号住居跡出土遺物位置図(縮尺不同)

遺物の番号は実測図の番号に同じ

土師器皿(4) 反転復元

復元口径13.0cmを測る。底部から体部にかけて緩やかに内湾する。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。胎土は精製されていてキメが細かく、内外面とも浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。胎土からすると搬入品の可能性がある。

土師器坏身(5)

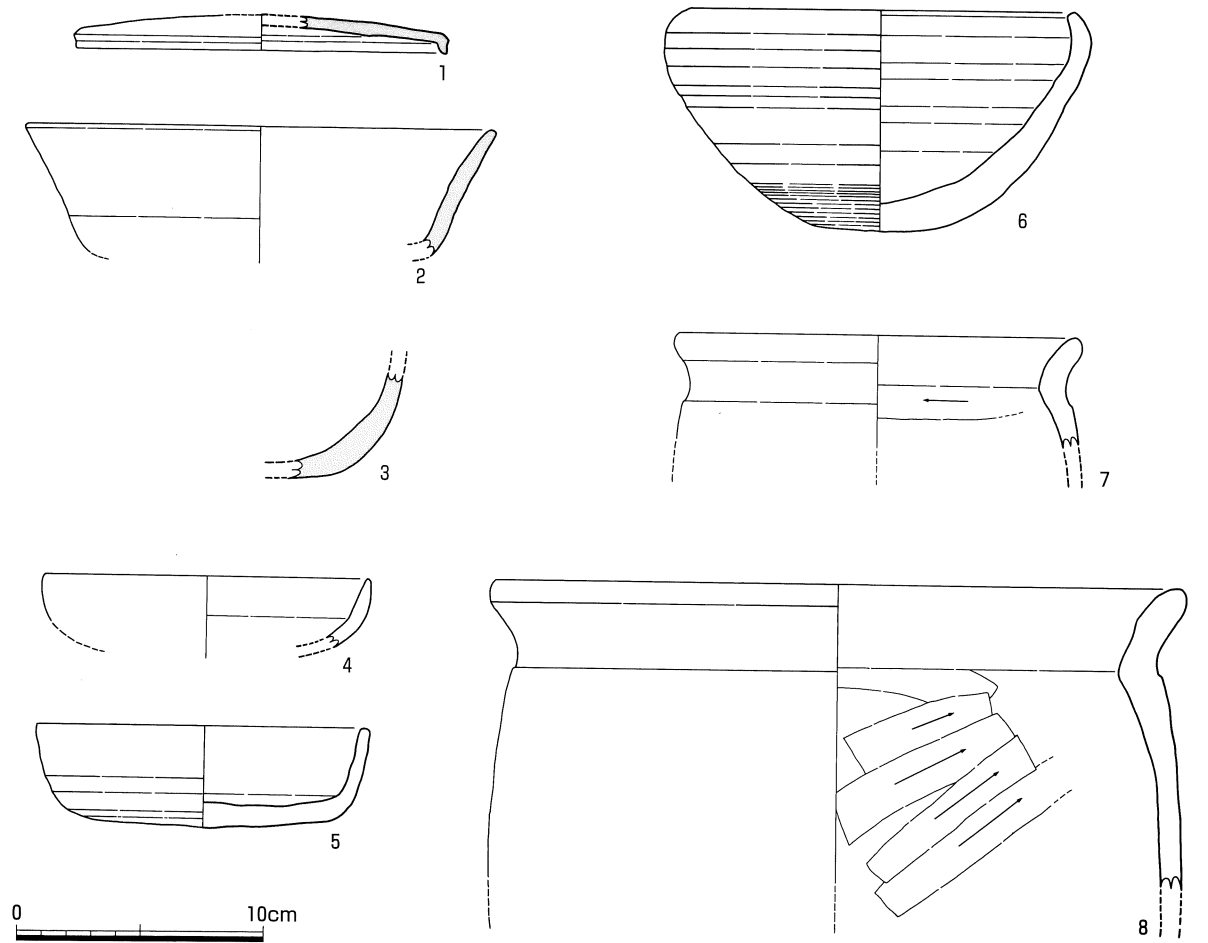
土坑内より出土する。口径13.0cm、器高4.1cmを測る完形の坏である。底部は平底で、体部から口縁部にかけてあまり開かず立ち上がる。内外面はナデ、底部は回転ヘラケズリを施す。胎土には少量の角閃石および長石を含み、内外面とも浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

土師器鉢(6)

土坑内より出土する。口径15.5cm、器高8.9cmを測るほぼ完形に近い土師質の鉢である。須恵器鉄鉢の模倣品である。底部は尖らず、やや凸レンズ状に近い面を持つ。口縁部は短く内湾し、内湾度は強い。内外面はナデ調整で、底部付近にはカキ目調整痕と思われる条痕が見られる。また、内部には輪積痕が明瞭に残る。胎土には少量の角閃石・長石および赤褐色粒子を含み、内外面とも暗黄橙色を呈し、焼成は良好である。

土師器甕(7・8) 反転復元

(7)は復元口径16.0cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は丸味を持つ。頸部付近に鈍い段があり、胴部はあまり膨らまず底部へ続く。外面は磨滅が著しく調整は不明であるが、内面はヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土には角閃石・長石・その他砂粒子を多量に含み、内外面とも明赤褐色を呈する。(8)は復元口径27.6cmを測る。口縁部はやや長めに外反し、端部は丸味を持つ。頸部付近に鈍い段があり、器形的には(7)によく似ている。調整・胎土・焼成も(7)と同様であり、内外面とも明褐色を呈する。いずれも、カマド付近の遺物である。



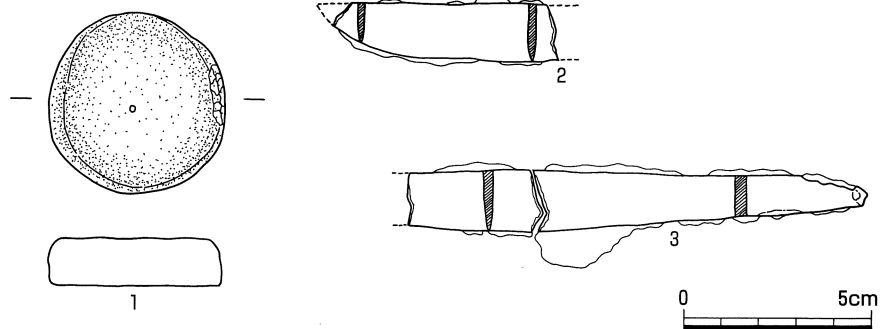
第14図 1号住居跡出土遺物実測図No1 (S=1/3)

()番号は土坑内遺物

その他 (第15図)

紡錘車 (1)

住居跡床面から出土した軽石を用いた紡錘車の未成品である。中央部には0.1cmを測る穿ちかけの孔があり、外径4.7cm、厚さ1.2cm、重さ36.5gを測る。



第15図 1号住居跡出土遺物実測図No2 (S=1/2)

鉄製品 (2・3)

いずれも土坑内の底面より出土した刀子である。(2)は先端部付近の破片であり、基部を欠損する。現存長6.0cm、幅1.3~1.5cm、厚さ0.2cmを測る。(3)は基部から先端部付近の破片であり、先端部の一部を欠損する。現存長12.2cm、幅1.0~1.5cm、厚さ0.3cmを測り、基部端は丸味を持つ。特徴などにより、(2)と(3)は同一個体になるものと思われる。

時期

出土遺物は、須恵器坏蓋(1)・土師器坏身(5)・土師器鉢(6)などの特徴より判断すると、8世紀前半から中頃の所産であると思われる、本住居跡の時期に比定されよう。

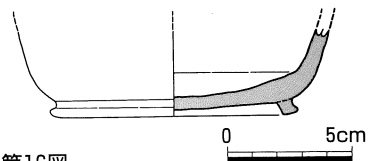
2号住居跡 (第17図)

B地区の北寄りの緩やかな斜面に位置する。カマドは付設されていない。住居の規模はN-75°-Eに主軸方向（短辺方向）をとる南北（長辺）4.4m×東西（短辺）4.0mの長方形を呈し、南西の隅付近がやや張り出してゐる。検出面からの深さは10~15cmを測る。床面からは数個のピットが検出されたが、位置および深さから判断すると、いずれも支柱穴とは言い難い。床面は北側から南側に向かい緩やかな下り勾配になっている。住居跡内には粒子の細かい黒色土が自然堆積している。遺物はほとんどが小片で、量的にも少なく、図示できるものは床面出土の須恵器坏身が1点のみである。その他、覆土中からは弥生~古墳時代にかけての土器片および黒曜石細片が出土している。住居跡内東側では（長軸）90cm×（短軸）60cm、深さ40~50cmを測る楕円形の屋内土坑が検出されたが、遺物は出土しなかった。

出土遺物 (第16図)

須恵器坏身

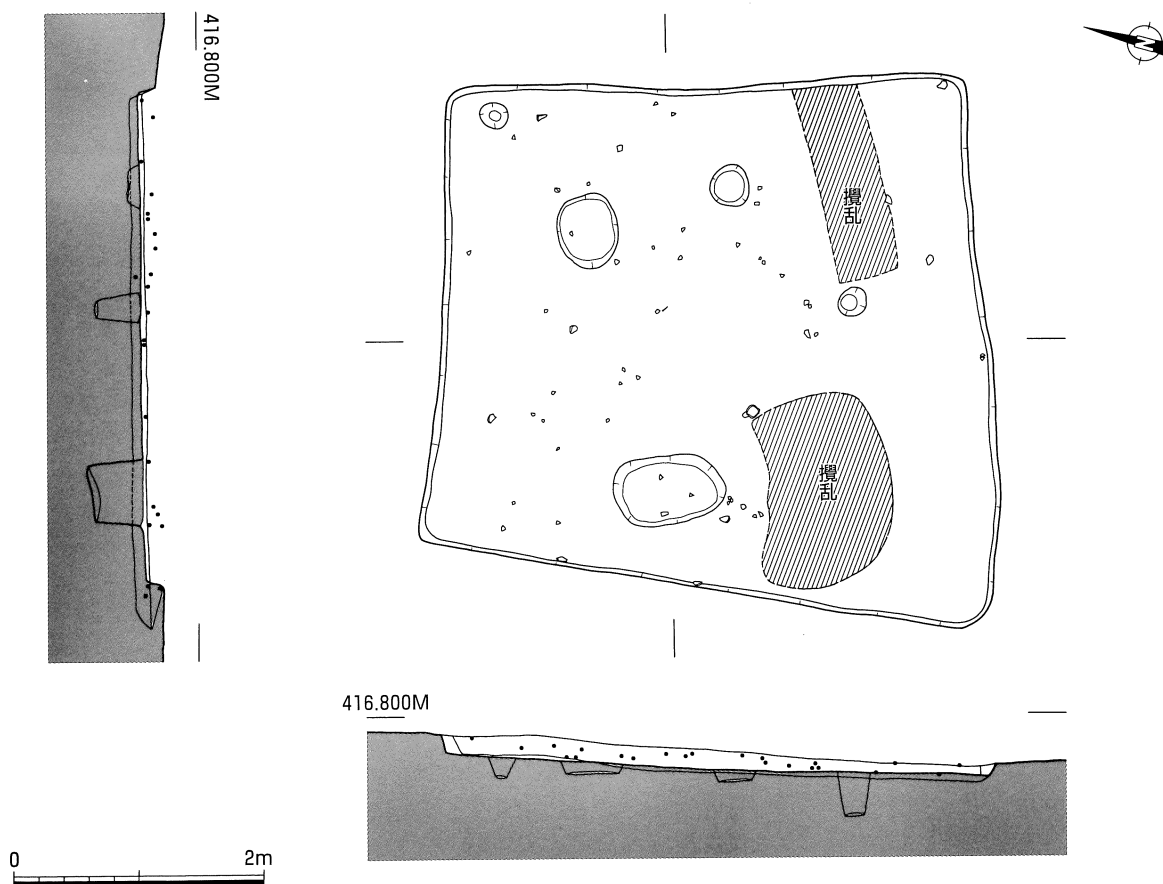
底部付近の破片である。約5mmの高台が張り出し気味につく。底部と体部の境は丸味を帯びている。内外面はナデ調整、底部には回転ヘラケズリを施す。胎土には2~3mmの石英粒子を少量含み、内外面とも灰色を呈する。焼成はあまい。



第16図
2号住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)

時期

復元可能な出土遺物が1点と少なく、住居跡の時期を決定するにはやや躊躇する。しかし、出土状況が床面直上であることを考慮すると、この遺物に頼らざるを得ない。須恵器坏身の特徴より判断すると、8世紀前半代の所産と思われ、本住居跡の時期に比定されよう。



第17図 2号住居跡実測図 (S=1/60)

3号住居跡 (第18図)

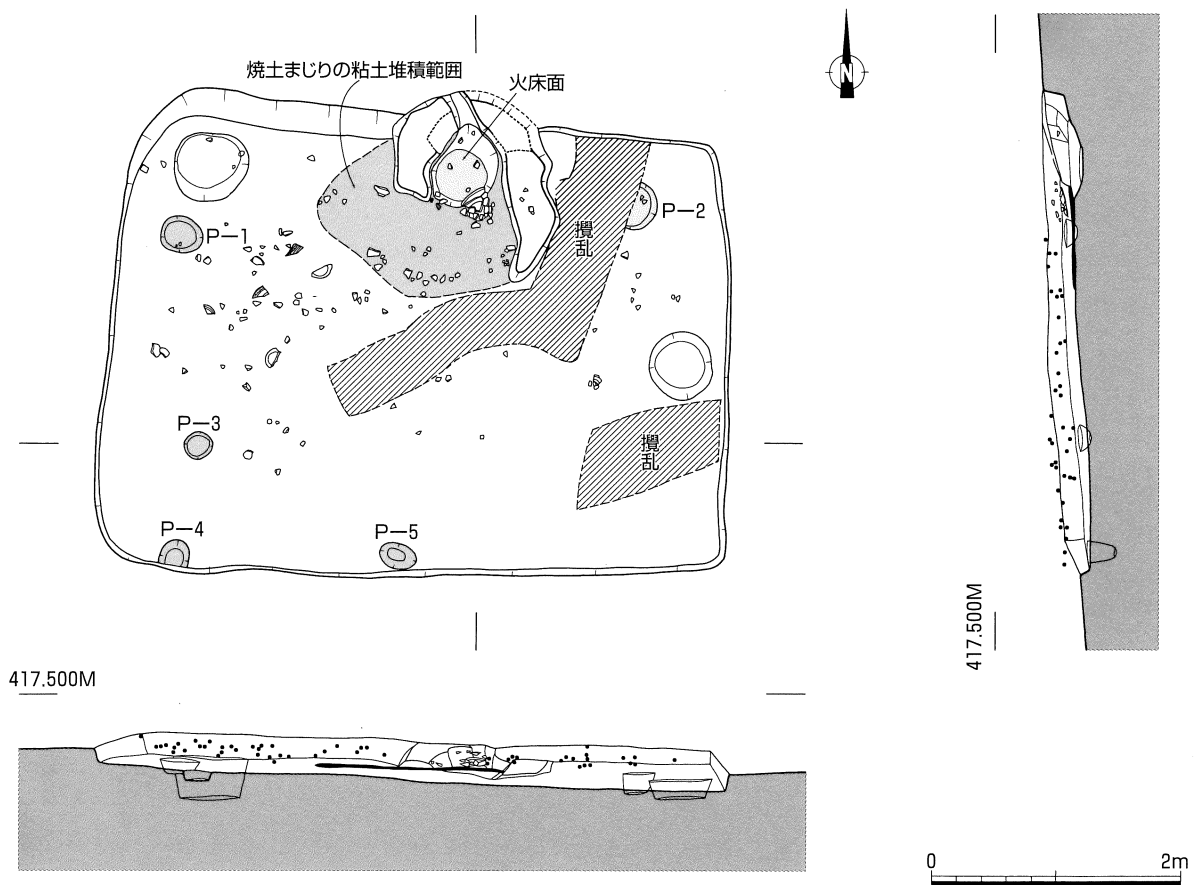
2号住居跡の北側に位置する。北壁にカマドを付設している。住居の規模はN-5°-Eに主軸方位をとる南北(短辺)3.7m×東西(長辺)5.0mの長方形を呈し、検出面からの深さは10~20cmを測る。P1~P3が主柱穴と思われるが、南東部の床面が攪乱を受けているため、残り1個は検出されなかった。直径20~30cm、深さ10~20cm、柱穴間1.7~3.7mを測る。また、南壁西寄りの壁際に20×30cmの楕円形を呈し、深さ20~30cm、柱穴間1.8mを測るP4・P5が検出された。出入口の施設であろうか。床面は堅く、北側から南側に向けて緩やかな下り勾配になっている。また、カマド付近には焼土粒子を多量に含む灰褐色土の堆積が見られる。おそらく、灰残滓などを掻き出した跡であろう。住居跡内には粒子の細かい黒色土が自然堆積している。

遺物は破片が大部分を占めるが、カマド内をはじめ、床面などからはほぼ完形に近い甕など土師器が8点、須恵器が9点、その他砥石1点が出土している。

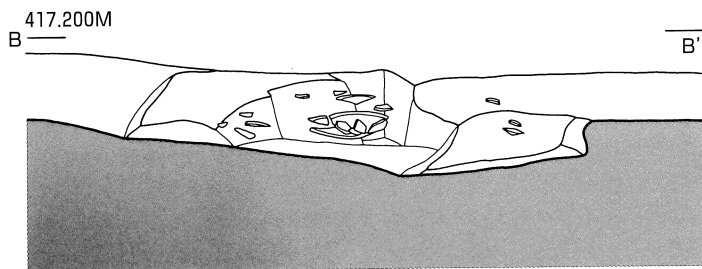
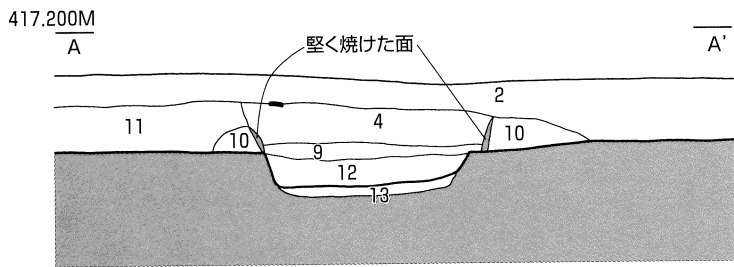
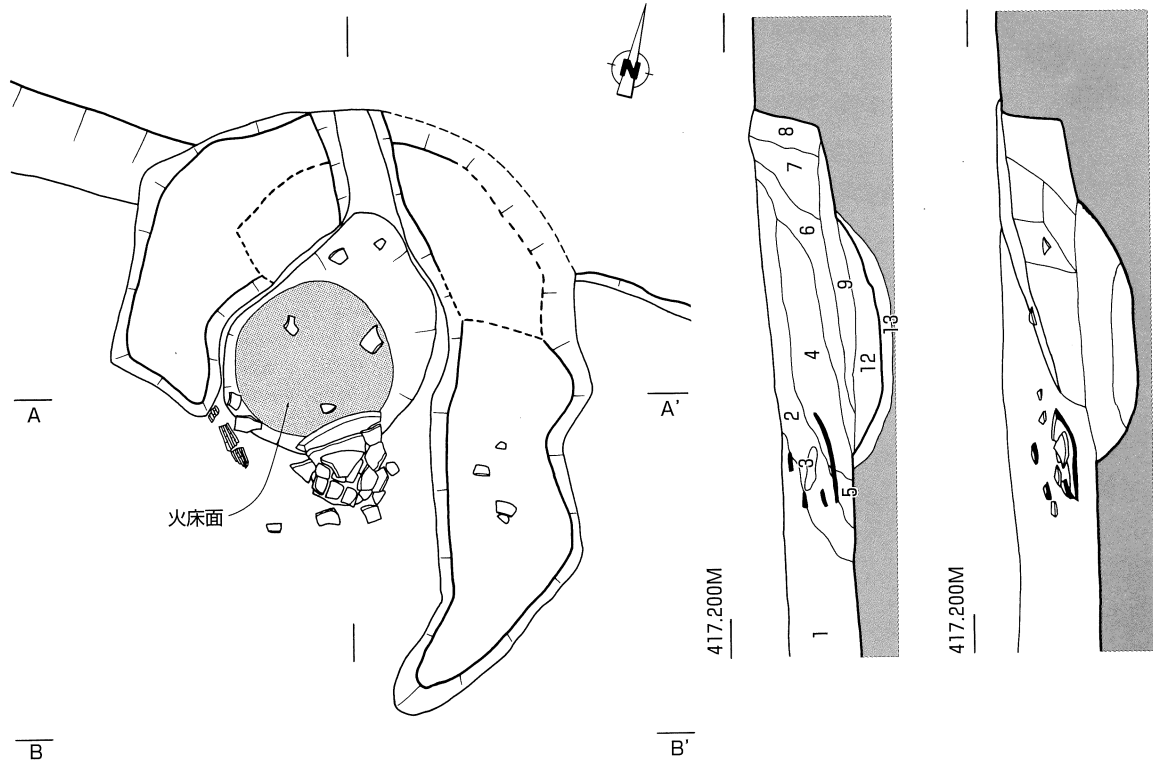
カマド (第19図)

遺存状態はあまり良くなく、天井石や袖石などのカマド構築に関する石材類は検出されなかった。袖部分の内壁は赤褐色に焼けており、左袖部は部分的に崩壊していた。燃焼部には灰黄色粘質土の基盤床をもつ50cm×65cmの被熱した火床面があり、焼土が詰まっていた。支脚および支脚痕は検出されなかった。炎口部から煙口部にかけては燃焼部より一段高くなっている。天井部は崩落・埋没しているため原形をとどめない。煙道部は住居跡外へ出ているようであるが、削平が著しく残りが悪い。なお、燃焼部より土師器(甕)が2個体出土しており、その内1点は潰れた状態ではあるが完形品である。

燃焼部は住居跡の北壁床面を掘り込み、灰黄色粘質土を貼って構築している。壁面および袖部分は住居跡の北



第18図 3号住居跡実測図(S=1/60)



3号住居跡カマド土層説明図

番号	特徴
第1層	黒褐色土(住居跡覆土)
第2層	茶褐色土(1cm以下の焼土粒子を含む/住居跡覆土)
第3層	赤褐色土(焼土ブロック)
第4層	明黄褐色粘質土(1cm以上の焼土粒子を含む/天井部崩落土)
第5層	黒灰色土(炭まじり)
第6層	明黄褐色土(焼土粒子を若干含む)
第7層	黒灰色土(炭まじりの焼土粒子を一部分含む/煙道部崩落土)
第8層	褐色土(やや粘性をもつ)
第9層	黄褐色土(やや粘性があり、焼土粒子を含む/灰残滓)
第10層	黄褐色粘質土(袖部を形成する)
第11層	暗黒褐色土(住居跡覆土)
第12層	赤褐色土(焼土/火床面)
第13層	灰黄色粘質土(カマド基盤床)



第19図 3号住居跡カマド実測図(S=1/20)

壁の一部を若干掘り込み、黄褐色の粘土を馬蹄状に貼り付けて構築している。

出土遺物

土器 (第20図)

須恵器坏身 (1・2) 反転復元

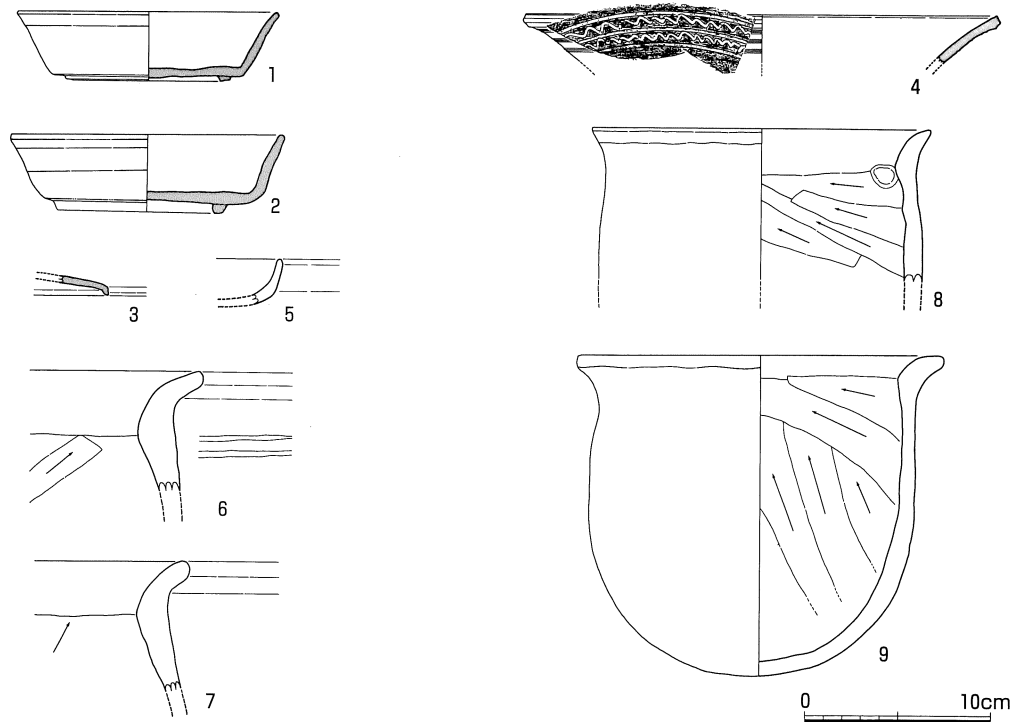
(1)は復元口径13.7cm、復元器高3.6cmを測る。底部と体部の境より内側に約3mmの低い高台がつく。底部から体部にかけて強く屈曲しながら直線的に開き、口縁部で若干外反する。(2)は復元口径14.7cm、復元器高4.2cmを測る。底部と体部の境より内側に約5mmの高台がつく。底部から体部にかけてやや丸味を持ち、開き気味に緩やかに立ち上がる。ともに、内外面はナデ調整、底部は回転ヘラケズリを施している。胎土には白色粒子を若干含み、内面は灰白色・外面は暗灰色を呈する。焼成は堅緻である。

須恵器坏蓋 (3)

口縁部の破片である。口縁端部は断面三角形でほぼ垂直に折れる。内外面とも黒灰色を呈する。胎土には砂粒子を若干含み、焼成は堅緻である。

須恵器甕 (4) 反転復元

復元口径50.0cmを測る大型甕の口縁部付近の破片である。頸部から口縁部にかけて直線的に大きく開き、口縁端部は肥厚する。口唇部に凹線が一条、頸部には凹線による突帯が3条巡る。凹線間は櫛描きによる波状文を描いているが、やや肉太であり、凹線と表現した方がよいかも知れない。胎土には白色粒子等を多量に含み、内外面は黒灰色を呈する。焼成は堅緻である。



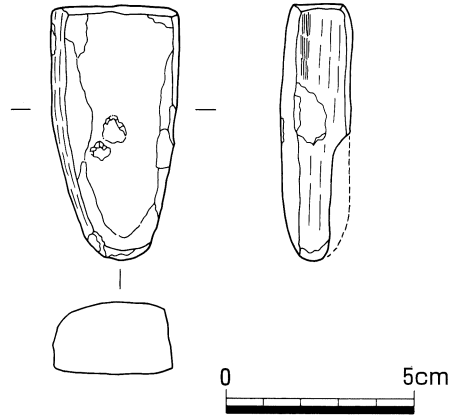
第20図 3号住居跡出土遺物実測図No1 (S=1/3 ④は1/6)

土師器皿 (5)

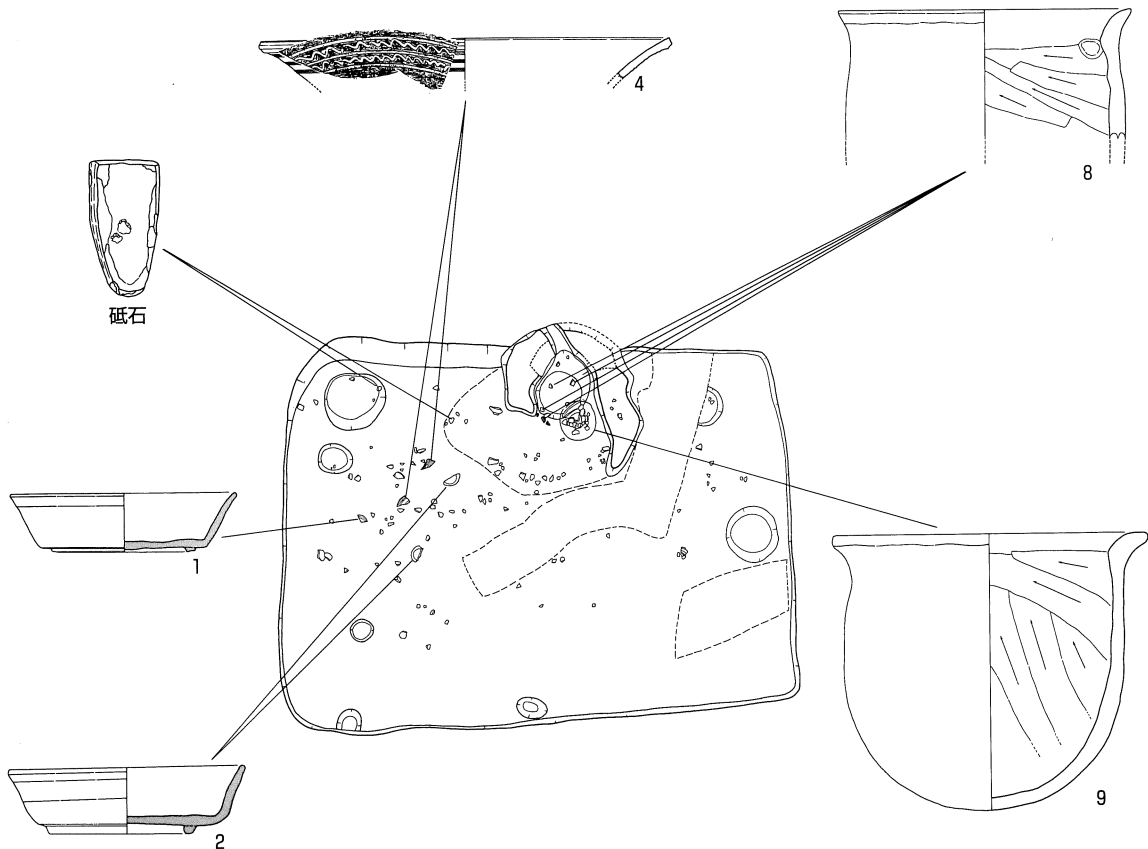
口縁部の破片である。底部と体部の境で屈曲し、端部はやや内湾する。磨滅が著しく調整は不明である。胎土はキメが細かく精製されており、内外面とも橙色を呈する。焼成は良好である。

土師器甕 (6・7・8・9) 8は反転復元

(6) は口縁部の破片である。頸部付近が肥厚し、口縁部は伸びながら強く外反する。端部は丸味を持ち、細くなる。内面は暗黄橙色・外面は黄橙色を呈する。(7) も口縁部の破片である。頸部付近がやや肥厚し、口縁部は短く外反する。端部は丸味を持ち、内外面とも黄橙色を呈する。ともに、内面はヘラケズリ、外面は磨滅が著しいがナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整で仕上げている。胎土には角閃石・長石・赤褐色粒子およびその他砂粒子を含む。焼成は良好である。(8) は復元口径18.0cmを測る。口縁部は肥厚気味で短く外反し、端部は細く尖り気味である。胴部はあまり膨らまずに、底部へ続くものと思われる。内面は黄橙色・外面は明黄褐色を呈する。(9) は口径19.0cm、器高17.0cmを測る完形品である。口縁部は短く強めに外反し、端部は丸くおさめる。胴部は下半でやや膨らみ、底部は丸底である。内面は暗黄橙色・外面は明黄褐色を呈する。底部から胴部下半にかけては器面が被熱し赤褐色を呈し、胴部上半から口縁部にかけては部分的に煤の付着が見られる。(8・9) とともに、カマド内より出土している。内面はヘラケズリ、外面は磨滅が著しいがナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。胎土には、角閃石・長石およびその他砂粒子を多量に含んでいる。焼成は良好である。なお、(8) の頸部内面には指頭圧痕が見られる。



第21図 3号住居跡出土遺物実測図No2 (S=1/2)



第22図 3号住居跡出土遺物位置図 (縮尺不同)

遺物の番号は実測図の番号と同じ

その他（第21図）

砥石

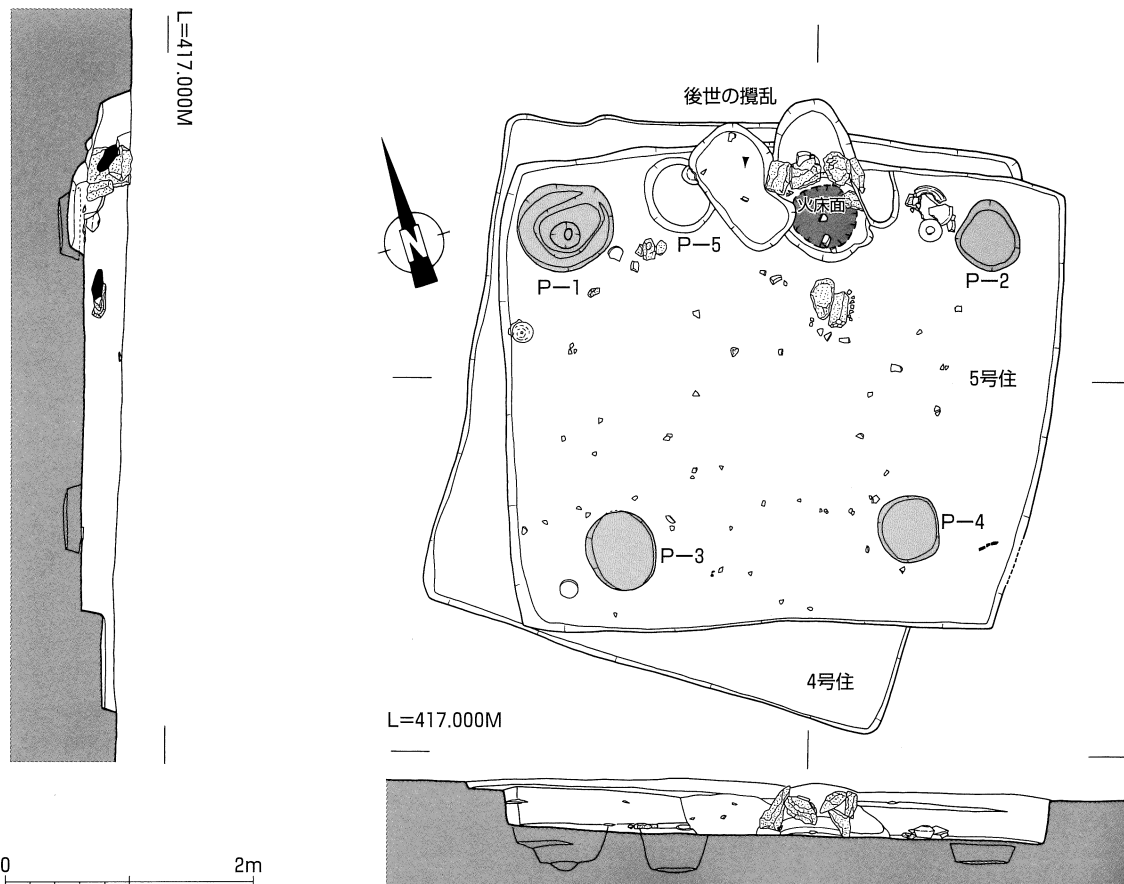
住居跡床面より出土した緑色変岩を用いた砥石である。裏面が一部剥離しているが、くさび形を呈し、断面は蒲鉾状を呈する。3面を使用しており、使用痕は明瞭で若干の凹みがある。外径6.7cm、幅3.1cm、厚さ1.9cm、重さ70.9gを測る。

時期

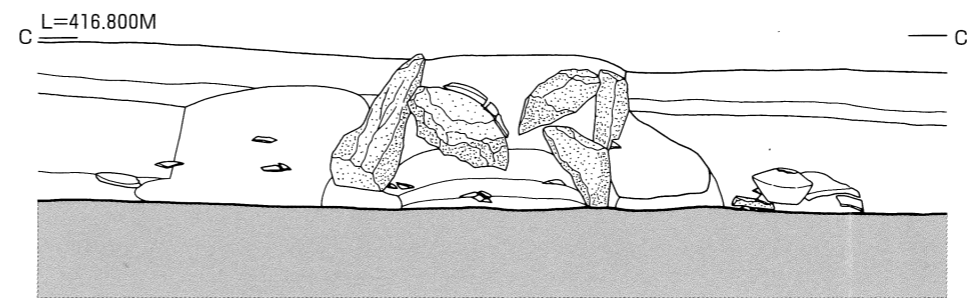
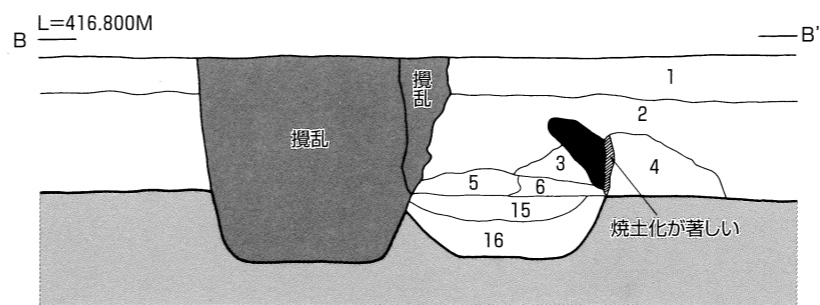
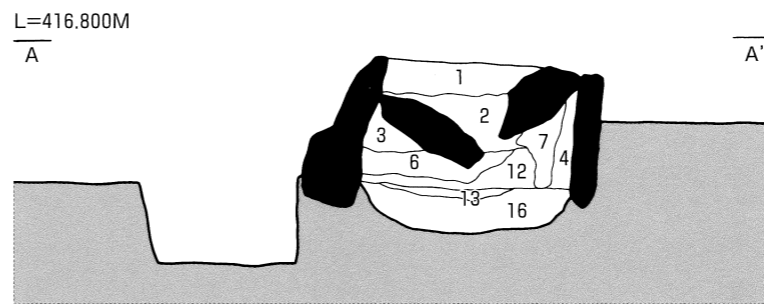
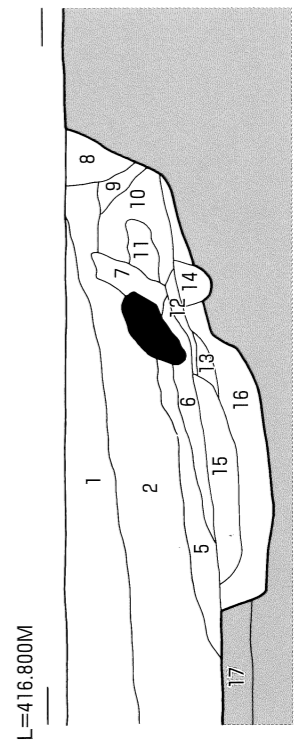
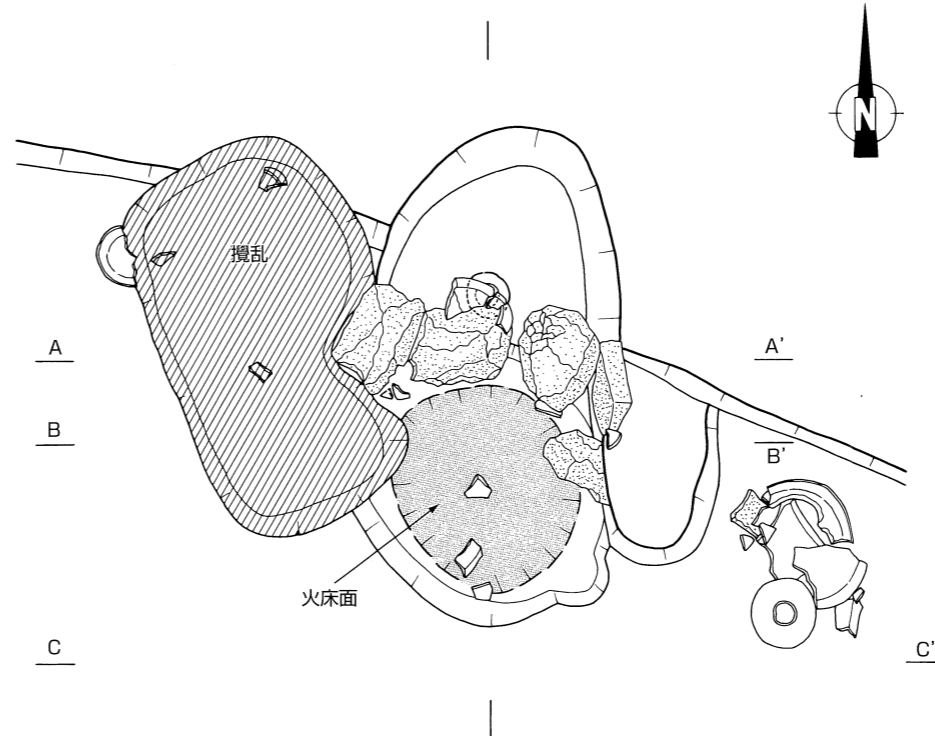
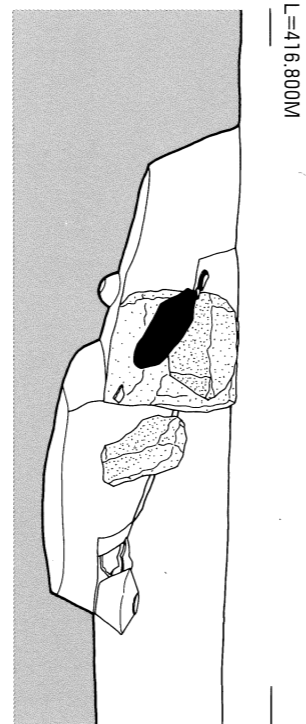
出土遺物は、須恵器坏蓋および坏身（1・2・3）や土師器甕（8・9）などの特徴より判断すると、8世紀前半～中頃の所産であると思われる、本住居跡の時期に比定されよう。

4号住居跡（第23図）

B地区の北東寄りに位置する。住居の規模はN-35°-Eに主軸方向をとる南北（長辺）4.6m×東西（短辺）3.9mの長方形を呈し、北東の隅がやや張り出し気味である。検出面からの深さは約10cmを測る。床面は堅緻であり、覆土には黒色土が自然堆積していた。ほとんど重複するように5号住居跡に切られているため、カマドや支柱穴の検出は不可能であった。本住居跡に属すると思われる遺物は全く出土していない。

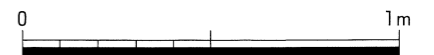


第23図 4・5号住居跡実測図 (S=1/60)



5号住居跡カマド土層説明図

番号	特徴
第1層	黒褐色土(住居跡覆土)
第2層	茶褐色土(1cm大の焼土粒子を多量に含む/住居跡覆土)
第3層	暗茶褐色土(2cm大の焼土粒子を多量に含むブロック)
第4層	黄灰色粘質土(袖部を形成する)
第5層	明茶褐色土(1cm大の焼土粒子を含む/天井部崩落土)
第6層	黄橙色土(細かい焼土粒子を含む/灰残滓)
第7層	赤褐色土(かなり火を受け焼土化している)
第8層	黒褐色土(粘性をもつ/煙道部崩落土)
第9層	暗黒褐色土(灰混じりで粘性度が強い/煙道部崩落土)
第10層	茶褐色土(粘性があり微量に焼土を含む/煙道部崩落土)
第11層	褐色土(焼けた粘土をブロック状に含む/煙道部崩落土)
第12層	黒褐色土(炭・灰混じり/炎口部)
第13層	暗茶褐色土(部分的に炭を含む)
第14層	茶褐色土
第15層	赤褐色土(焼土/火床面)
第16層	黄褐色粘質土(カマド基盤床)
第17層	明茶褐色土(住居跡貼床)



第24図 5号住居跡カマド実測図(S=1/20)

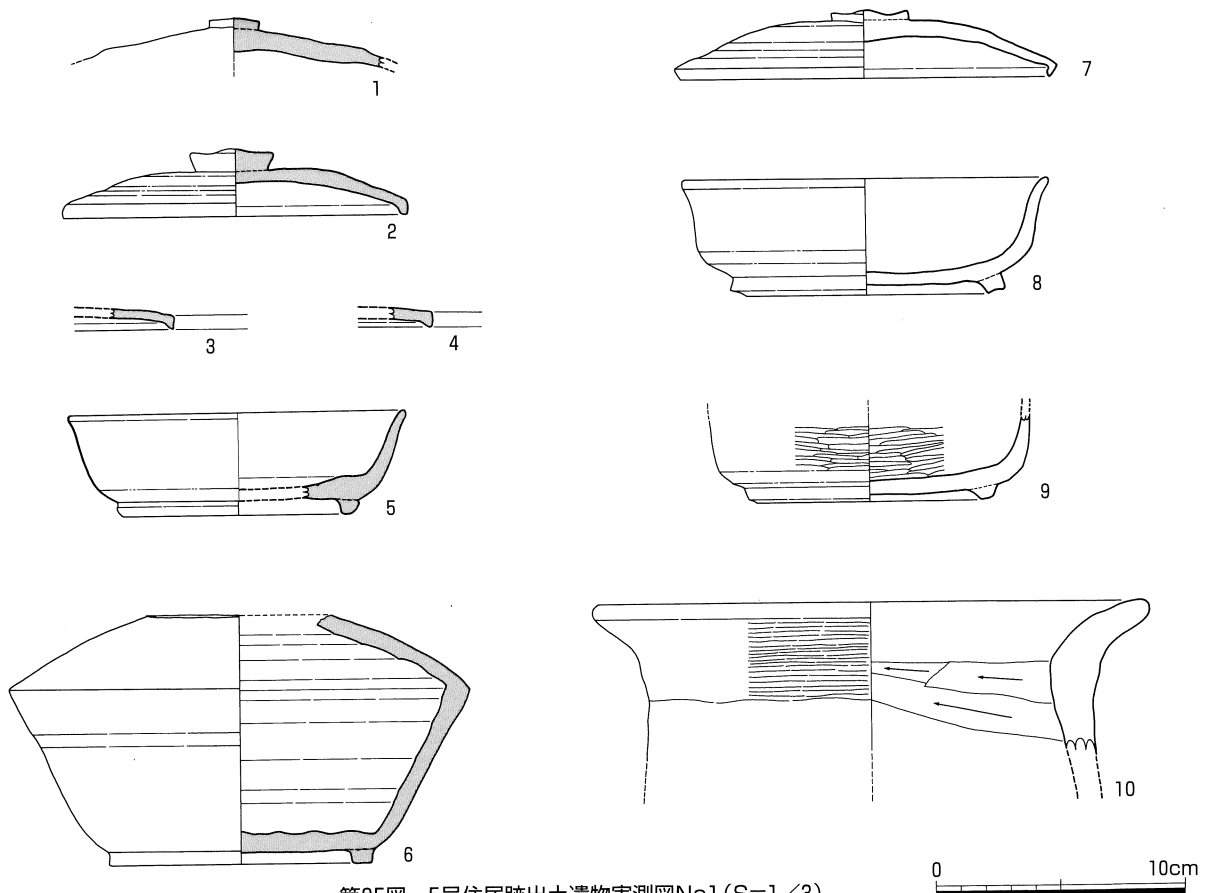
5号住居跡（第23図）

B地区の北東寄りに位置し、4号住居跡を切っている。北壁中央部に北向きのカマドを付設している。住居の規模はN-20°-Eに主軸方向をとる南北（長辺）3.6m×東西（短辺）4.4mとほぼ長方形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。壁寄りで検出されたP1～4が主柱穴と思われる。直径50～60cm、深さ10～20cm、柱穴間2～3mを測る。床面には、約10cm弱を測る明茶褐色の堅緻な貼床面が認められ、ほぼ水平に構築されている。住居跡内には黒色土と明褐色土・茶褐色土が順次自然堆積している。状況からすると、4号住居跡の建て替えの可能性はある。

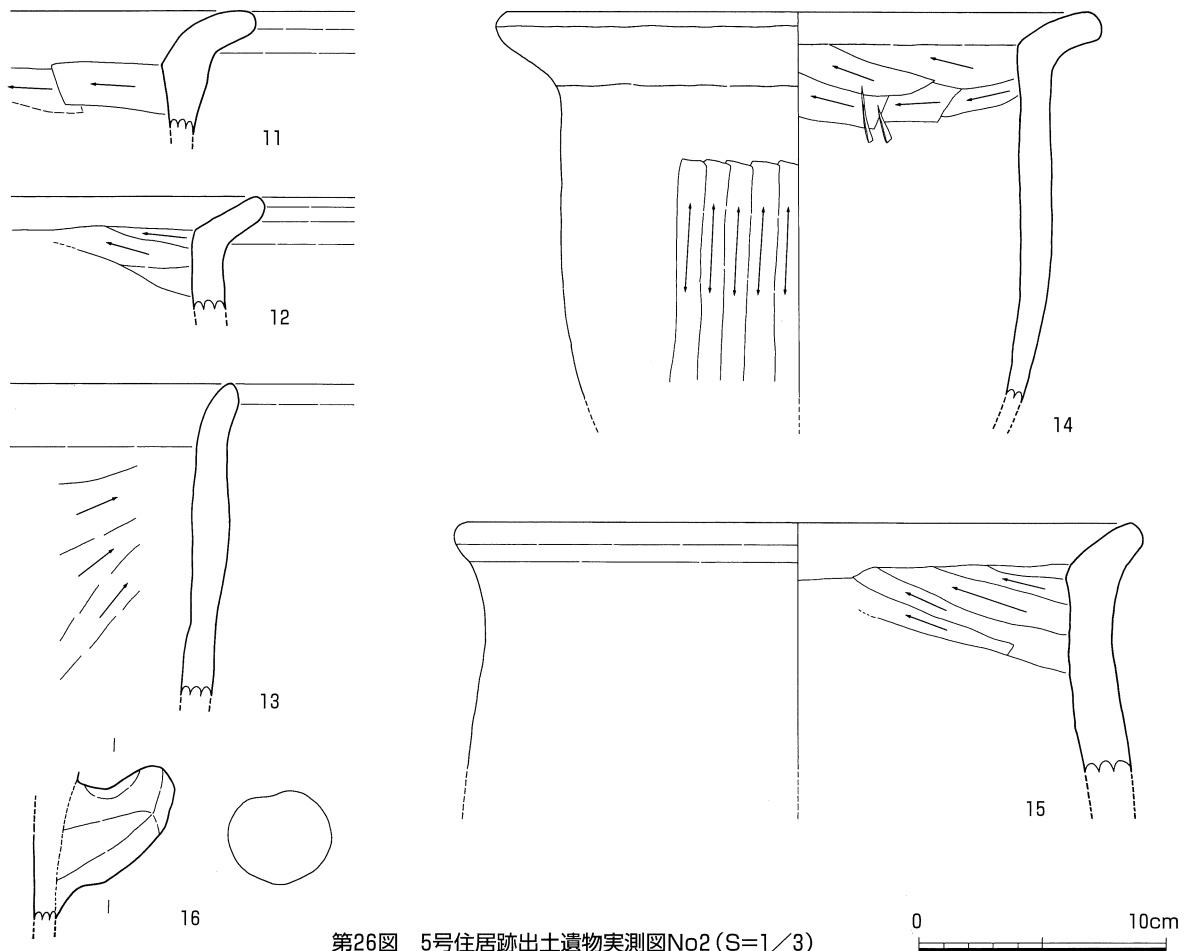
遺物は本遺跡の住居跡の中では最も充実している。カマド付近を中心に、長頸壺・坏蓋・坏身などの須恵器が10点、甕などの土師器が15点、鉄製品が1点出土している。住居跡内一括遺物として有効な資料である。

カマド（第24図）

焚口部には自然石を使用した右袖石のみが残っていた。内側は赤褐色に熱変しており、傾斜角約40°で内傾した状態で検出された。黄灰色を呈する粘土で構築された袖部分に10cmほど埋め込まれていた。左袖部分は後世の攪乱を受けており、原形をとどめていない。燃焼部には55cm×50cmの被熱した火床面があり、焼土が堆積していた。炎口部には川原石を使用した左右袖石と自然石を使用した2個の天井石が残っていた。袖石はどちらも内側が赤褐色に熱変しており、袖部分に接するかたちで床面に10cmほど埋め込まれていた。天井部分は崩壊しており、天井石は下面が赤褐色に熱変し、カマド内に崩落した状態で検出された。炎口部後方に小ピットが検出されたが、位置的に支脚痕とは言い難く、その他の機能を考える必要がある。なお、カマド前方の住居跡床面に5面を面取りした支脚と推定される柱状の自然石が倒置されていた。炎口部から煙道部にかけては燃焼部より一段高くなり、住居の外に約40cmほど突出している。煙道部は崩落・埋没して原形をとどめていない。カマド内部から土師



第25図 5号住居跡出土遺物実測図No1 (S=1/3)



第26図 5号住居跡出土遺物実測図No2 (S=1/3)

器（甕）の口縁部破片が、また、カマド右袖の東側約20cmの住居跡床面からは土師器（甕）および須恵器（長頸壺）の半完形品が出土している。

本カマドは住居跡北壁を掘り込み、袖部分を壁に直接貼り付けて構築している。また、住居跡の貼床面を掘り下げた後に、黄褐色粘質土を貼り付けて基盤床にしている。

出土遺物

土器（第25図・第26図）

須恵器坏蓋（1・2・3・4）

（1）は天井部の破片である。扁平な擬宝珠つまみを持つ。外面には回転ヘラケズリを施している。胎土には砂粒子を少量含み、内面は灰色・外面は暗灰色を呈し、堅緻である。（2）は口径13.8cm、器高2.7cmを測る完形品である。天井部から緩やかに口縁部に至り、端部はやや丸味を持ちほぼ垂直に折れる。つまみは扁平な宝珠状を呈し、天井部には回転ヘラケズリを施している。胎土には角閃石を少量含み、内面は灰白色・外面は浅黄色を呈している。焼成はあまい。焼成温度が低く、生焼けの状態である。（3・4）はともに口縁部の破片である。端部は断面三角形を呈し、垂直に折れる。内外面は灰色を呈し、堅緻である。

須恵器坏身（5）反転復元

復元口径13.5cm、復元器高4.1cmを測る。約6mmの高台がつく。底部から体部にかけて丸味を持ち、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。底部は回転ヘラケズリ、その他内外面にはナデ調整を施す。胎土には白色粒子を若干含み、内面は灰色・外面は暗灰色を呈し、堅緻である。

須恵器長頸壺 (6)

残存高10cmを測る。5mmの高台がつき、体部は下半でやや膨らみを持ちながら立上がり、肩部で稜をなし屈曲する。底部は回転ヘラケズリ、その他内外面にはナデ調整を施す。内外面は灰色を呈し、堅緻である。頸部より上は意識的に破壊したようで、断面が磨滅している。

土師器坏蓋 (7)

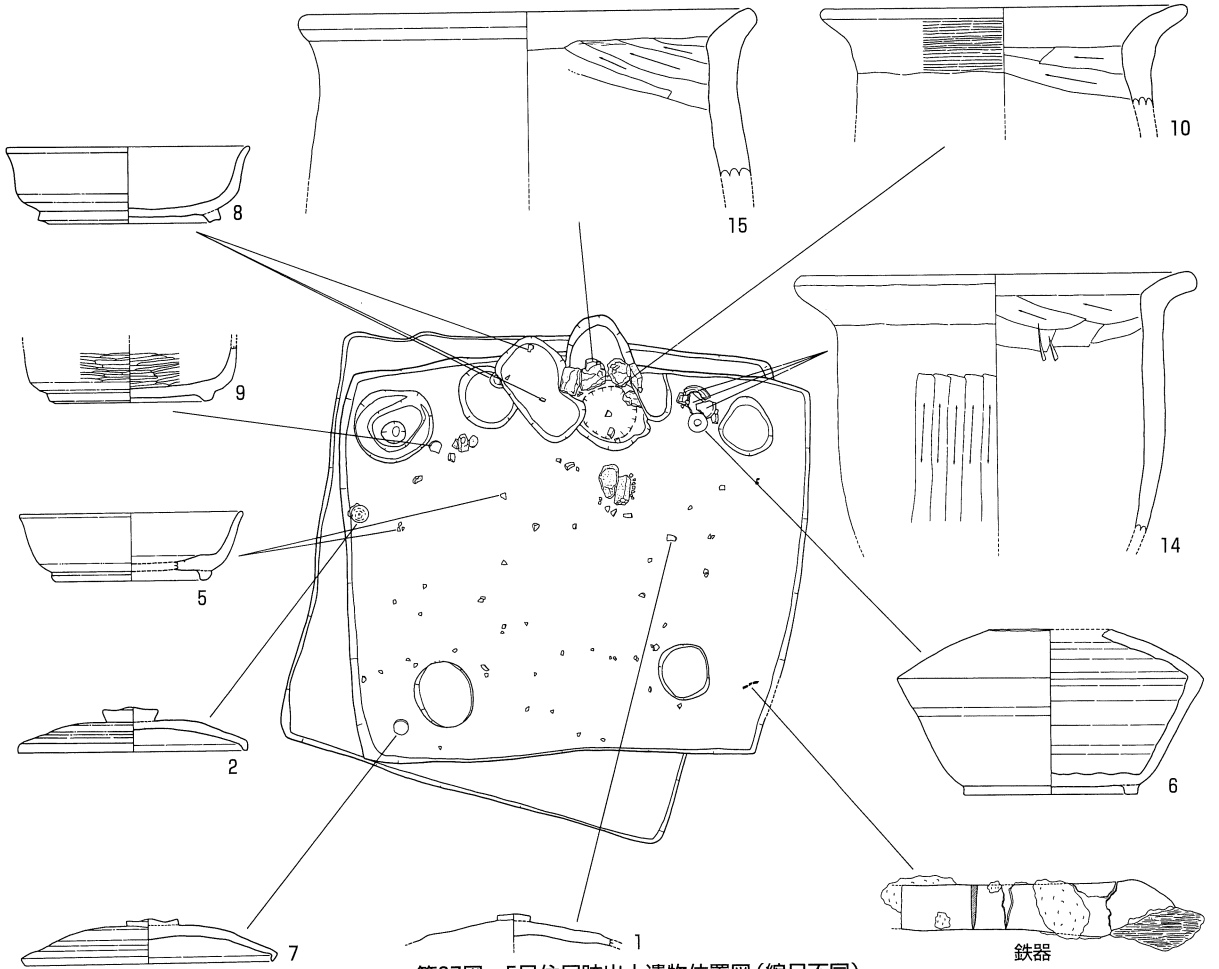
口径14.9cm、器高2.7cmを測る完形品である。天井部から緩やかに口縁部に至り、端部は嘴状に内傾して折れる。かなり磨滅した扁平な擬宝珠つまみを持つ。天井部には回転ヘラケズリを施す。胎土には角閃石を含み、内外面は橙色を呈する。須恵器を模した赤焼きの土器である。

土師器坏身 (8・9)

(8)は復元口径14.7cm、復元器高4.6cmを測る。7mmの高台が張り出し気味につく。底部から体部にかけては丸味を持ち、内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。底部には回転ヘラケズリを施す。胎土には角閃石を含み、内外面は橙色を呈する。須恵器を模した赤焼きの土器である。胎土・焼成・口径などから判断すると土師器坏蓋(7)とセットを成すようである。(9)は体部下半の破片である。6mmの高台がつき、底部と体部の境で屈曲し直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ、その他内外面には横方向のヘラミガキを施す。胎土には角閃石を含み、内外面は明赤褐色を呈する。須恵器を模した赤焼きの土器である。

土師器甕 (10・11・12・13・14・15) 10・15は反転復元

(10)は復元口径22.0cmを測る。頸部付近が肥厚し、口縁部は伸びながら大きく外反する。胴部はあまり膨らまずに底部へ続くものと思われる。内面はヘラケズリ、外面はナデ、口縁部内外面は粗いヨコナデ調整を施



第27図 5号住居跡出土遺物位置図(縮尺不同)

鉄器
遺物の番号は実測図の番号に同じ

し、ハケ状の条痕が残る。胎土には角閃石・長石などを含み、内外面は黄橙色を呈する。焼成は良好である。

(11) は口縁部の破片である。頸部付近が肥厚し、口縁部は短く外反する。胴部は膨らまずに底部へ続く。内面はヘラケズリ、外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土には角閃石（多量）・長石などを含み、内外面とも暗橙色を呈する。焼成は良好である。(12) も口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状に外反する。胴部は膨らまずに底部へ続く。内面はヘラケズリ、外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土には角閃石（少量）などを含み、内外面とも暗黄橙色を呈する。焼成は良好である。(13) は胴部から口縁部にかけての破片である。胴部から口縁部にかけて直立し、端部付近でやや外反する。角閃石・長石・赤褐色粒子などを含み、内外面とも浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。外面に煤の付着が見られる。器形的には、甗とした方がよいかもしい。 (14) は復元口径23.7cmを測る。口縁部は如意状に外反し、端部は丸味を持つ。胴部は膨らまずに底部へ続き、器壁は厚い。内面はヘラケズリ、外面胴部下半は縦方向のヘラミガキ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土には角閃石（多量）・長石（多量）・赤褐色粒子などを含み、内面は暗黄橙色・外面は暗橙色を呈する。焼成は良好である。外面胴部下半は被熱し、赤褐色に変色している。須恵器長頸壺（6）と共伴する。(15) は復元口径27.0cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は丸味を持つ。胴部はあまり膨らまずに底部へ続くものと思われる。器壁が1.8cmと厚い。内面はヘラケズリ、外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土には角閃石・長石・赤褐色粒子などを含み、内外面とも暗黄橙色を呈する。焼成は良好である。

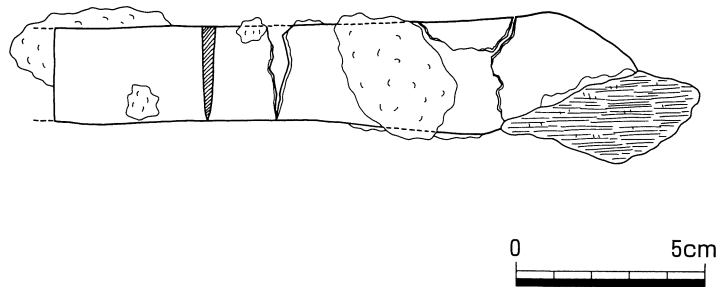
土師器甗 (16)

甗の把手部分である。胎土に角閃石・長石・赤褐色粒子などを含み、内外面とも橙色を呈する。焼成は良好である。3号住居跡のカマド内出土の土師器破片と接合する。

その他 (第28図)

鉄製品

住居跡内南東の壁際床面直上より出土した。基部付近の破片であり、身の先端部を欠損する。現存長約17cm、幅2.5~3.0cm、厚さ約0.3cmを測る。全体的にかなり錆びているが、基端部には一部木質部が残っている箇所がある。刀子としては大きすぎる感がある。基端部付近にカーブを持つようなので、手鎌の可能性が高い。



第28図 5号住居跡出土遺物実測図No3

時期

出土遺物は、須恵器（2・3・4・5・6）および土師器（7・8・9）などの特徴より判断すると、8世紀前半~中頃の所産であると思われる。土師器甗（16）が3号住居跡カマド内遺物と接合することを考え合わせると、本住居跡の時期と考えて妥当であろう。この時期の須恵器と土師器がある程度一括出土していることで、本地域における8世紀前半代の土師器の様相を知る手掛かりが得られ、たいへん意義深い資料と言える。なお、須恵器長頸壺（6）の頸部付近は明らかに意図的に破損されており、短絡的ではあるがカマド祭祀との関連性を指摘しておきたい。

6号住居跡 (第29図)

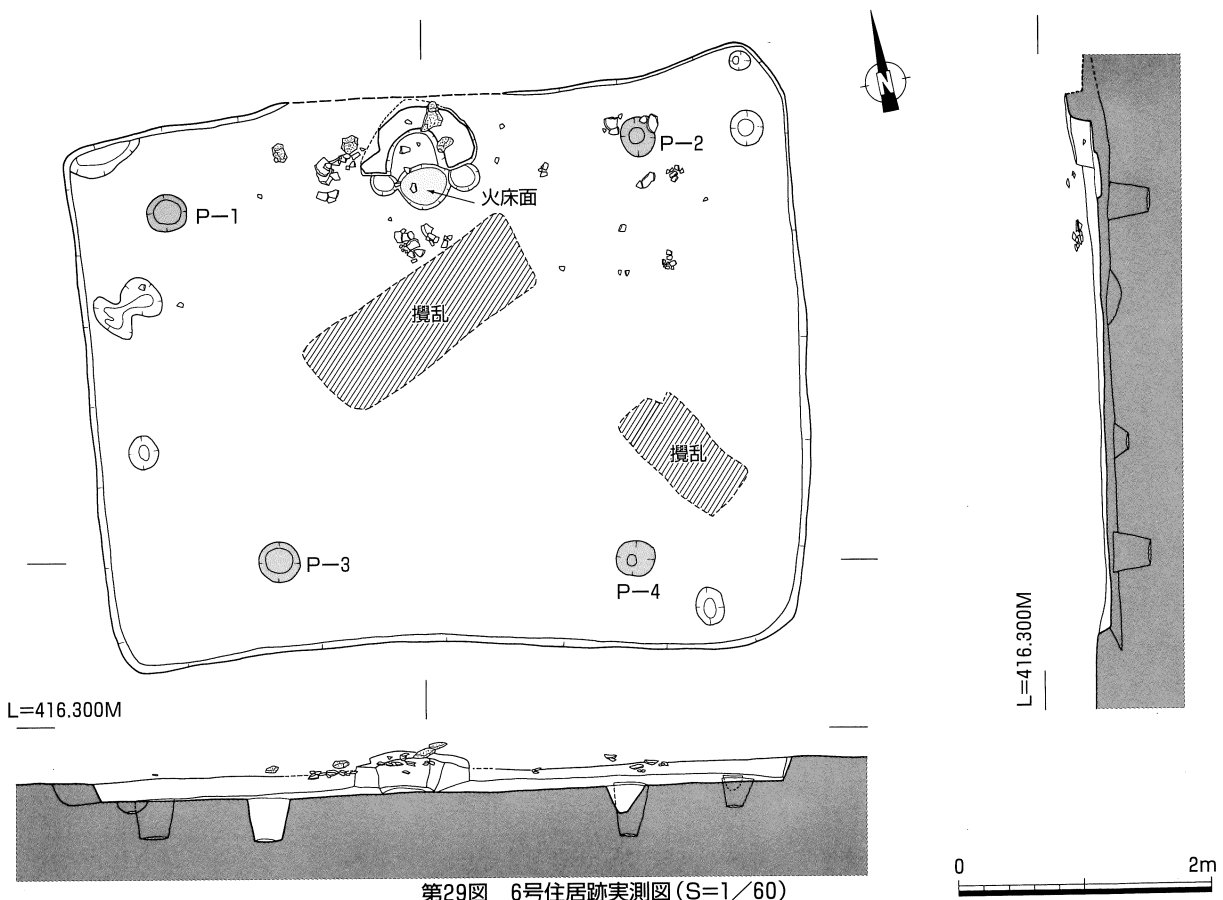
B地区の中央部に位置する。北壁中央部に北向きのカマドを付設している。住居の規模はN-10°-Eに主軸方向をとる南北(短辺)4.3m×東西(長辺)5.7mの長方形を呈しているが、カマド付近の北壁の一部は削られている。また、開墾などによる削平のため検出面からの深さは約10cm程度である。支柱穴は壁寄りで検出されたP1~P4と思われる。直径30cm、深さ25~30cm、柱穴間3~4mを測る。床面は堅緻で、東側から西側にかけて緩やかな下り勾配になっている。住居跡内には粘性のない黒褐色土が自然堆積している。

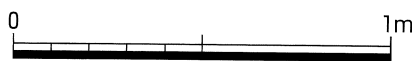
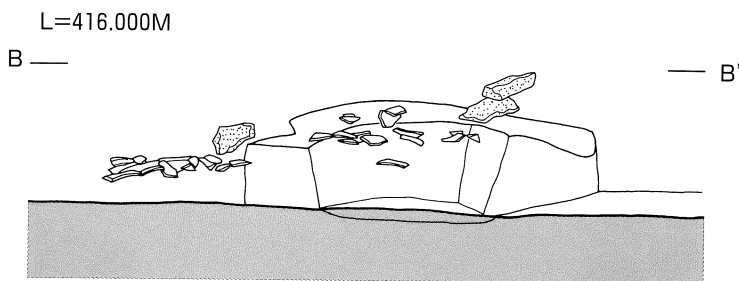
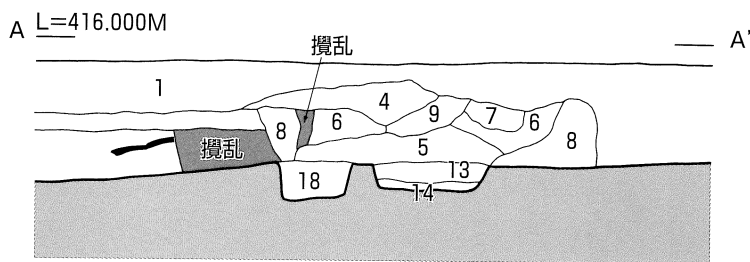
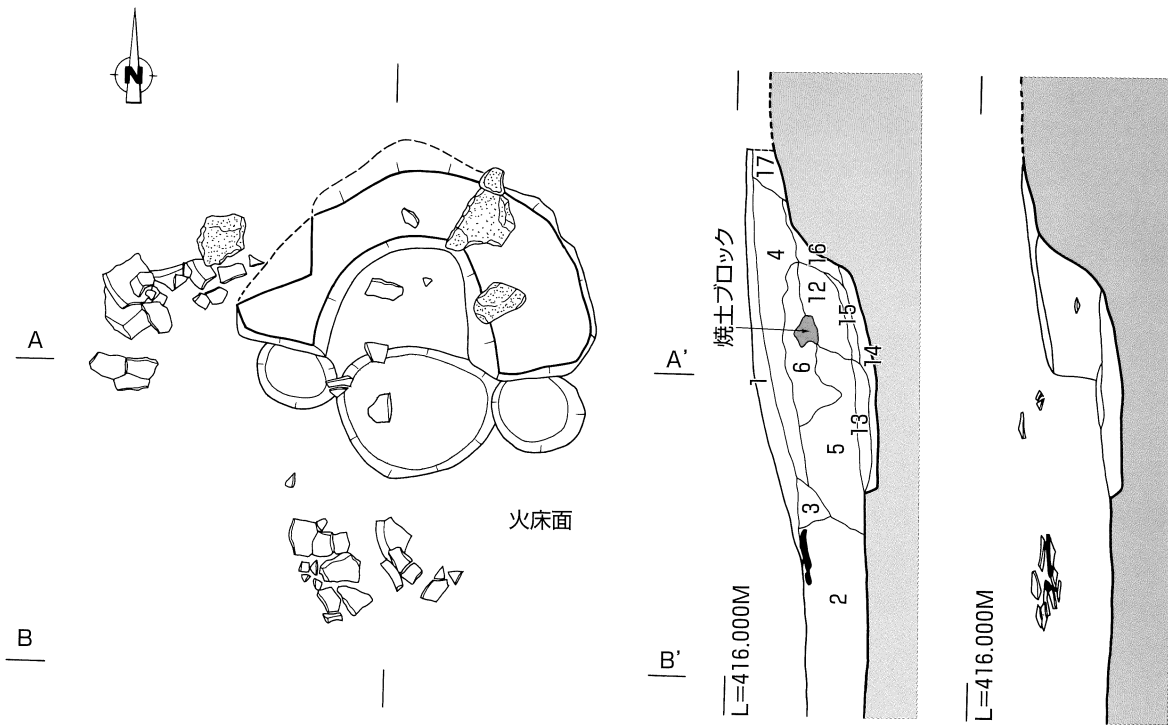
遺物はカマド付近と床面から甕・皿など土師器が8点出土した。特に、ほぼ完形の皿が4点まとまって出土している。須恵器は坏身の口縁部破片が1点のみである。

カマド (第30図)

遺存状態はあまり良くない。天井部分は崩落しており、焼土混じりの白色粘土がカマド周辺にかなり堆積していた。袖石の抜き取り痕と思われる40cm×40cmのピットが左右2カ所で検出されたが、支脚および支脚痕は検出されなかった。左右袖石の抜き取り痕の間には、40cm×35cmの焼土が詰まっており、楕円形の窪みが見られた。底面には被熱し赤褐色に変色している火床面があり、燃烧部と思われる。炎口部付近には灰混じりの黒褐色土が堆積し、奥壁はかなり被熱している。煙道は、住居跡外へ出るとと思われるが、煙口部の上方は崩落し、煙出部は削られていて原形をとどめていない。遺物は前庭部付近からは土師器甕の胴部上半から口縁部にかけてと底部部分の破片が、また、左袖部の西約10cm付近では土師器甕の胴部から口縁部にかけての破片が、それぞれやや浮いた状態で出土した。

カマドの本体は、住居跡の北壁中央部床面を掘り下げて、そこに基盤床として灰黄褐色の粘土を貼り、燃烧部としている。壁体および袖部分にも同様の粘土を用い、馬蹄状に積み上げて構築している。





6号住居跡カマド土層説明図

番号	特徴
第1層	暗褐色土(部分的に焼土粒子を含む/住居跡覆土)
第2層	暗黄褐色土(住居跡覆土)
第3層	黒褐色土(ブロック状であり焼土粒子を若干含む)
第4層	暗茶褐色土(焼土・炭化物粒子を少量含む/天井部崩落土)
第5層	明黄褐色土(焼土・炭化物粒子を多く含む/灰残滓)
第6層	黄橙色土(焼けた粘土をブロック状に含む/袖部崩落土)
第7層	黄橙色土(焼けた粘土ブロックを多量に含む/袖部崩落土)
第8層	灰黄褐色粘質土(袖部を形成する)
第9層	明黄褐色土(焼土・炭化物粒子を少量含む/天井部崩落土)
第10層	暗褐色土(炭化物を含む/住居跡覆土)
第11層	黒褐色土(住居跡覆土)
第12層	暗黒褐色土
第13層	赤褐色土(焼土/火床面)
第14層	灰黄褐色粘質土(カマド基盤床)
第15層	黒褐色土(灰まじり/炎口部)
第16層	黄褐色土(かなり被熱している/奥壁)
第17層	赤褐色土(焼土粒子を多量に含む/煙道部崩落土)
第18層	黒褐色土(袖石埋土)

第30図 6号住居跡カマド実測図(S=1/20)

出土遺物

土器 (第31図)

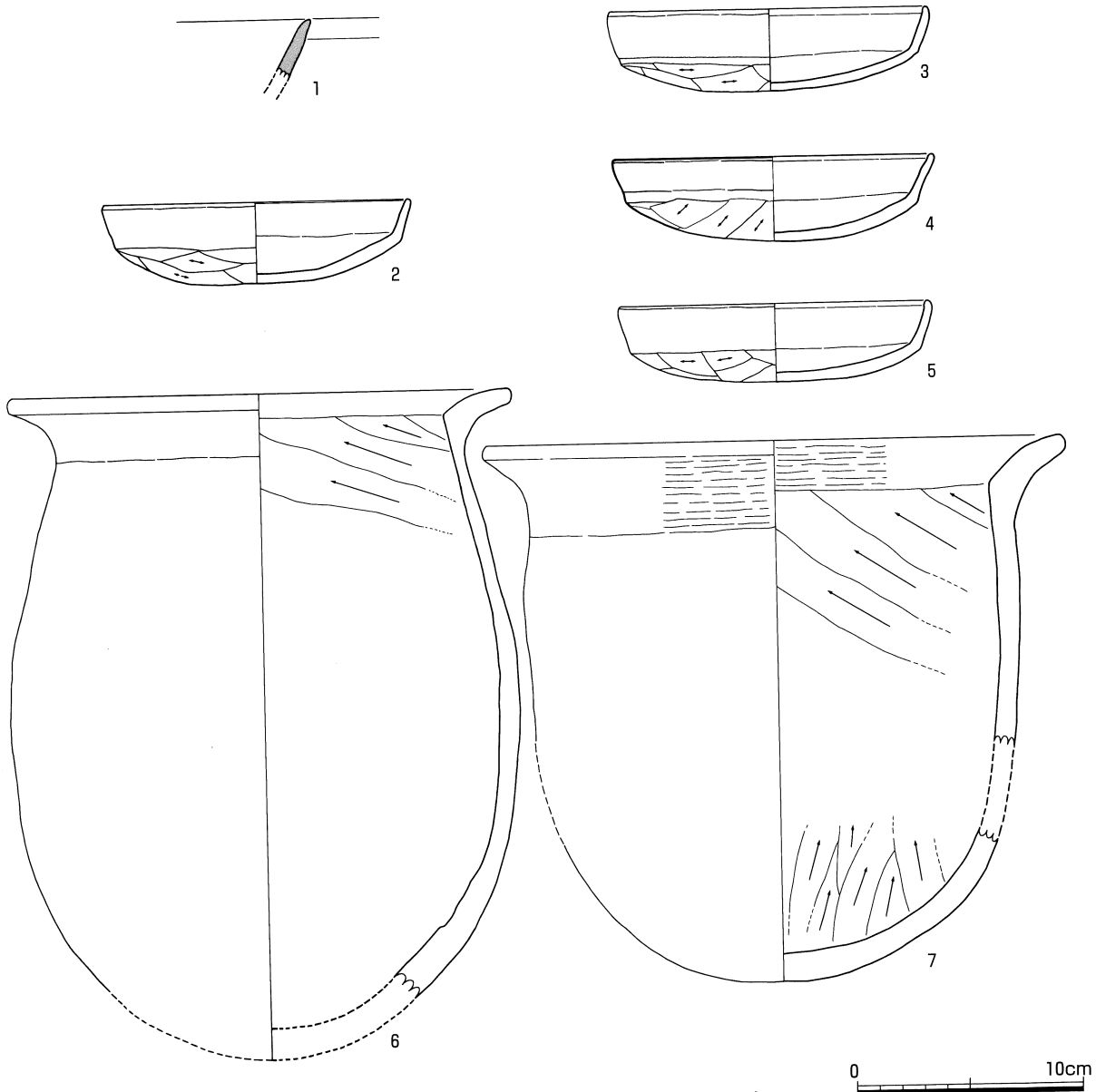
須恵器坏身 (1)

口縁部の破片である。体部は開き気味で、口縁部付近で僅かに外反する。内面は灰白色・外面は暗灰色を呈し、堅緻である。

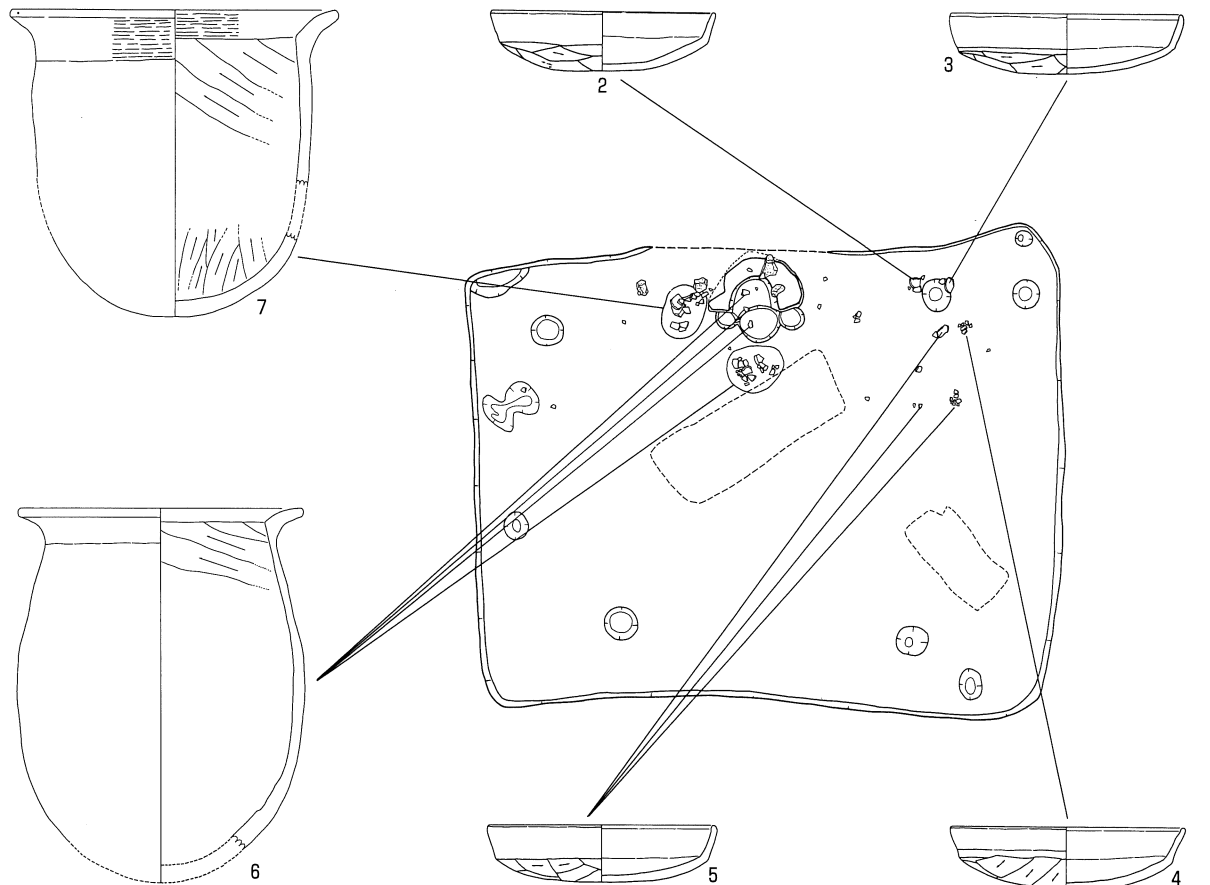
土師器皿 (2・3・4・5)

(2) は復元口径14.0cm、器高3.6cmを測る。(3) は復元口径13.5cm、器高3.7cmを測る。(4) は復元口径14.0cm、器高3.7cmを測る。(5) は復元口径13.5cm、器高3.4cmを測る。ほぼ同規格の皿である。いずれも、底部と体部の境で屈曲し、開き気味に立上がり、口縁部はやや内湾する。底部は手持ち(静止)ヘラケズリを施し、内外面はヨコナデ調整をおこなっている。胎土は精製されていてキメが細かく、雲母粒子を含んでおり、角閃石は全く含まない。内外面は暗黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土から判断すると、搬入品の可能性がある。

土師器甕 (6) 反転復元



第31図 6号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)



第32図 6号住居跡出土遺物位置図(縮尺不同)

遺物番号は実測図の番号に同じ

カマド左袖部付近の出土である。復元口径22.0cm、器高29.5cmを測る。口縁部は伸びながら強く外反する。胴部は下半で膨らみ、器壁は上半が薄く、下半が厚い。底部は丸底になると思われる。内面はヘラケズリが施され、頸部には明瞭な稜が見られる。外面は磨滅が著しいがナデ調整であると思われる。口縁部内外面にはヨコナデ調整を施している。胎土には角閃石・長石および石英・赤褐色粒子を少量含み、内外面浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。なお、底部付近は被熱し赤褐色を呈し、部分的に煤の付着も見られる。

土師器甕(7)

カマド前庭部付近の出土である。復元口径25.5cm、器高26.0cmを測る。口縁部は伸びながら外反する。胴部は膨らまず丸底の底部へ続く。内面はヘラケズリが施され、頸部には明瞭な稜が見られる。外面はナデ、口縁部内外面には粗いヨコナデ調整を施しており、浅い平行沈線が残る。胎土には角閃石・長石および石英・茶褐色粒子・白色粒子を少量含み、内外面黄橙色を呈する。焼成は良好であり、底部付近は被熱し赤褐色を呈する。

時期

出土遺物は須恵器が1点で、しかも小破片のため、これにより時期を決めるのは不可能である。そのため、ある程度まとまって出土した土師器皿・甕の特徴より判断すると、8世紀代の所産であると思われる。したがって、本住居跡の時期に比定されよう。

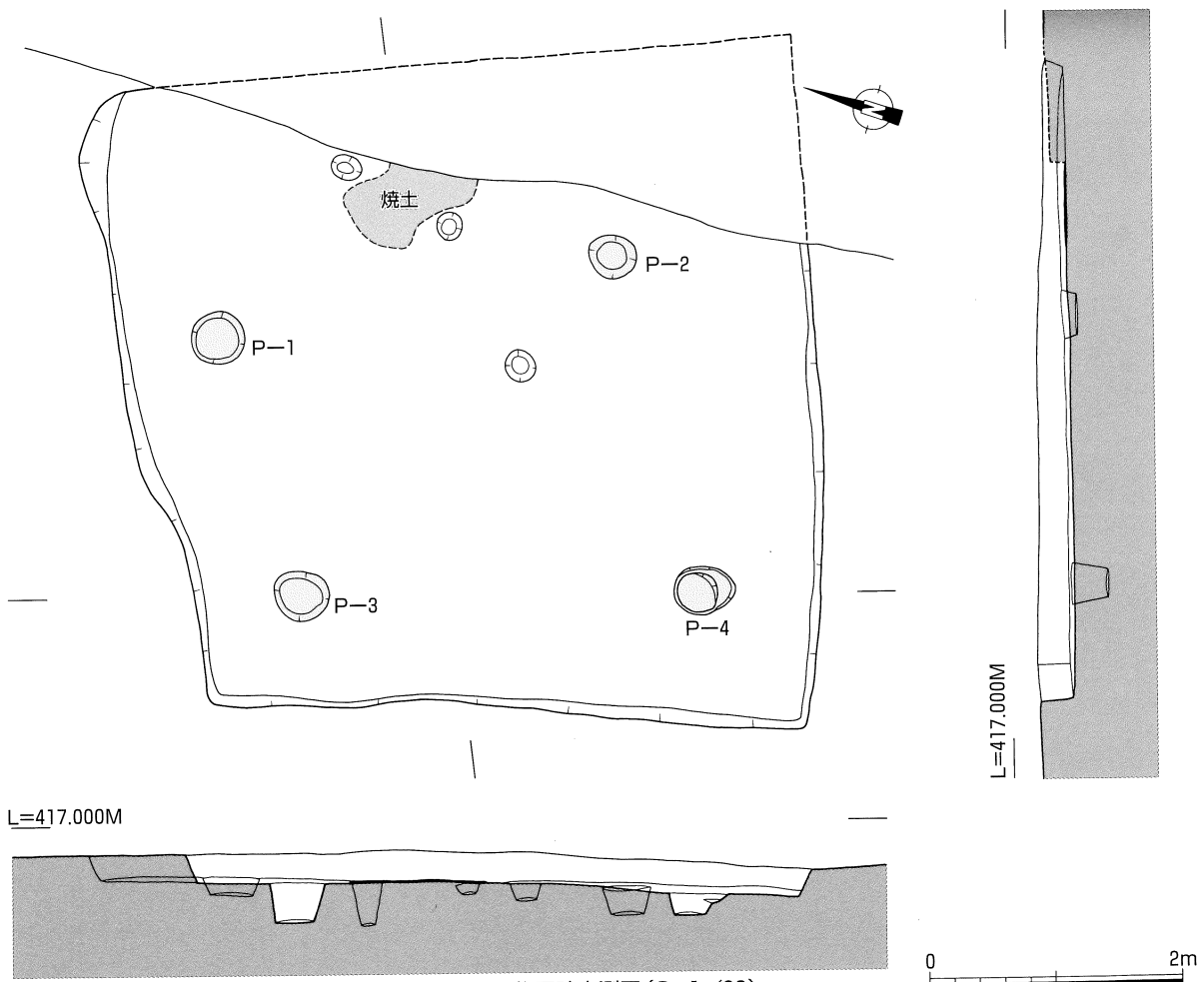
7号住居跡 (第33図)

B地区の北東寄りに位置する。北東壁の大部分は調査区外であるため、北東壁付近の精査はできなかった。住居の規模はN-70°-Eに主軸方位をとる南北(長軸)5.5m×東西(短軸)5.0mのほぼ長方形を呈し、検出面からの深さは20~30cmを測る。主柱穴はP1~4であると思われる。直径約40cm、深さ20~30cm、柱穴間約2.5~3.2mを測る。床面はほぼ水平で、住居跡内には黒色土が自然堆積していた。なお、北東部の床面には焼土の堆積が認められた。カマドの痕跡であると思われる。

床面からの出土遺物は全くなく、覆土上層より土師器の坏身および甕の破片が各々1点ずつと弥生土器(甕)の破片が1点出土している。しかし、出土状態から判断すると、いずれも本住居跡出土の遺物ではないと思われるため、一括遺物として取り上げた。したがって、出土遺物より7号住居跡の明確な時期を決めることはできない。

8号住居跡 (第34図)

6号住居跡の南西約8mに位置する。北壁中央部に北向きのカマドを付設する。北壁部分は試掘の際にトレンチを設定したため壊されてしまった。住居跡の規模はN-5°-Eに主軸方位をとる南北(短辺)3.6m×東西(長辺)4.7mの長方形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。主柱穴はP1~4の4本である。直径20~30cm、深さ30~50cm、柱穴間2~3mを測る。床面はほぼ水平であり、約10cmの茶褐色粘性土の貼床が認められた。住



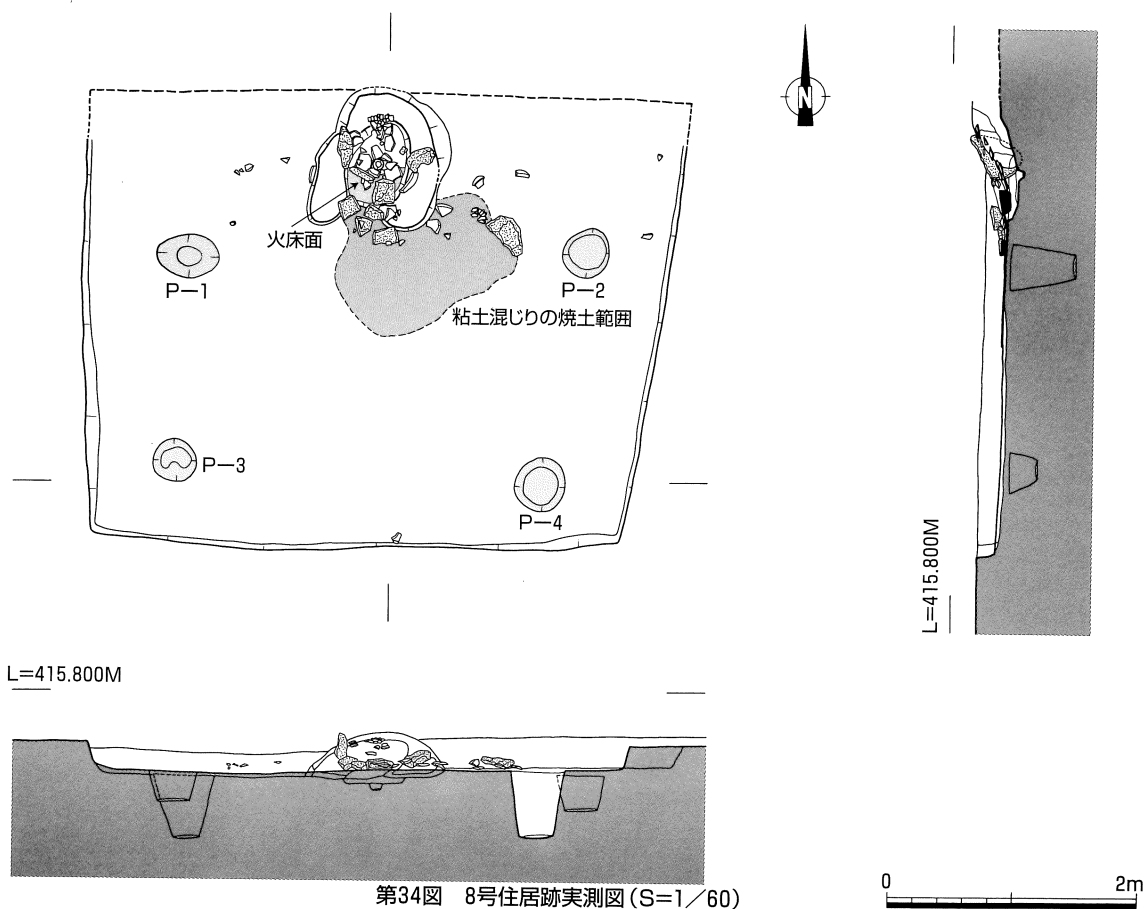
第33図 7号住居跡実測図 (S=1/60)

居跡内には暗褐色土と黒色土が順次自然に堆積していた。遺物はカマド内と住居跡床面より土師器の甕・皿・甑など7点、滑石製の紡錘車が1点出土している。須恵器は全く出土していない。なお、覆土中には弥生土器や黒曜石の細片が数点混入していた。

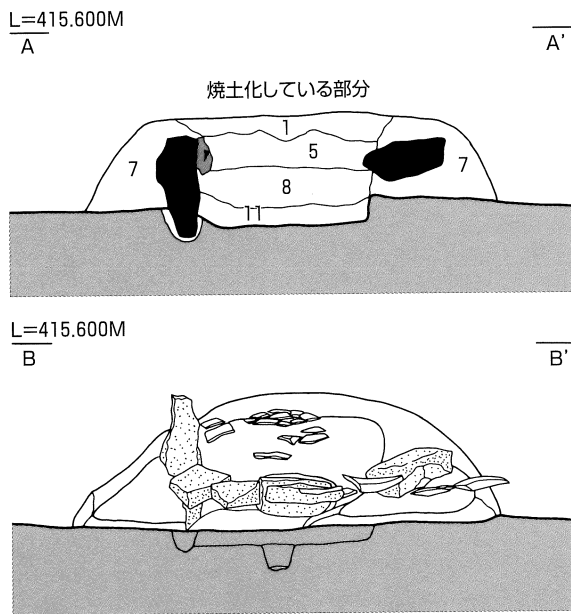
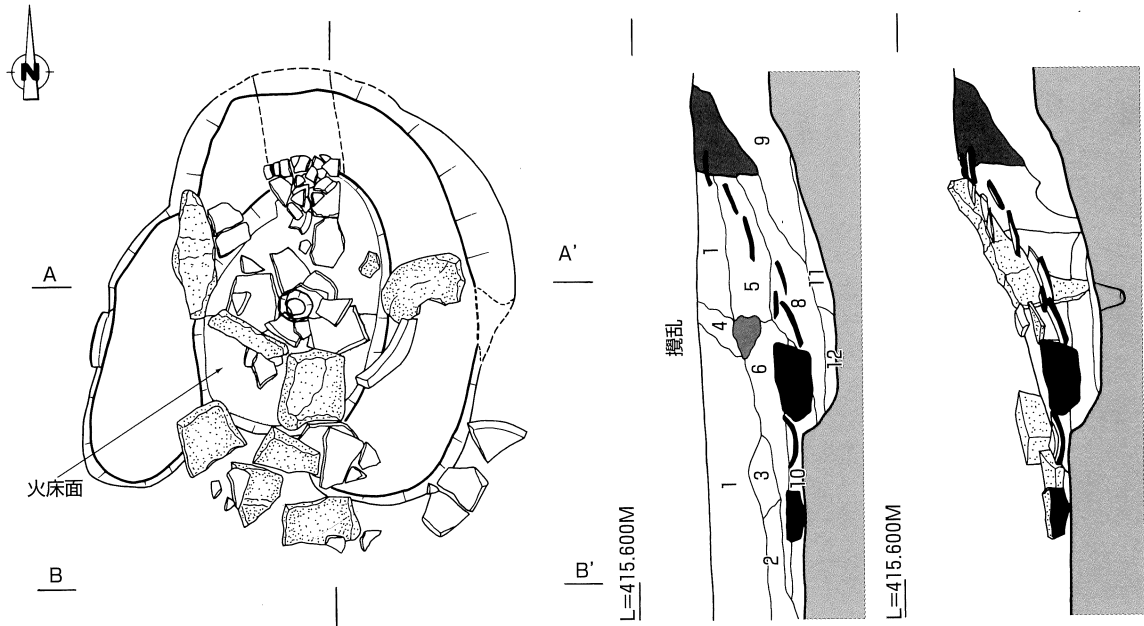
カマド（第35図）

天井部の一部が崩落しているものの、遺存状態は比較的良好。右袖部周辺には、焼土を混入する灰黄褐色粘質土が一定の範囲に堆積していた。右袖部の崩壊の様子を物語っているのであろう。前庭部および焚口部付近には安山岩質の大型の角礫が多数散乱しており、カマドから東に50cmほど離れた地点では40cm×30cmの扁平な川原石が検出された。これらはすべて被熱し、表面には赤褐色を呈する箇所がかなり見られることから天井石や焚口部袖石の一部と思われる。燃焼部には40cm×30cmを測る楕円形の火床面が見られた。焼土が堆積しており、燃焼部後方の中央部には直径約8cm、深さ約10cmを測る支脚痕が検出された。支脚そのものは検出されなかった。炎口部付近は遺存状態は良く、天井部の一部と川原石の袖石が残っていた。右袖石は倒置した状態であるが、左袖石は約30cmほど袖部に埋め込まれた状態で遺存していた。煙道については、煙口部は確認できたが、煙出部は削られており原形をとどめていない。おそらく、住居跡外へ出ているものと思われる。燃焼部から炎口部にかけての床面は、緩やかに登り気味になっている。なお、カマド内部と炎口室天井部分から一個体分と思われる土師器甕の大きな破片が多数出土している。

住居跡の北壁プランは明確ではないため、カマド本体が北壁側を掘り込んでいるかは判断できなかったが、住居跡内に灰黄褐色粘質土を馬蹄状に貼り付けて構築している。内部は、住居跡床面を掘り下げ、褐灰色粘質土を基盤床として貼り付けている。その後、中央前方部を新たに掘り下げ、燃焼部としている。焚口部では、袖石の抜き取り跡が検出されていないので、焚口部袖石は設置されていないと思われる。しかし、5号住居跡

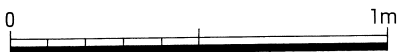


第34図 8号住居跡実測図 (S=1/60)



8号住居跡カマド土層説明図

番号	特徴
第1層	黒褐色土(住居跡覆土)
第2層	茶褐色土(やや粘性がある/住居跡覆土)
第3層	暗黒褐色土(焼けた粘土のブロック)
第4層	黒褐色土(焼土粒子を多量に含む)
第5層	明黄褐色土(焼けた粘土をブロック状に含む/天井部崩落土)
第6層	灰黄褐色粘質土(焼土粒子混じりの粘土/袖部崩落土)
第7層	灰黄褐色粘質土(袖部を形成する)
第8層	黄橙色土(細かい焼土・粘土粒子を多量に含む/灰残滓)
第9層	黒褐色土(灰混じりである/煙道部崩落土)
第10層	暗茶褐色土(煙道混じりである/灰残滓)
第11層	褐灰色土(カマド基盤床)
第12層	赤褐色土(焼土/火床面)



第35図 8号住居跡カマド実測図(S=1/20)

の焚口袖石のように、袖部分に埋め込まれていた可能性も捨て切れない。

出土遺物

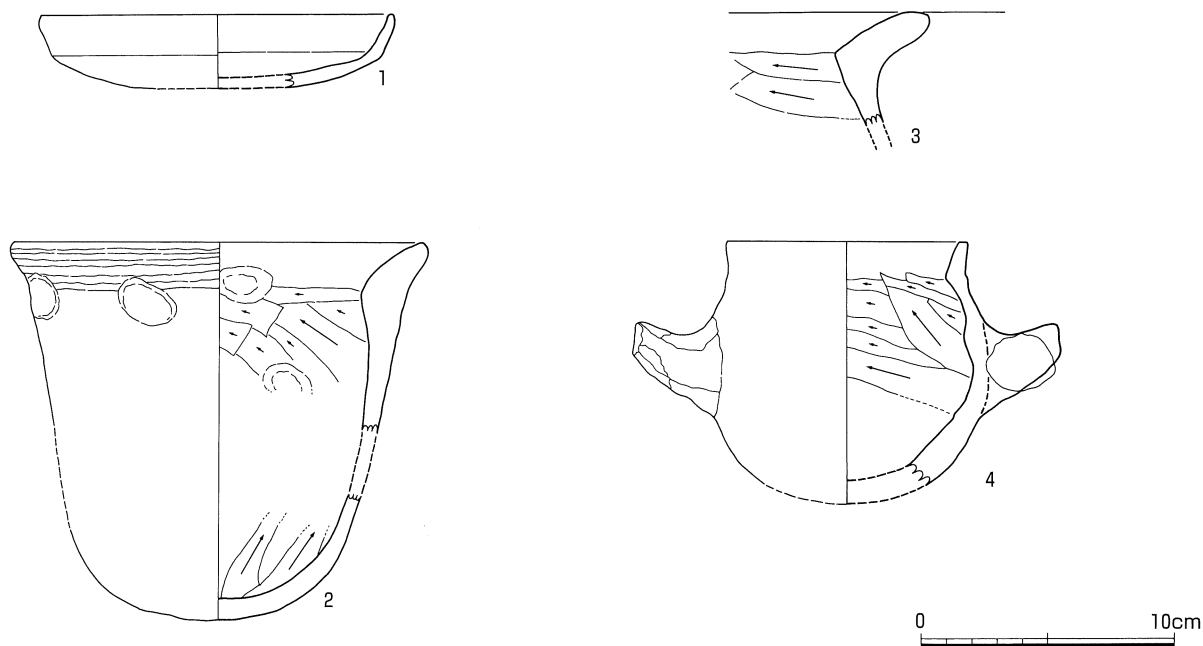
土器 (第36図・第37図)

土師器皿 (1) 反転復元

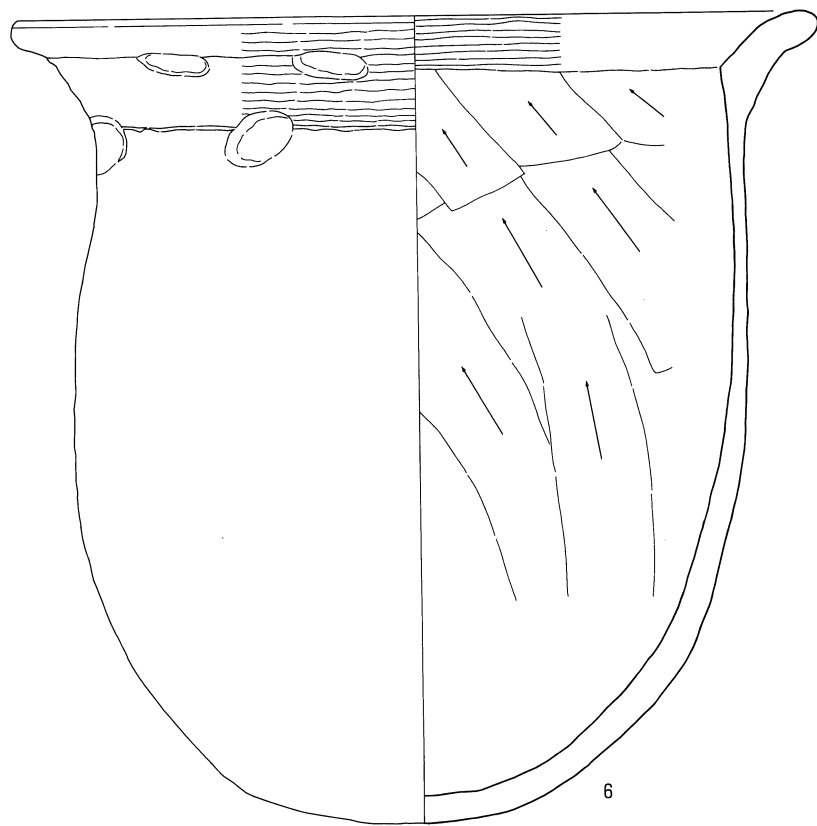
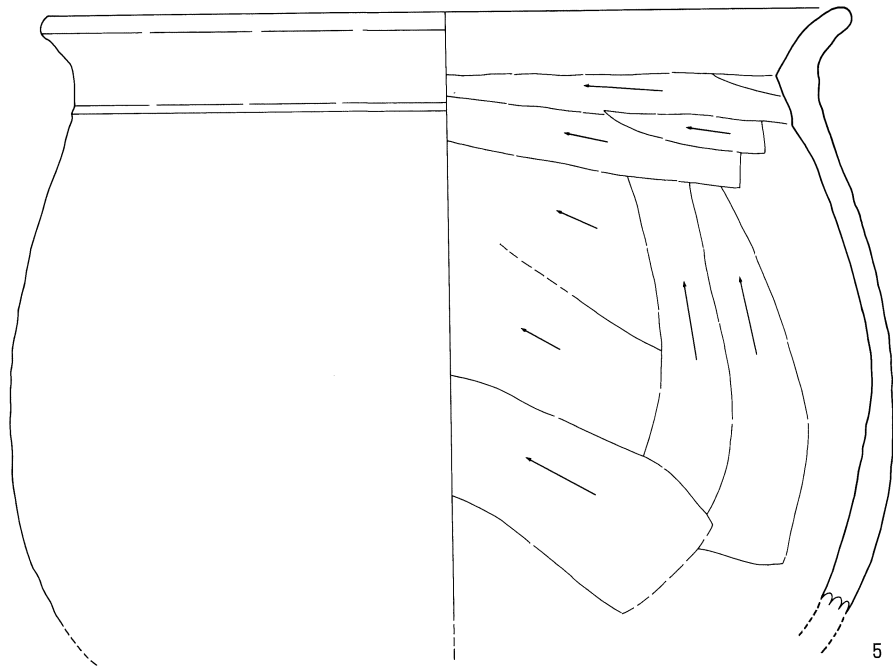
復元口径14.0cm、復元器高3.0cmを測る。底部と体部の境で屈曲し、開き気味に立ち上がり、口縁部でやや内湾する。底部は磨滅が著しいが恐らく手持ちヘラケズリであろう。内外面にはヨコナデ調整を施している。胎土は精製されていてキメが細かく雲母粒子を含み、角閃石は全く含まない。内外面は橙色を呈し、焼成は良好である。胎土からすると搬入品の可能性がある。6号住居跡出土の皿に器形・調整・胎土がよく似ている。

土師器甕 (2・3・5・6) 5は反転復元

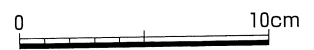
(2)はカマド周辺で出土しており、口径16.0cm、復元器高15.0cmを測る。頸部から口縁部にかけて肥厚し、口縁部は短く外反する。胴部は膨らまず、窄み気味に丸底の底部へ続く。内面はヘラケズリ、外面はナデ調整を施している。口縁部にはハケ目状の調整が見られ、器面にやや深目の平行沈線が残る。胎土には角閃石・長石・石英その他赤褐色粒子を少量含んでおり、内面は暗黄橙色・外面は黄橙色を呈する。焼成は良好である。なお、底部外面と口縁部・胴部内面に煤の付着がある。また、頸部内外面に指頭圧痕が見られる。(3)は口縁部の破片である。頸部がやや肥厚し、口縁部は伸びながら外反する。端部は丸味を持つ。内面はヘラケズリ、口縁部内外面にはヨコナデ調整を施している。角閃石および長石を少量含み、内外面は明黄褐色を呈する。焼成は良好である。(5)はカマド周辺で出土しており、復元口径32.0cmを測る。口縁部は伸びながら外反する。胴部は中位で膨らみ底部へ続く。内面はヘラケズリが施され、頸部に明瞭な稜が見られる。外面はナデ調整を施している。口縁部内外面には丁寧なヨコナデ調整が見られる。胎土には角閃石(多量)・長石および赤褐色粒子を少量含み、内面は明黄褐色・外面は黄橙色を呈する。焼成は良好である。なお、胴部外面には煤の付着が見られる。(6)はカマド内より大きな破片で出土しており、ほぼ完形に近い状態で復元できた。口径31.7cm、器高32.4cmを測る。頸部から口縁部にかけて肥厚しながら大きく外反し、屈曲する。端部は丸味を帯びる。胴部上半は器壁が薄く、下半でやや膨らみながら丸底の底部へ続く。内面はヘラケズリが施され、頸部に明瞭な稜



第36図 8号住居跡出土遺物実測図No1 (S=1/3)



第37图 8号住居跡出土遺物実測図No2 (S=1/3)



が見られる。外面はナデ調整を施している。口縁部内外面には、ハケ目状の粗いヨコナデ調整が見られ、浅い平行沈線が残る。胎土には角閃石・長石・石英および砂粒子を少量含み、内面は暗橙色・外面は橙色を呈する。焼成は良好である。なお、胴部外面に一部煤の付着が見られ、また頸部外面に指頭圧痕が残る。

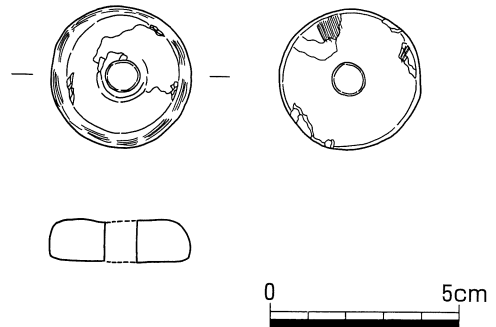
土師器把手付甕（4）反転復元

復元口径9.0cm、復元器高10.4cmを測る小型の甕である。口縁部は外反気味で、端部は水平につくられている。胴部は中位で膨らみ、やや平坦な面を持つ丸底の底部へ続くものと思われる。内面はヘラケズリ、外面はナデ調整を施す。口縁部内外面にはヨコナデ調整が見られる。胎土には角閃石・長石を含み、内面は明黄褐色・外面は黄橙色を呈する。焼成は良好である。なお、外面には煤の付着が見られる。

その他（第38図）

紡錘車

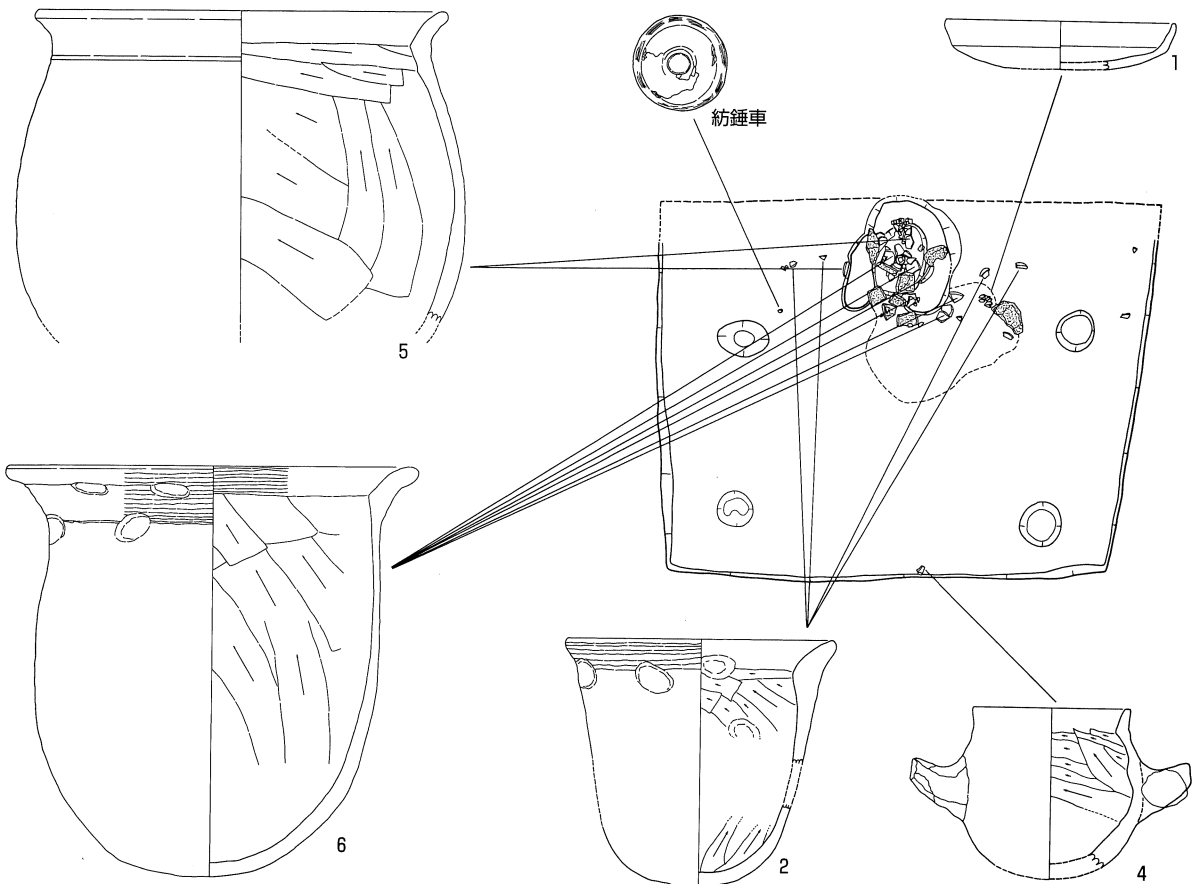
床面直上出土の滑石製の紡錘車である。外径3.7cm、厚さ1.1cm、孔径0.9cm、重さ25.9gを測る。側面には使用に伴う条痕が見られる。



時期

須恵器の出土がないため、明確な時期は決められないが、土師器甕（5・6）などは特徴から判断すると、8世紀代の所産であると思われる、本住居跡の時期に比定されよう。

第38図 8号住居跡出土遺物実測図No3 (S=1/2)



第39図 8号住居跡出土遺物位置図 (縮尺不同)

遺物の番号は実測図の番号と同じ

9号住居跡 (第40図)

1号住居跡の南側に位置する。南西壁の一部は削られている。カマドなどは検出されなかった。住居跡の規模はN-50°-Eに主軸方向をとる南北(長辺)6.0m×東西(短辺)5.3mのやや大型の長方形を呈し、検出面からの深さは10~20cmを測る。支柱穴はP1~4である。直径40~50cm、深さ50~60cm、柱穴間3.2m~3.4mを測る。床面は堅緻で、北東から南西にかけて緩やかな下り勾配になっている。住居跡内には黒色土が自然堆積している。

遺物は坏身や坏蓋などの須恵器の破片が3点、甕などの土師器の破片が5点ほど出土している。また、覆土中より弥生土器の破片が数点出土した。

出土遺物

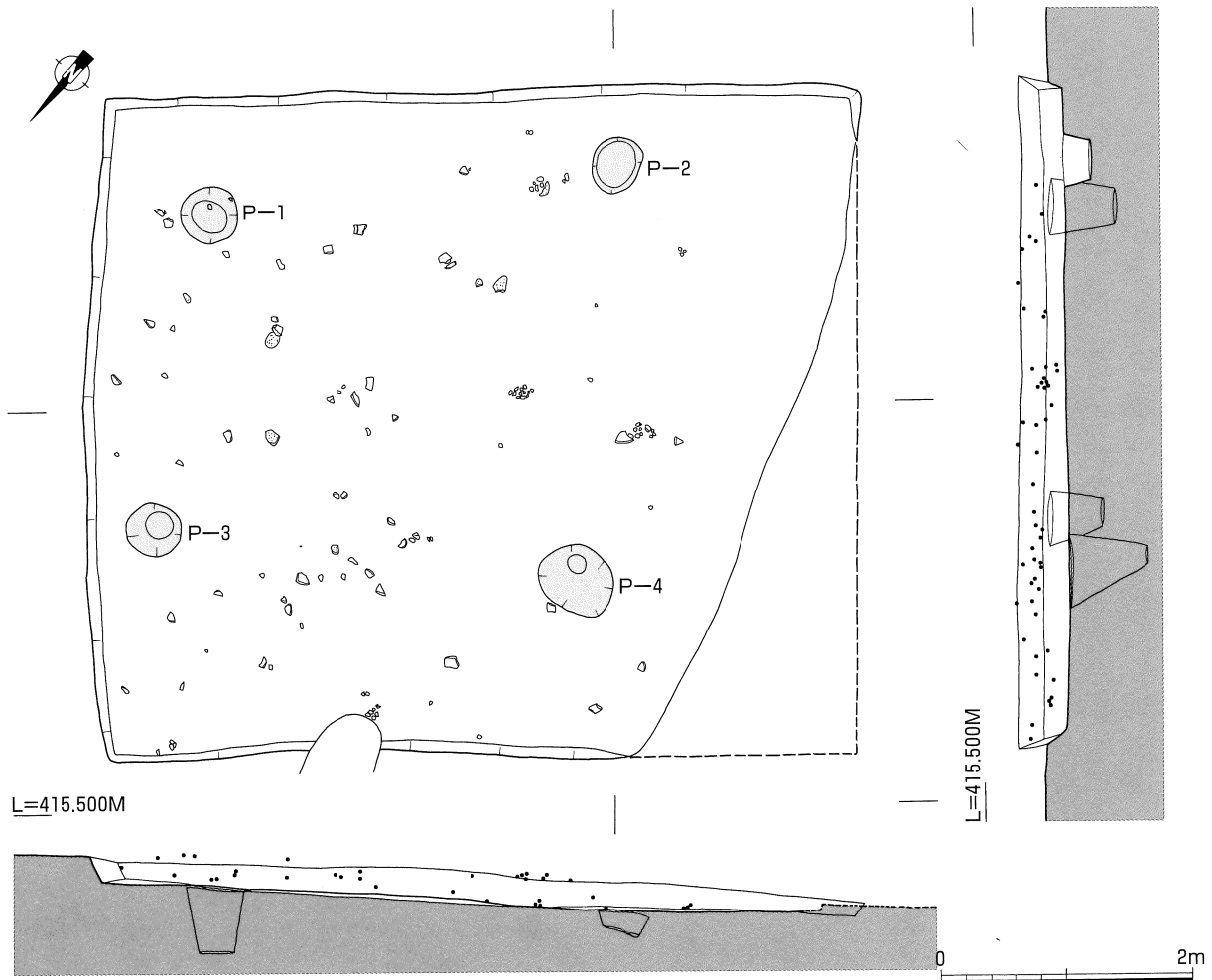
土器 (第41図)

須恵器坏蓋 (1)

つまみ付近の破片である。扁平な擬宝珠状を呈する。胎土に砂粒子を若干含み、内外面とも黒灰色を呈している。堅緻な焼成である。

須恵器坏身 (2) 反転復元

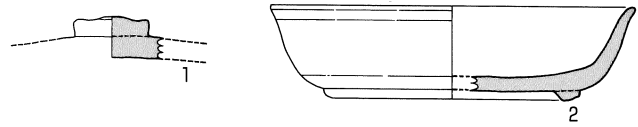
復元口径14.4cm、復元器高3.7cmを測る。底部と体部の境より内側に4mmの高台がつく。底部から体部にかけて丸味を持ち、開き気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。底部は回転ヘラケズリ、内外面はナデ調整を施す。内面は灰白色、外面は黒灰色を呈し、焼成はあまい。



第40図 9号住居跡実測図(S=1/60)

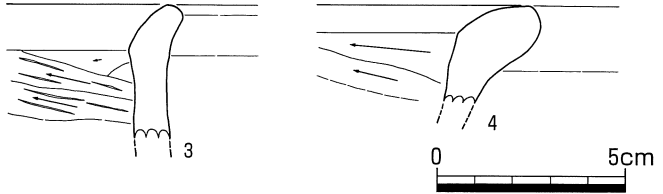
土師器甕 (3)

口縁部の破片である。器壁は全体的に厚く、口縁部は短く外反する。内面はヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土には角閃石・長石などを含み、内外面は明褐色を呈しており、焼成は不良である。



土師器鍋 (4)

口縁部の破片である。頸部から口縁部にかけてかなり肥厚し、短く外反する。内面はヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。器形的には、胴部が窄むようなので鍋とした。



第41図 9号住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)

時期

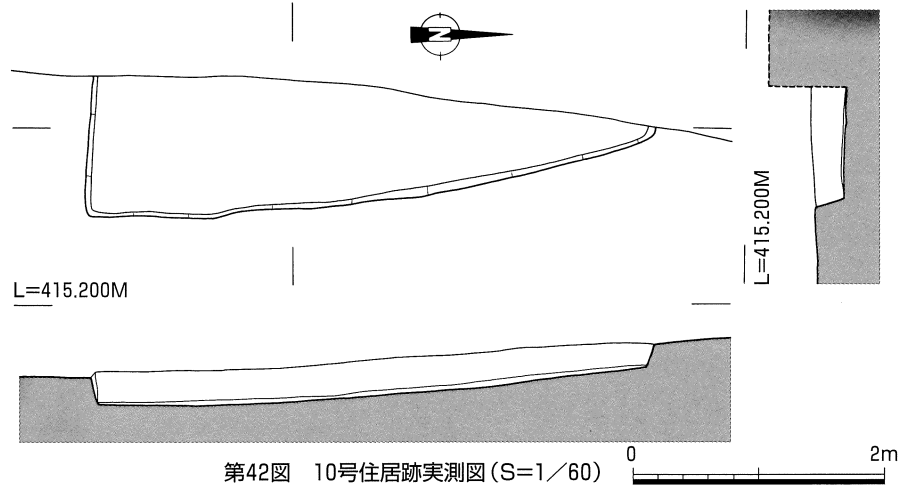
須恵器坏蓋 (1) や須恵器坏身 (2) などの特徴より判断すると、8世紀前半代の所産と思われ、本住居跡の時期に比定されよう。

10号住居跡 (第42図)

9号住居跡の西側に位置する。大部分は調査区外であり、東壁付近の一部が精査できたにすぎなかった。そのため、住居跡の規模を推測することは困難であるが、東壁の辺は約4.6m、検出面からの深さは約20cmを測る。床面は堅緻であり、北から南に向けて緩やかな下り勾配になっている。柱穴やその他の屋内施設は検出されなかった。遺物はほとんどなく、土師器の細片が数点見られるのみである。

時期

出土遺物がほとんどないため、遺物より本住居跡の時期決定をすることができない。したがって、時期については不明である。



第42図 10号住居跡実測図 (S=1/60)

11号住居跡 (第43図)

C地区の北寄りに位置する。中央部に炉跡が、床面に数個のピットが検出された。住居跡の規模はN-30°-Eに主軸方向をとる南北3.6m×東西3.6mのほぼ方形を呈し、検出面からの深さは20~30cmを測る。ピットの中で主柱穴の可能性のあるものは炉跡の南東付近にあるP1のみである。直径30cm、深さ40cmを測る。攪乱等のため検出されなかったが、炉跡を挟んで北西付近に対になる柱穴が想定され、2本柱である可能性が強い。床面は堅緻でほぼ水平であるが、南東から北西にかけて若干緩やかな下り勾配になっている。住居跡内には黒褐色土と炭化物を含む暗茶褐色土が順次自然堆積している。

遺物は炉跡の直上から完形の二重口縁壺が潰れた状態で1点、北東壁付近の床面から僅かに浮いた状態でほぼ

完形に近い小型丸底壺が1点出土した。遺物はこの2点のみで、他はまったく検出されなかった。出土状態からすると、住居破棄時に何らかの意図を持って、置かれたものと思われる。

出土遺物

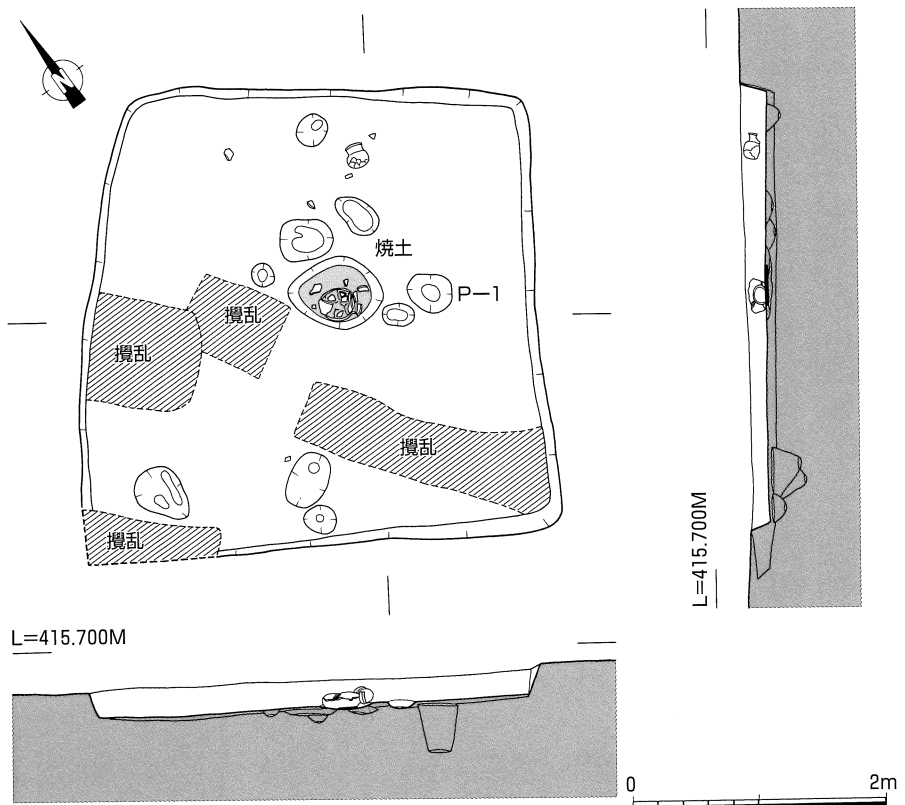
土器 (第44図)

二重口縁壺 (1)

口径15.8cm、器高26.6cm、最大径24.2cmを測る。頸部で屈曲し、口縁部は二重口縁気味にやや開きながら立ち上がる。口縁端部は水平で平坦面を持つが、中央部が若干窪む。胴部は中位で膨らみ、丸底の底部へ続く。肩部付近にはヘラ状工具による波状沈線文が一部描かれている。内面は胴部上半にはヘラケズリ、胴部下半にはハケ目が、外面は全体的に縦方向のハケ目調整が施されている、口縁部内外面にはヨコナデ調整がなされている。胎土は精製されキメが細かく、角閃石・長石・石英が含まれ、内外面とも浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。なお、胴部外面には煤の付着が見られる。

小型丸底壺 (2)

口径12.4cm、器高14.4cmを測る。底部は丸底で、頸部から口縁部にかけて開き気味に立ち上がる。内面はナデ(胴部)とハケ目(口縁部)が、外面はハケ目(底部～頸部)とヨコナデ(口縁部)が施されている。胎土は精製されキメが細かく、角閃石(多量)・長石(少量)・石英が含まれ、内面は黄橙色、外面は明褐色を呈し、焼成は良好である。なお、底部付近は部分的に被熱し赤褐色を呈し、胴部下半外面には煤の付着がある。



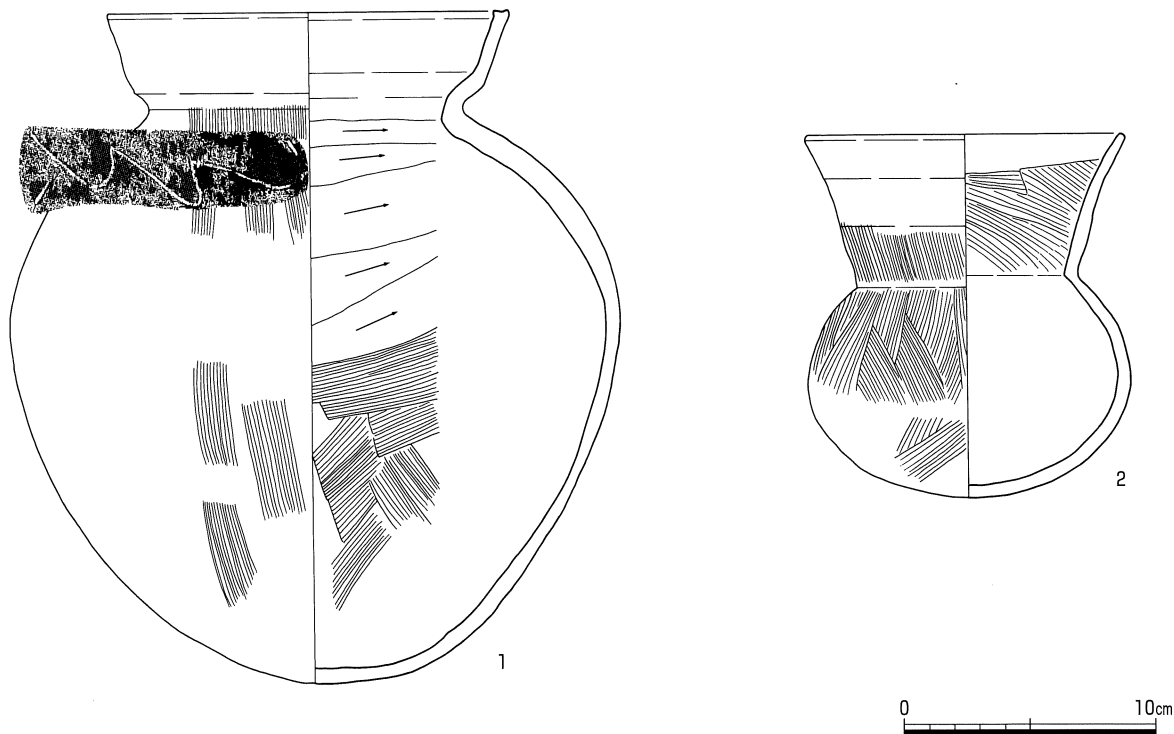
第43図 11号住居跡実測図(S=1/60)

時期

特徴より判断すると、二重口縁壺や小型丸底壺などの遺物は布留式並行期(古墳時代前期)頃の所産であると思われる、本住居跡の時期に比定されよう。この時期の遺構は、本遺跡ではこれのみである。

竪穴状遺構 (第45図)

11号住居跡の北西に位置する。規模はN-40°-Eに主軸方位をとる南北2.4m×東西2.2mのほぼ方形を呈し、検出面からの深さは10~20cmを測る。柱穴やその他屋内施設は検出されなかったため、住居跡として扱わなかった。床面は堅緻で、南東から北西にかけて下り勾配になっている。遺構内には黒褐色土が堆積していた。遺物は



第44図 11号住居跡出土遺物実測図(S=1/3)

南東部に集中し、床面よりやや浮いた状態で出土した。大部分が破片で図示可能な物は少ない。

出土遺物

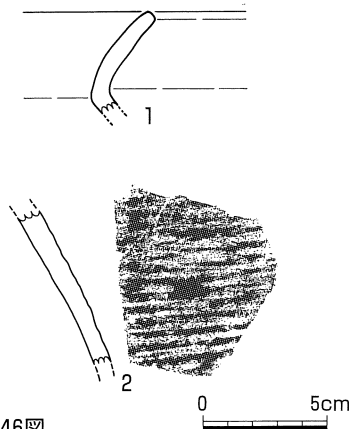
土器 (第46図)

甕 (1・2)

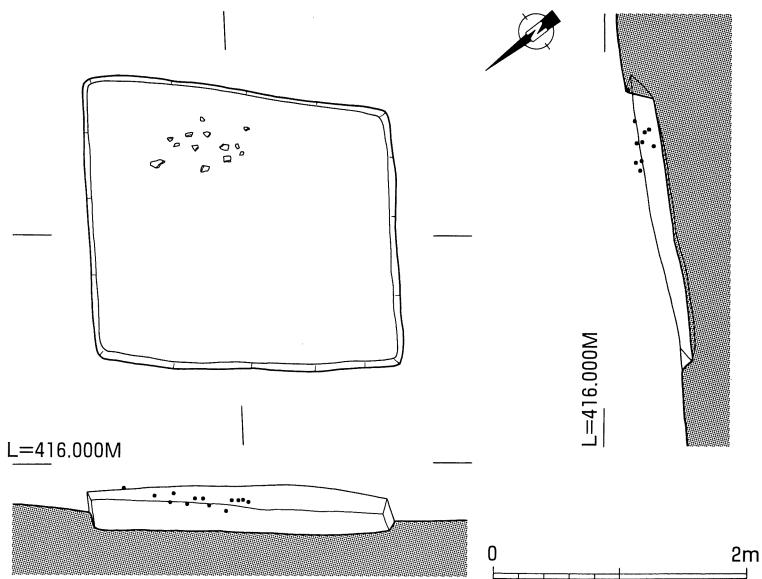
(1) は口縁部付近の破片である。口縁部は伸びながら外反し、端部は角張る。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土は精製されており角閃石を少量含み、内外面とも淡黄色を呈する。焼成は良好である。(2) は胴部の破片である。タタキ目が見られる。胎土は精製されており角閃石を少量含み、内外面とも淡黄色を呈する。焼成は良好である。(1) と (2) は器形や胎土の特徴からすると同一個体と思われる。

時期

遺物は弥生時代終末頃の所産であり、本遺構の時期に比定されよう。



第46図 竪穴状遺構出土遺物実測図(S=1/3)



第45図 竪穴状遺構実測図(S=1/60)

2. 掘立柱建物跡

B地区・C地区とも2～3回精査を行い、ある程度のピットを検出した。掘立柱建物が想定できたのはB地区の6棟のみであり、住居跡およびその他の遺構と重複することなしに検出された。内容は(2間×1間…1棟)・(2間×2間…2棟)・(3間×2間…2棟)・(4間×2間…1棟)である。なお、B地区の中央西よりにピットが集中する部分があり、掘立柱建物跡の可能性もあるが、調査区外に続くため確認できなかった。以下、6棟について各々簡単な説明を加えてみたい。

1号掘立柱建物跡 (第47図)

B地区の北西部に位置する。主軸をN-92°-Eにとる東西棟である。北西隅の柱穴は検出されなかったが、桁行2間・梁行2間の総柱建物であると思われる。北から南にかけて緩やかな下り勾配になっているところに建てられており、規模は桁行(平均)4.43m、梁行(平均)3.83mで、床面積は約17.0㎡を測る。柱穴は長径(平均)38cm×短径(平均)30cm、深さ(平均)22cmであり、円形もしくは楕円形をしており、柱穴内には粘性のない黒色土が堆積していた。また、柱穴などからの出土遺物は全く無く、柱痕も検出されなかった。

2号掘立柱建物跡 (第48図)

B地区の中央部やや北寄りに位置する。主軸をN-80°-Eにとる東西棟で、桁行4間・梁行2間の建物である。北から南にかけて緩やかな下り勾配になっているところに建てられており、規模は桁行(平均)7.20m、梁行(平均)3.88mで、床面積は約27.9㎡を測る。柱穴は長径(平均)47cm×短径(平均)43cm、深さ(平均)27cmであり、大部分が円形を呈し、柱穴内には粘性のない黒色土が堆積している。柱穴などからの出土遺物は全く無く、柱痕も検出されなかった。なお、桁柱・梁柱の各々中央部に位置するP3・P10・P6・P7は他の柱穴に比べ浅くなっている。

3号掘立柱建物跡 (第49図)

B地区の中央部やや北西寄りに位置する。主軸をN-82°-Eにとる東西棟で、桁行2間・梁行2間の建物である。中央部付近は攪乱を受けていたため柱穴は検出されなかったが、規模などが1号掘立柱建物跡と似ており、同様に総柱になる可能性がある。北から南にかけて緩やかな下り勾配になっているところに建てられており、規模は桁行(平均)4.04m、梁行(平均)4.04mで、床面積は約16.3㎡を測る。柱穴は長径(平均)35cm短径(平均)33cm、深さ(平均)27cmであり、大部分が円形を呈し、粘性のない黒色土が覆土として堆積している。柱穴などからの出土遺物は全く無く、柱痕も検出されなかった。なお、P3の東側約70cmの所にP9が、P8の東側約80cmの所にP10が検出されており、位置からすると庇状のものが想定される。また、梁柱の中央部に位置するP4・P5は他の柱穴に比べ極端に浅くなっている。

4号掘立柱建物跡 (第50図)

B地区の中央部に位置する。主軸をN-62°-Eにとる東西棟である。北側の柱穴が全て検出されていないが、桁行3間・梁行2間の建物であると思われる。規模は桁行(平均)4.34m、梁行(平均)2.69mで、床面積は約11.7㎡を測る。柱穴は長径(平均)39cm×短径(平均)36cm、深さ(平均)23cmであり、大部分が円形を呈し、粘性のない黒色土が堆積していた。柱穴などからの出土遺物は全く無く、柱痕も検出されなかった。

5号掘立柱建物跡 (第51図)

B地区の中央部に位置する。主軸をN-78°-Eにとる東西棟で、桁行2間・梁行1間の建物である。規模は桁行(平均)6.42m、梁行(平均)2.14mで、床面積は約13.7㎡を測る。柱穴は長径(平均)40cm×短径(平均)

36cm、深さ（平均）25cmであり、大部分が円形を呈し、粘性のない黒色土が堆積していた。P1とP4は2段掘りになっている。柱穴などからの出土遺物は全く無く、柱痕も検出されなかった。桁行の柱間が広いのが特徴的である。

6号掘立柱建物跡（第52図）

B地区の南東部に位置する。主軸をN-35°-Wにとる南北棟で、桁行3間・梁行2間の建物である。規模は桁行（平均）5.92m、梁行（平均）3.64mで、床面積は約21.6㎡を測る。柱穴は長径（平均）25cm×短径（平均）24cm、深さ（平均）13cmであり、大部分が円形を呈し、粘性のない黒色もしくは黒褐色土が堆積している。柱穴などからの出土遺物は全く無く、柱痕も検出されなかった。なお、他の掘立柱建物跡に比べ柱穴の径が小さく、深さが浅い。

すべての掘立柱建物跡において、出土遺物が全く検出されないため、時期を特定する積極的な資料に欠けている。しかし、基本的に柱穴群は奈良時代の住居跡が検出された面で見つかり、すべての柱穴内には一様に黒色土が堆積していた。この黒色土は、奈良時代の遺物を中心にそれ以降の遺物を若干含んでいる第2層（基本土層）と同様のものである。また、立地場所は住居跡と重複しないエリアであり、柱穴検出時に周辺から採集された遺物を観察すると住居跡の時期とほぼ同時期のものが多く見られる。主軸方向については、6号が異なるが、1号～5号までがほぼ東西方向と共通する。

以上のことから判断すると、1～6号は、ほぼ8世紀代の時期のものであると考えてよからう。したがって、奈良時代の住居跡と共に集落を構成する施設である可能性がきわめて高い。柱穴の規模が小さいことから推測すると、簡易な建物であったと思われる。1号は総柱であるので倉庫的な機能を果たしたものであろう。3号も総柱の可能性が強いので、同様のことが言えよう。2・4・5・6号は平地式建物が考えられる。倉庫か居住空間なのかの明確な判断は下せない。なお、5号は桁行の柱間が広く、他の建物とやや形状を異にするので、同じ平地式建物でも用途が違うのかもしれない。

第2表 掘立柱建物跡計測表 No1

計測箇所のアverage値（単位m）

番号	箇所	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間	柱穴（長径×短径／深さ）	床面積
1号掘立柱建物跡		4.43	3.83	2.21	1.91	0.38×0.30／0.22	17.0㎡
2号掘立柱建物跡		7.20	3.88	1.80	1.87	0.47×0.43／0.27	27.9㎡
3号掘立柱建物跡		4.04	4.04	2.06	2.00	0.35×0.33／0.27	16.3㎡
4号掘立柱建物跡		4.34	2.69	1.31	1.34	0.39×0.36／0.23	11.7㎡
5号掘立柱建物跡		6.42	2.14	3.22	—	0.40×0.36／0.25	13.7㎡
6号掘立柱建物跡		5.92	3.64	2.00	1.82	0.25×0.24／0.13	21.6㎡

第3表 掘立柱建物跡計測表 No 2

1号掘立柱建物跡 計測表 (単位m)

桁行	数值
P 1 ~ P 3	4.70
P 4 ~ P 6	4.40
P 7 ~ P 9	4.20

桁行 柱間	数值
P 1 ~ P 2	2.40
P 2 ~ P 3	2.30
P 4 ~ P 5	2.20
P 5 ~ P 6	2.20
P 7 ~ P 8	1.90
P 8 ~ P 9	2.30

梁行 柱間	数值
P 1 ~ P 4	2.10
P 4 ~ P 7	1.70
P 2 ~ P 5	1.90
P 5 ~ P 8	1.90
P 3 ~ P 6	1.90
P 6 ~ P 9	2.00

柱穴番号	長径×短径	深さ
P 1	0.32×0.28	0.22
P 2	0.38×0.28	0.32
P 3	0.40×0.28	0.18
P 4	0.38×0.34	0.30
P 5	0.52×0.38	0.17
P 6	0.28×0.26	0.20
P 7	---	---
P 8	0.45×0.38	0.22
P 9	0.38×0.26	0.20

梁行	数值
P 1 ~ P 7	3.80
P 2 ~ P 8	3.80
P 3 ~ P 9	3.90

2号掘立柱建物跡 計測表 (単位m)

桁行	数值
P 1 ~ P 5	7.00
P 6 ~ P 7	7.30
P 8 ~ P 12	7.30

梁行	数值
P 1 ~ P 8	3.80
P 2 ~ P 9	3.86
P 3 ~ P 10	3.94
P 4 ~ P 11	4.00
P 5 ~ P 12	3.84

桁行 柱間	数值
P 1 ~ P 2	1.92
P 2 ~ P 3	1.64
P 3 ~ P 4	1.50
P 4 ~ P 5	2.00
P 8 ~ P 9	2.14
P 9 ~ P 10	1.74
P 10 ~ P 11	1.50
P 11 ~ P 12	2.00

柱穴番号	長径×短径	深さ
P 1	0.32× ?	0.36
P 2	0.70×0.64	0.40
P 3	0.48× ?	0.30
P 4	0.46×0.40	0.42
P 5	0.44×0.40	0.22
P 6	0.50×0.44	0.22
P 7	0.50×0.44	0.12
P 8	0.44×0.36	0.32
P 9	0.50×0.46	0.36
P 10	0.42×0.34	0.14
P 11	0.42×0.40	0.18
P 12	0.48×0.48	0.30

梁行	数值
P 1 ~ P 6	1.90
P 6 ~ P 8	1.80
P 5 ~ P 7	1.80
P 7 ~ P 12	2.00

3号掘立柱建物跡 計測表 (単位m)

桁行	数值
P 1 ~ P 3	4.28
P 4 ~ P 5	3.86
P 6 ~ P 8	3.98

桁行 柱間	数值
P 1 ~ P 2	1.96
P 2 ~ P 3	2.32
P 6 ~ P 7	1.46
P 7 ~ P 8	2.52

梁行 柱間	数值
P 1 ~ P 4	2.06
P 4 ~ P 6	2.00
P 3 ~ P 5	2.16
P 5 ~ P 8	1.80

柱穴番号	長径×短径	深さ
P 1	0.40×0.36	0.30
P 2	0.36×0.36	0.18
P 3	0.36×0.36	0.46
P 4	0.24×0.24	0.08
P 5	0.26×0.26	0.06
P 6	0.32×0.28	0.24
P 7	0.42×0.36	0.44
P 8	0.44×0.38	0.44
P 9	0.38×0.38	0.30
P 10	0.40×0.36	0.28

梁行	数值
P 1 ~ P 6	4.10
P 2 ~ P 7	4.10
P 3 ~ P 8	3.92

4号掘立柱建物跡 計測表 (単位m)

桁行	数值
P 1 ~ P 4	4.56
P 5 ~ P 6	4.32
P 7 ~ P 10	4.14

桁行 柱間	数值
P 1 ~ P 2	1.08
P 2 ~ P 3	---
P 3 ~ P 4	---
P 7 ~ P 8	1.50
P 8 ~ P 9	1.46
P 9 ~ P 10	1.22

梁行 柱間	数值
P 1 ~ P 5	1.40
P 5 ~ P 7	1.16
P 4 ~ P 6	1.32
P 6 ~ P 10	1.48

柱穴番号	長径×短径	深さ
P 1	0.36×0.36	0.20
P 2	0.38×0.38	0.16
P 3	---	---
P 4	0.38×0.34	0.35
P 5	0.46×0.38	0.14
P 6	0.42×0.40	0.60
P 7	0.42×0.36	0.18
P 8	0.40×0.40	0.18
P 9	0.44×0.34	0.14
P 10	0.30×0.28	0.18

梁行	数值
P 1 ~ P 7	2.54
P 2 ~ P 8	2.70
P 3 ~ P 9	---
P 4 ~ P 10	2.84

5号掘立柱建物跡 計測表 (単位m)

桁行	数值
P 1 ~ P 3	6.34
P 4 ~ P 6	6.50

梁行	数值
P 1 ~ P 4	2.12
P 2 ~ P 5	2.24
P 3 ~ P 6	2.06

桁行 柱間	数值
P 1 ~ P 2	3.30
P 2 ~ P 3	3.06
P 4 ~ P 5	3.32
P 5 ~ P 6	3.20

柱穴番号	長径×短径	深さ
P 1	0.32×0.32	0.34
P 2	0.40×0.38	0.28
P 3	0.40×0.38	0.10
P 4	0.40×0.36	0.36
P 5	0.48×0.40	0.30
P 6	0.40×0.36	0.14

6号掘立柱建物跡 計測表 (単位m)

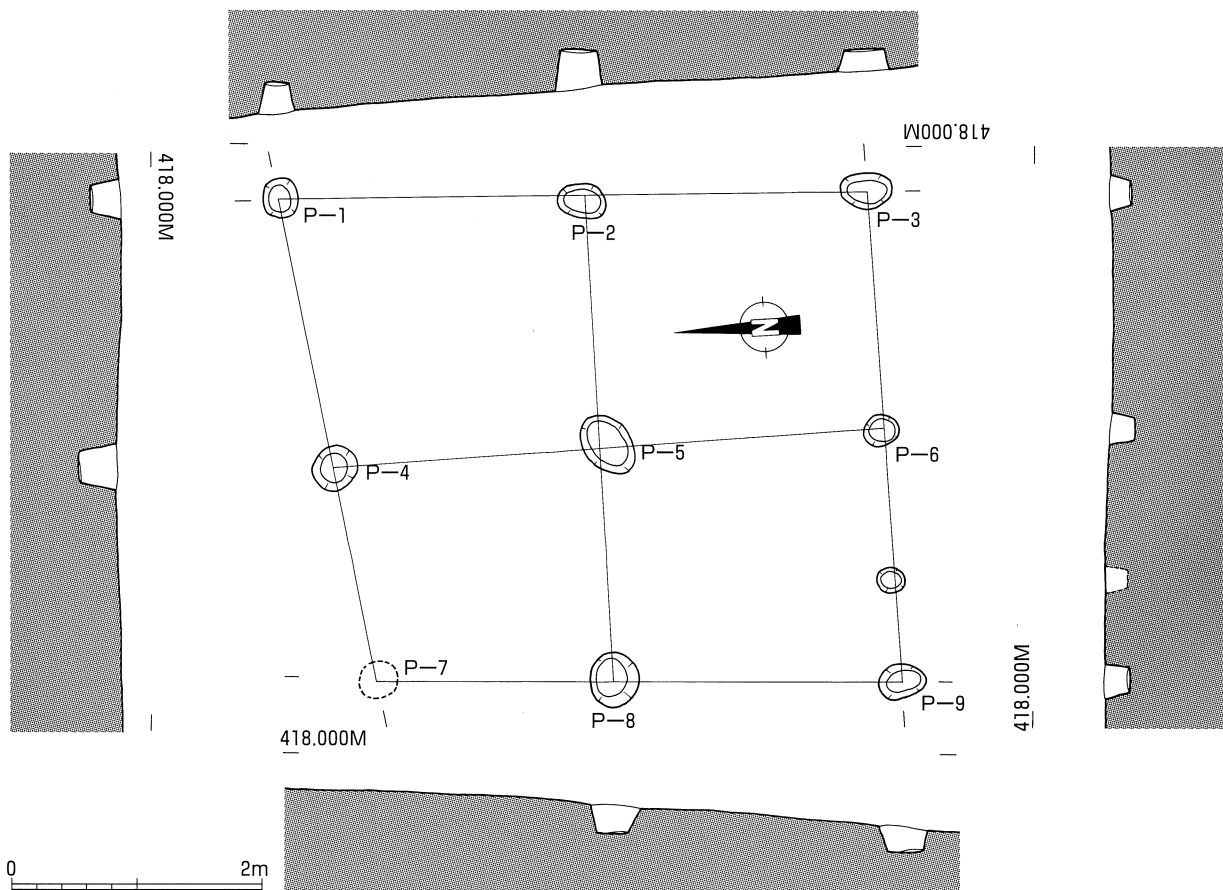
桁行	数值
P 1 ~ P 4	6.04
P 5 ~ P 6	5.80
P 7 ~ P 10	5.92

桁行 柱間	数值
P 1 ~ P 2	2.04
P 2 ~ P 3	2.00
P 3 ~ P 4	2.06
P 7 ~ P 8	1.80
P 8 ~ P 9	1.80
P 9 ~ P 10	2.34

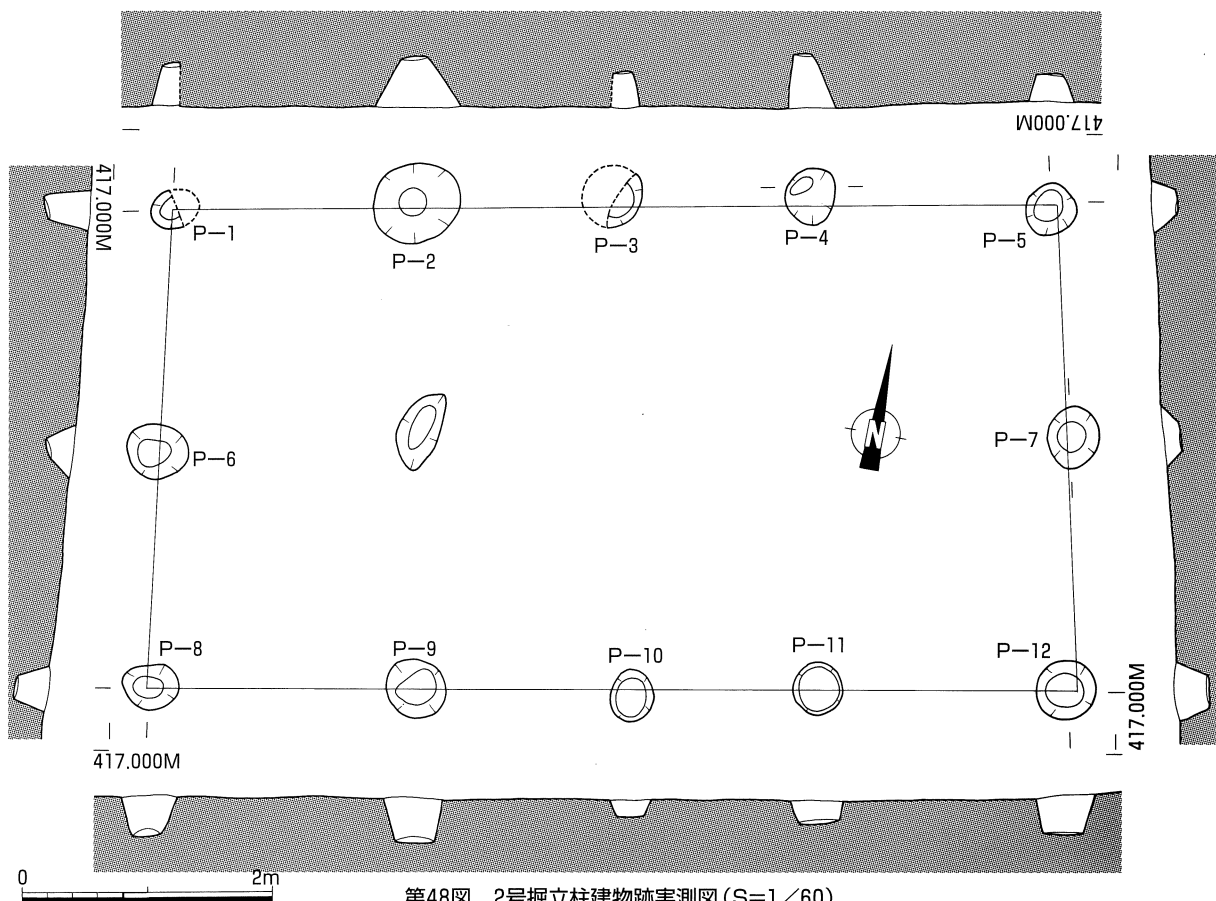
梁行 柱間	数值
P 1 ~ P 5	2.40
P 5 ~ P 7	1.34
P 4 ~ P 6	2.22
P 6 ~ P 10	1.34

柱穴番号	長径×短径	深さ
P 1	0.24×0.22	0.16
P 2	0.30×0.28	0.20
P 3	0.26×0.26	0.16
P 4	0.20×0.20	0.12
P 5	0.28×0.28	0.06
P 6	0.20×0.20	0.14
P 7	0.28×0.28	0.10
P 8	0.26×0.24	0.10
P 9	0.28×0.26	0.10
P 10	0.26×0.26	0.18

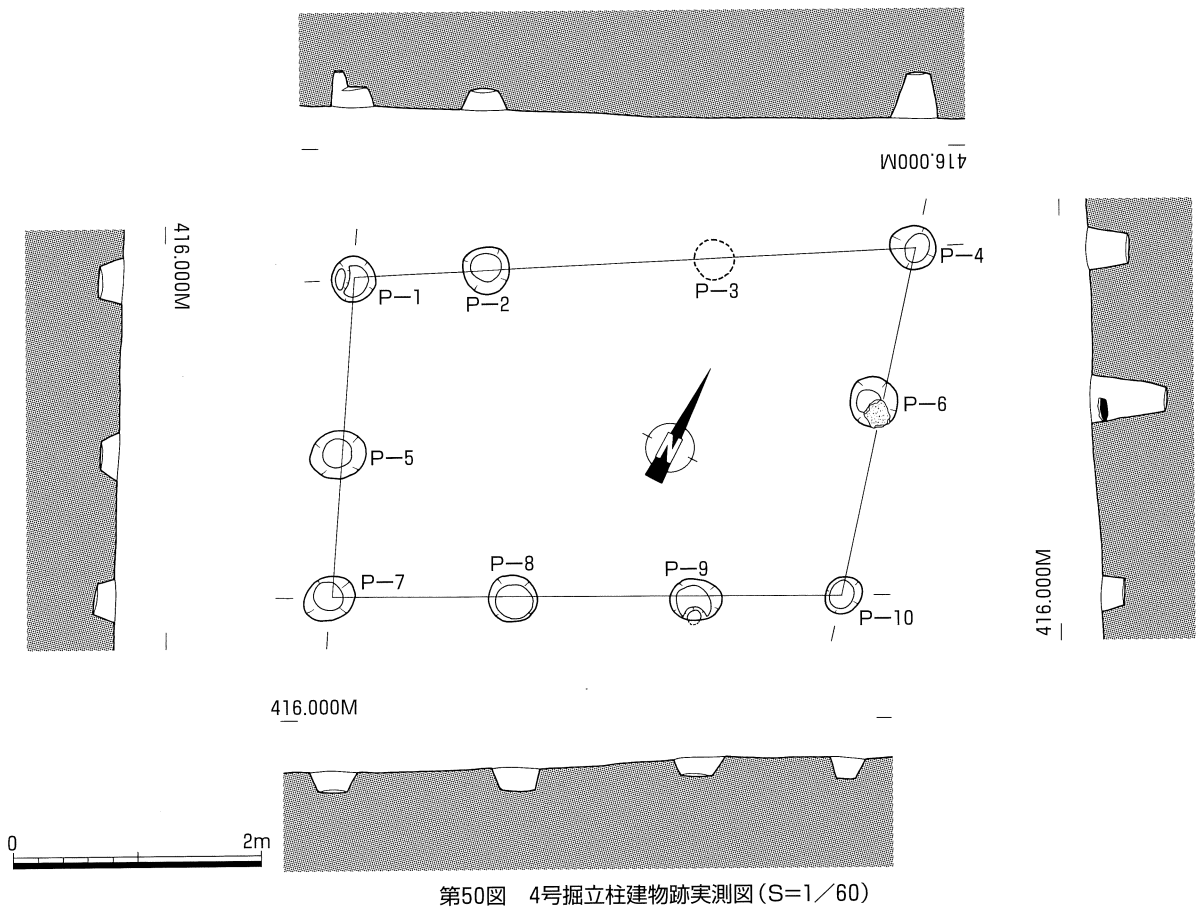
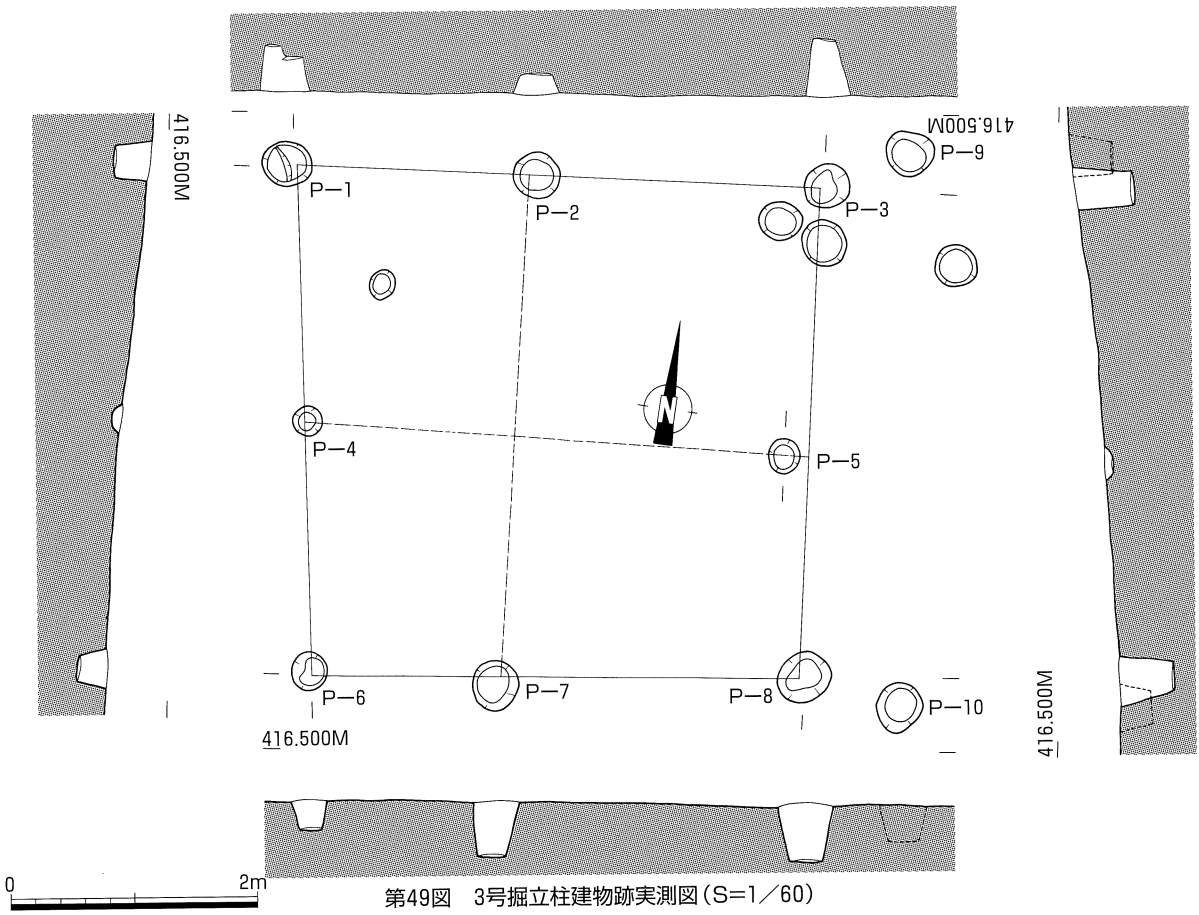
梁行	数值
P 1 ~ P 7	3.74
P 2 ~ P 8	3.72
P 3 ~ P 9	3.54
P 4 ~ P 10	3.56

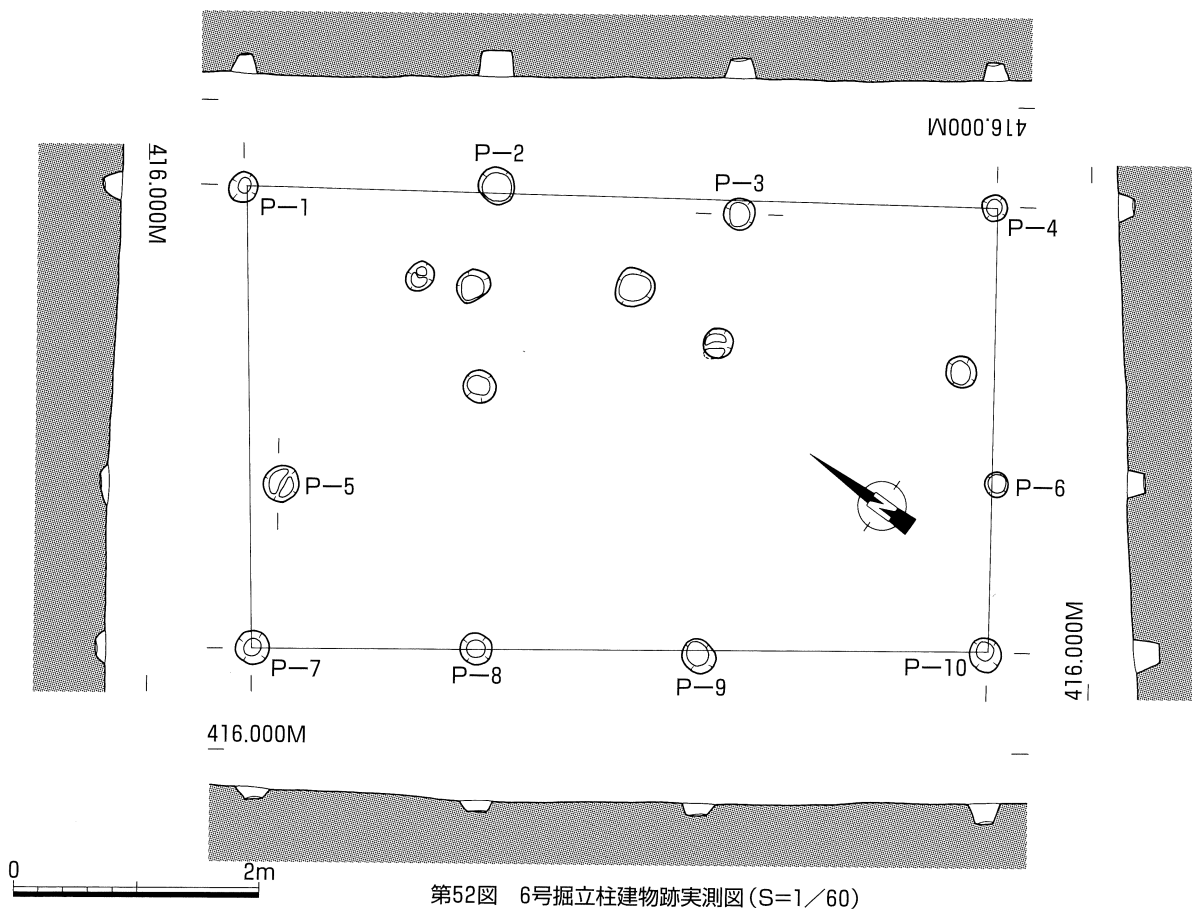
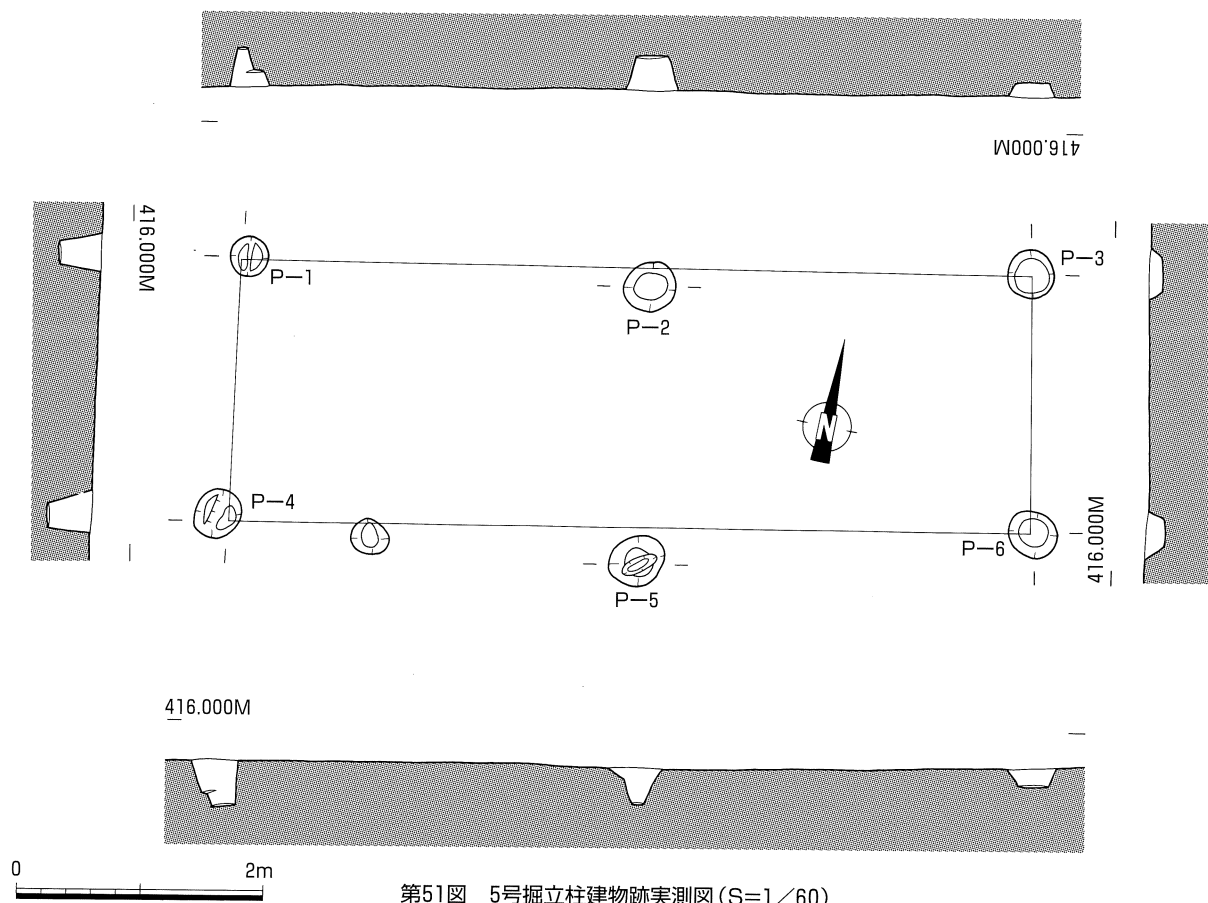


第47图 1号掘立柱建物跡実測図(S=1/60)



第48图 2号掘立柱建物跡実測図(S=1/60)





3. 土坑

ここでは、長径もしくは短径が1.0mを越え、形態が円形・楕円形・長楕円形・不整楕円形などを呈するものを土坑として扱った。B区において合計14基の土坑が検出された。中央部西寄りに大部分が分布している。各土坑からの出土遺物は全体的に少なく、ほとんどの土坑で時期を明確にすることができない。

1号土坑（第55図）

B地区の北、3号住居跡の北側約0.3mに位置する。長軸をN-10°-Eの方位にとる。規模は長径1.25m×短径0.7mの楕円形を呈し、深さは約25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。本土坑からの出土遺物は全くなく、時期は決め難い。

2号土坑（第55図）

B地区の北、2号住居跡の南側約0.5mに位置する。長軸をN-68°-Wの方位にとる。規模は長径1.50m×短径1.0mの楕円形を呈し、深さは約25cmを測る。壁の立ち上がりは急であり、床面はほぼ平坦である。遺物は覆土中より土師質の土器片が数点出土しているが、細片のため図示不可能であり、時期も特定できない。

3号土坑（第55図）

B地区の西、4号掘立柱建物跡の南西約2.0mに位置する。長軸をほぼ東西の方向にとる。規模は長径1.65m×短径0.84mの長楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、東側半分の深さ約20cmのところは緩やかに傾斜した面をもつテラス状を呈し、段をなす。また、西側半分の床面で18cm×13cm×10cmを測る楕円形のピットが検出された。遺物は覆土中より土器の破片が1点出土している。弥生時代終末～古墳時代初め頃の所産であると思われるが、これによって本土坑の時期を決めるには無理がある。

出土遺物（第53図の1）

甕の口縁部である。頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は伸びながら外反する。口縁端部の内側に若干の凹みが見られる。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。内・外面とも浅黄橙色を呈し、胎土には角閃石を少量含んでいる。

4号土坑（第55図）

B地区の西、3号土坑の南西約3.0mに位置する。長軸をN-03°-Eのほぼ南北の方向にとる。規模は長径1.93m×短径1.05mを測り、西側でやや膨らむ長楕円形を呈する。深さは約50cmを測る。北壁を除き、その他の壁の立ち上がりは急である。西側半分の深さ約30cm付近が緩やかに傾斜した面をもつテラス状になっており、段をなす。床面は皿状を呈し、底面中央部で17cm×15cm×7cmを測る楕円形のピットが検出された。テラスの北側にあるピットは根痕であろう。本土坑からの出土遺物は全くなく、時期は決め難い。

5号土坑（第55図）

B地区の西、9号住居跡の北東側約0.3mに位置する。長軸をN-50°-Eの方位にとる。規模は長径0.93m×短径0.8mの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。壁の立ち上がりは急であり、床面はほぼ平坦である。遺物は覆土中および床面より須恵器の破片が数点出土している。出土状態より判断すると、遺構に伴う可能性が強く、特徴的には8世紀前半の所産であると思われる。したがって、本土坑の時期に比定されよう。

出土遺物（第53図の2）

須恵器の坏身である。復元口径12.0cm、復元器高3.6cmを測る。約5mmの高台が付き、体部は直線的に立ち上がる。底部には回転ヘラケズリを、体部内外面はナデ調整を施している。内面は褐灰色、外面は黒灰色を呈

し、2mm前後の白色粒子を若干胎土に含む。

6号土坑（第56図）

B地区の西、4号土坑の南東側約5.0mに位置し、北東側の一部を2号溝によって切られている。長軸をN-57°-Wの方位にとる。規模は長径5.3m×短径3.2mの不整楕円形を呈する大型土坑であり、深さは約30cmを測る。断面形は皿状であり、南東側の深さ約10cm付近はテラス状を呈し、段をなす。中央部から南西側にかけて10~20cm大の川原石が浮いた状態で数個検出された。その他の出土遺物はない。

7号土坑（第56図）

B地区の西、6号土坑の東側約0.5mに位置する。長軸をN-79°-Wのほぼ東西の方向にとる。規模は長径2.3m×短径1.0mを測り、北側でやや膨らむ長楕円形を呈する。深さは約30~50cmを測る。北側半分の深さ約35cm付近がテラス状になっており、段をなす。テラスの東側部分で長径17cm×短径12cm、深さ10cmを測る楕円形のピットが検出された。本土坑からの出土遺物はない。

8号土坑（第56図）

B地区の南側に位置する。長軸をN-46°-Eの方位にとる。規模は長径1.1m×短径0.95mの不整楕円形を呈する。全体的に上面が削平を受けており、特に西側は著しく、検出面からの深さは約15~30cmを測る。遺物は中央部やや西寄りの地点で潰れた状態の甕が出土した。特徴より判断すると、弥生時代中期末頃の所産であると思われる。出土状態からすると、遺構に伴うものと思われ、本土坑の時期に比定されよう。

出土遺物（第53図の4）

ほぼ完形に近い甕である。口径19.0cm、器高23.9cm、胴部最大径20.3cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、端部付近には凹みがあり一周する。胴部は上半で最大となり、平底の底部へと続く。外面は肩部付近が横方向の粗いハケ調整、胴部付近が縦方向の粗いハケ調整であり、内面はナデ調整である。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。胎土には角閃石・長石・石英を含み、内外面とも明褐色を呈する。なお、胴部には煤の付着が見られ、底部は被熱し赤褐色に熱変している。

9号土坑（第57図）

B地区の南、8号土坑の南東約3.0mに位置する。長軸をN-75°-Wのほぼ東西の方向にとる。規模は長径1.78m×短径0.8mの長楕円形を呈する。全体的に上面がかなり削平を受けていると思われ、深さは約5cm~10cmを測るのみで浅い。西側にある2つのピットは後世のものであろう。本土坑からの出土遺物は全くない。

10号土坑（第57図）

B地区の西、9号住居跡の南側約0.2mに位置する。長軸をN-49°-Eの方位にとる。規模は長径1.9m×短径1.35mの楕円形を呈し、深さは約30~35cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦であるが、西方向に緩やかに傾斜している。遺物は土師器の細片が数点出土しているが、図示できるものはなく、時期決定は困難である。

11号土坑（第57図）

B地区の西、1号住居跡と9号住居跡の間に位置する。長軸をN-61°-Eの方位にとる。規模は長径0.98m×短径0.58mの長楕円形を呈する。全体的に上面が削平を受けていると思われ、深さは約15cmを測る。壁の立ち上がりは急であり、床面はほぼ平坦である。遺物は覆土中より川原礫および土師質の土器細片が数点出土しているが、図示不可能であり、時期の決定もできない。

12号土坑（第57図）

B地区の西、11号土坑の西側約0.4mに位置する。長軸をN-07°-Wのほぼ南北の方向にとる。規模は長径0.95m×短径0.83mの楕円形を呈し、全体的に上面が削平を受けており、深さは約15cmを測る。壁の立ち上がりは急であり、床面はほぼ平坦である。遺物は床面よりかなり浮いた状態で土器片が出土した。弥生時代中期後半頃の所産であると思われるが、これによって本土坑の時期を決めるには無理がある。

出土遺物（第53図の3）

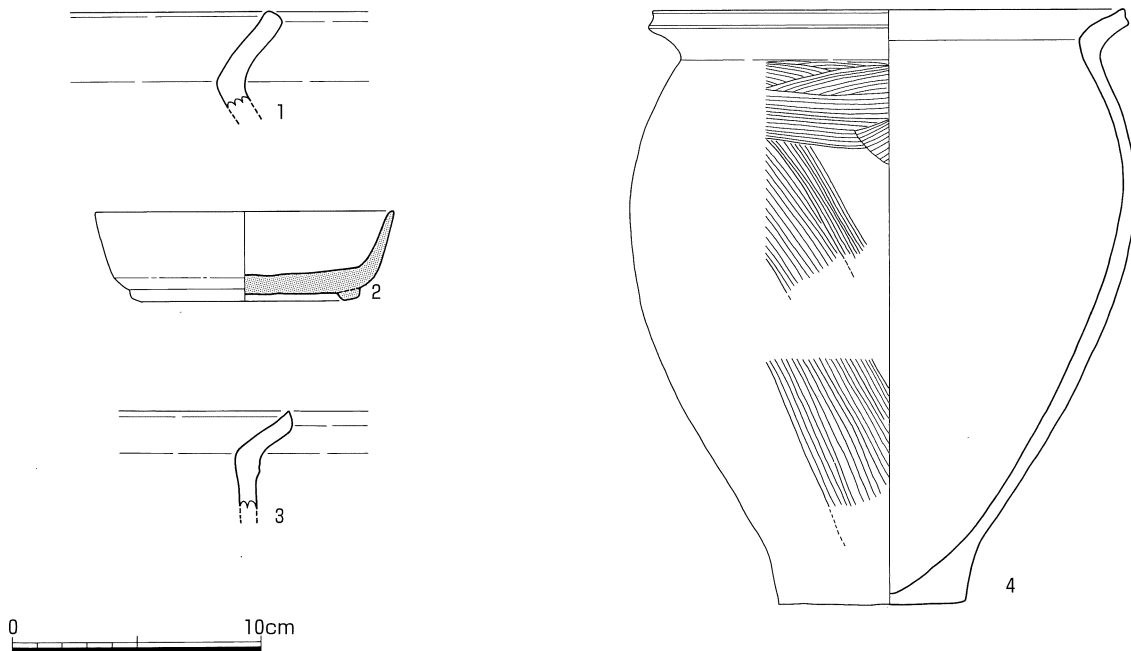
甕の口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部はつまみ上げ、跳上状口縁を呈する。胴部は膨らまず底部へ続くようである。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。胎土に角閃石（多）・長石を含み、内面は浅黄橙色・外面は明褐色を呈する。

13号土坑（第57図）

B地区の西、11号土坑の東側に位置し、1号住居跡と9号住居跡の一部を切っている。長軸をN-30°-Wの方位にとる。規模は長径1.20m×短径0.48mの長楕円形を呈し、全体的に上面がかなりの削平を受けており、深さは約5～8cmを測るのみである。遺物は覆土中より川原礫が数個出土したにすぎず、本土坑の時期を決定することはできない。しかし、1号住居跡と9号住居跡の一部を切っていることを考えると、それ以降の時期が推定される。

近世土坑（第54図）

B地区の中央部東端で検出された。規模は直径1.05m、上面は削平を受けているものの検出面からの深さ75cmを測る。底面は平坦であり、ほぼ円形を呈する土坑である。下層には暗褐色土が、上層には黄茶褐色土が堆積していた。下層の暗褐色土中から、底面よりやや浮いた状態で、獣骨と染付碗の破片が1点出土している。骨は、子牛のもので、一頭分であるが、頭部と脚部分が主である。染付碗は、特徴などから判断すると、18世紀後半の



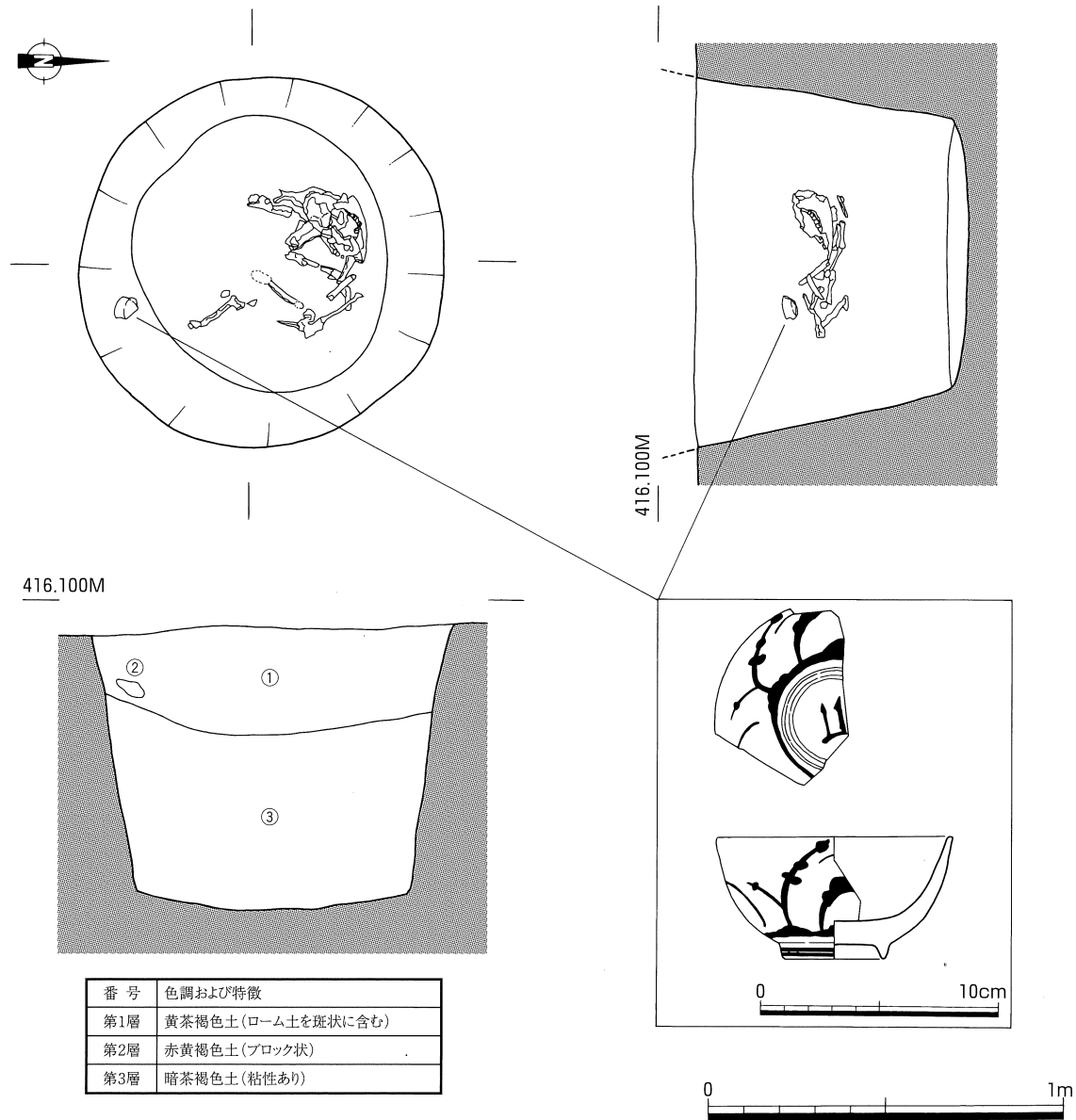
第53図 土坑内出土遺物実測図(S=1/3)

所産であると思われる。出土状態から判断すると、染付碗は後からの流れ込みとは考え難く、獣骨に共伴するものであり、この遺構は、18世紀後半のものと思われる。

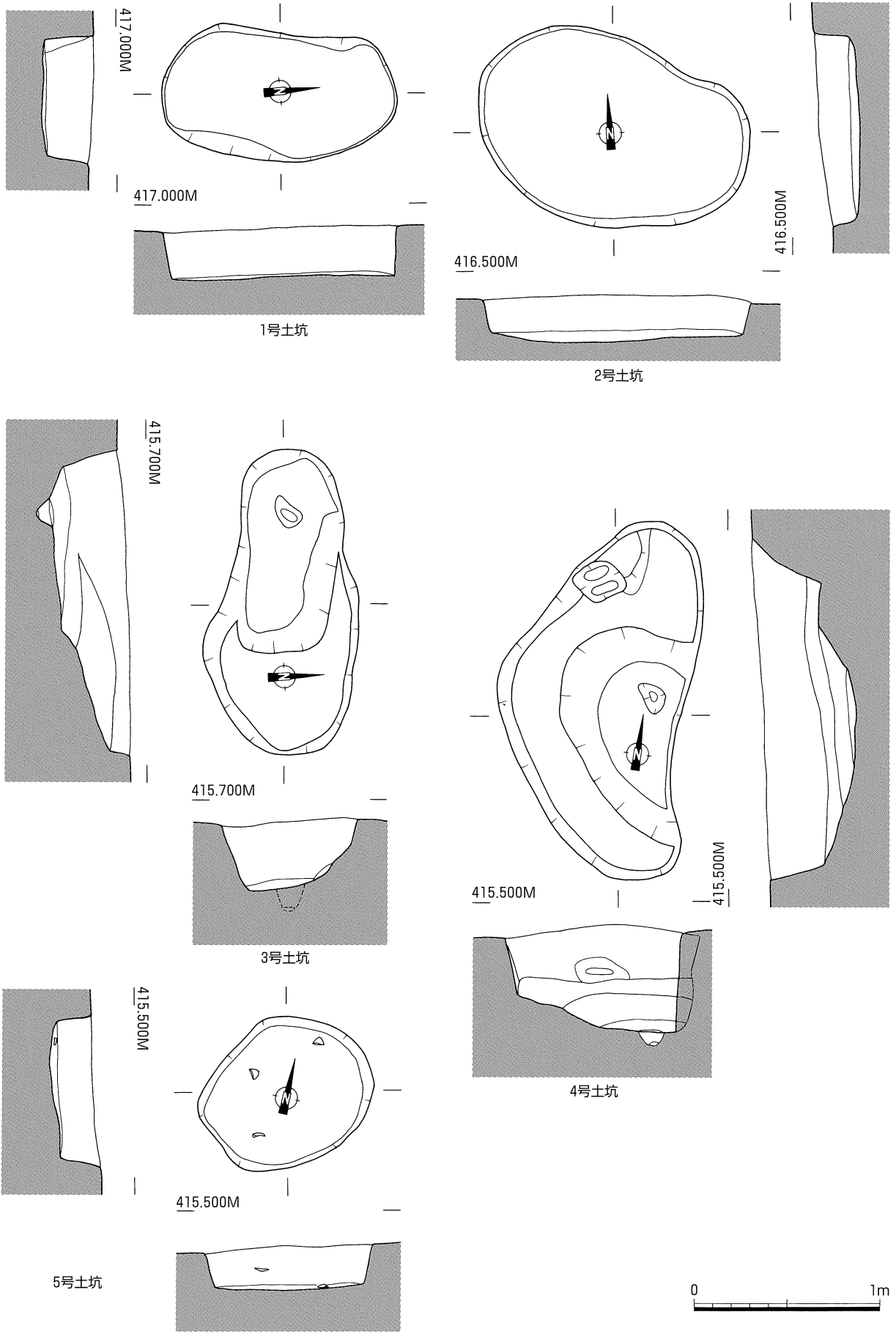
出土遺物 (第54図)

肥前産の染付碗である。復元口径9.7cm、復元器高5.1cm、復元底径4.4cmを測る。体部の外面には「梅樹雪輪文」の染付が見られ、高台には界線が2条巡っている。底部外面には「大明年化製」銘の略記号が見られる。18世紀後半に流行した、いわゆる「くらわんか碗」である。

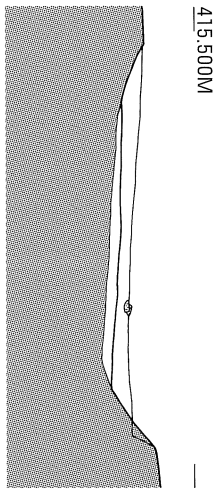
以上、説明を加えてきたが、5・8号土坑および近世土坑については、時期をある程度決められるものの、それ以外の土坑では明確にできない。形態的には、長楕円形を呈し、テラス状の段を持ち、内部にピットが存在するという共通点を持つ3・4・7号土坑は同時期に存在した可能性がある。5号土坑は9号住居跡とほぼ同時期であり、関連施設の可能性が強い。1・2号土坑はそれぞれ住居跡に近接することから、5号土坑同様に住居跡との関連性が考えられる。



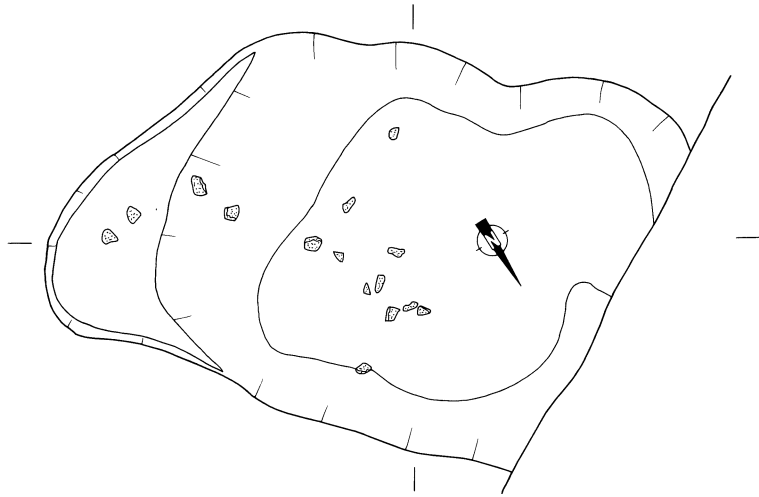
第54図 近世土坑および出土遺物実測図(S=遺構1/20・遺物1/3)



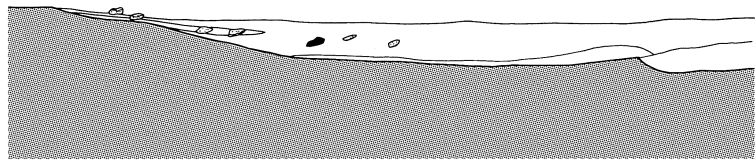
第55图 土坑实测图No1 (S=1/30)



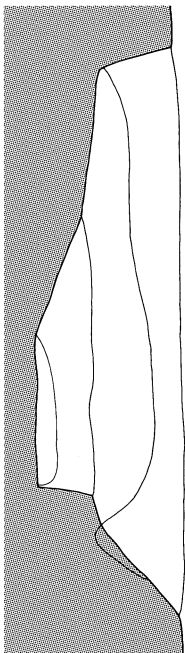
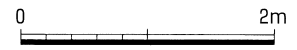
415.500M



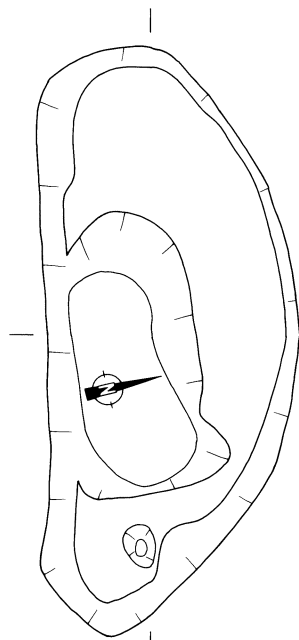
415.500M



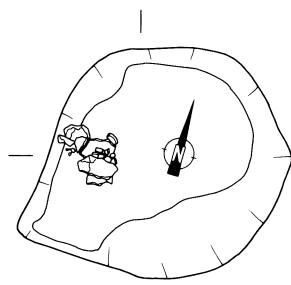
6号土坑



415.500M

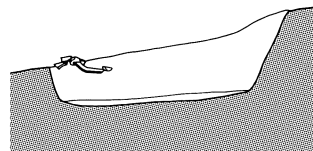


415.500M

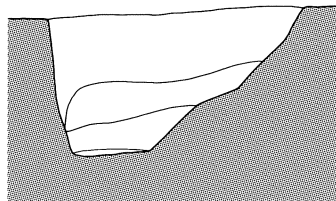


414.800M

414.800M



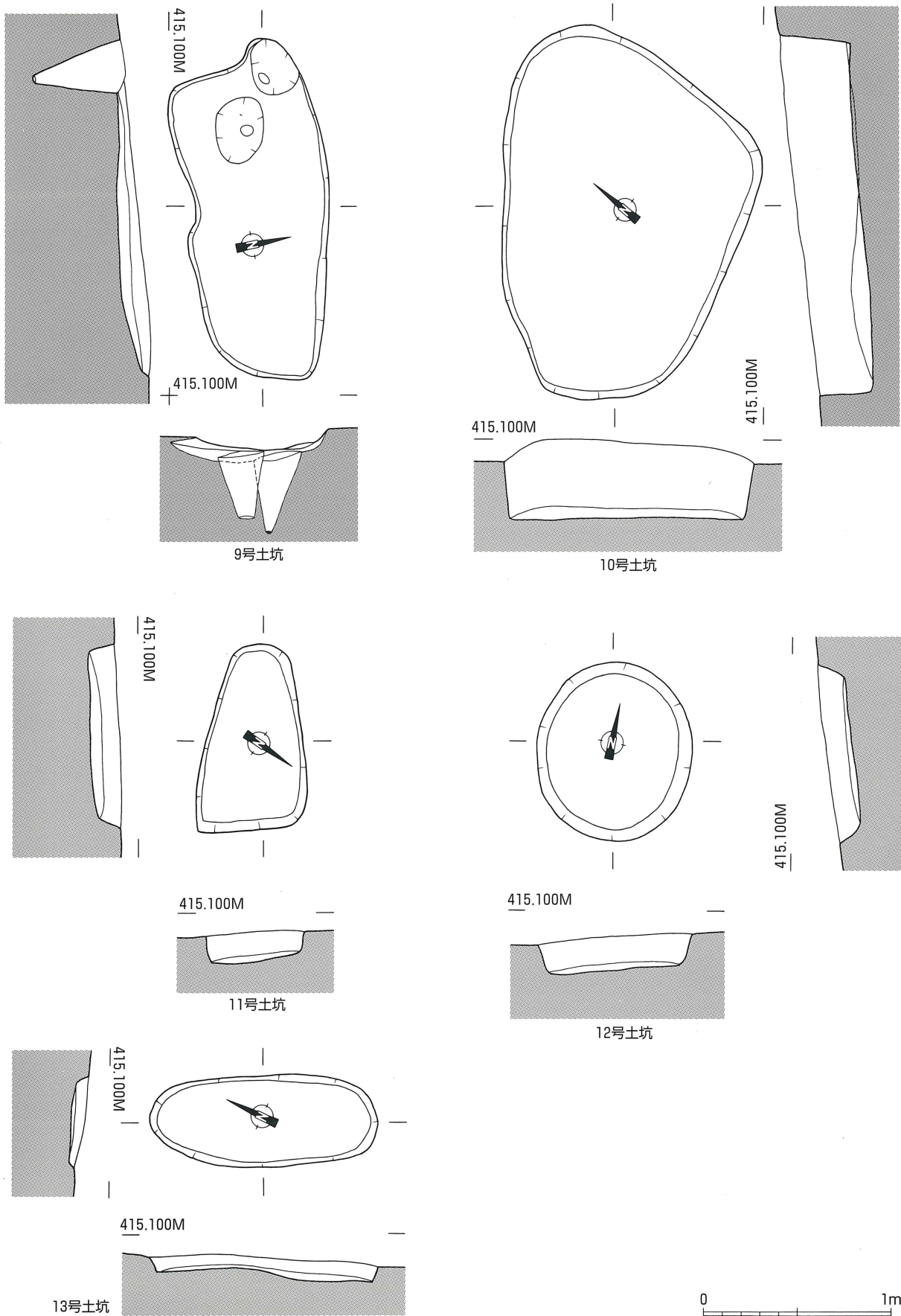
8号土坑



7号土坑



第56图土坑实测图No2 (S=1/30·6号土坑は1/60)



第57图 土坑实测图No3 (S=1/30)

4. 溝状遺構

B地区から4条、C地区から1条の合計5条の溝状遺構が検出された。全体的に、溝内部からの出土遺物は少なく、時期および性格については不明な点が多い。

1号溝（第58図）

B地区の平坦部が切れて斜面へ移行する地点に位置し、西側から南側にかけて標高約414m付近に沿うように検出された。規模は全長約35m、幅約2～3m、検出面からの深さは約50cmを測り、西側は調査区外へ伸びるようであり、南側は削平のためか途中で切れている。断面はU字状を呈し、溝内には平坦部から流れ込むように覆土が堆積していた。溝内からの遺物はほとんどなく、しかも少量で小片であるが、唯一底面付近より須恵器（甕）の破片が1点出土した。特徴より判断すると8世紀前半～中頃の所産と思われる。この遺物のみで1号溝の時期を決定するにはやや問題があると思われるが、他に時期を決定する遺物がないため頼らざるを得ない。したがって、1号溝の時期を8世紀前半～中頃に比定できよう。性格については住居跡の時期とはほぼ一致することから、集落を構成する施設の一部の可能性を指摘しておきたい。

出土遺物（第58図）

須恵器の甕の頸部から口縁部にかけての破片であり、復元口径は19.0cmを測る。頸部から直線的に屈曲し、口縁端部は水平な面を持っている。外面は暗灰色・内面は灰白色を呈し、胎土に若干砂粒子を含む。焼成は良好である。

2号溝（第58図）

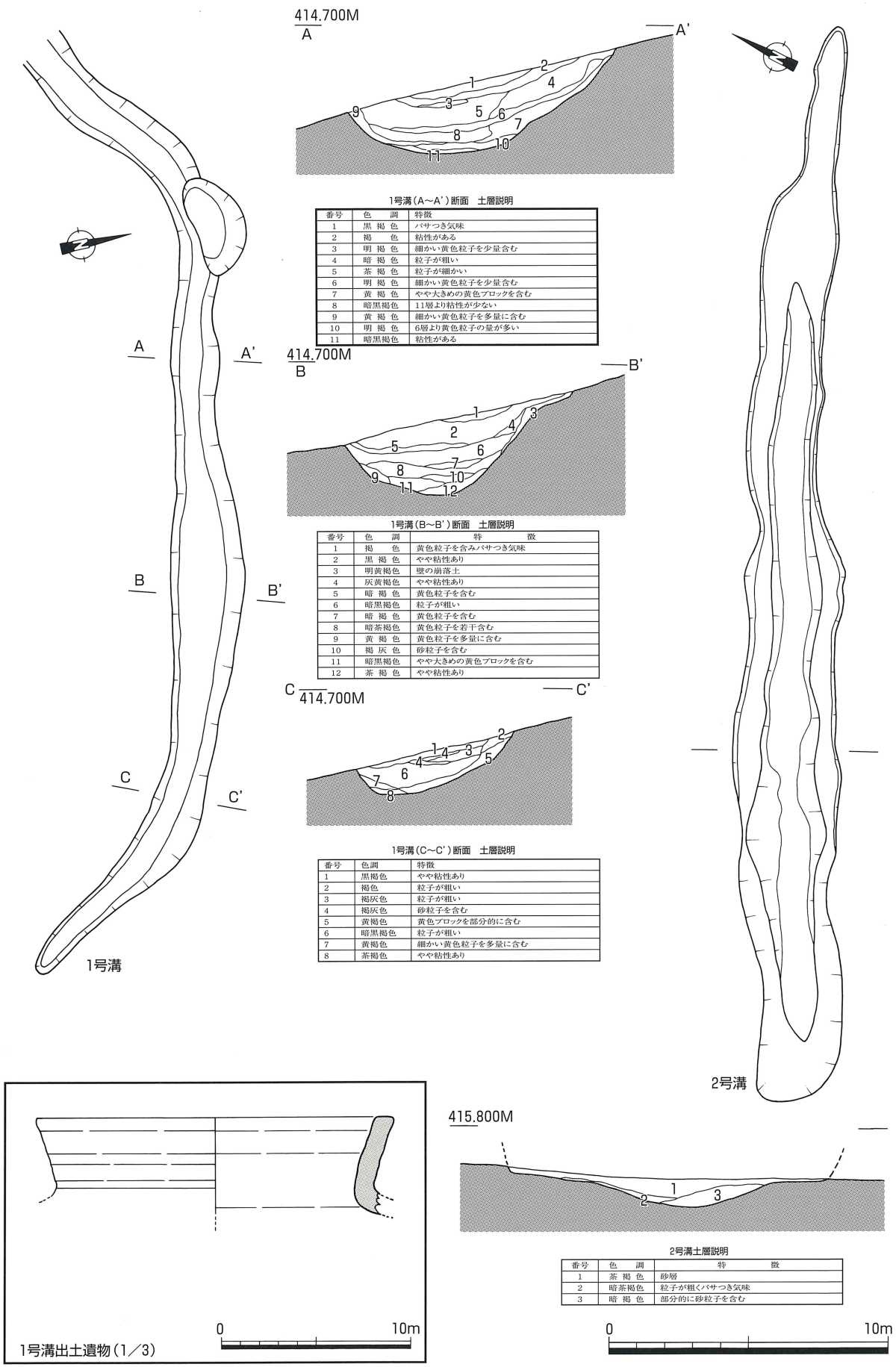
B地区の平坦部で遺構検出をする際に、表土に近い面に砂を含む茶褐色土の覆土をもつプランが部分的に検出された。初めは単なる攪乱として扱ったが、住居跡などを検出した面まで掘り下げた時点で、溝状のプランを呈したので、一応精査することにした。東側部分で6号土坑の一部を切っており、規模は全長約38m、幅約2.5～3.5mを測る。最終検出面からの深さは約30cmを残すが、実際はそれ以上と思われる。中央部分が一段深くなっており、遺物は覆土から磁器の細片が少量出土している。図示不可能であるが、近世以降のものと思われ、近世より古い土器片は見られない。本遺構の時期は検出状況および出土遺物から判断すると、近世以降であると思われる。性格については不明である。

3号溝・4号溝（第59図）

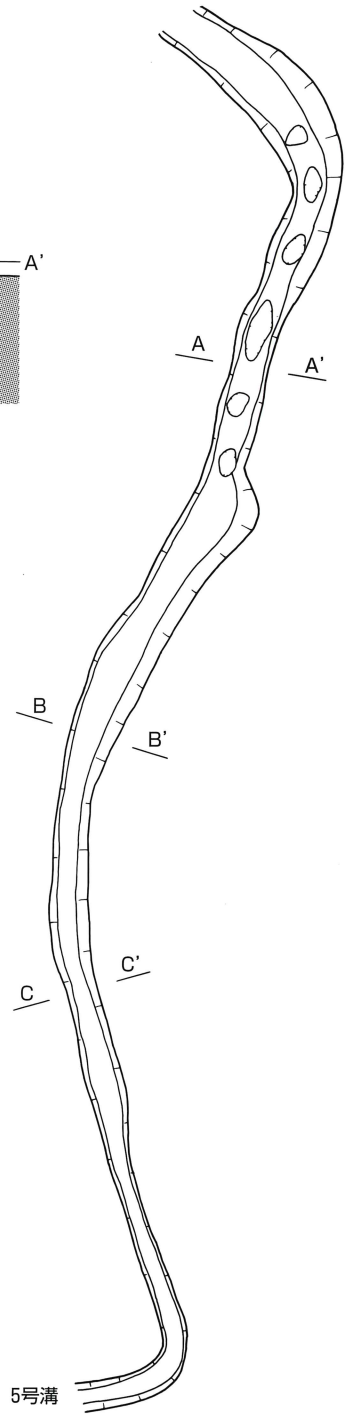
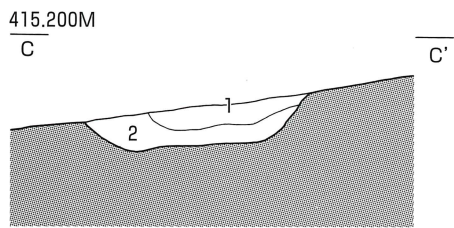
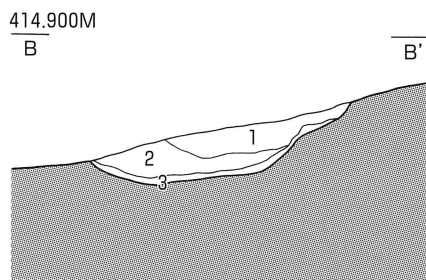
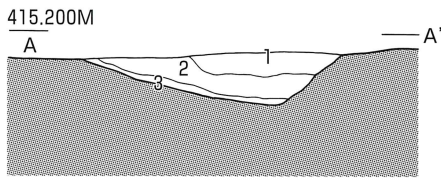
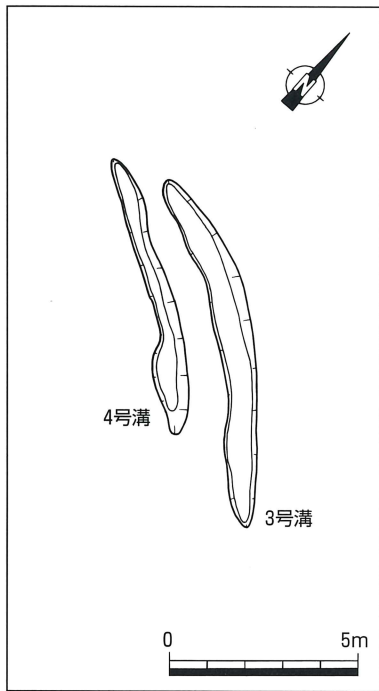
B地区に位置し、1号溝の南側で検出された。規模は3号溝が全長約9m、幅約1m、検出面からの深さ約20cmを測り、4号溝は全長約7.5m、幅約50cm、検出面からの深さ約10cmを測る。いずれも浅く、遺物は全く検出されなかった。本遺構の時期および性格については不明である。

5号溝（第59図）

C地区の平坦部が切れて斜面へ移行する地点に位置し、西側から南側にかけて標高約415m付近に沿うように検出された。規模は全長約55m、幅約2m、検出面からの深さは約40cmを測る。西側は調査区外へ伸びるようであり、南側も調査区外へ伸び、斜面側に落ち込むようである。断面は蒲鉾状を呈し、溝内には平坦部から流れ込むように覆土が堆積していた。溝の西側付近には小石を塚状に積み上げたものが6ヶ所で検出されたが、かなり浮いた状態であり、溝に伴うものではないと判断した。溝内からの遺物はほとんどなく本遺構の時期を決定する積極的な資料に欠ける。しかし、1号溝と地形上極めて似かよった場所に掘られていることなど、1号溝からの続きの可能性が指摘できる。ただ、C地区では8世紀代の遺構などは検出されておらず、集落全体から考えると、この溝の内側は空白エリアになることになる。



第58図 溝状遺構実測図No1 (S=遺構は1/200、土層は1/60)



番号	色調	特徴
1	黒褐色	粘性がなくバサつき気味
2	明褐色	ローム粒子を斑状に含む
3	黄褐色	バサつき気味のローム



第59図 溝状遺構実測図No2 (S=3, 4溝1/200・5号溝1/300・土層1/40)

5. 集石遺構

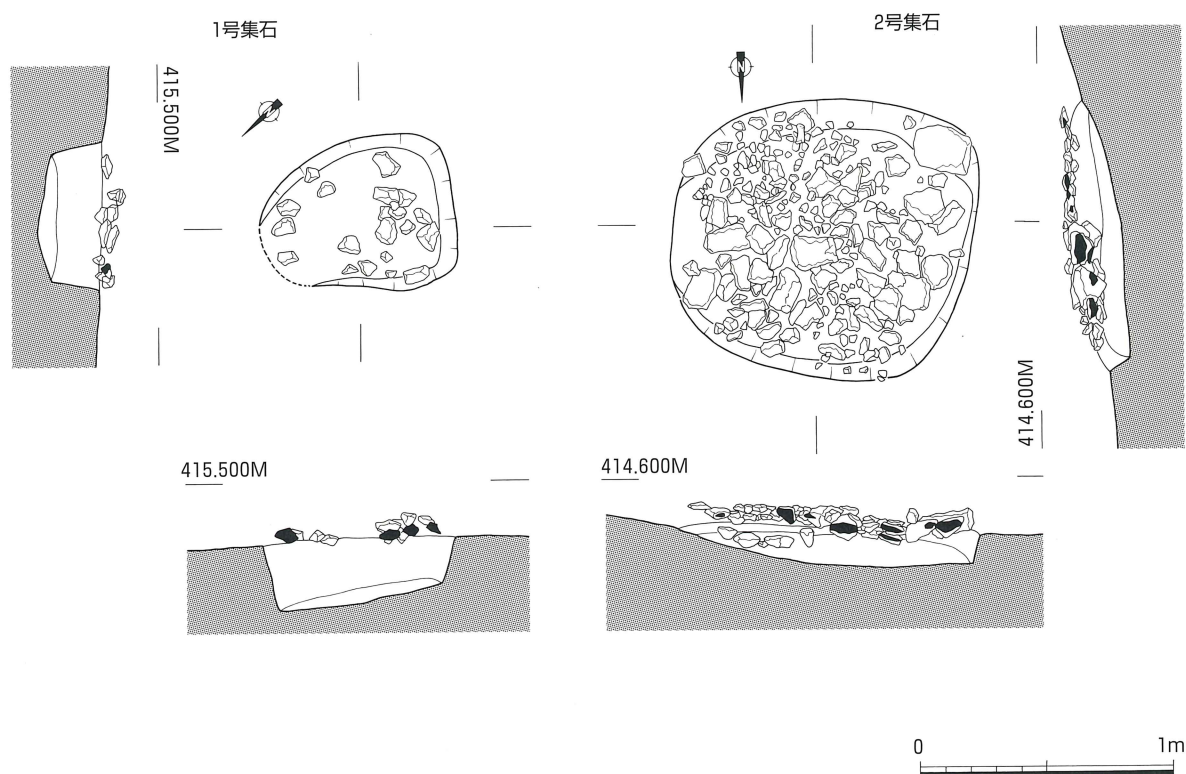
C地区の遺構を検出する際に、西側の緩やかな斜面で礫や小石が集中する集石状の遺構が2箇所で見出された。以下、簡単な説明を加える。

1号集石（第60図）

西側のやや中央よりの標高415m付近に位置する。5cm×10cm大の小石が20個ほど残っており、その中には被熱し赤変した焼石が数個見られた。また、楕円形の掘り方が検出された。規模は長径0.8m×短径0.6m、検出面からの深さ約30cmを測る。小石は掘り方の内部にはなく、上部のみで見られる。遺物は全く出土しておらず、周辺からの表採遺物もなく、遺構の時期を決定することはできない。

2号集石（第60図）

西側端部の標高414m付近に位置する。20cm前後のやや大きい石と5cm前後の小礫とで構成されている。全体的に扁平なものが多く、被熱したものは全くない。周辺部に大きめの石を、中心部付近に小礫を配置しているように思われる。1号集石同様に楕円形の掘り方が検出された。規模は長径1.3m×短径1.2m、検出面からの深さ約12cmを測り、底面は皿状を呈する。覆土は粘性のない暗黄褐色土が堆積していた。1号集石同様、遺物は全く出土しておらず、周辺からの表採遺物もなく、遺構の時期を決定することはできない。



第60図 集石遺構実測図 (S=1/30)

6. 包含層出土遺物

(1) 縄文時代の遺物

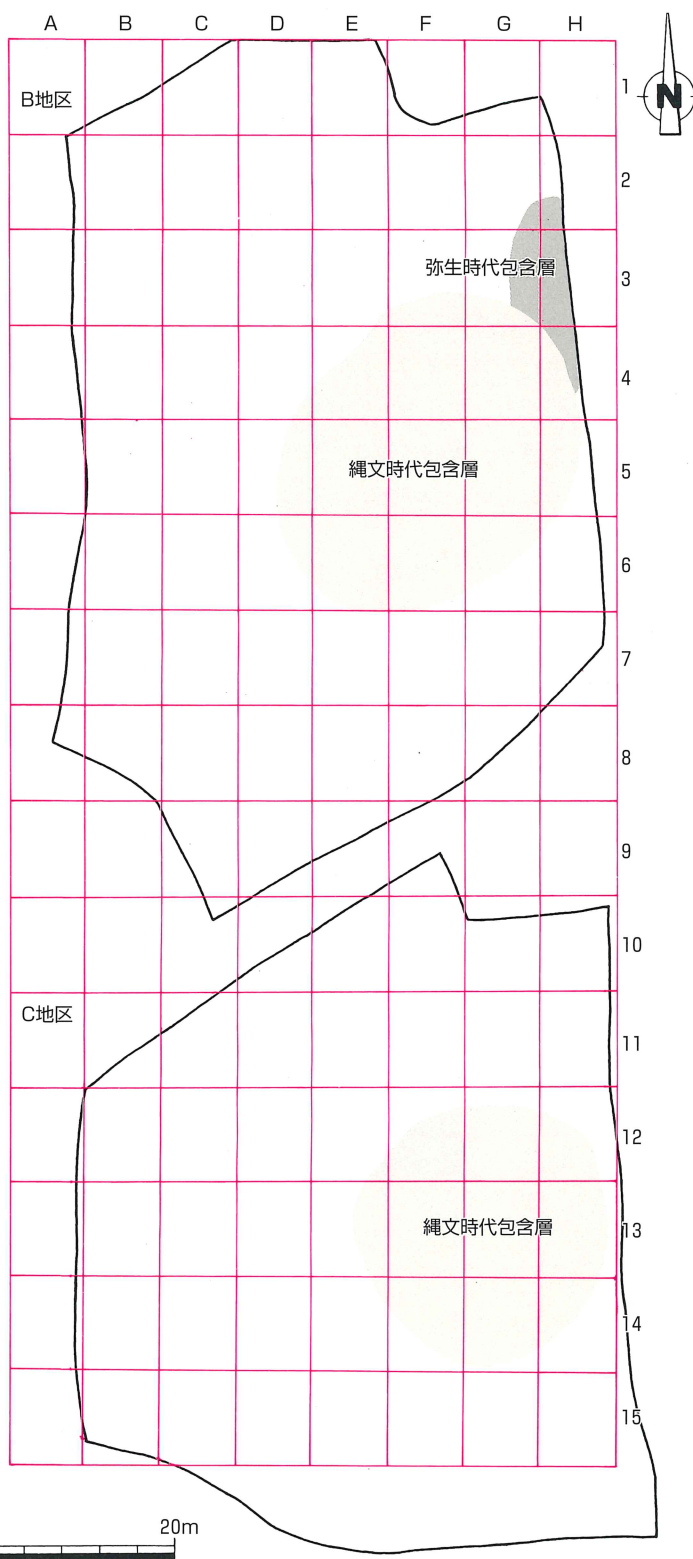
縄文時代の遺物はB・C地区のそれぞれで確認された包含層中より出土しているが、その他、遺構検出時や住居跡・土坑・溝などの覆土からも出土している。後期・晩期の土器片や扁平打製石斧・石鏃などの石器類が中心である。出土状況からすると、包含層内の遺物は後期・晩期のものが混在しており、層位的に両者を明確に区別することはできない。以下、B・C地区の調査状況と図示可能な出土遺物について説明を加えたい。

B地区

試掘の時に、E-4区、F-4区、G-4区に設定したトレンチから扁平打製石斧や石鏃が出土している。また、住居跡などの遺構検出の際にも縄文土器片・扁平打製石斧・石鏃などの散在が認められたことから縄文時代の包含層の存在がある程度予測された。そこで、全体の調査がある程度終了したところで、数カ所の小調査区を掘り下げてみることにした。基本的には後世の遺構などにより攪乱を受けているものと思われるが、遺物の分布密度がある程度濃く、他に比べて黒色土および黒褐色土の堆積が厚く比較的攪乱の少ないE-5・6区、F-4・5・6区、G-4・5区、H-5区を調査の対象とした。これらの地区では、包含層と思われる茶褐色土中より、扁平打製石斧、蛇紋岩製の磨製石斧、石鏃、石匙、軟玉製の管玉をはじめ、後期の磨消縄文土器片や晩期の刻目突帯文土器片などが出土した。明確な遺構と言えるものは検出されなかったが、E-6区とG-4・5区の2カ所を中心にする付近で深さ約15~20cmほどの凹地状になっている部分が検出された。遺物とピットの分布状況がこの付近に特に集中することから、生活遺構の可能性はあるが、明確な判断は下せない。

C地区

縄文包含層と思われる茶褐色土の残存状況は非常に悪く、G-14区を中心にする付近に薄く見られる程度である。ここからの遺物は、石鏃・凹石・剥片などが僅かに散見されるにすぎない。また、表土中からは弥生時代~近世の遺物に混じって、後期の磨消縄文土器片・扁平打製石斧・石鏃などが数点出土している。このような出土状況からす



第61図 包含層位置図

ると、後世の開発などによりかなりの攪乱を受け、大部分の遺物は原位置を保っていないと判断できる。

出土遺物

土 器 (第63図・第64図)

1～7、9はB地区の調査対象区より出土した刻目突帯文土器である。口縁部よりやや下がった所に一条の刻目突帯があり、内外面には横方向の条痕調整を施すという共通性が見られる。口縁端部の形態は、平坦なもの(4)もあるが、尖り気味のものがほとんどである。刻目の形状は、楕円形(1・5・6・7)、長楕円形で幅広(4)、爪形(2・3)とバラエティに富んでいる。施文具としては、指・ヘラおよび棒状工具などが考えられる。大部分が口縁部のみの破片であるが、比較的破片が大きい(7)や胴部の破片である(9)から判断すると、胴部で屈曲する深鉢形を呈するようである。屈曲部には刻目を施さず、口縁部にかけての屈曲度は弱い。これらの特徴は、挾間町下黒野遺跡出土の遺物に類似しており、晩期終末(弥生時代早期)に位置付けられるものである。その他、表採遺物の中には、屈曲部にも刻目を施す二条刻目突帯の深鉢(8)や赤色顔料を塗布しているヘラ研磨調整の浅鉢(24)なども見られる。10～13、19は調査対象区出土の後期土器である。

(10～12)は口縁部付近に2～3本の沈線を付け、その間に磨消縄文を施すもので後期後葉の西平式である。

(13)は磨消縄文が見られず、羽状文を施していることから三万田式の範疇に属するものであろう。(19)は頸部付近からやや膨らみ、口縁部は若干内湾している。口縁部には巻貝による擬縄文の文様帯があり、深鉢形を呈する。その他、表採遺物として、口唇部に凹線文・沈線文・縄文による文様帯が巡っているもの(14・15・16)がある。(16)は口縁部と胴部上半に沈線による文様帯がある。磨消縄文は見られず、「つ」の字状の退化した文様である。(17)とは同一個体である。後期中葉の所産であろう。18、25は外面に条痕調整が施されている。後期・晩期の粗製深鉢の破片か。20～23は外面に縄文が施されているものの細片のため時期は不明である。

石 器 (第65図～第69図)

石 鏃 (1～22)

大部分が表採遺物のため層位が明確でなく、形態的にも同一時期の所産とは言えない。かなりの時期幅を考えなくてはならない。平基式のものではなく、すべて凹基式の基部を呈する。基部の形状は、脚部が長いもの(6・8・9)、挟りが深く鏃形状のもの(7・16・19)、挟りが浅く幅広のもの(20・21)などが見られる。大きさでは、長さ(破損品は推定値)が2cm未満の小型(1～7)、2cm～3cm未満の中型(8～17)、3cm以上の大型(18～22)に大別できる。石材は、姫島産黒曜石が主である。その他、安山岩やサヌカイト製のものも見られる。大型のものにその傾向がある。10・11・12・17はB地区の調査対象区より、縄文時代後期～晩期の土器などととも包含層より出土したものである。特徴としては、中型で均整のとれた二等辺三角形(正三角形に近い)を呈し、基部の挟りは比較的浅く幅が広い。これら4点以外は、表採遺物であり、時期を特定することはできない。近接する二日市洞穴出土の石鏃と比較すると、小型のものや鏃形を呈するものは早期頃の可能性がある。22の残存長8cmを測る長身のサヌカイト製の石鏃(石槍状)は側縁部に細かい剝離調整が施され、胴部は広がらずに直線的に基部にいたるようである。形態的には早期頃の所産であろうか。

石 匙 (23～26)

縦型タイプ(23)と横型タイプ(24～26)Iに区別できる。23～25は明瞭なつまみ部分が付き、紐状を呈している。刃部には細かい剝離調整が施されている。石材は安山岩又は、サヌカイト製である。24・25はB地区の調査対象区包含層内(F-6・G-5)出土であり、縄文時代後期～晩期頃の所産であると思われる。その他は、表採遺物であるが、同時期のものであろう。

管 玉 (27)

緑色をする軟玉製の管玉である。長さ4.5cm、幅0.8cm、重さ4.6gを測り、両方端部はやや丸みを持つ。穿孔は両方向からなされ、中央部から若干ずれた所に1.3×0.3cmを測る長楕円形の臍があり、その部分も両方向

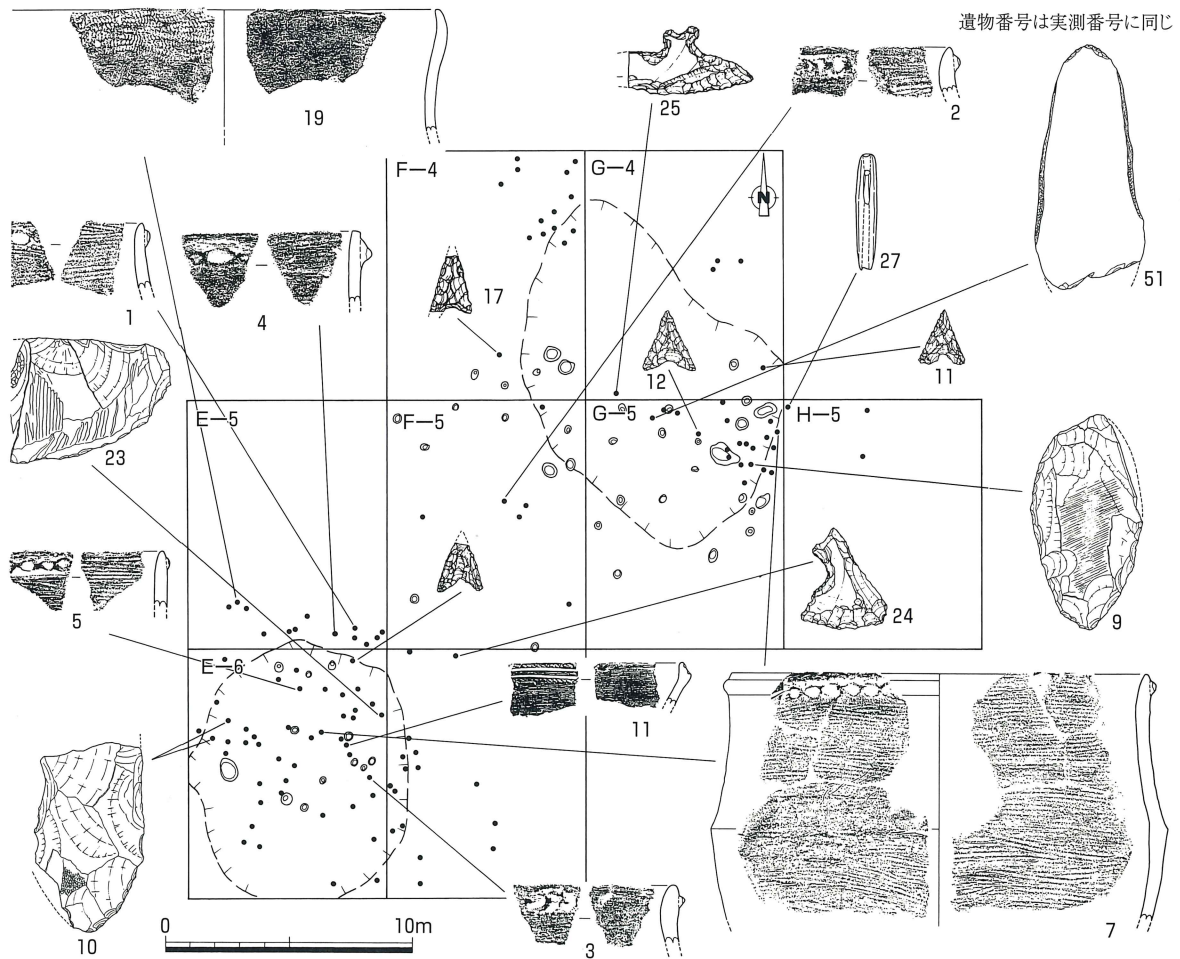
に貫通している。出土地点がH-5区の縄文時代後期・晩期包含層（茶褐色土）中であることからこの時期の所産として妥当であろう。県内の他の遺跡（宇佐市尾畑遺跡・緒方町大石遺跡・挾間町北原遺跡など）からも後期～晩期の緑色軟玉製管玉が出土している。特に、本遺跡のように臍部があるものは大石遺跡出土のものに類似品が見られる。

扁平打製石斧（28～49）

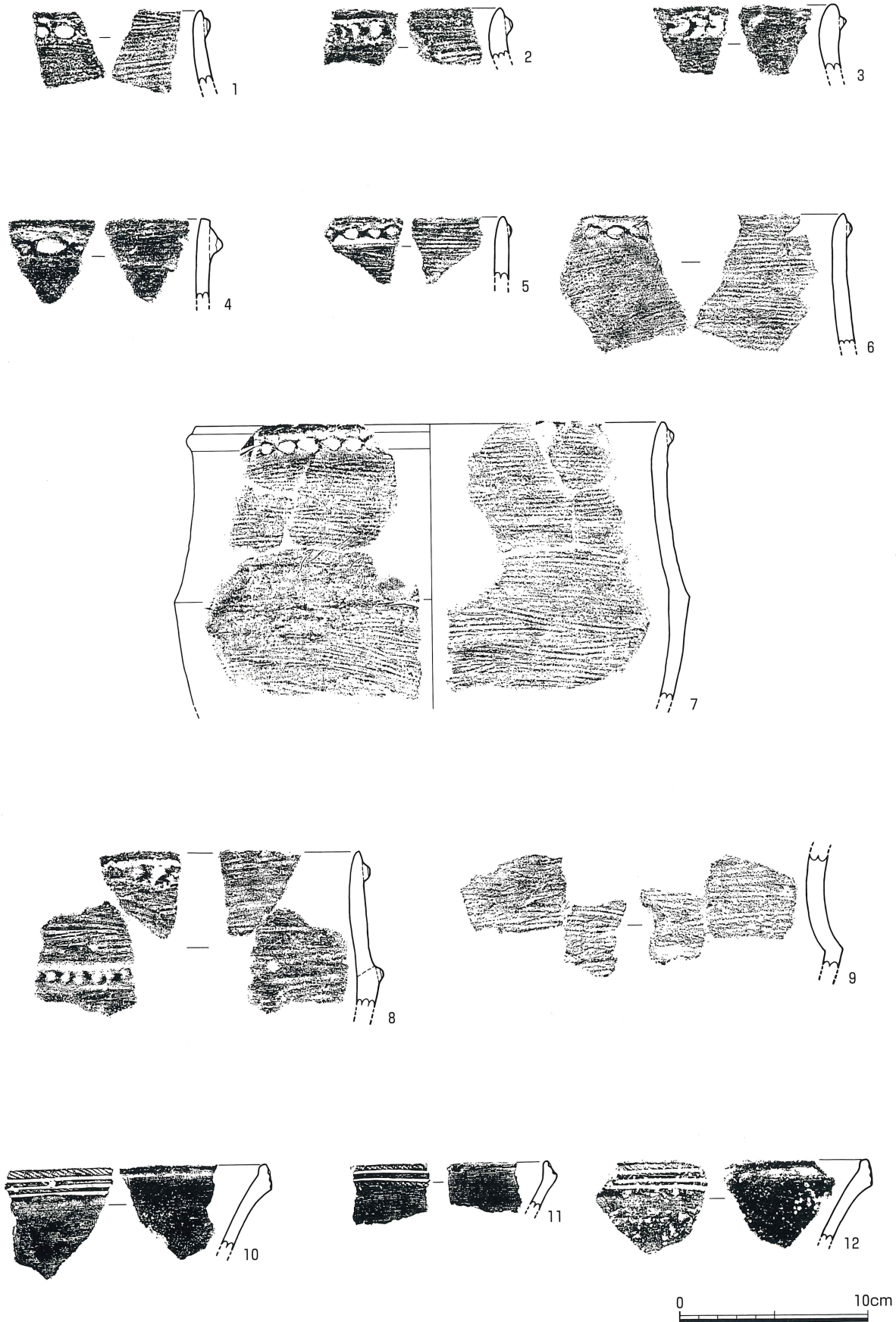
石材はデイサイトおよび安山岩製がほとんどである。完形品が少なく破損品が多いため判断つけ難いものもあるが、形態的にはバチ形（刃部にかけて広がるもの）・短冊形（側縁部が直線的なもの）・長楕円形（中間部が最大幅になるもの）に大別できる。バチ形は基部が直線的なもの（28～30）と、基部が尖るもの（31）に分けられる。32～34は短冊形のものである。長楕円形は基部・刃部が尖るもの（35～39）と半円形のもの（小型40～44・大型45～49）に分けられる。線条痕の観察できるものがかなりある。出土状態は調査対象区の包含層中のものは少なく、大部分が表採されたものであるが、縄文時代後期・晩期頃の所産であろう。

その他（50～53）

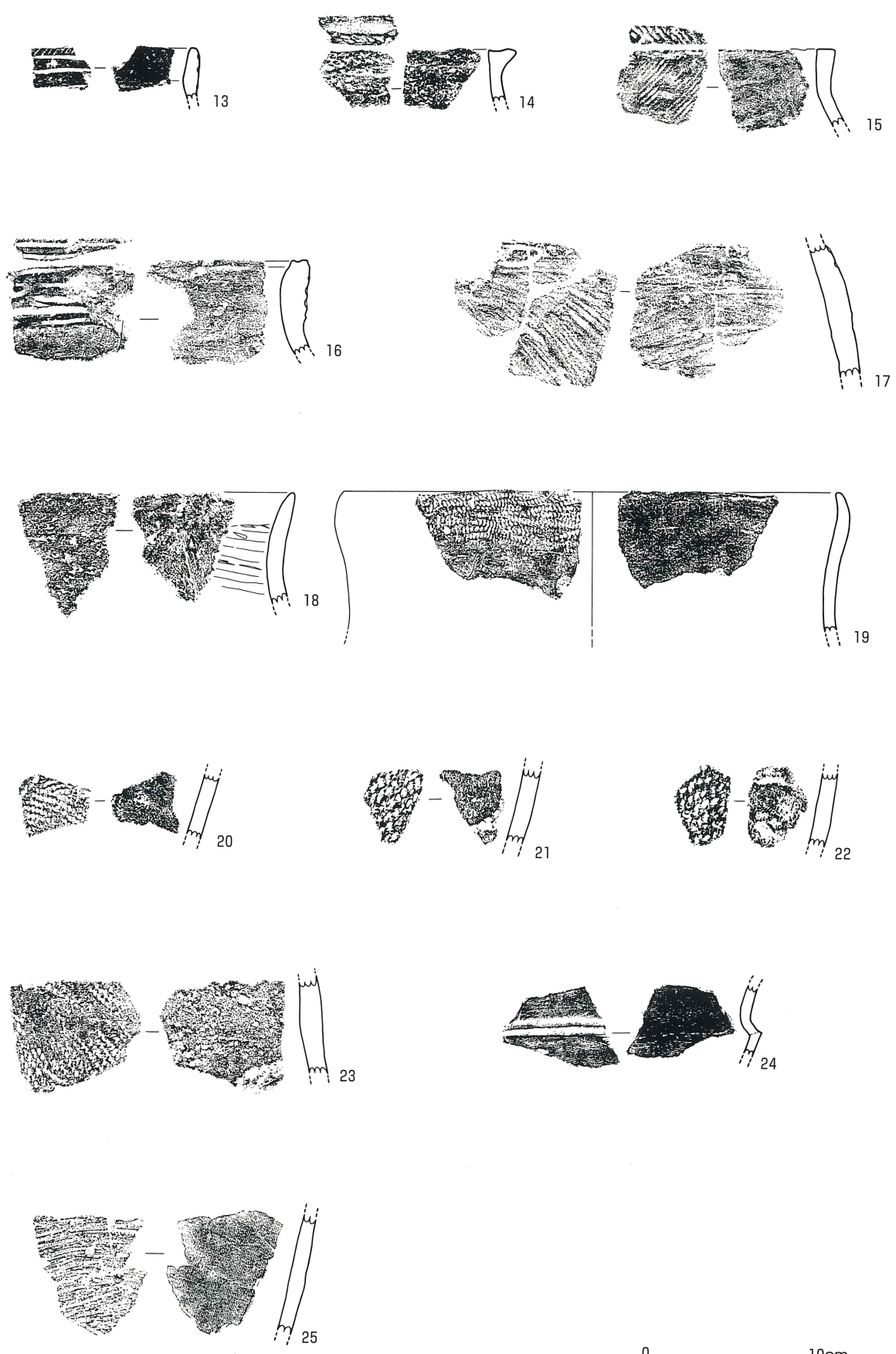
50は輝石安山岩製の横刃型石器である。51は蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部付近は欠損しているが、丁寧な作りであり、表面は磨かれている。側縁部には擦痕があり、装着痕の可能性がある。横刃型石器がE-6区、磨製石斧がG-5区の凹地内から出土しており、縄文時代後期～晩期の所産と考えてよいであろう。52は角閃安山岩製の凹石である。表・裏の中央部には凹面が見られる。53は角閃安山岩製の磨石である。いずれもC地区の表採遺物である。



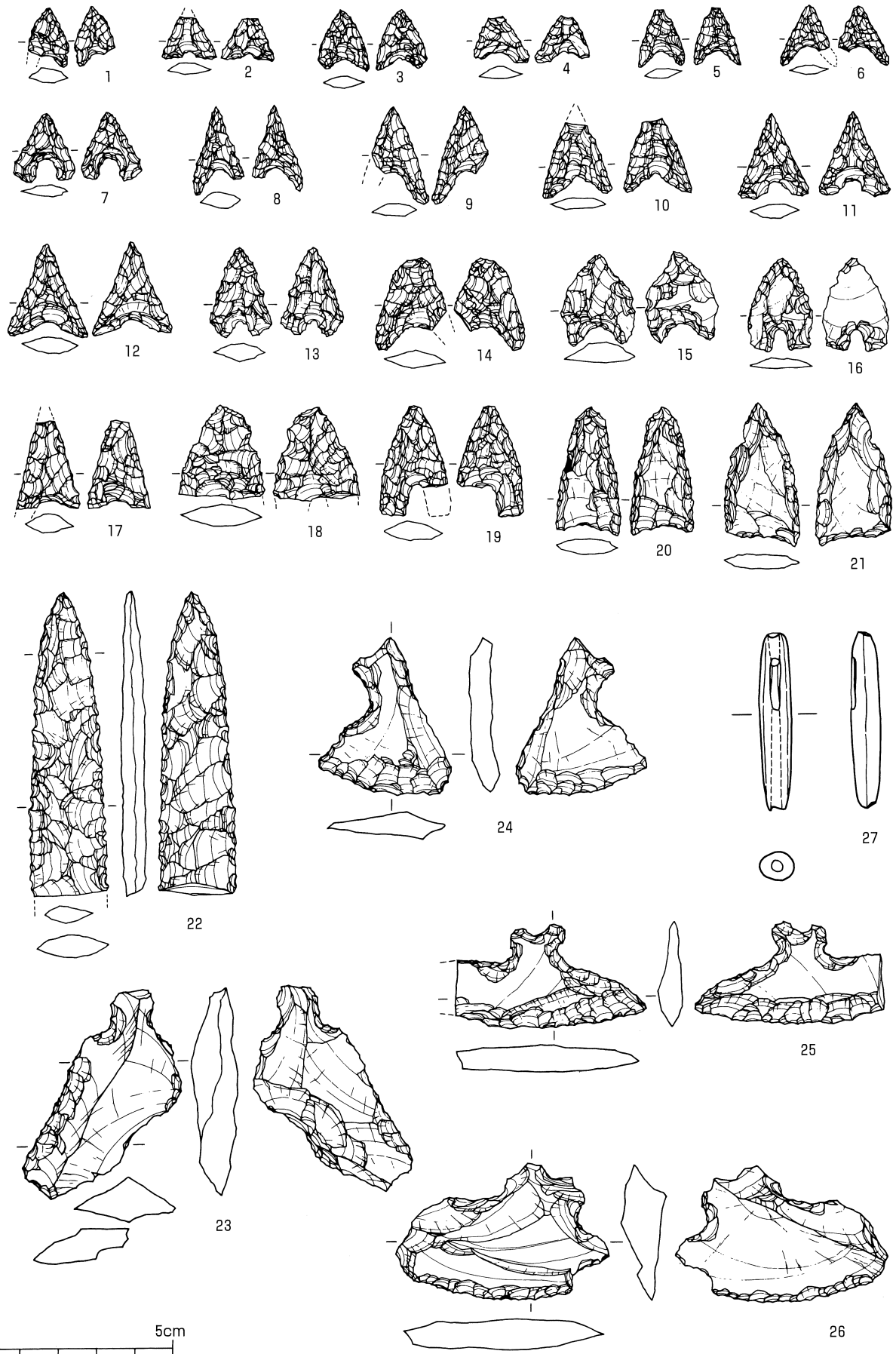
第62図 縄文時代B地区出土遺物位置図（遺物は縮尺不同）



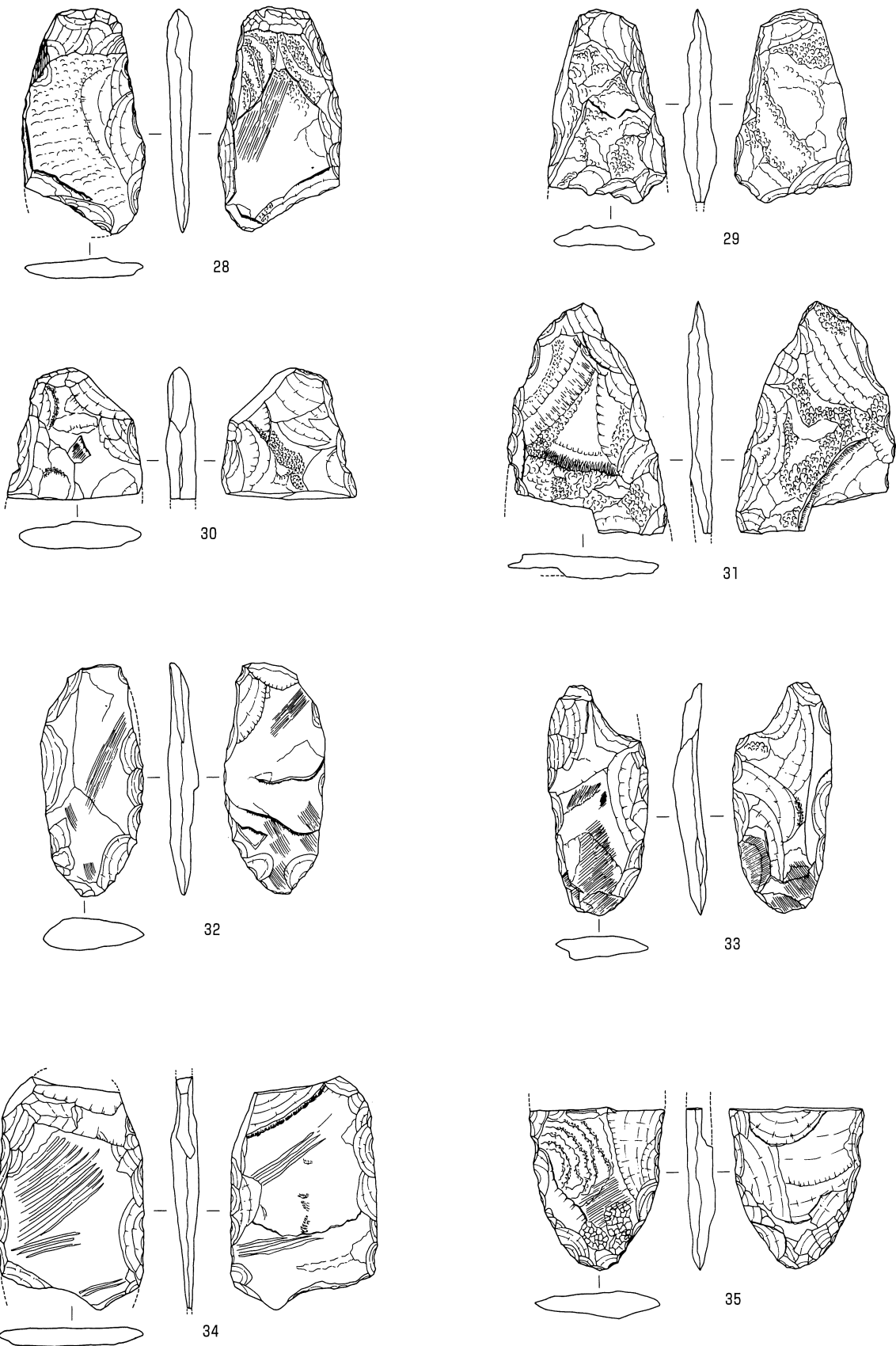
第63図 縄文時代遺物実測図土器No1 (S=1/3)



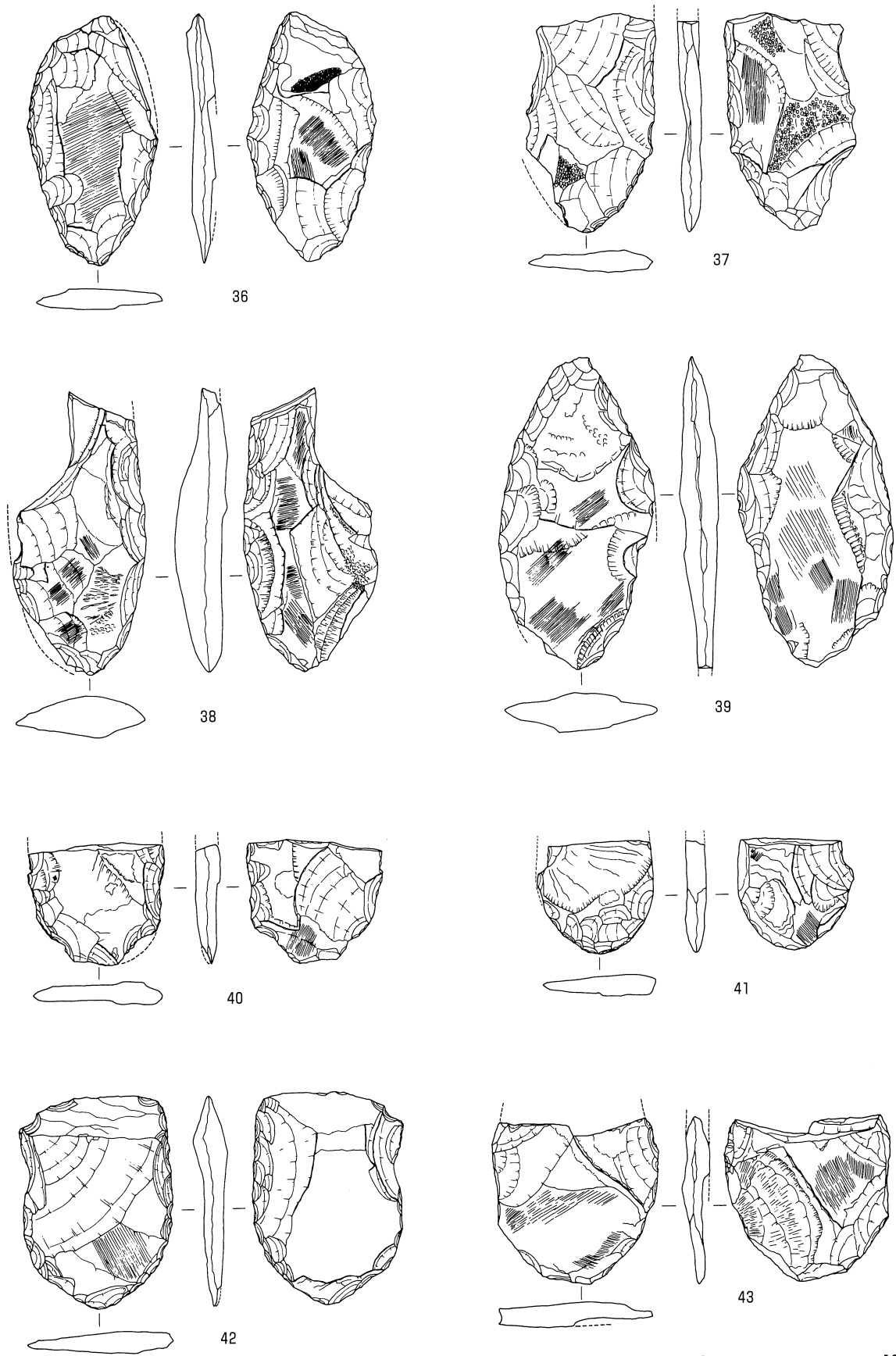
第64図 縄文時代遺物実測図土器No2 (S=1/3)



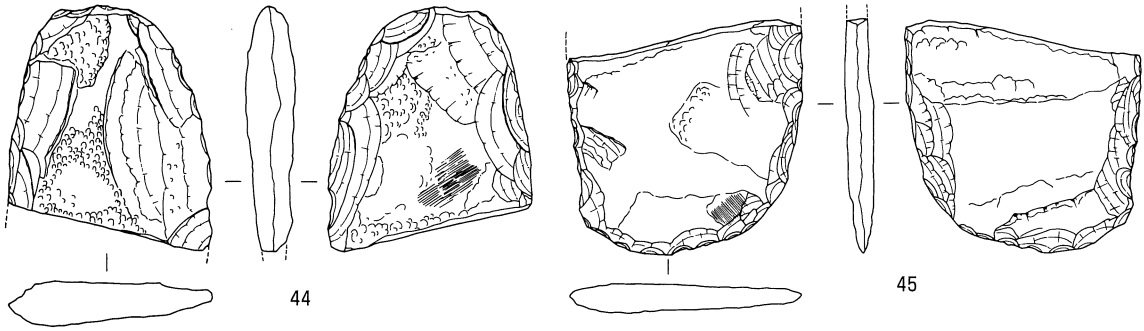
第65図 縄文時代遺物実測図石器No1 (S=2/3)



第66図 縄文時代遺物実測図石器No2 (S=1/3)

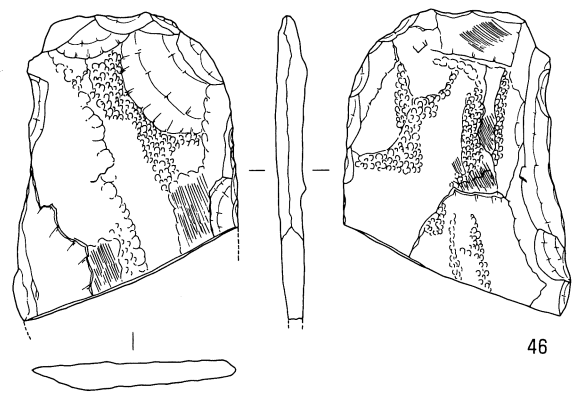


第67圖 縄文時代遺物実測図石器No3(S=1/3)

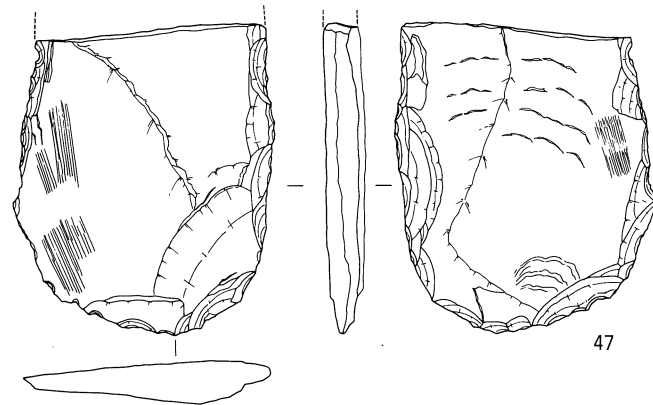


44

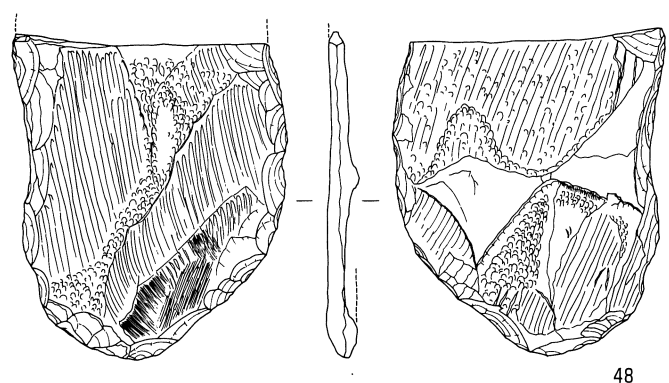
45



46

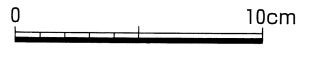


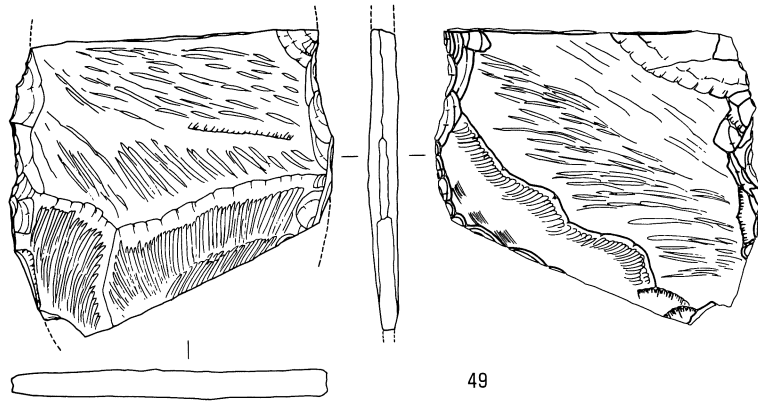
47



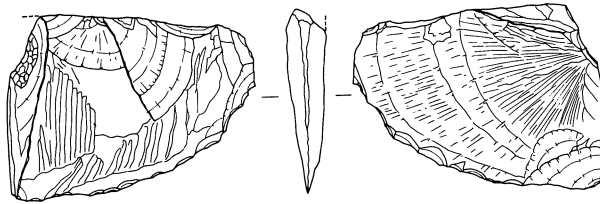
48

第68図 縄文時代遺物実測図石器No4 (S=1/3)

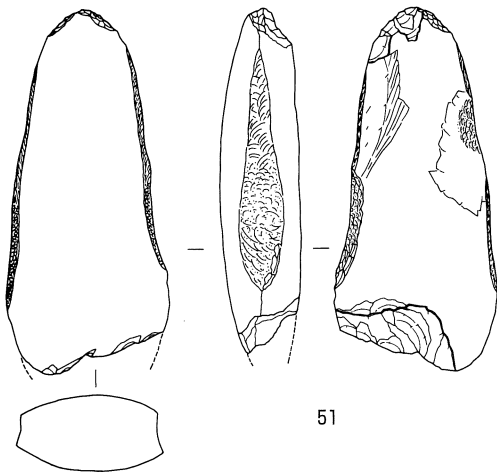




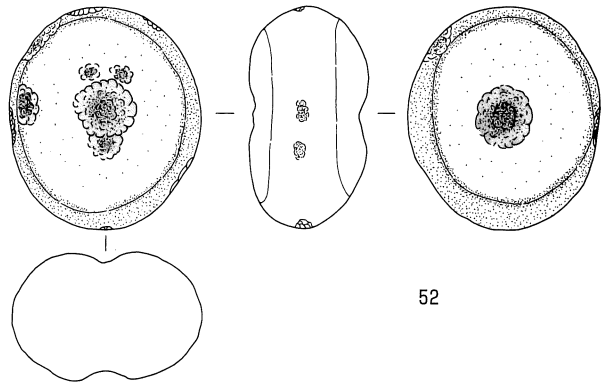
49



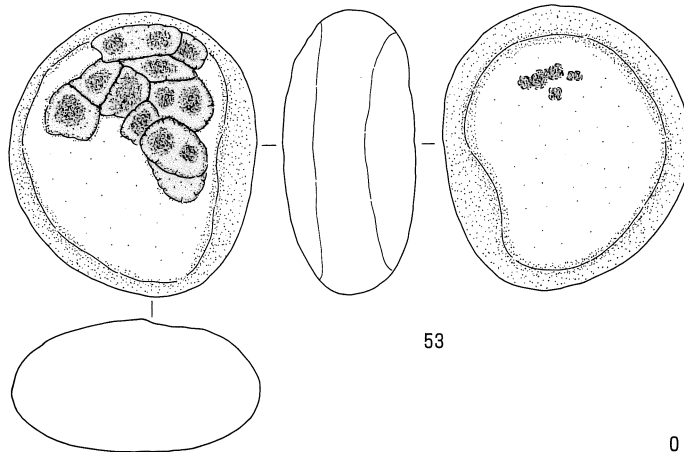
50



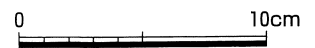
51



52



53



第69図 縄文時代遺物実測図石器No5 (S=1/3)

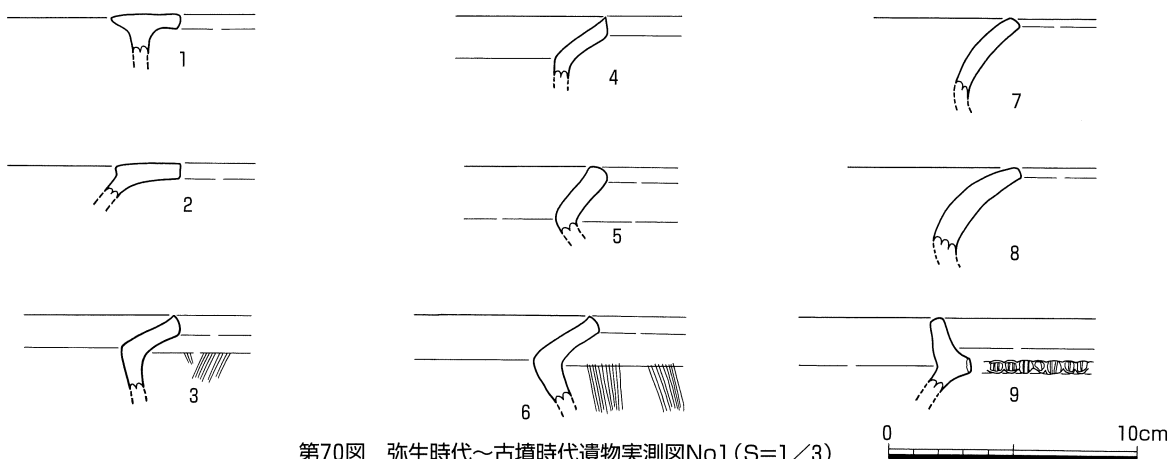
(2) 弥生時代～古墳時代の遺物

ここでは、B・C地区で遺構に伴わない弥生時代～古墳時代の遺物を一括して扱う。量的にはあまり多くないが遺構検出時や住居跡などの遺構の覆土内、包含層内などから出土した遺物および表採遺物の中から図示可能なものを紹介する。しかし、大部分が破片のため明確な時期を決めるのは難しい。弥生時代の遺物包含層はH-3・H-4区を中心にして部分的に見られる程度である。大半が表採品で、しかも遺構に伴わないため何とも言えないが、弥生時代中期以前の遺物は少なく、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が多いようである。特に、H-3・4区の包含層の確認された付近で出土した遺物の中にその傾向が強い。

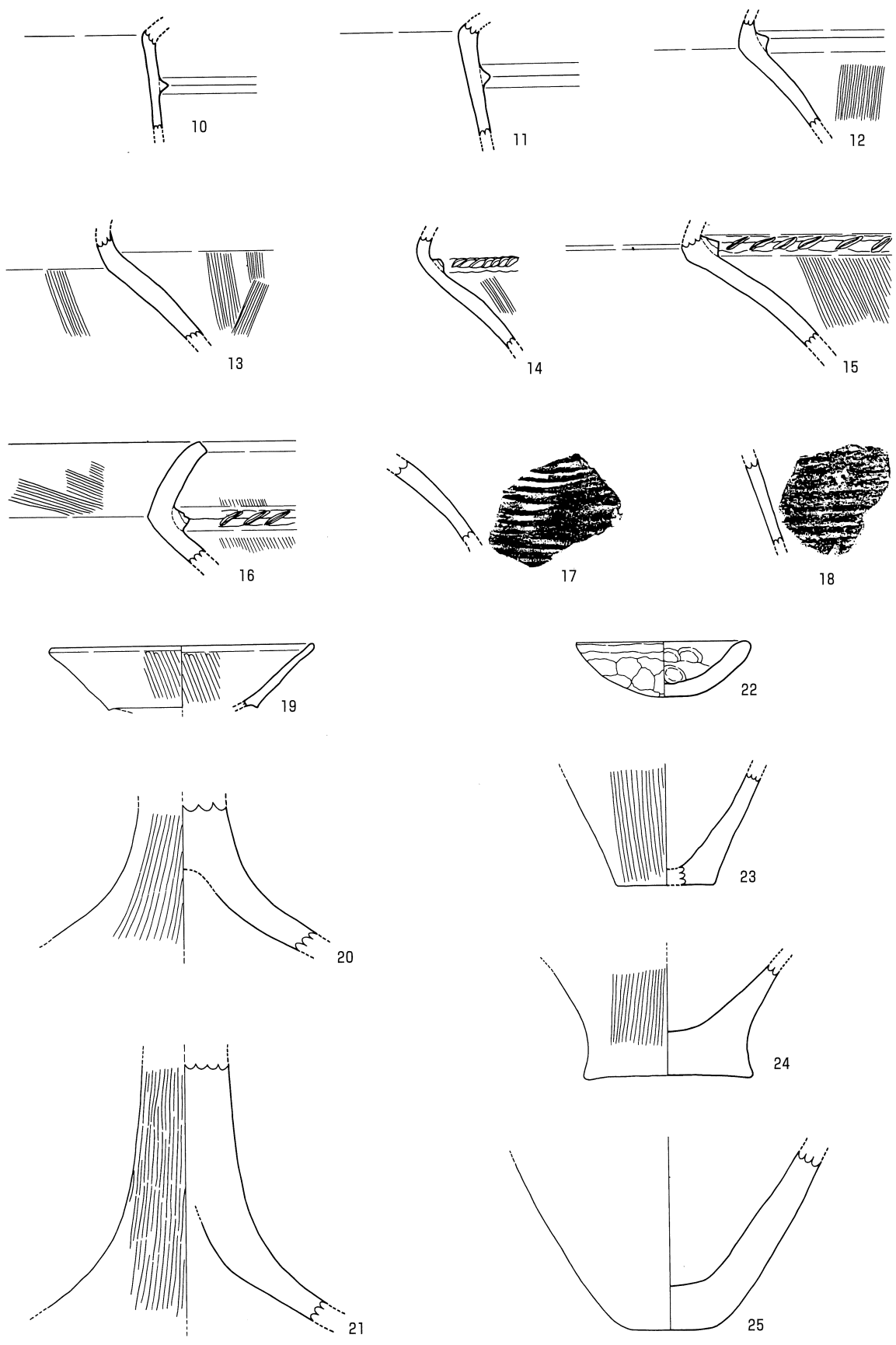
出土遺物

土器 (第70図・第71図)

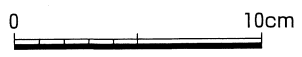
1は甕の、2は高杯の口縁部の破片である。それぞれ「T」字状および鋤先状を呈しており、弥生時代中期頃の特徴が見られる。3～6は甕の口縁部付近の破片である。(3)、(4)、(6)は口縁部が「く」字状に強く屈曲し、端部がやや跳ね上がり気味である。弥生時代中期後半の所産であろう。(5)はやや肥厚気味である。細片のため断言はできないが、弥生時代後期後半の所産であろう。7、8は甕の口縁部付近の破片である。開き気味に伸びながら外反し、内外面はヨコナデ調整を施す。(8)は端部がやや細くなる。弥生時代終末から古墳時代初め頃の所産であろう。9は壺の口縁部の破片である。やや直立気味の二重口縁を呈し、屈曲部に刻目が見られる。弥生時代後期後半の所産か。10、11は壺の肩部から胴部にかけての破片である。いずれも肩部下に断面三角形の突帯が一条巡り、内外面ともナデ調整が施されている。弥生時代前期末頃の所産であろう。12～16は壺の肩部付近の破片である。いずれもハケ目調整を施している。(12)の頸部には断面三角形の突帯が一条巡る。弥生時代後期前半の所産であろう。(14)、(15)、(16)は頸部に刻目突帯が一条巡り、内外面ともハケ目調整が施されている。弥生時代終末頃の所産であろう。17、18、は甕の胴部の破片である。内面はハケ目、外面はタタキ目調整が見られ、弥生時代終末から古墳時代初め頃の所産であろう。19は高杯の坏部である。脚部から坏部にかけて明瞭な稜をもって屈曲し、稜が下方に垂れ気味になっている。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。古墳時代前期布留式土器並行期の所産であろう。20、21は高杯の脚部である。裾部にかけてやや開き気味である。(21)の外面にはタテ方向のヘラミガキが施されている。いずれも弥生時代後期の所産であろう。22は小型埴の完形品である。器壁は厚く、口縁部は開き気味である。内面に指頭圧痕のある手捏ね土器である。古墳時代前期頃の所産か。23～25は甕または壺の底部である。(23)は完全な平底を呈する。(24)はハケ目が底部端まで見られず、若干上げ底気味である。いずれも弥生時代中期後半の所産であろう。(25)はやや尖り気味を呈している。弥生時代終末頃の所産か。



第70図 弥生時代～古墳時代遺物実測図No1 (S=1/3)



第71図 弥生時代～古墳時代遺物実測図No2 (S=1/3)



(3) 歴史時代の遺物

ここでは、遺構からの出土ではないが、遺構検出時に住居跡などの周辺や第2層（黒色土）中から出土した歴史時代の遺物の中から図示可能なものを一括して紹介することにする。C地区からの遺物はなく、全てB地区からの出土である。須恵器や土師器は、奈良時代の住居跡と並行する時期のものが大部分を占める。

出土遺物

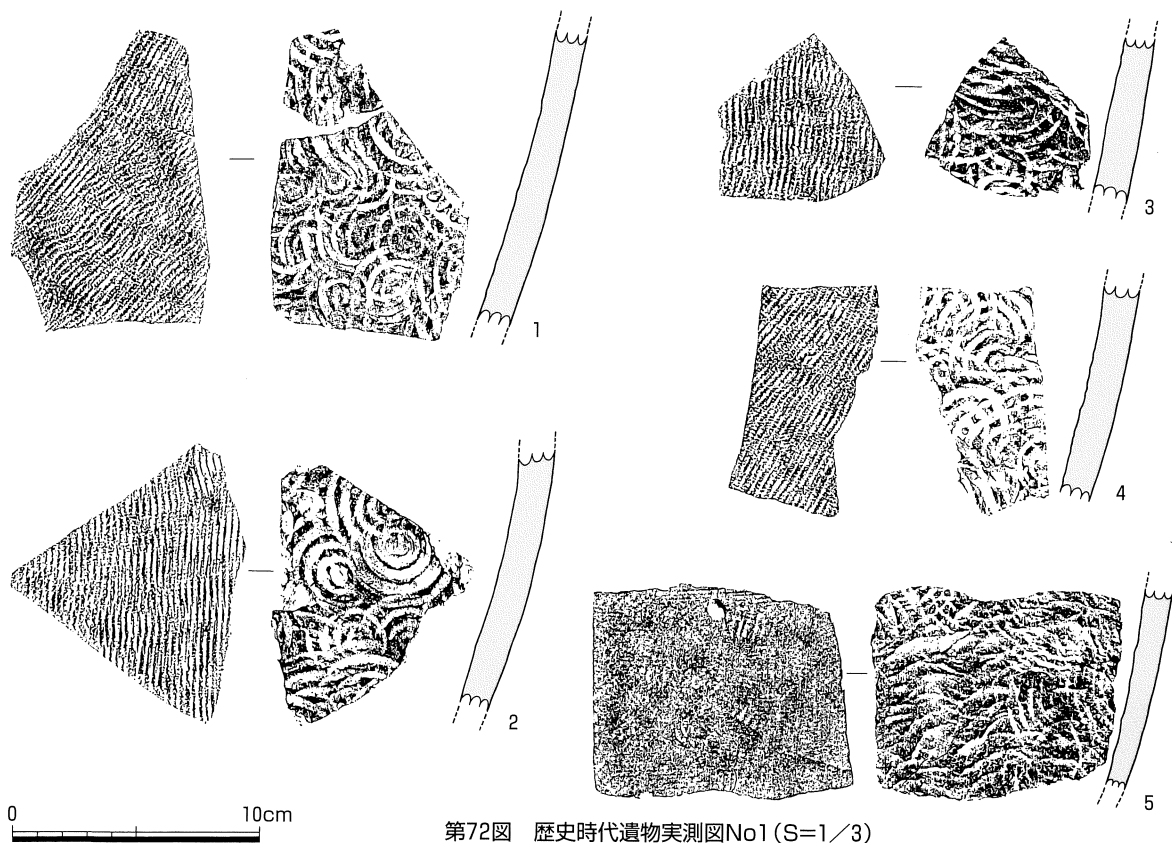
土器（第72図・第73図）

須恵器（1～13）

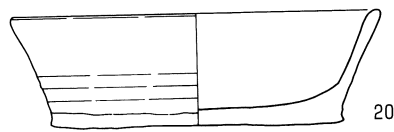
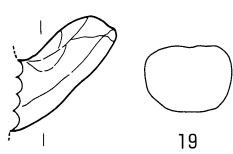
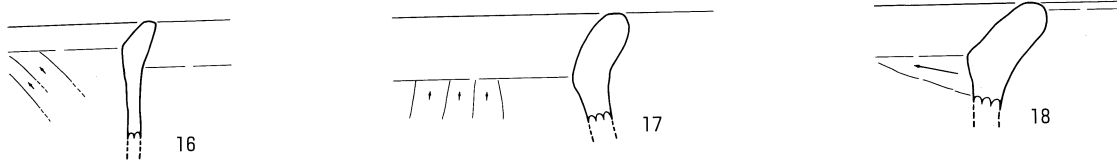
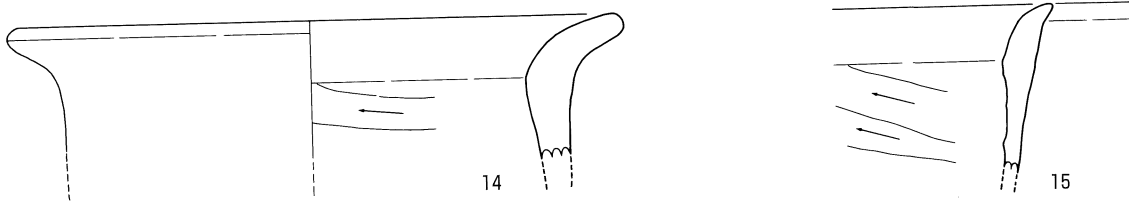
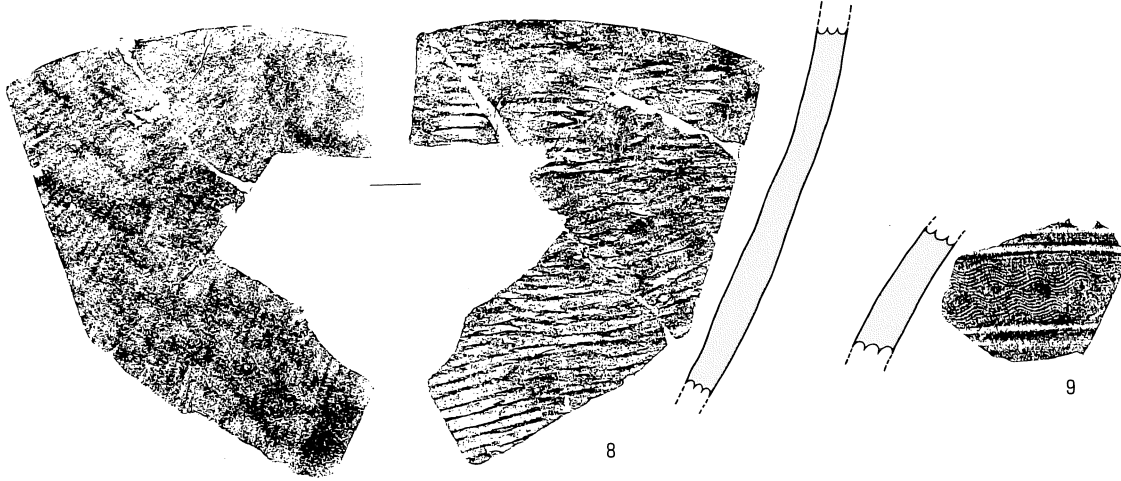
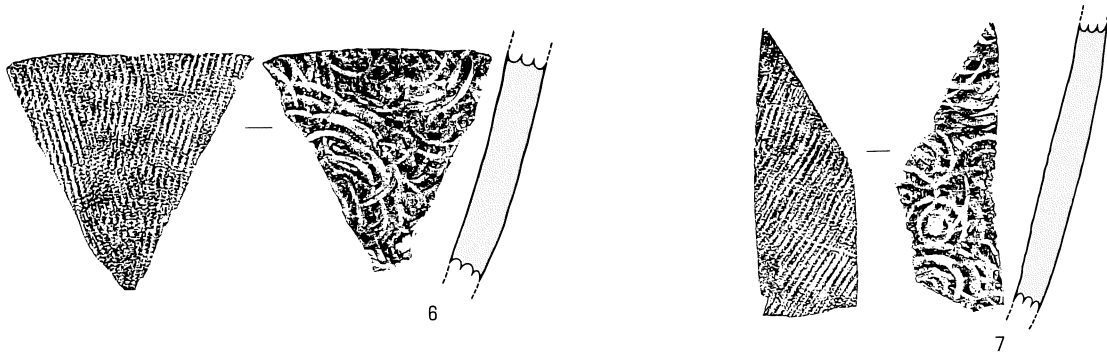
1～8はすべて甕の胴部付近の破片である。平行タタキ（外面）や同心円文タタキ（内面）などが施されている。9は甕の頸部付近の破片である。外面には櫛描波状文が施されている。10は坏蓋の破片である。口縁部付近がほぼ垂直に折れ、やや嘴状を呈するようになり8世紀中頃の特徴を示している。11～13は坏身の底部付近の破片である。いずれも底部と体部の境より内側に0.3～0.4cmの高台がつき、外面には回転ヘラケズリが施されている。8世紀前半～中頃の所産であろう。(13)は底部から体部にかけて屈曲気味に立ち上がるなど(11)・(12)よりやや新相を呈している。

土師器（14～20）

14～18は甕の口縁部付近の破片である。口縁部の形態は伸びながら外反するもの(14)、直立気味に短く外反するもの(15・16)、短く外反するもの(17・18)の3タイプに分けられる。いずれも口縁部は肥厚し、内面（ヘラケズリ）・外面（ナデ）・口縁部内外面（ヨコナデ調整）を施し、胴部は膨らまず底部へ続くという共通点を持っている。住居跡からの出土遺物と類似する特徴であり、同時期のものであろう。19は甗の把手部分の破片である。20は坏身の完形品である。底部には回転ヘラ切りが見られ、体部は開き気味に立ち上がるなど8世紀後半～9世紀代の特徴が見られる。



第72図 歴史時代遺物実測図No1 (S=1/3)



第73図 歴史時代遺物実測図No2 (S=1/3)

第4表 縄文時代遺物(土器) 観察表

角…(角閃石) 長…(長石) 英…(石英)

挿図番号	器種	器形の特徴および文様	器面調整の方法	胎土	色調	出土地点	備考
第63図1	深鉢	口縁端部よりやや下がった所に刻目突帯文がある。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英×	内・暗黄橙色 外・暗黄橙色	E-5区	
第63図2	深鉢	口縁端部よりやや下がった所に刻目突帯文があり、口縁部付近はやや肥厚気味である。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英×	内・暗黄橙色 外・暗黄橙色	F-5区	
第63図3	深鉢	口縁端部よりやや下がった所に刻目突帯文があり、口縁部付近はやや肥厚気味である。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英×	内・暗茶褐色 外・暗茶褐色	E-6区	
第63図4	深鉢	口縁端部よりやや下がった所に刻目突帯文がある。	内・条痕(横方向) 外・不明(磨滅のため)	角○・長○ 英○	内・明褐色 外・暗褐色	E-5区	
第63図5	深鉢	口縁端部よりやや下がった所に刻目突帯文がある。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英×	内・浅黄橙色 外・浅黄橙色	E-6区	
第63図6	深鉢	口縁端部よりやや下がった所に刻目突帯文がある。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英×	内・灰黄褐色 外・明黄褐色	G-5区	7と同一個体
第63図7	深鉢	肩部で屈曲し、口縁端部より下がった所に刻目突帯文がある。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英×	内・灰黄褐色 外・明黄褐色	E-6区	復元口径25.0cm
第63図8	深鉢	肩部の屈曲部と口縁端部より下がった所に刻目突帯文がつく。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英×	内・浅黄橙色 外・橙色	9号住居(覆土)	
第63図9	深鉢	肩部で屈曲する。	内・条痕(横方向) 外・条痕(横方向)	角○・長○ 英○	内・褐灰橙色 外・暗橙色	F-6区	
第63図10	深鉢	口縁部の沈線間に摩消縄文と凹点文あり。	内・ヘラ研磨 外・ヘラ研磨	角○・長○ (精緻)	内・浅黄橙色 外・暗黄橙色	E-6区	
第63図11	深鉢	口縁部の沈線間に摩消縄文あり。	内・ヘラ研磨 外・ヘラ研磨	角○・英○ (精緻)	内・褐灰色 外・浅黄橙色	E-6区	
第63図12	深鉢	口縁部の沈線間に摩消縄文と凹点文あり。	内・ヘラ研磨 外・ヘラ研磨	角○・長○ (精緻)	内・浅黄橙色 外・暗黄橙色	E-6区	10と同一個体
第64図13	深鉢	口縁部付近は肥厚気味。口縁部に沈線と凹点文・羽状文あり。	内・不明(磨滅のため) 外・不明(磨滅のため)	角○	内・暗黄褐色 外・暗黄褐色	F-5区	
第64図14	深鉢	口縁部は肥厚し、口唇部には凹線が一条巡る。口縁端部とやや下がった所に僅かに縄文あり。	内・不明(磨滅のため) 外・不明(磨滅のため)	角○	内・褐灰色 外・褐灰色	G-14区(表採)	
第64図15	深鉢	口唇部と口縁部に縄文がある。	内・ナデ 外・ナデ	角○・長○ 英○	内・暗黄橙色 外・暗黄橙色	F-11区(表採)	
第64図16	深鉢	口縁部に沈線文による文様帯がある。	内・ナデ 外・ナデ	角○・長○ 英○	内・橙色 外・橙色	G-14区(表採)	
第64図17	深鉢	胴部の破片である。沈線文あり。	内・条痕(横方向) 外・条痕(斜方向)	角○・長○ 英○	内・暗黄橙色 外・暗黄橙色	G-14区(表採)	16と同一個体
第64図18	深鉢	口縁部は開き気味に外反し、端部は尖る。	内・ケズリ 外・部分的に条痕あり	角○・長○	内・黒褐色 外・黒褐色	B地区(表採)	
第64図19	深鉢	頸部からやや膨らみ、口縁部にかけて内湾する。口縁部に擬縄文あり。	内・ナデ 外・ナデ	角○・長○	内・浅黄褐色 外・暗黄褐色	E-5区	復元口径26.0cm
第64図20	?	縄文あり。	内・不明 外・不明	英○	内・暗黄橙色 外・褐灰色	C地区(表採)	
第64図21	?	縄文あり。	内・不明 外・不明	英○	内・暗黄橙色 外・褐灰色	C地区(表採)	20と同一個体
第64図22	?	縄文あり。	内・不明 外・不明	角○・長○	内・黄橙色 外・黄橙色	C地区(表採)	
第64図23	?	胴部付近の破片であろう。縄文があり、一部ナデ消す。	内・不明(磨滅のため) 外・ナデ	角○・長○ 英○	内・黄橙色 外・橙色	D-12区(表採)	
第64図24	浅鉢	肩部で屈曲する。	内・ヘラ研磨 外・ヘラ研磨	角○ (精緻)	内・浅黄橙色 外・浅黄橙色	B地区(表採)	赤色顔料付着
第64図25	深鉢	胴部の破片である。	内・ヘラ研磨 外・条痕(横方向)	角○・英○	内・暗黄橙色 外・暗黄褐色	E-6区	

遺構検出時および遺構覆土中より出土したものは、表採遺物として扱った。

第5表 縄文時代遺物（石器）観察表

挿図番号	遺存状況	種類	石材	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	出土地点
第65図1	脚部一部欠損	石 鏃	チャート	(1.5)	1.1	0.3	0.4	F-3
第65図2	先端部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(1.1)	1.4	0.3	0.3	G-13
第65図3	完形	石 鏃	黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.4	G-4
第65図4	先端部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(1.2)	1.4	0.3	0.4	G-13
第65図5	完形	石 鏃	黒曜石	1.5	1.2	2.2	0.3	G-4
第65図6	脚部一部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(1.5)	1.3	0.3	0.1	B-5
第65図7	完形	石 鏃	サヌカイト	1.8	1.7	0.3	0.6	B地区
第65図8	脚部一部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(2.3)	1.4	0.4	0.7	G-13
第65図9	脚部一部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(2.6)	1.5	0.3	0.7	C-4
第65図10	先端部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(1.9)	1.8	0.3	0.7	E-6
第65図11	完形	石 鏃	サヌカイト	2.2	1.9	0.4	0.9	G-4
第65図12	完形	石 鏃	サヌカイト	2.5	2.1	0.4	1.3	G-5
第65図13	完形	石 鏃	サヌカイト	2.3	1.7	0.5	1.3	G-14
第65図14	脚部一部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(2.4)	1.9	0.5	1.3	E-5
第65図15	完形	石 鏃	黒曜石(姫島)	2.4	2.0	0.5	1.7	E-6
第65図16	完形	石 鏃	黒曜石(姫島)	2.5	1.7	0.3	1.0	G-14
第65図17	先端部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(2.3)	1.7	0.5	1.4	F-4
第65図18	脚部欠損	石 鏃	黒曜石(姫島)	(2.5)	2.3	0.6	2.9	F-15
第65図19	脚部一部欠損	石 鏃	安山岩	(2.9)	1.8	0.5	1.7	E-6
第65図20	完形	石 鏃	安山岩	3.4	1.7	0.5	2.6	C地区
第65図21	完形	石 鏃	安山岩	3.8	2.0	0.5	3.5	E-6
第65図22	基部一部欠損	石 鏃	サヌカイト	(8.0)	2.0	0.6	12.0	F-15
第65図23	完形	石 匙	安山岩	5.5	4.2	1.2	16.0	B地区
第65図24	完形	石 匙	サヌカイト	4.1	3.5	0.6	6.7	F-6
第65図25	一部欠損	石 匙	安山岩	(2.7)	5.0	0.7	7.7	G-5
第65図26	一部欠損	石 匙	安山岩	(3.6)	5.6	1.0	16.7	G-14
第65図27	完形	管 玉	緑色軟玉	4.5	0.8	0.7	4.6	H-5
第66図28	基部のみ	扁平打製石斧	輝石安山岩	(11.3)	6.0	1.1	97.1	F-5
第66図29	基部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(9.7)	6.0	1.4	94.7	11号覆土
第66図30	基部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(6.6)	6.8	1.4	84.2	B地区
第66図31	基部のみ	扁平打製石斧	輝石安山岩	(11.7)	7.6	1.2	118.6	H-5
第66図32	完形	扁平打製石斧	デイサイト	11.8	5.1	1.2	122.8	2号住覆土
第66図33	完形	扁平打製石斧	デイサイト	11.7	5.1	1.3	90.0	D-12
第66図34	基部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(11.7)	7.5	1.3	155.8	B地区
第66図35	刃部のみ	扁平打製石斧	角閃安山石	(8.2)	6.8	1.2	91.6	G-5
第67図36	完形	扁平打製石斧	角閃安山石	12.8	6.6	1.2	123.3	G-5
第67図37	刃部のみ	扁平打製石斧	角閃安山石	(10.8)	6.3	1.0	109.5	E-6
第67図38	刃部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(14.6)	6.6	2.4	210.6	5号溝覆土
第67図39	基部のみ	扁平打製石斧	角閃安山石	(16.0)	7.7	2.0	268.0	5号溝覆土
第67図40	刃部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(6.1)	6.6	1.2	76.1	5号溝覆土
第67図41	刃部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(5.8)	5.8	1.0	51.3	B地区
第67図42	完形	扁平打製石斧	角閃安山石	11.0	7.7	1.2	136.7	B地区
第67図43	刃部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(8.5)	8.1	1.1	118.8	B地区
第68図44	基部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(9.8)	8.0	1.5	160.2	2号土坑覆土
第68図45	刃部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(9.4)	9.4	1.1	148.4	B地区
第68図46	基部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(12.2)	8.3	1.2	171.7	B地区
第68図47	刃部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(12.4)	10.0	1.4	298.7	10号土坑覆土
第68図48	刃部のみ	扁平打製石斧	輝石安山岩	(13.2)	10.5	1.2	213.1	B地区
第69図49	基部のみ	扁平打製石斧	デイサイト	(12.1)	12.7	1.1	293.7	G-15
第69図50	完形	横刃型石器	輝石安山岩	10.0	7.4	1.5	133.8	E-6
第69図51	基部のみ	磨製石斧	蛇紋岩	(14.5)	6.5	3.2	440.4	G-5
第69図52	完形	凹 石	角閃安山岩	9.0	7.7	4.7	476.2	F-14
第69図53	完形	磨 石	角閃安山岩	11.4	10.0	5.3	789.9	D-11

()は残存測定値／出土地点が不明確なものは地区で表示した

第6表 弥生時代～古墳時代遺物（土器）観察表

(単位・cm)

挿図番号	器種	法量	器形の特徴および文様	成形・調整の特徴	胎土・焼成	色調	出土地点	備考
第70図1	甕	----	「T」字状の口縁部を呈する。	ヨコナデ	角閃石・長石 石英(良好)	(内)黄橙色 (外)黄橙色	E-6区	口縁部破片
第70図2	高坏	----	鋤先状の口縁部を呈する。	ヨコナデ	角閃石・石英 (良好)	(内)浅黄橙色 (外)浅黄橙色	E-6区	口縁部破片
第70図3	甕	----	口縁部は「く」字状に強く折れて開く。端部は平坦面をもつ。	(外)ハケ目 口縁部内外面ヨコナデ	角閃石 精緻(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	F-6区	口縁部破片
第70図4	甕	----	口縁部は「く」字状に折れる。	ヨコナデ	角閃石(多) 長石(良好)	(内)明黄褐色 (外)明黄褐色	1号住居 覆土中	口縁部破片
第70図5	甕	----	口縁部は「く」字状に緩やかに折れる。	ヨコナデ	角閃石 精緻(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	H-4区	口縁部破片
第70図6	甕	----	口縁部は「く」字状に強く折れる。胴部は膨らみ気味であろう。	(内)ヘラケズリ (外)ハケ目 口縁部内外面ヨコナデ	角閃石 精緻(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	8号住居 覆土中	口縁部破片
第70図7	甕	----	口縁部は開き気味に外反する。	ヨコナデ	角閃石・長石 精緻(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	H-3区	口縁部破片
第70図8	甕	----	口縁部は開き気味に伸びながら外反する。端部はやや細くなる。	ヨコナデ	角閃石・長石 精緻(良好)	(内)橙色 (外)橙色	H-4区	口縁部破片
第70図9	甕	----	やや立ち上がり気味の二重口縁である。屈曲部に刻目が一条巡る。	ナデ	角閃石・長石 石英・細砂粒 精緻(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	H-3区	口縁部破片
第71図10	甕	----	胴部上半に三角突帯が一条巡る	ナデ	角閃石・長石 石英(良好)	(内)浅褐色 (外)橙色	8号住居 覆土中	胴部破片
第71図11	甕	----	胴部上半に三角突帯が一条巡る	ナデ	角閃石・長石 石英(良好)	(内)浅黄褐色 (外)橙色	E-5区	胴部破片 (煤付着)
第71図12	甕	----	頸部に三角突帯が一条巡り、胴部は膨らむ。	(内)ナデ (外)ハケ目	角閃石・長石 石英(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	9号住居 覆土中	胴部破片
第71図13	甕	----	胴部が膨らむ。	(内)ハケ目 (外)ハケ目	角閃石(少) 長石(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	H-3区	胴部破片
第71図14	甕	----	頸部に刻目突帯が一条巡り、胴部は膨らむ。	(内)不明 (外)ハケ目	角閃石(少) (良好)	(内)暗褐色 (外)暗褐色	2号住居 覆土中	胴部破片
第71図15	甕	----	頸部にはヘラ状工具による刻目突帯が一条巡り、胴部は膨らむ。	(内)不明 (外)ハケ目	角閃石・長石 石英(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	D-12区	胴部破片
第71図16	甕	----	口縁部は伸びながら「く」字状に屈曲する。頸部にはヘラ状工具による刻目突帯が一条巡る。	(内)不明 (外)ハケ目 口縁部内面はハケ目	角閃石・長石 石英 精緻(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	E-10区	口縁部破片
第71図17	甕	----	胴部は膨らみ気味である。	(内)ハケ目 (外)タタキ目	角閃石(良好)	(内)暗黄褐色 (外)暗黄褐色	D-12区	胴部破片
第71図18	甕	----	胴部はあまり膨らまない。	(内)ハケ目 (外)タタキ目	角閃石・長石 石英(良好)	(内)黄褐色 (外)黄褐色	G-4区	胴部破片
第71図19	高坏	復元口径 (13.5)	口縁部は開き気味で、端部は丸味をもち、やや内湾する。坏部と脚部の境で段がつく。	(内)ヘラミガキ (外)ヘラミガキ 部分的にヨコナデ	角閃石(少) 長石・石英 精緻(良好)	(内)黄褐色 (外)黄褐色	F-15区	坏部破片
第71図20	高坏	----	脚部は開き気味である。	(内)不明 (外)ハケ目	角閃石・長石 石英(良好)	(内)黄褐色 (外)黄褐色	H-3区	脚部破片
第71図21	高坏	----	脚部は掘付近で開き気味になる。	(内)不明 (外)ヘラミガキ	角閃石・長石 石英(良好)	(内)浅黄褐色 (外)浅黄褐色	G-3区	脚部破片
第71図22	埴	復元口径 (8.8) 復元器高 (2.9)	器壁は厚く、体部から口縁部にかけて開く。	内外面はヨコナデ 内面に一部指頭圧痕あり。	角閃石・長石 その他砂粒 (良好)	(内)黄褐色 (外)黄褐色	B地区	完形 手捏ね土器
第71図23	甕? ?	復元底径 (5.0)	平底の底部である。	(内)不明 (外)ハケ目 ハケ目は底部端までおよんでいる。	角閃石(少) 長石(少) 石英(多)(良好)	(内)褐灰色 (外)黄褐色	F-6区	底部破片 煤付着
第71図24	甕? ?	復元底径 (8.5)	若干上げ底気味の底部である。	(内)不明 (外)ハケ目 ハケ目は底部端までおよばない。	角閃石・長石 石英 5mm前後の砂粒 (良好)	(内)暗褐色 (外)橙色	B地区 (表採)	底部破片
第71図25	甕? ?	底径 (5.0)	若干尖り底気味の底部である。	(内)不明 (外)不明	角閃石・長石 石英 2~3mmの砂粒 多量(良好)	(内)暗褐色 (外)橙色	7号住居 覆土中	底部破片

第7表 歴史時代遺物（土器）観察表

(単位・cm)

挿図番号	器種	法量	器形の特徴および文様	成形・調整の特徴	胎土・焼成	色調	出土地点	備考
第72図1	甕	----	----	(内)同心円文タタキ (外)平行タタキ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)黒灰色	B地区 (表採)	須恵器 胴部破片
第72図2	甕	----	----	(内)同心円文タタキ (外)平行タタキ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)黒灰色	G-4区	須恵器 胴部破片
第72図3	甕	----	----	(内)同心円文タタキ (外)平行タタキ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)黒灰色	F-4区	須恵器 胴部破片
第72図4	甕	----	----	(内)同心円文タタキ (外)平行タタキ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)暗灰色	7号住居 覆土中	須恵器 胴部破片
第72図5	甕	----	----	(内)青波文タタキ (外)格子タタキ→カキ目	砂粒若干 (堅緻)	(内)暗灰色 (外)暗灰色	B地区 (表採)	須恵器 胴部破片
第73図6	甕	----	----	(内)同心円文タタキ (外)平行タタキ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)黒灰色	H-4区	須恵器 胴部破片
第73図7	甕	----	----	(内)同心円文タタキ (外)平行タタキ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)暗灰色	B地区 (表採)	須恵器 胴部破片
第73図8	甕	----	----	(内)平行タタキ (外)平行タタキ	砂粒若干 (堅緻)	(内)暗灰色 (外)暗灰色	G-4区	須恵器 胴部破片
第73図9	甕	----	頸部は開き気味に立ち上がり櫛描波状文あり。	(内)ナデ	(堅緻)	(内)暗灰色 (外)黒灰色	G-3区	須恵器 頸部破片
第73図10	坏蓋	----	平坦な天井部から口縁部に至る付近で段をなし、ほぼ垂直に折れる。	(内)ナデ (外)回転ヘラケズリ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰色 (外)灰色	G-5区	須恵器 口縁部破片
第73図11	坏身	----	底部と体部の境より内側に3mmの高台がやや外傾気味につく。	(内)ナデ (外)回転ヘラケズリ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)暗灰色	B地区 (表採)	須恵器 底部破片
第73図12	坏身	----	底部と体部の境より内側に4mmの高台がやや内傾気味につく。 体部は丸味をもち立ち上がる。	(内)ナデ (外)回転ヘラケズリ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)暗灰色	F-4区	須恵器 底部破片
第73図13	坏身	----	底部と体部の境より内側に3mmの高台がやや外傾気味につく。体部は屈曲し立ち上がる。	(内)ナデ (外)回転ヘラケズリ	砂粒若干 (堅緻)	(内)灰白色 (外)灰白色	F-4区	須恵器 底部破片
第73図14	甕	復元口径 (24.0)	頸部は肥厚し、口縁部は伸びながら外反する。端部は丸味をもち、胴部は膨らまず底部へ続く。	(内)ヘラケズリ (外)ナデ 口縁部内外面はヨコナデ	角閃石(少) 長石・石英 (良好)	(内)浅黄橙色 (外)浅黄橙色	F-3区	土師器 口縁部破片
第73図15	甕	----	口縁部は肥厚し、端部は短く外反する。胴部は膨らまず底部へ続く。	(内)ヘラケズリ (外)ナデ 口縁部内外面はヨコナデ	角閃石・長石 その他砂粒 (良好)	(内)明褐色 (外)明褐色	B地区 (表採)	土師器 口縁部破片
第73図16	甕	----	口縁部はやや肥厚し、短く外反する。胴部は膨らまず底部へ続く。	(内)ヘラケズリ (外)ナデ 口縁部内外面はヨコナデ	角閃石・長石 (良好)	(内)明褐色 (外)明褐色	F-3区	土師器 口縁部破片
第73図17	甕	----	頸部から口縁部にかけて肥厚し、短く外反する。胴部はやや膨らみ、底部へ続く。	(内)ヘラケズリ (外)ナデ 口縁部内外面はヨコナデ	角閃石・石英 長石(多) (良好)	(内)暗橙色 (外)黄橙色	B地区 (表採)	土師器 口縁部破片
第73図18	甕	----	口縁部は肥厚し、外反する。胴部は膨らまず底部へ続く。	(内)ヘラケズリ (外)ナデ 口縁部内外面はヨコナデ	角閃石・長石 その他砂粒 (良好)	(内)黄橙色 (外)黄橙色	7号住居 覆土中	土師器 口縁部破片
第73図19	甕	----	----	(外)ナデ	角閃石(少) 長石 (良好)	(内)黄橙色 (外)黄橙色	G-3区	土師器 把手部分
第73図20	坏身	復元口径 (14.8) 復元器高 (4.5)	底部は完全な平底で、体部から口縁部にかけては開き気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。	内外面はヨコナデ 底部は回転ヘラ切り	角閃石・長石 赤褐色粒若干 (良好)	(内)暗黄褐色 (外)暗黄褐色	7号住居 覆土中	土師器 完形

V. まとめ

1. 歴史の変遷

本遺跡の立地する丘陵地の東側には樋ノ口遺跡・下馬原遺跡があって旧石器時代の石器等が確認されているが、今回の調査範囲内では、旧石器時代の明確な遺物は確認できなかった。縄文時代は、草創期～中期までの遺物・遺構は見られないが、石鏃の中には同時期のものが数点含まれている。後期から晩期にかけての遺物が大部分を占め、扁平打製石斧・石鏃・石匙等が見られ、土器では磨消縄文系（西平式）や刻目突帯文系（下黒野式）が主流であり、後期後半と晩期終末（弥生時代早期）に人々の営みがあったことが窺える。弥生時代は、中期頃から終末までの遺物が見られるが、後期～終末頃のもの为主である。古墳時代にはいと、前期頃の出土遺物が多く、11号住居跡に見られるように前期の集落が形成されていたと思われる。中期以降の遺物・遺構はなく、奈良時代に集落が形成されるまで歴史的には空白期になっている。

以上のように、この丘陵地が人々の生活の舞台となる主な時期は、縄文時代後期・晩期、古墳時代前期、奈良時代であると言えよう。

2. 遺物について（須恵器と土師器）

松木遺跡出土の須恵器と土師器については、「IV、遺構と遺物」で触れ、8世紀の前半から中頃の所産であることを指摘したが、ここでは、その根拠を述べるとともに若干の検討を加えたいと思う。

須恵器

出土土器に占める須恵器の絶対量が少ないため、検討し得る資料に乏しい。そのため、須恵器を模した土師質土などの出土遺物を含めて、その位置付けを考えた。

須恵器の編年に関しては、坏身・坏蓋に変化の特徴が明瞭に現れる。そこで、諸研究者の8世紀代を中心とした坏身・坏蓋の編年案を見てみると、坏身については、高台の位置と形状・底部から体部にかけての形状と体部から口縁部にかけての外傾度に着目している。坏蓋については、天井部・つまみ・口縁部の形態変化に主眼を置いている。これらの編年案を参考にしながら、本遺跡出土の坏身・坏蓋の編年の位置付けをおこなってみたい。

第8表 松木遺跡変遷年表

旧石器時代	
縄文時代	草創期
	早期
	中期
	後期
	晩期
弥生時代	前期	
	中期	
	後期	
古墳時代	前期	集落
	中期	
	後期	
飛鳥時代		
奈良時代	前期	集落
	中期	
	後期	
平安時代		
鎌倉時代		
室町時代		
江戸時代	

第9表 8世紀代を中心にした坏蓋・坏身における須恵器編年案一覽表^{註1}

時期	中村編年(陶邑編年)	佐藤編年	小田編年	川添・森田編年	田辺編年	大宰府編年
7世紀	Ⅲ-①(7世紀初頭) ・坏の形相が全く遊動する。 ・坏蓋に宝珠つまみと内面にかえりが付く。 ・坏身に蓋受けがない。	5期
	Ⅲ-②(7世紀前半～中頃) ・坏蓋のつまみは擬宝珠状に変化する。 ・高台付の坏身が出現する。	(7世紀後半) ・坏蓋はつまみかえりを持つものが口縁部内側にかえりを持つものへ変化する。 ・高台付坏身 ・体部下半で屈曲し外反するタイプと屈曲部を持たず、緩やかに内湾しながら立ち上がるタイプがあり、両タイプとも高台は高い。	6期(7世紀後半) ・高台付きの坏身が出現する。 ・坏蓋はつまみかえりが小さくなり、退化傾向にある。一部に口縁部を折り曲げたものが現れる。	1期(7世紀後半) ・坏蓋のかえりが残る。
	Ⅲ-③(7世紀中頃～後半) ・坏蓋のかえりが緩やかに内側につき、つまみは低く扁平になる。 ・坏身の口縁部は外反気味とS字状がある。
8世紀	Ⅳ-①(8世紀初頭) ・坏蓋のかえりが消失し、端部が内側に屈曲するつまみは扁平な擬宝珠状になる。天井部は丸味を持ち、器高が高い。 ・坏身はゆるやかに外反する口縁部を持ち、直線的に伸びる八字状の高台が付く。口縁部が直立気味のものやS字状を呈するものもある。	(8世紀前半) ・坏蓋 ・天井部から緩やかに口縁部に至り、端部はやや丸味を帯びながら立ち上がる。天井部が平坦になり口縁部に向かつて屈曲するものもある。 ・つまみは擬宝珠状である。 ・高台付坏身 ・体部と底部の境が丸味をもち、縁部がやや内湾気味に立ち上がる。 ・高台は底部と体部の境より内側に付く。	7期(8世紀代) ・坏蓋口縁部は鳥のくちばし状を呈して断面三角形の細く短いものが主流である。中には、さらに丸く仕上げたものや明確な屈曲をもたないものもある。 ・高台付坏身は口径の大きいものへ変化する。	2期(8世紀前半) ・坏蓋のかえりが消失する。(垂直・内傾・外反) ・坏身は体部が直線的に立ち上がる。(外反・内湾) ・高台は底部端より内側に断面四角形のものが付く。	坏蓋のかえりの消失 MT21-	8世紀前半～中頃
	Ⅳ-②(8世紀前半) ・坏蓋は天井部の膨らみが消え、平らになる。 ・擬宝珠つまみはさらに扁平になり、半尖部が凸形をなす。一部につまみが突帯状のものもある。 ・高台付の坏身は口縁部が逆八字形に緩やかに外反するものとS字状を呈するものがある。	(8世紀中期) ・坏蓋 ・口縁部で屈曲し、くちばし状を呈する。輪状のつまみを持つものが見られる。 ・高台付坏身 ・体部と底部の境が強く屈曲し、口縁部の外傾がやや強くなる傾向にある。高台は底部と体部の境より内側に付く。やや底端部に行くものもある。	3期(8世紀中頃) ・坏蓋は天井部が低く水平になる。口縁部の形態には垂直・内傾・外反のタイプがある。それ以外に天井部から口縁部にかけて強く屈曲するものもある。 ・坏身は丸味をもち、高台は底部端に付く。	SD2340
	Ⅳ-③(8世紀中頃) ・坏蓋は天井部が斜水平に近く、その端で大きくS字状にカーブを描き、口縁部にいたって下に屈曲し段をなす。つまみの形が輪状の突帯状のものがある。 ・坏身の変化は少なく、体部が外反し口縁部を丸く仕上げる。高台の位置は底部端に近づく。	(8世紀後半) ・坏蓋 ・底部が低く扁平なものが多く、口縁部の屈曲が顕著になる。 ・高台付坏身 ・高台は底部と体部の境に付く傾向があり、高台が体部と一体化するものもある。	4期(8世紀後半～9世紀初) ・坏蓋は口縁部が退化し、器高は低い。 ・坏身は直線的に外方向へ伸び、高台は底部端に付く。	8世紀中頃～後半 SE1081 SK1084
	Ⅳ-④(8世紀後半) ・坏蓋は天井部のZ字状のカーブがなくなり、Z字状にカーブしていた部分が高くなりそこから再びへり出す。 ・坏身の形成は全段階から大きな変化はないが、縁部が底端部に直立気味もしくは八字状に付く用になる。

坏身は、5mm前後の低い高台が底部と体部の境より内側に付く。断面の形状は四角形や台形のものがあり、底面が接地する傾向にあるが、ハの字状に張り出し気味のものもある。器形は、底部と体部の境が丸味を帯びているものが主流であるが、強く屈曲するものも見られる。体部から口縁部にかけての外傾度はあまり強くなく、内湾気味に立ち上がるものが多いが、直線的に開くものもある。口縁端部は僅かに外反するものが見られる。器面調整は、底部に回転ヘラケズリが施されている。法量は、完形品が少なく、復元推定値に頼るものが多いが、口径が15cm以下、器高が4cm前後と中型品が多い。

坏蓋は、完形のもの少なく、天井部を観察する資料に乏しいが、天井部はやや膨らみを持ちながら口縁部に至るようである。膨らみがなく、平らになると思われるものもある。法量は、口径が15cm以下、器高が3cm以下と坏身と同じく中型品が多い。器面調整には回転ヘラケズリが施されている。つまみの形状は、扁平な擬宝珠状のものが主流で、中央部が凸形状をしている。口縁部の形態は、断面三角形で、ほぼ垂直に折れるものが多いが、中には、強く屈曲して内傾するものもある。全体的に、かえりを持つものはなく、また、いわゆるZ字状にカーブを描く口縁部の形態は認められない。

検討資料の僅少さという問題点はあるものの、本遺跡出土の坏身・坏蓋には8世紀前半の特徴が認められるが、一部には中頃の特徴も見られる。したがって、編年的位置付けについては、8世紀前半を中心にし、やや中頃にかかる時間幅の中でとらえたい。しかし、坏身・坏蓋の形態的变化は法量によっても差異が認められ一律の基準では分類しかねるという指摘^{註2}もあり、その他の器種で検証をしておきたい。

鉢は、土師質の鉄鉢模倣品(1号住-6)があるが、口縁部付近が強く内湾し、底部の形状がやや平坦な凸レンズ状をしている。鉄鉢形の鉢は口縁部の内湾度が弱いものから強いものへと、また、底部が平底から尖底へと8世紀前半～中頃の時期に形態変化するようである。この鉢は底部が中間的な要素を持つことなどから、形態変化の時期の所産としたい。

壺は、頸部より上が破損した長頸壺(5号住-6)がある。高台の形状が若干違うものの、体部の形状や肩部の屈曲具合など全体的なプロポーシオンが、大宰府政庁中門出土の長頸壺にたいへんよく似ている。8世紀前半～中頃の時期の所産であろう。

甕は、完形品がないため全体的な器形はわからないが、1号溝出土のもの口縁部の形態は、頸部から直線的に屈曲して口縁端部に水平面を持つなど8世紀前半～中頃の特徴を持っている。また、本遺跡では、大型甕の口縁部破片(3号住-4)のように凹線間に波状文を施したものがこの時期まで見られるようである。

以上のことから、坏身・坏蓋以外の器種からも、先に述べたように8世紀前半を中心にし、やや中頃にかかる時間幅の中でとらえるという編年的位置付けが検証できたことになる。

土師器

須恵器に比べ出土量は多く、甕・坏身・皿・甑と各器種が見られる。しかし、須恵器ほど著しい形態変化は観察できない。本遺跡に見られるこれらの土師器は、奈良時代の住居跡から須恵器に伴って出土したものが大部分であり、須恵器と同様の時期の所産であろう。6・8号住居跡はほとんど須恵器を伴っていないが、後述するように、これらの住居跡が集落構成および住居跡の形態などから須恵器を出土する住居跡と同時期と考えられる。したがって、これらの住居跡から出土した土師器も8世紀前半を中心にし、やや中頃にかかる時期の所産と考えて妥当であろう。

坏身は、高台の付くものと付かないものがあるが、器形的には8世紀前半代の特徴を持っている。器面調整では、回転ヘラケズリやナデを基調とするが、体部内外面にヘラミガキを施しているもの(5号住-9)もある。

皿は、6号住居跡などから出土している。底部には手持ちヘラケズリが施され、底部と体部の境が屈曲し、口縁部はやや内湾するという特徴を持っている。大部分のものが、口径14cm前後・器高3.5cm前後であり、法量的には同じ規格のものが本遺跡では使用されていたようである。筑後地方^{註3}などでは、8世紀中頃までの須恵器に伴って出土している。6号住居跡からは、まとめて4枚出土しており、器種構成の上で興味深い。本地域の土器の胎土は、角閃石粒子を含んでいるものが一般的であるが、これらの皿のように、精良なつくりで、角閃石粒子を含ま

ず、雲母粒子を含んだ精製された粘土を胎土としている土師器は搬入品と考えてよからう。

甕は、極めて形態変化の緩慢な器種である。各住居跡から出土しているが、量的には限られている。そのため、資料不足の感はあるが、本遺跡の出土遺物からこの時期の特徴をあげてみたい。口縁部の形態には大きく分けて3タイプある。

Aタイプ…屈曲して、伸びながら外反するもの（5号住-10、6号住-6・7、8号住-5・6など）

Bタイプ…屈曲して、短く外反するもの（3号住-6・7など）

Cタイプ…屈曲度が弱くて、直立気味に外反するもの（3号住-8、8号住-8など）

大部分において、頸部内部に明瞭な稜を持ち屈曲している。また、口縁端部は丸味を持って仕上げている。頸部から口縁部にかけて肥厚する、いわゆる「肥厚口縁甕」は、Cタイプに見られる。これらは、口縁部の形態に若干の違いが認められるものの器形や器面調整の点で、共通する特徴が見られる。胴部は、上部でやや膨らむものもあるが、基本的には膨らみをあまり持たずに丸底の底部へ続いている。長胴化の傾向は見られない。法量的には、中型（口径20cm以上）のものが主流を占め、Cタイプのものは小型の傾向にある。内面は、例外なく頸部付近までヘラケズリが施されており、器壁を薄く仕上げる意図が見られる。外面は、ハケ目調整が見られず、丁寧なナデ調整のみで仕上げている。この外面の仕上げ調整は、玖珠町西田遺跡・同板屋遺跡の同時期の甕でも言え、本地域での器面調整上の特徴として指摘しておきたい。なお、頸部から口縁部にかけて、横方向にハケ目状の条線が見られるもの（5号住-10、6号住-7）があるが、粗いヨコナデ調整と判断した。その他、縦方向のヘラミガキが見られるもの（5号住-14）もある。甕についての、大まかな特徴を述べてみたが、今後、本地域での類例の増加を待って、さらに検討を加えたい。

3. 遺構について（住居跡）

本遺跡では、住居跡（竪穴状遺構を含む）が12基検出された。ここでは、各住居跡の時期やその形態およびカマドについて触れてみたい。

住居跡

ある程度須恵器が出土しているものは、1・2・3・5・9号住居跡である。須恵器の年代より判断すると、8世紀前半を中心にし、やや中頃にかかる時期の所産と考えてよからう。その他の住居跡については土師器を主体としているか、遺物が全くない状況であるため、住居跡の形態・規模や集落構成などの面から時期を考えることにする。まず、6・8号住居跡は規模・主軸方位・長方形を呈する形態・4本柱の主柱穴・カマドの付設および位置などが、3・5号住居跡と共通する。7号住居跡も同様に9号住居跡と共通する要素を持っている。4号住居跡は状況からすると、5号住居跡の建て替えと考えられる。以上のことから、1号～9号住居跡はほぼ同時期、つまり8世紀前半を中心にし、やや中頃にかかる時期であり、奈良時代の住居跡であると結論づけられる。なお、10号住居跡については、規模をはじめ不明な点が多いため、時期を決め得るのは不可能である。

第10表 住居跡一覧表

(単位：m)

住居跡番号	主軸方位	規模(床面積㎡)	形態	主柱穴	主な出土遺物	カマド	時期	備考
1号住居跡	N-55°-E	(長辺)4.5×(短辺)3.9 (17.5)	長方形	4本	須恵器(坏蓋・坏身) 土師器(甕・坏身・鉢) 紡錘車・鉄器(刀子)	北東壁に付設している	8世紀代	屋内土坑
2号住居跡	N-75°-E	(長辺)4.4×(短辺)4.0 (17.6)	長方形	不明	須恵器(坏身)	無	8世紀代	屋内土坑
3号住居跡	N-05°-E	(長辺)5.0×(短辺)3.7 (18.5)	長方形	4本	須恵器(坏蓋・坏身・甕) 土師器(甕・皿) 磁石	北壁に付設している	8世紀代	
4号住居跡	N-35°-E	(長辺)4.6×(短辺)3.9 (17.9)	長方形	不明	無	無	8世紀代	5号住居跡によって切られている
5号住居跡	N-20°-E	(長辺)4.4×(短辺)3.6 (15.8)	長方形	4本	須恵器(坏蓋・坏身・長頸壺) 土師器(坏蓋・坏身・甕) 鉄器(手鎌)	北壁に付設している	8世紀代	遺物が充実している(3号住の遺物と接合するものあり)
6号住居跡	N-10°-E	(長辺)5.7×(短辺)4.3 (24.5)	長方形	4本	須恵器(坏身) 土師器(甕・皿)	北壁に付設している	8世紀代	皿が4点ままとまって出土している
7号住居跡	N-70°-E	(長辺)5.5×(短辺)5.0 (27.5)	長方形	4本	無	カマドの痕跡あり	8世紀代	比較的大型の住居である
8号住居跡	N-05°-E	(長辺)4.7×(短辺)3.6 (16.9)	長方形	4本	土師器(甕・甌・皿) 紡錘車	北壁に付設している	8世紀代	須恵器は出土していない
9号住居跡	N-50°-E	(長辺)6.0×(短辺)5.3 (31.8)	長方形	4本	須恵器(坏蓋・坏身) 土師器(甕)	無	8世紀代	比較的大型の住居である
10号住居跡	不明	4.6×? (--)	不明	不明	土師器細片数点	不明	----	大部分が調査区外である
11号住居跡	N-30°-E	(長辺)3.6×(短辺)3.6 (12.9)	方形	2本	土師器(二重口縁壺) (小型丸底壺)	無	古墳時代前期	中央部に炉跡がある
竪穴状遺構	N-40°-E	(長辺)2.4×(短辺)2.2 (5.3)	方形	無	土器片数点 (タタキ目あり)	無	弥生時代終末	小型であり主柱穴がない

奈良時代の住居跡の他に、11号住居跡や竪穴状遺構のように弥生時代終末～古墳時代前期頃のものも見られる。特に、11号住居跡は完形の壺が2個体出土したのみで、その他の遺物は全く見られない。炉跡と床面直上に意図的に置かれた状態である。中でも、炉跡直上のは炉を灰混じり土で埋めて、その上に置かれた形跡がある。住居を廃棄する際に、住居内を掃き、炉を封じる一形態であると思われる。同時期の類例を待つて再度検討を加えたい。

カマド

奈良時代の住居跡のうち、5基でカマドが検出された。付設場所は、基本的には北壁中央部であり、全体的な特徴は、次の通りである。袖部を補強する目的で、焚口部に袖石を置き、天井部には天井石を配する傾向が窺える。中には、炎口部にも袖石を置くもの（5号住）もある。燃焼部は住居床面を掘り下げて、粘質土を貼り、カマド基盤床としている。炎口部は燃焼部より一段高くなっているか、上り勾配になっている。煙道部は崩落や削平が著しく、よく分からないが、屋外へ長く伸びるものは見られない。

形態的には、大別して次の3タイプに分類できる。

Aタイプ…住居内の壁を若干掘り込み、粘土を馬蹄状に貼り付けて、壁体および袖部を構築するもの（3・6・8号住）

Bタイプ…住居内の壁を深く掘り込み、粘土により袖部を貼り付けて、壁体を構築するもの（5号住）

Cタイプ…住居内の壁を掘り込まないで、住居壁に直接粘土を貼り付けて、壁体および袖部を構築するもの（1号住）

また、遺構や遺物の出土状況から明らかになったことは、まず、支脚や袖石を抜き取ったり灰残滓を掻き出すなどの行為が見られることである。カマド機能停止後、意図的に本体を壊していることは明らかなようである。遺物は、甕類を中心に、燃焼部付近やその周辺で出土している。破片が一塊で検出されたり、一部が欠損したりするものである。器面には、例外がなく煤の付着が見られ、使用していた甕であることが分かる。特に、5号住居跡では、底部が欠損すると甕と頸部より上方が欠損する長頸壺とがカマド付近に意識的に置かれていた。また、1号住居跡のようにカマドの残骸や遺物が入れられた土坑をもつ例なども見られた。このように「住居機能の停止＝カマド機能の停止」の後に行われる意図的な行為をカマド祭祀^{註5}という概念の範疇でとらえることにしたい。火をあつかうカマドは、古代から神聖な場所とされている。カマドの廃棄においては、何らかの祭祀的な行為がともなっていたと思われる。その意味において、11号住居跡に見られるような炉を封じる形態も、祭祀的な意味合いが強いことが窺われる。

4. 集落について

丘陵地平坦部の西側の一部に、奈良時代の住居跡が9軒～10軒存在することが明らかになり、主軸方向や形態・カマドの有無・近接関係等から判断すると、一時期に4～5軒の住居が存在し、I期…（2号・4号・7号・9号）、II期…（3号・5号・6号・8号・10号）2期に分けられるようである。8世紀前半から中頃の古い段階までの約30年前後の間にII期からII期にかけて存在することは、単純計算すれば、各々15年前後の存続期間になる。構成面で、II期のもは2軒を単位にして2つのグループ（3号と5号、6号と8号）に分けられる。住居跡群は調査区の北側であるB地区にあり、南側のC地区の平坦部はこの時期の遺構がない空白部分になっている。掘立柱建物は、全て住居の建てられていないエリアに建てられていることから、ある程度、住居の存在を意識していることが言える。出土遺物がないためI期・II期のいずれに属するかは判断できないが、時期的にはI期～II期の期間内に収まるであろう。溝については、奈良時代のものとして1号溝がある。出土遺物からするとII期に属するようである。同じような地形に位置する5号溝は同時期であり、はっきりと確認できなかったが、1号溝と繋がって丘陵先端部を取り囲む可能性が高いと思われる。奈良時代において、丘陵先端部を取り囲むような溝がどのような意味を持つのであろうか。防衛上のもの・集落との境界や区割り・水路等考えられないこともない

が、時代背景や地理的条件の上からは否定せざるを得ない。その他の意味づけを必要となるが、類例を待って検討しなければならず、今後の課題としておきたい。

集落についてまとめてみると以下のようなことが言える。

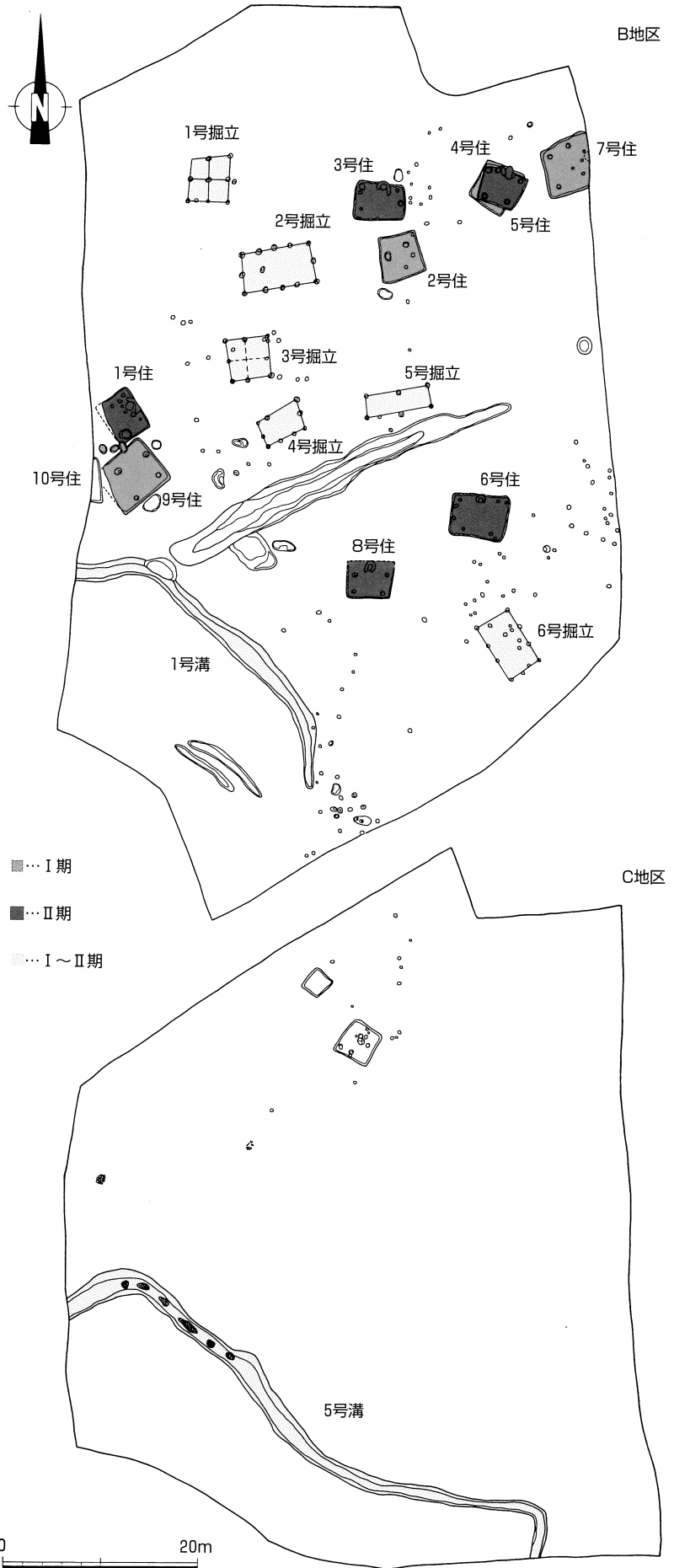
- ①集落は比高差のある丘陵地に立地している。
- ②奈良時代の比較的短い一時期に営まれていた。
- ③住居・掘立柱建物・溝から構成される集落の一部である。
- ④溝の内部を集落の範囲と考えると、建物の存在しない空白のエリアが存在する。

これらのことを考え合わせて集落の性格について考えてみたい。

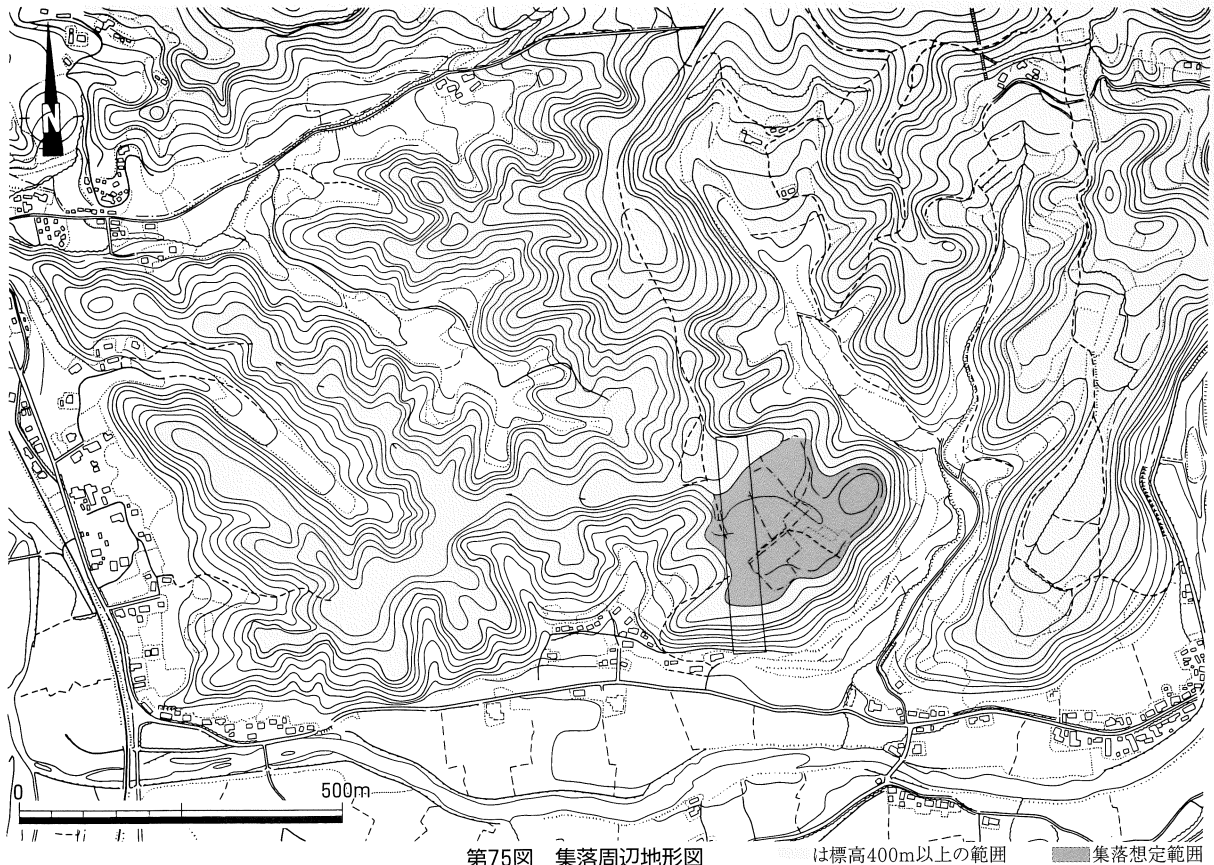
県道からの比高差が50mを越える丘陵部平坦地に位置する立地条件は、水田経営に適しているとは言えない。玖珠盆地周辺では、弥生時代から古墳時代にかけての集落は扇状台地上や河岸段丘上などの比較的高い場所に見られ、眼下の沖積地で水田を営んでいたと思われる。本遺跡の弥生時代終末から古墳時代前期の集落は、その規模は分らないが、谷水田などの開発も含め、同様に沖積地での水田経営を生活の基盤にしていたのであろう。しかし、本遺跡における奈良時代の集落はどうであろうか。奈良時代と言えば律令制度が整い、租・庸・調などの税制も施行されている時期である。前述したような湧水などを利用した谷水田では効率がよくないし、沖積地での水田経営をしたにしても、あえて高所に集落を営み、生活する根拠は何であったのだろうか。水田経営に頼らないその他の生業も考えなくてはならないだろう。そこで、当時の社会状況を考慮にいれ、集落の性格についていくつかの仮説を立ててみたい。

仮説1：郡衙・駅に関する集落

玖珠郡衙および荒田駅の存在は、文献の



第74図 奈良時代集落構成図



上からは知られているが、その所在は明らかではない。しかし、玖珠盆地内を中心とした場所であることは予想される。そう考えた場合、その周辺の丘陵地にも関連施設があった可能性はないだろうか。一例をあげると、郡衙の燃料（木炭）を供給する場や駅馬の飼育場などが考えられよう。

仮説2：草木の栽培集落

玖珠郡に関して、天平8年（736年）の『豊後国正税帳』に紫草園の記述がある。紫草とは多年生草木で、皮膚病の薬や染料として重用されたものである。国司がこれを監督し、収穫に立ち会った。園の所在地は不明であるが、紫草は日当たりのよい原野などに自生することが分かっている。本遺跡のある丘陵地一体にも栽培集落があったとも考えられる。また、同文献には漆の採取の記述もあり興味深い。

仮説3：丘陵地開拓の拠点集落

飯田高原などの標高900mの高原地帯では、弥生時代以降の遺物が散在しており、ある程度の開発が進んでいたことが分かる。日田地方では、上野遺跡^{註8}のように台地の開発を示唆する例もある。本遺跡の立地する宝山^{註7}から派生する丘陵地は、標高400mほどの所に平坦面を持っており、集落の規模は分からないものの丘陵地の開発を目的とした拠点集落の可能性もある。その場合、生業としては仮説2（草木栽培）を含めた畑作や谷水田・沖積平野での水田経営も考えられる。しかし、沖積平野での水田経営を考えた場合、なぜ集落のみを丘陵地に構えたか、その経緯は判然としない。

以上のような仮説を積極的に肯定する明確な遺構や遺物は検出されておらず、仮説そのものも推測の域を脱しない。今回の調査では、丘陵地平坦部の一部を調査したに過ぎず、集落構造を論じるには、あまりにも資料不足ではある。しかし、調査範囲内での状況を分析し、ある程度の仮説を立て、奈良時代に属する集落の全体像に迫

る作業は決して無駄ではなからう。

VI. おわりに

文献などから見ると、玖珠・九重地方は奈良時代に関する記述が比較的多い。しかし、考古学的には、この時代の集落調査はほとんどおこなわれていない。松木遺跡は当時の人々の生きざまをほんの僅かではあるが垣間見せてくれた。今、遺跡のあった場所は九州自動車道が建設され、日々数多くの車が数秒で通過している。荘厳にそびえる宝山だけが、いにしえからの歴史の歩みを物語ってくれている。

註および参考文献

- 註1 小林昭彦「九州における須恵器編年の現状と課題」『立正史學68号』 1990
佐藤浩司「奈良時代の須恵器と土師器について」『岡崎敬先生退官記念論文集』 1987
中村 浩『和泉陶邑窯の研究―須恵器生産の基礎的考察―』柏書房 1981
などを参考に作成した。
- 註2 小林昭彦「九州における須恵器編年の現状と課題」『立正史學第68号』 1990
- 註3 『高原遺跡・口ノ坪遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告31』福岡県教育委員会 1994
『長島遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告34』福岡県教育委員会 1995
『大庭・久保遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告36』福岡県教育委員会 1995
- 註4 『小田遺跡群Ⅰ 大分県玖珠郡玖珠町所在集落遺跡の発掘調査報告書』玖珠町教育委員会 1987
『小田遺跡群Ⅱ 大分県玖珠郡玖珠町所在集落遺跡の発掘調査報告書』玖珠町教育委員会 1988
- 註5 時期や形態の上から、松木遺跡の例に近いものとして日田市陣ヶ原辻原遺跡で検出されたカマド祭祀の例が挙げられる。類例の増加を待たなければならないが、この時期のカマド祭祀では、カマドの本体および使用していた甕などの破壊をもって祭祀の一形態としていたことが予想される。
『日田市高瀬遺跡群の調査1 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』大分県教育委員会 1995
- 註6 一応2つのグループを考えてみたが、10号住居跡が同時期のものであるならば1号住居跡と組み合わせることができ、3つのグループに分けられることになる。
- 註7 後藤宗俊「豊後における古道と駅制」『風土記の考古学』（小田富士雄編）1995
- 註8 『上野第1遺跡 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅳ』大分県教育委員会 1993

写 真 図 版

(遺構と遺物)



松木遺跡遠景（南より）



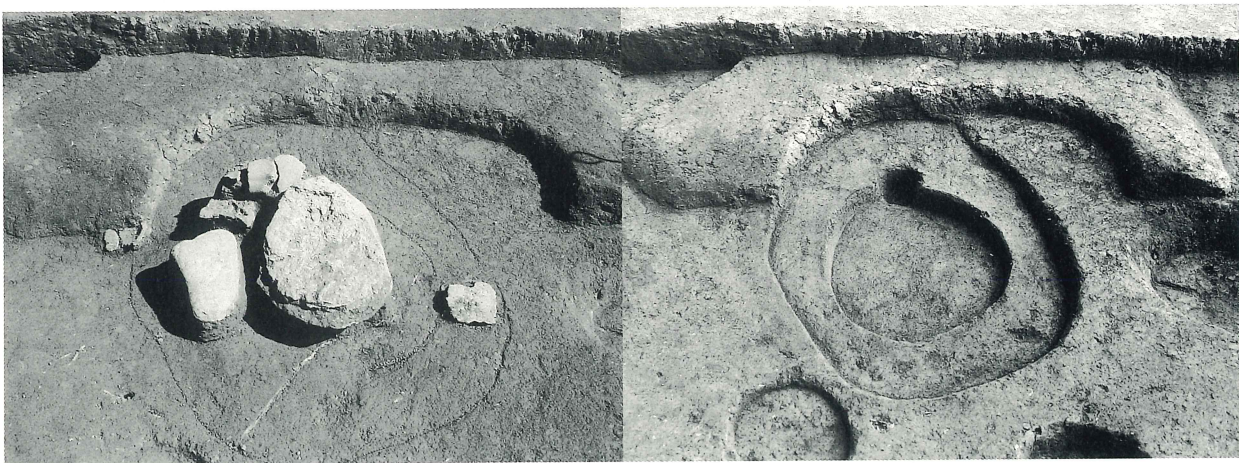
松木遺跡全景（東上空より 伐株山方面を望む）



1号住居跡完掘（北より）



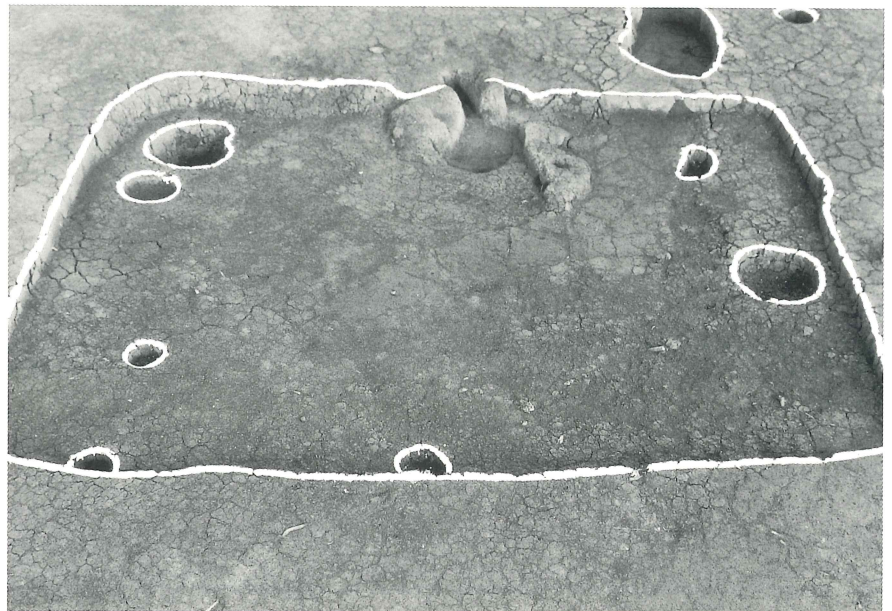
1号住居跡内土坑遺物出土状態



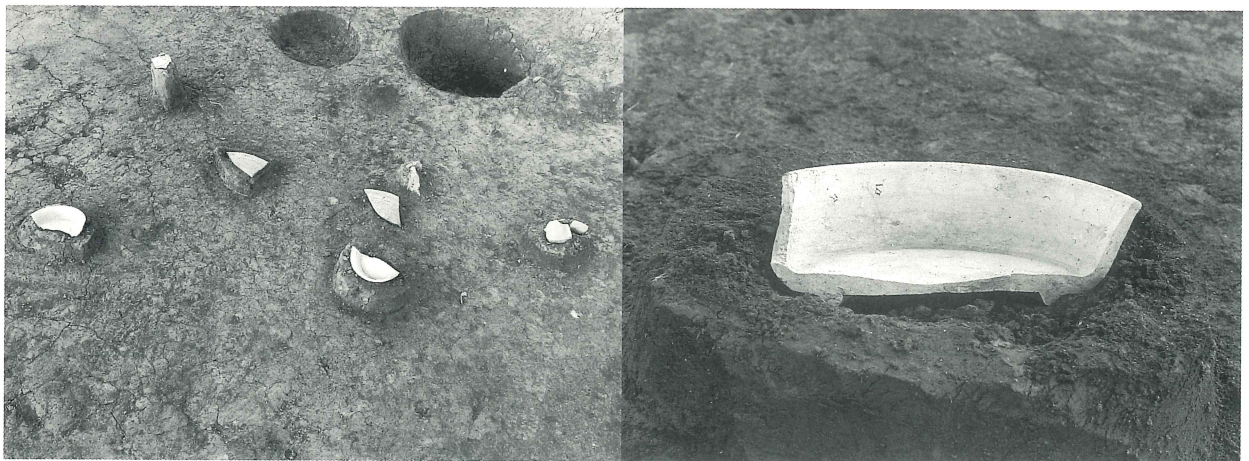
1号住居跡カマド（左：検出状況 右：完掘）



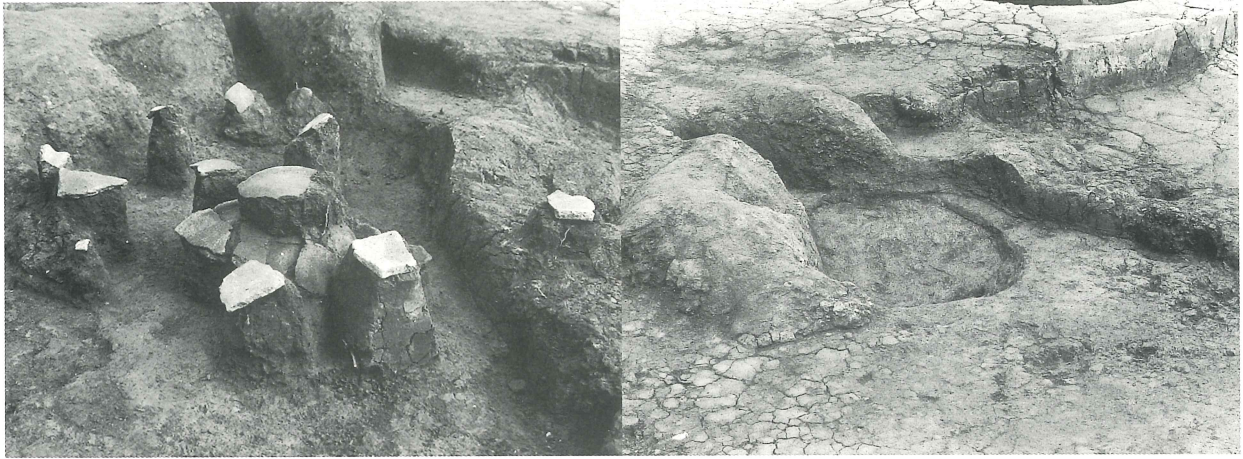
2号住居跡完掘
(南より)



3号住居跡完掘 (南より)



3号住居跡 遺物出土状態



3号住居跡カマド（左：遺物出土状況 右：完掘）



4・5住居跡完掘（南より）



5号住居跡遺物出土状態（左：カマド周辺 右：坏蓋）



5号住居跡カマド

検出状況	完掘(西より)
完掘(正面)	周辺遺物



6号住居跡完掘(南より)



6号住居跡遺物出土状態



6号住居カマド

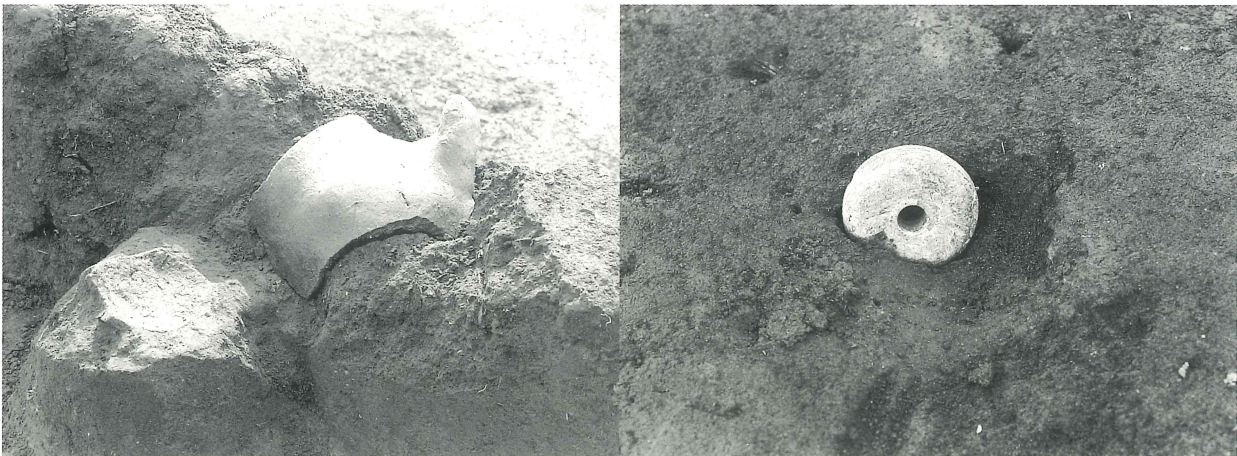
検出状況	燃焼部検出(東より)
燃焼部検出	完 掘



7号住居跡完掘（西より）



8号住居跡完掘（南より）



8号住居跡遺物出土状態（左：把手付甕 右：紡錘車）



8号住居跡

検出状況(正面)

検出状況(東より)

完

掘

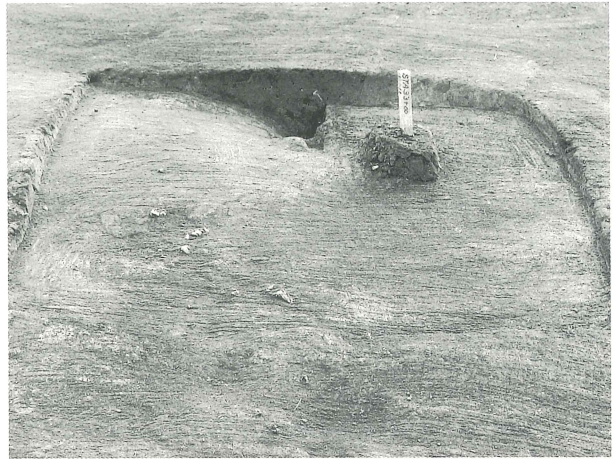
袖部除去後



9号住居跡(南より)



10号住居跡完掘（南より）



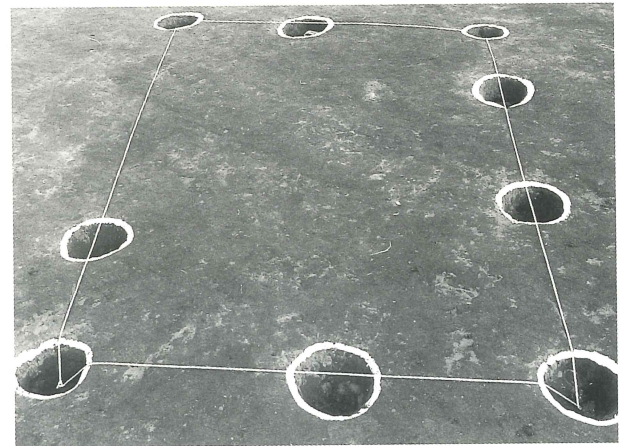
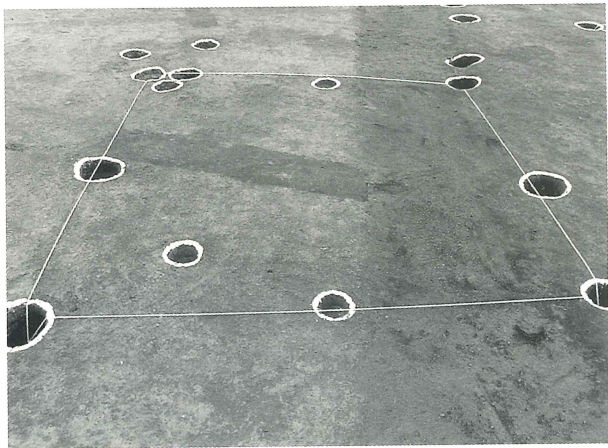
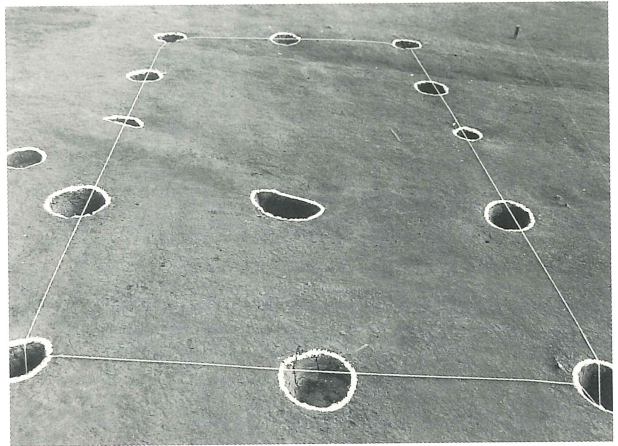
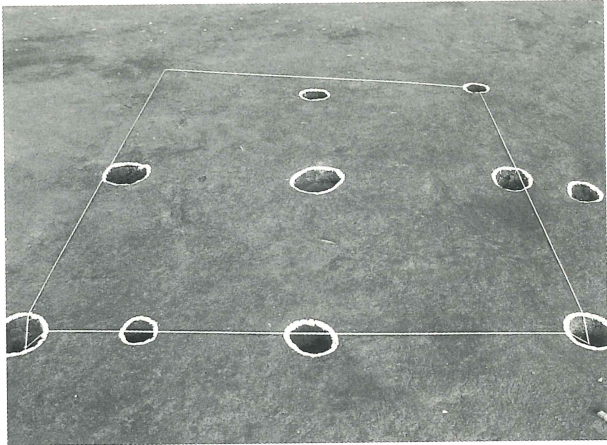
竪穴状遺構完掘（西より）



11号住居跡完掘（東より）



11号住居跡遺物出土状態（左：二重口縁壺 右：小型丸底壺）

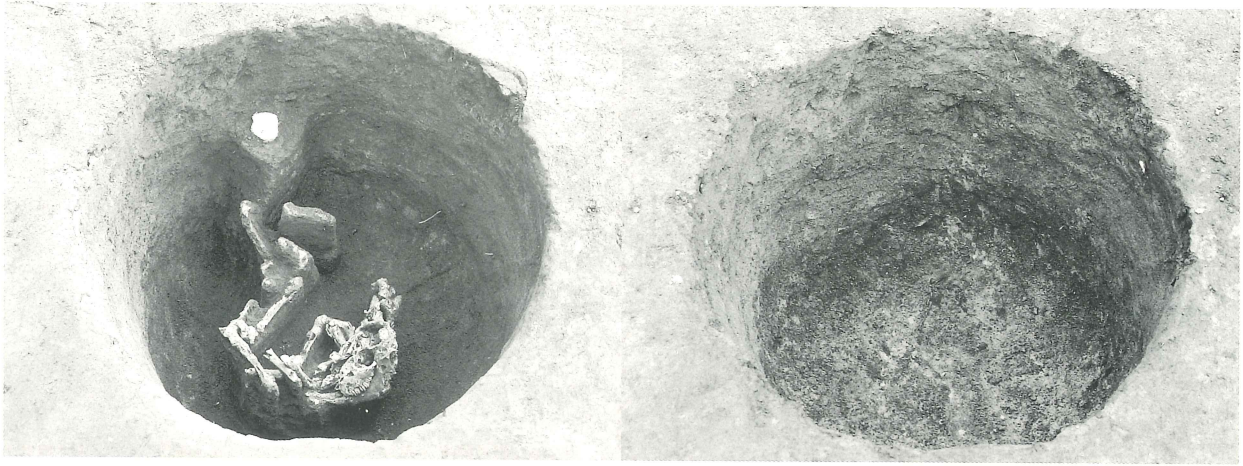


掘立柱建物跡

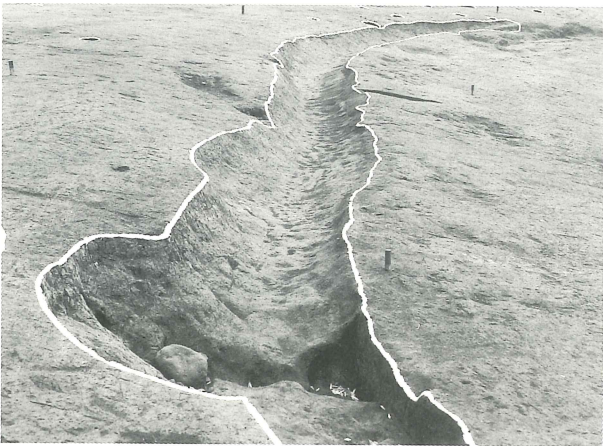
1号(南より)	2号(西より)
3号(西より)	4号(西より)



土坑 (左: 4号 (西より) 右: 6号 (南より))

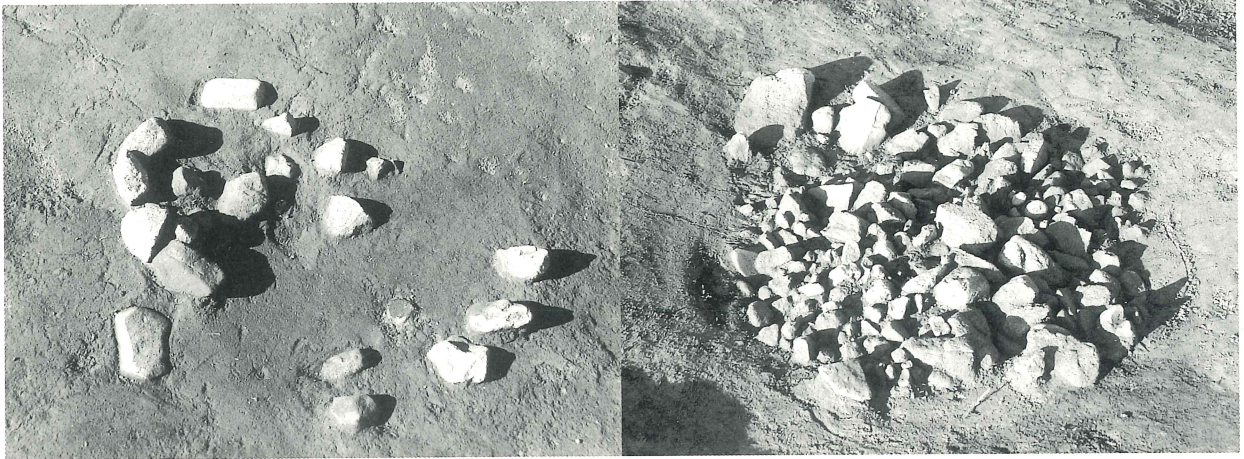


近世土坑（左：遺物出土状態 右：完掘）



溝状遺構

1 号(西より)	5 号(東より)
1号土層断面(B~B')	5号(小石が塚状に堆積する部分)



集石遺構 (左: 1号 (東より) 右: 2号 (東より))



縄文時代包含層G-5区 (東より)



縄文時代包含層 E-6区 (南より)



縄文時代包含層遺物出土状態

石	匙	石	匙
磨	製	管	玉
石	斧		



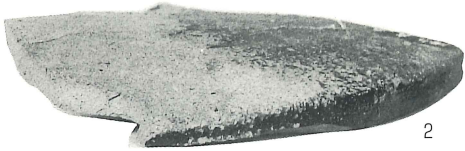
作業風景



1



3



2



4



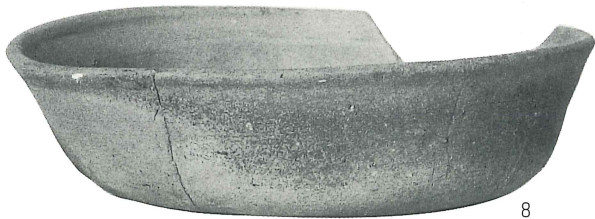
5



6



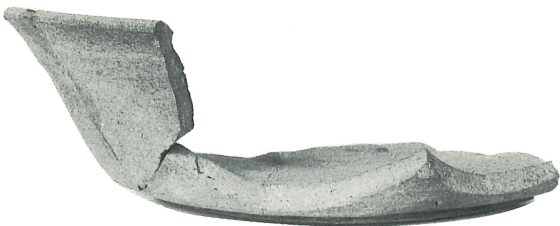
7



8



9

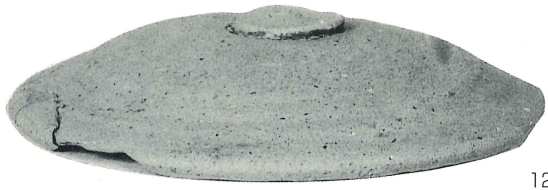


10

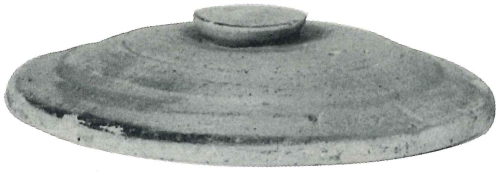


11

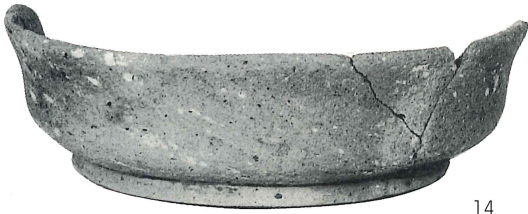
1·2·3号出土土器(1号住1~4、2号住5、3号住6~11)



12



13



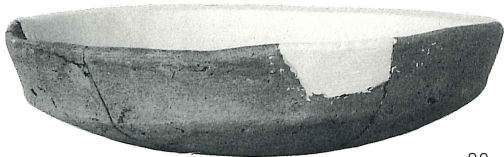
14



15



16



20



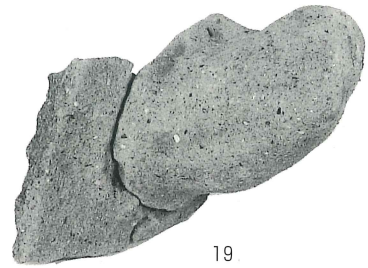
22



17



18



19



21



23

5・6住出土土器（5号住・12～19、6号住・20～23）



24



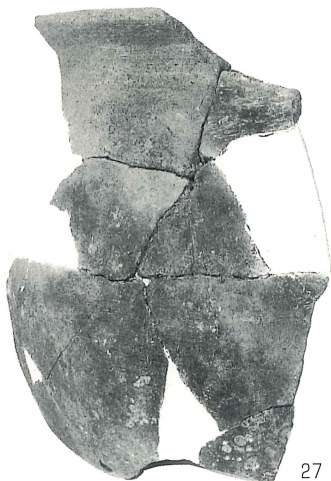
25



28



26



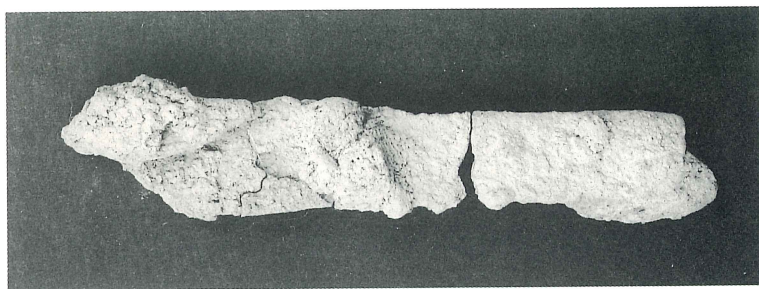
27



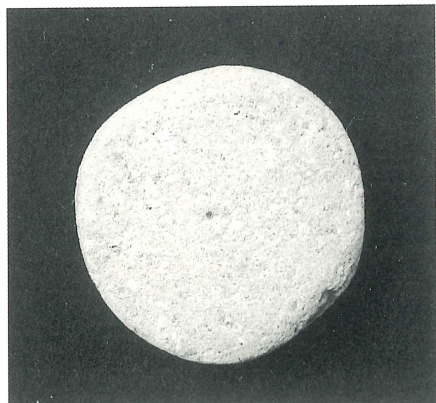
29



30 (3号)



31 (5号)

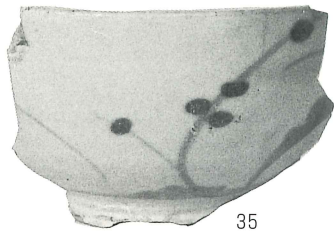


32 (1号)

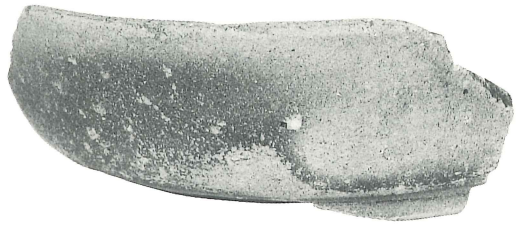


33 (8号)

8・11号出土土器・鉄器・石器 (8号住 24~27、11号住 28・29)



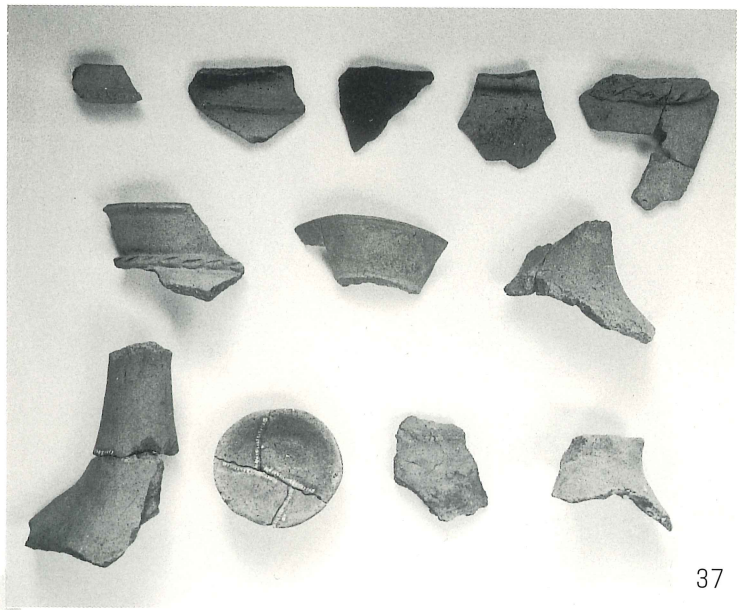
35



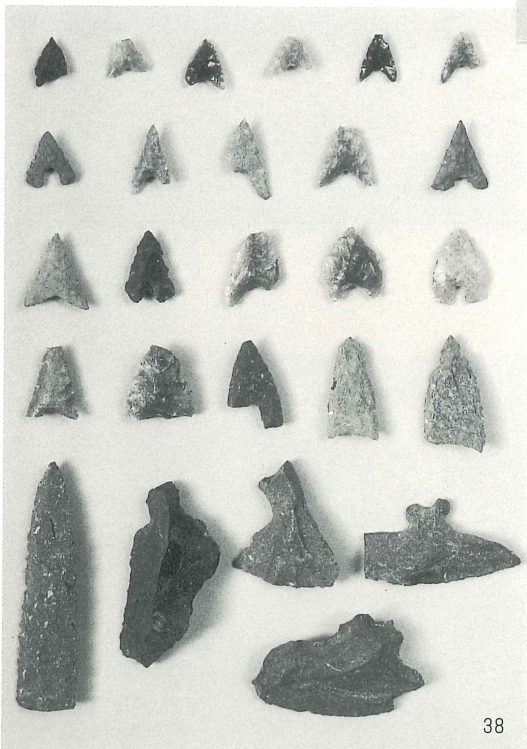
36



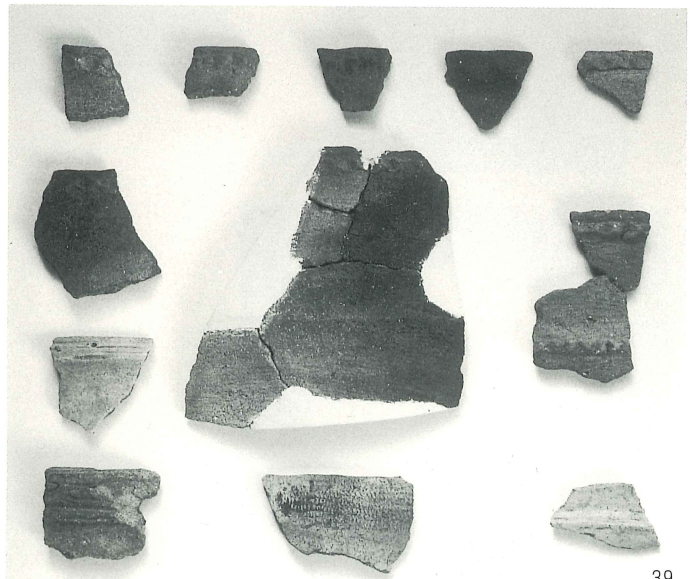
34



37



38



39

土坑出土土器、包含層出土土器・石器（土坑 34～36、包含層 37～39）

報告書抄録

ふりがな	まつぎいせき							
書名	松木遺跡							
副書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(7)							
巻次	—————							
シリーズ名	—————							
シリーズ番号	—————							
編著者名	五十川 孝正							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	〒870 大分県大分市府内町3丁目10番1号							
発行年月日	1997年3月31日							
所収遺跡名 <small>ふりがな</small>	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
まつぎ 松木	大分県玖珠郡 九重町 大字松木 字大明神	444618	653047	33°15'44"	131°11'40"	940405	18000	道路工事
						941228		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松木	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 近世	包含層 包含層・竪穴1 住居跡1 住居跡9 溝1 土坑1	刻目突帯文土器・石器 弥生式土器 土師器 土師器・須恵器 須恵器 陶磁器				

松 木 遺 跡

— 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(7) —

1997年 3 月31日

大 分 県 教 育 委 員 会

(〒870 大分市府内町 3 丁目10番 1 号)

☎0975-36-1111 (内線5501)・0975-36-2415(直通)

印刷 九州凸版印刷株式会社

(〒870 大分市大字下郡3154の22)

☎0975-69-0191